

令和6年度

生活文化に息づく「沖縄空手」調査報告書
～沖縄の風俗慣習・民俗芸能にみる武術的身体表現～



沖縄空手ユネスコ登録推進協議会
(沖縄県文化観光スポーツ部空手振興課)

発刊のことば



沖縄空手ユネスコ登録推進協議会会長

沖縄県知事 玉城 デニー

はいさい ぐすーよー ちゅーうがなびら

沖縄県では、沖縄空手の精緻な技と平和を希求し礼節を重んじる精神性を次世代に正しく保存・継承するとともに、「空手発祥の地・沖縄」を国内外に広く発信するため、空手関係団体をはじめ、県内の幅広い関係機関・団体と連携し、令和2年8月に「沖縄空手ユネスコ登録推進協議会」を設置し、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録（以下、「ユネスコ登録」という。）を目指しています。

ユネスコ登録は、世界に誇る沖縄の伝統文化である空手の将来にわたる保存・継承と普及・啓発に寄与するものであり、沖縄空手の価値を県民が再認識する契機となるとともに、空手を通じた交流人口の拡大により、地域社会の発展や世界の平和文化創出にも貢献するものと考えております。

このため、ユネスコ登録に必要な調査・研究として、空手の生活文化としての価値に着目し、同協議会において設置した「学術研究連絡会」において、地域の生活文化に根付いた棒術を含む空手（武術的身体表現）に関する詳細な調査を実施して報告書としてまとめました。

報告書では、棒術を含む空手が県内の地域行事や祭礼行事において盛んに行われるなど、生活文化に溶け込んでいることが分かる内容となっており、地区別の特徴や事例、行事別の特徴、歴史的事例、町道場との関わり、全国との比較などを紹介しています。

本報告書により、沖縄空手が地域社会や県民生活と密接な関わりがあることの学術的な裏付けとなり、ユネスコ登録が推進され、将来にわたり沖縄空手の保存・継承が図られるとともに、文化的価値への理解がさらに深まることを期待しています。

結びに、本報告書の執筆に御尽力いただいた学術研究連絡会の委員・アドバイザーの皆様をはじめ、本調査に御協力を賜りました県内市町村教育委員会や自治会、町道場をはじめとする関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

いっぺー にふえーでーびる

令和 7年 3月

目 次

調査概要

- 1 調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 2 「武術的身体表現」について・・・・・・・・・・ 4
- 3 調査の経過について・・・・・・・・・・ 4
- 4 調査報告書の執筆者・・・・・・・・・・ 6
- 5 調査票・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
 - (1) 基礎調査票・・・・・・・・・・ 8
 - (2) 調査票・・・・・・・・・・ 9
- 6 調査結果総括・・・・・・・・・・ 10

第1章「武術的身体表現」

- 第1節 「武術的身体表現」の民俗的事例（寄稿）・ 14
田楽・田遊び、風流踊、棒踊り、民俗的棒術、獅子舞、小括
- 第2節 「武術的身体表現」の歴史的事例・・・・・・ 19
 - 1 流派武術と民俗社会・・・・・・・・・・ 19
 - 2 「武術的身体表現」の実態：神道香取流を事例に・ 21
 - 3 小括・・・・・・・・・・ 22

第2章「武術的身体表現」を有する ムラ行事について

- 第1節 地域の生活文化に根差した武術的
身体表現の歴史的事例・・・・・・・・・・ 27
- 第2節 行事別の特徴・・・・・・・・・・ 33
 - 1 豊年祭・・・・・・・・・・ 33
 - (1) 沖縄本島北部・・・・・・・・・・ 33
 - (2) 沖縄本島中部・・・・・・・・・・ 34
 - (3) 沖縄本島南部・・・・・・・・・・ 35
 - (4) 宮古・八重山・・・・・・・・・・ 37
 - 2 盆行事及び関連行事・・・・・・・・・・ 39
 - (1) 北部地区・・・・・・・・・・ 39
 - (2) 中部地区・・・・・・・・・・ 39
 - (3) 南部地区・・・・・・・・・・ 40
 - (4) 宮古・八重山地区・・・・・・・・・・ 40
 - 3 ハタスガシー・ヌーバレー・イタシキバラ行事・ 41
 - (1) ハタスガシー・・・・・・・・・・ 41
 - (2) ヌーバレー・・・・・・・・・・ 42
 - (3) イタシキバラ・・・・・・・・・・ 43
 - 4 その他・・・・・・・・・・ 44
 - (1) 南ヌ島（フェーヌシマ）・・・・・・・・・・ 44
 - (2) シヌグ・ウンジャミと綱引き行事・・・・・・・・・・ 47
 - (3) 特別な行事・・・・・・・・・・ 50

- 第3節 武術的身体表現を有するムラ行事の総括・・ 52
 - 1 北部地区・・・・・・・・・・ 52
 - 2 中部地区・・・・・・・・・・ 56
 - 3 南部地区・・・・・・・・・・ 62
 - 4 宮古地区・・・・・・・・・・ 69
 - 5 八重山地区・・・・・・・・・・ 72

- 第4節 町道場とムラ行事との関わり・・・・・・・・ 84
 - 1 ムラ行事における空手道場・・・・・・・・ 84
 - 2 八重瀬町志多伯における棒術・・・・・・・・ 86
 - 3 小括・・・・・・・・・・ 87

第3章 各地区の調査報告（代表事例）

- 第1節 北部地区・・・・・・・・・・ 91
- 第2節 中部地区・・・・・・・・・・ 103
- 第3節 南部地区・・・・・・・・・・ 112
- 第4節 宮古地区・・・・・・・・・・ 132
- 第5節 八重山地区・・・・・・・・・・ 138

第4章 委員座談会

- 委員座談会・・・・・・・・・・ 159

第5章 調査回答結果

- 第1節 市町村の各行政区（ムラ）所在の
「武術的身体表現」を有する調査 調査地区一覧表
・・・・・・・・・・ 169
- 第2節 調査地区分布地図・・・・・・・・・・ 171
- 第3節 調査回答結果表・・・・・・・・・・ 172

- 関係資料・・・・・・・・・・ 193

調查概要

1 調査概要

(1) 調査目的

本調査の目的は、主に地域の生活の営みと密接に関わるものとして「空手や棒術など(武術的身体表現)が、地域行事に根差しており、生活の一部となっている」ことを調査結果として取りまとめ、調査報告書を関係省庁に提出することで、「生活文化」の登録無形文化遺産として認定、その後のユネスコ無形文化遺産登録へつなげていくことである。

また、「武術的身体表現」に関する現状把握とともに、必要に応じて実際に祭事に合わせた現地調査を行うことにより、記録保存と資料の収集に努めることをねらいとしている。

(2) 調査内容

本調査は、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録に向けた取り組みの一環として、「武術的身体操作・表現の形態」が継承されてきた多様な民俗文化(生活文化)の現状を把握するための県内全域にわたる調査である。

また、沖縄県域を5ブロック(沖縄本島北部、中部、南部、宮古、八重山)に区分し、各ブロック内の「武術的身体表現」を有する行事等について、詳細な調査を実施する。

(3) 調査手法

令和3年度に基礎調査として、県内各地の集落単位で所在する祭祀や儀礼に継承された「村棒」、豊年祭などの奉納行事に見られる「武に係るまたは武を想起させる」所作を含めて、地域に残る「武術(空手や古武道)」の情報収集を行った上で、県内市町村教育委員会を通じて、各市町村の文化財保護担当等の協力を得ながら、区長や各市町村の文化財保護委員等を調査員として依頼して、集落を単位とする詳細な調査を実施した。

(4) 調査対象

調査票は、地域行事や祭礼行事などにおいて行われる武術的身体操作・表現として、例えば祭事において拝所で行われる空手や古武道(棒やサイ等)の演武や棒術の奉納、豊年祭などにおける棒術の披露、舞踊にみられる空手の舞、空手の型を基にした獅子舞、櫓や槍・サイなどの古武道演武、エイサーの道ジュネーにおける六尺棒、綱引きのガーエーなどに登場する棒術など、様々な場面・内容を対象としている。

(5) 調査項目

調査項目としては、「方言名称」「武術的身体操作・表現の形態」「時期・場所」「行事の目的・由来・伝承」「当該行事における意味」「組織・指導者・伝承方法」「稽古の仕方」「演武構成」「衣装・道具」「音楽」「課題」「記録」に関する28項目となっている。

(6) 調査時期

調査時期としては、令和4年度は5地区34集落、令和5年度は5地区76集落、合計で5地区110集落の調査を実施しており、令和6年度は補足調査や追加調査を実施して、報告書を作成することとしている。

2 「武術的身体表現」について

本調査においては、集落に伝承される空手や棒術などの民俗行事の所作を、「武術的身体表現」と定義して、人々の生活の中で、これら武術的身体表現がどのように根付いているかについての実態を把握することとしている。

3 調査の経過について

(1) 令和2年度の関連した取組

「沖縄空手ユネスコ登録推進協議会（以下、「協議会」という。）」において、沖縄空手は平和を尊ぶ精神性や地域社会・県民生活と密接な関わりを持つこと等を特徴とし、ユネスコの登録基準に示されている「口承の伝統・表現」、「社会的慣習・儀礼・祭礼行事」、「芸能」等の分野に幅広く該当する無形文化遺産である旨の検討結果が取りまとめられた。

(2) 令和3年度の県内市町村への基礎調査

県内市町村の文化財保護担当者へ協力を依頼して、各市町村で行われている「村棒」や「棒踊」を含む沖縄空手・古武道関係など「武術的身体表現」を有する行事に関する基礎調査を実施して、30市町村から該当がある旨の回答があった。基礎調査においては、「当該行事が行われている集落名」「名称」「起源」「概略」「特徴」「内容」「継承状況」などを照会した。

(3) 令和3年11月22日付けで協議会規則改正

協議会において、ユネスコ登録の構成要素に係る実情を把握するなど、調査研究に係る実施体制の強化を図るため、人類学者・民俗学者を中心とした「学術研究連絡会」を設置した。

(4) 令和3年11月29日、令和3年度第1回学術研究連絡会を開催

沖縄空手のユネスコ登録に向けた令和2年度までの取組状況を踏まえた上で、学術研究連絡会の設置・構成について確認した。また、県内市町村へ照会した武術的身体表現の基礎調査の結果や「マチ道場」の社会的な役割について検討した。

(5) 令和3年12月24日、令和3年度第2回学術研究連絡会を開催

令和4年度以降に実施する調査に係る実施体制や調査票様式、「マチ道場」の社会的な調査等について検討した。

(6) 令和3年1月28日、令和3年度第3回学術研究連絡会を開催

令和4年度以降に実施する調査に係る調査票様式（改定案）のほか、「第2回沖縄空手オンラインシンポジウム」について検討した。

(7) 令和4年2月14日、協議会において、「第2回沖縄空手オンラインシンポジウム」を開催

協議会は、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録に向けた県民や空手関係者の気運醸成を図るため、登録に向けた取組を紹介するシンポジウムを開催した。パネルディスカッションでは、学術研究連絡会の萩尾委員長、久万田委員、神谷武史委員、田邊アドバイザーがパネリストとして参加し、「武術的身体表現」という視点で民俗行事を事例として紹介した。

(8) 令和4年2月22日、令和3年度第4回学術研究連絡会を開催

令和4年度以降に実施する調査に係る調査票様式（改定案）のほか、令和3年度に実施した学術研究連絡会の総括、令和4年度の事業計画（案）について検討した。

(9) 令和4年7月7日、令和4年度第1回学術研究連絡会を開催

令和4年度以降に実施する調査に係る調査票様式や令和4年度の調査計画（調査対象集落や説明会日程）について検討した。

(10) 令和4年7月22日～令和5年3月31日、「武術的身体表現」を有する行事の調査を実施

沖縄県内各地の集落で伝承されている「武術的身体操作・表現」の現状や役割を把握するための調査を実施した。

調査地区：今帰仁村、宜野座村、金武町、読谷村、嘉手納町、北谷町、北中城村、西原町、那覇市、糸満市、八重瀬町、多良間村、竹富町（5地区 34 集落）

なお、宮古島市（8/29）、那覇市（9/13）、宜野座村（9/14）、北中城村（9/15）、竹富町（9/21）、八重瀬町（9/28）では説明会を開催した。

(11) 令和4年12月12日、令和4年度第2回学術研究連絡会を開催

調査に係る調査票の取りまとめ状況の確認や意見交換等を行った。

(12) 令和5年2月13日、協議会において、「第3回沖縄空手オンラインシンポジウム」を開催

協議会は、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録に向けた県民や空手関係者の気運醸成を図るため、登録に向けた取組を紹介するシンポジウムを開催した。パネルディスカッションでは、学術研究連絡会の久保田アドバイザーがパネリストとして参加し、無形の文化財の調査研究から見る沖縄空手を紹介した。

(13) 令和5年4月28日～令和6年3月31日

令和4年から引き続き、沖縄県内各地の集落で伝承されている「武術的身体操作・表現」の現状や役割を把握するための調査を実施した。

調査地区：大宜味村、本部町、名護市、伊江村、伊平屋村、伊是名村、宜野湾市、豊見城市、八重瀬町、南城市、南風原町、久米島町、粟国村、宮古島市、石垣市、竹富町、与那国町（5地区 76 集落）

なお、北部地区（4/27）、中南部地区（4/28）では説明会を開催した。

(14) 令和5年5月12日、令和5年度第1回学術研究連絡会を開催

調査に係る調査対象や担当地区、今後のスケジュールについて検討を行った。

(15) 令和5年8月7日、令和5年度第2回学術研究連絡会を開催

調査に係る現地調査の担当地区割り振り、調査報告書構成（案）、今後のスケジュールについての検討、令和4年度調査結果に係る不足項目・必要な追加調査の項目に係る意見交換等を行った。

(16) 令和6年1月12日、令和5年度第3回学術研究連絡会を開催

沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録までの流れや令和5年度調査の回答状況の確認、調査結果に係る不足項目・必要な追加調査の項目に係る意見交換、調査報告書構成（案）の再考等を行った。

(17) 令和6年5月27日、令和6年度第1回学術研究連絡会を開催

調査票の取り扱いと報告書の位置付け、報告書の構成案とスタイル案、年間スケジュール等を検討した。

(18) 令和6年9月10日、令和6年度第2回学術研究連絡会を開催

調査報告書に係る原稿執筆の進捗状況について、各委員からの報告と意見交換を行ったほか、委員座談会の開催や今後のスケジュール等を検討した。

(19) 令和6年12月7日、令和6年度第3回学術研究連絡会(委員座談会)を開催

調査を振り返るとともに、ムラ行事を継承していく上での課題や対応策、希望等について話し合う座談会を開催した。また、報告書(原稿)の取りまとめ状況や今後のスケジュール等の確認を行った。

(20) 令和7年3月6日、令和6年度第4回学術研究連絡会を開催

報告書の作成も含めた3年間の調査についての総括を行い、今後必要な調査等について検討して、今後の方向性について確認を行った。

4 調査報告書の執筆者

本調査の報告書は、「沖縄空手ユネスコ登録推進協議会 学術研究連絡会」において、調査目的や内容、手法、対象、項目等を協議・決定して、委員やアドバイザー一同が調査や執筆を担当して、まとめたものである。また、本調査のアドバイザーの久保田 裕道 東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長より寄稿いただいた。

○学術研究連絡会委員

萩尾 俊章 沖縄民俗学会 会長

久万田 晋 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所 教授

神谷 武史 沖縄県立芸術大学音楽学部音楽文化専攻沖縄文化コース 講師

萩原 左人 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 教授

神谷 智昭 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 准教授

仲村 顕 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所 共同研究員

○学術研究連絡会アドバイザー

久保田 裕道 東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長

田邊 元 富山大学学術研究部芸術文化学系 講師

園原 謙 沖縄県文化協会 事務局長

《参考》 調査実施に至るまでの経緯について

沖縄を発祥の地とする空手は、沖縄が世界に誇る伝統文化であり、先人達が体系化し今日まで受け継がれてきた技や精神性を今後も正しく保存・継承していくことが必要である。

ユネスコ無形文化遺産登録は、こうした貴重な伝統文化としての沖縄空手の価値を県民が再認識する契機となるとともに、国内外における「空手発祥の地・沖縄」の認知度向上に繋がることから、沖縄空手の振興はもとより、地域社会の発展や世界の平和文化創出に貢献するものと考えられている。

このため、県では、平成 30 年 3 月に策定した「沖縄空手振興ビジョン」において、沖縄空手の保存・継承に向けた取組の一つとして、ユネスコ無形文化遺産の登録を位置づけており、伝統文化としての空手の価値と平和の武である精神性の学術研究を深めるとともに、広く県民に啓発を行い、気運醸成を図ることとしている。

さらに、平成 31 年 3 月には、同ビジョンを実現するための具体的な工程等となる「沖縄空手振興ビジョンロードマップ」を策定しており、これらに基づいて登録に向けた取組を推進している。

県では、「沖縄空手振興ビジョン」及び同「ロードマップ」に基づき、空手関係者、学識経験者・有識者、行政関係者による「沖縄空手ユネスコ無形文化遺産登録推進検討委員会」及びその部会として流派別の空手関係者からなる「流派研究連絡会」を令和元年 9 月に設置し、登録に向けて必要な内容の検討に着手した。

また、令和 2 年 8 月には、沖縄空手のユネスコ無形文化遺産登録に必要な調査・研究並びに気運醸成に向けた取組を通じて、沖縄空手を次世代に正しく保存・継承するとともに、「空手発祥の地・沖縄」を国内外に広く発信することを目的に、「沖縄空手ユネスコ登録推進協議会」を令和 2 年 8 月に設置し、早期の登録実現に向け、県内の空手関係団体をはじめ、県議会、市町村、教育、文化・学術、経済・観光、メディアなど幅広い関係者の参画を得た。

同協議会には、登録に必要な調査・研究を行うための部会として、空手関係者、学識経験者・有識者、行政関係者等で構成する「検討委員会」が設置され、沖縄空手は、「礼節を重んじ平和を尊ぶ精神性」や「地域社会・県民生活との密接な関わり持つこと」等を特徴とし、ユネスコの登録基準に示されている「口承の伝統・表現」、「社会的慣習・儀式・祭礼行事」、「芸能」等の分野に該当し、人々に伝統とアイデンティティを再認識させ、地域の絆や連帯を強める役割を果たす無形文化遺産である旨の検討結果が令和 2 年度末に取りまとめられた。

このような中、令和 3 年に行われた文化財保護法の改正により、これまで無形の文化財の対象としてこなかった生活文化の分野（書道、華道等）のうち、一定の学術的な蓄積により文化としての価値付けが可能なものについて、無形文化財及び無形の民俗文化財の登録制度が新設された。

沖縄空手が地域に根差し、人々の生活と密接に関連している特徴を裏付けるためには、空手や棒術など（武術的身体表現）が地域行事や祭礼行事などにおいて行われるなど、生活の一部となっていることを調査する必要がある。

このため、同協議会においては、令和 3 年 11 月に、これらの分野に精通する民俗学や人類学等の専門家による部会（「学術研究連絡会」）を新設し、新たな視点を盛り込みながら、早期の登録実現に向けた今後の調査・研究を実施することとなった。

5 調査票

(1) 基礎調査票

令和3年度沖縄空手ユネスコ登録推進事業

各市町村の「村棒」など「武術的身体表現」を有する基礎的調査票

各市町村で行われている「沖縄空手・古武道」関係（「村棒」や「棒踊」等を含む）など「武術的身体表現」を有する行事について、確認できる事柄についてご記載ください。

1.所在市町村		
2.豊年祭や綱引き、集落の祭禮、行事の中で、「村棒」、「棒踊」等がある村名をすべて記入してください。		
3.地域の中でももっとも伝統の古い集落名を記してください。		
4.村棒や棒踊等について（空手・古武術に関するエイサー等も含む）	名称：	
	起源：	
	概略：	
	特徴：	
	詳細内容：	
	継承状況：	
5.「市町村史」、「字史」、「郷友会誌」、その他文献資料や演武状況の写真などの有無と詳細	有・無	
	内容：	
6.学校等の地域社会の教育機関で導入されている事例があればご教示ください。	有・無	
	内容：	

(2) 調査票

沖縄空手ユネスコ登録推進事業

沖縄県内 市町村の各行政区（ムラ）所在の「武術的身体表現」を有する行事の調査票

市町村名	調査 年月日1		調査員 氏名			
			氏 名	生 年	電 話	住 所
行政区名				大正 ・ 昭和 年		
小字名 (地元での名称)	再調査 月日	令和 年 () 月 日 (曜日)	話者・協力者 氏名			
			氏 名	生 年	電 話	住 所
				大正 ・ 昭和 年 大正 ・ 昭和 年		

方言名称	1 年中行事名 (該当部分に「✓」)	☐ 豊年祭 () ☐ 盆行事 ☐ シヌグ・ウンジャミ ☐ その他 ()
	2 地元での呼び方	
武術的 身体表現の 形態	3 武術的身体操作・表現の形態	
	4 武術的身体操作・表現の分類 (該当部分に「✓」(複数可))	☐ 型の演武がある、 ☐ 対面での打ち合い等がある、 ☐ 獅子に対峙しての武術がある、 ☐ 芝居の中で武術的所作が演じられる、 ☐ その他 ()
時期・場所	5 行事が行われ期日 (旧暦)	
	6 上演の場所	
行事の目的 由 来 伝 承	7 行事の目的・伝播の仕方 (どのように伝承されるようになったか。)	
	8 中断・再興の時期とその理由	
	9 武術的身体表現(「空手」、「棒」等)に まつわる由来、伝承や民話、説話など	
当該行事 における意味	10 行事の中での演武(舞)の位置とその意味 (戦前、戦後、復帰後の変化)	
組 織 ・ 指 導 者 ・ 伝 承 方 法	11 組織	
	12 組織の特化	☐ 武術の部分に特化した組織がある(保存会設置) ☐ 武術の部分は専門の師匠がいる
	13 各組織の役割等 (戦前、戦後、復帰後等の変化について)	
	14 指導者の氏名 (さかのぼるまで)	
	15 出演者の状況・条件 (年齢・性別/戦前・戦後・復帰後)	
稽古の 仕方、期間	16 稽古のスケジュール (戦前、戦後、復帰後等の変化について)	
	17 稽古の場所 (戦前、戦後、復帰後等の変化について)	
演舞(武)構成	18 演武(舞)構成(芸能) (現状を含む)	
	19 集落以外での披露の有無 (該当部分に「✓」)	☐ 集落のみでしか演武したことがない ☐ 集落以外(市町村内)で演武したことがある ☐ 公民館やホールなど(市町村外)で演武したことがある ☐ その他 ()
衣裳・道具	20 衣裳・道具の名称と着方	
	21 衣裳・棒、他の用具の管理と時代の変化について (戦前、戦後、復帰後等の変化について)	
	22 衣裳・棒、他の用具の修繕や製作、購入の方法 (担当、方法、経費など)	
	23 棒など用具の材質 (戦前、戦後の変化)	
音 楽	24 楽器の内容と呼称、各楽器の演奏者数と 時代の変化について(戦前、戦後、復帰後など)	
	25 楽曲 (戦前、戦後の変化)	
課 題	26 支援してもらいたいことや困っていること (今後の継承等課題等)	
	27 コロナで影響を受けたこと	
記 録	28 文献、映像記録、古老の記録、 プログラムや式次第など (該当部分に「✓」)	☐ 文 献 ☐ 映像記録 (浦添てだこ祭に出演した記録が行政で保管している可能性あり、1992 首里城正殿復元の際の柿落し公演で戦後活躍された先輩方が演舞している) ☐ 古老の記録、メモ(昭和 55 年の浦添市史担当事務局編の「前田棒について」は前田出身の古老の記録) ☐ プログラムや式次第 ☐ その他 ()

6 調査結果総括

本調査で分かったこと（調査結果概要）

本調査においては、沖縄県域を5地区に区分して、空手や棒術など（武術的身体表現）を有する地域行事や祭礼行事等について調査を実施したところ、各地区や集落、また行事ごとに特徴があるものの、沖縄の地域社会や県民生活と密接な関わりがあることが示された。

今回の県内市町村教育委員会を通じた調査により、空手・古武道に由来する地域行事への伝承は、棒術が多く見られることが分かった。併せて、町道場の道場主への聞き取りを通じて、ムラ行事においては綱引きやハーリー（爬龍船競争）、豊年祭など、その行事における重要な役割として空手や棒術の演武が位置付けられているなど、沖縄空手が地域に根ざしていることが分かった。また、結婚式の余興として、沖縄空手の演武が選ばれることは、来賓者に沖縄空手の演武が喜ばれ、ハレの席にふさわしい演目として、沖縄空手が沖縄の人々の生活に浸透していることの表れである。さらに、礼儀作法の躰や生涯教育として、現在でも多くの道場が町中に看板を掲げ、地域社会に溶け込んでいることから裏付けられる。

本調査においては、各市町村を通じて行った集落単位の調査に基づき、必要に応じて実地調査やヒアリング等で補いながら、地区ごとの特徴や多様性についてまとめたものとなっている。

北部地区では、棒術において豊年祭を始めるに当たり、舞台や場を清める意味を持たせて棒を演じることが多く見られた。棒術の編成は、大きく3種類（一人棒、二人棒、三人棒）に分けられ、集団演武のスマチ棒などがある。演武形態では棒を激しく打ち合う事例も見られた。興味深いのは、本島最北端の集落（国頭村奥）において、王国末期に首里からの旧士族の移動に伴い空手や棒術の伝播・伝承が確認されたことである。沖縄空手は琉球古来の武術が周辺諸国との交流を深める中で体系化されたものがルーツとされるが、琉球王国時代に発展し、首里の士族等から地方へ伝播し、地域行事や祭礼行事へ溶け込み、伝承されていることが表れており、八重山などの他地区への伝播・伝承が見られた。

中部地区では、幅広い範囲で綱引きが行われており、併せて棒術も行われている集落が多いことが特徴である。五穀豊穰、子孫繁栄などを祈願して行う綱引きの前後に一人棒、二人棒、ハジリ棒と言われる組棒を演武する。また、綱引きに関わらず棒術が行われる集落も多い。豊年祭や旧盆行事、生年祝いや敬老会などの行事でも棒術の演武が披露される。エイサーのつなぎや組踊、舞踊と組み合わせで演武されることもある。

南部地区では、棒術を含む空手（武術的身体表現）は地区全体に広く伝播している一方で、今回の調査では存在が認められない地域や島がある。年中行事との関係では、綱引きや豊年祭において、空手や棒術などが披露されることが多い。南部地区の離島に目を向ければ、本島南部の集落とは異なる期日や行事において、空手や棒術が演武されているのが特徴である。芸能との組み合わせでは、獅子舞との組み合わせが目立っており、獅子舞の前に座清めで演武されることが多い。

宮古地区では、県内他地域と比べて伝承地の数が少なく、分布地域に偏り（宮古島南西部一帯と多良間島）が見られる。また、年中行事、特に豊年祭において棒術を行う事例が多く、宮古島南西部一帯では、棒術と女性の踊りがセットで行われ、最後にクイチャーを踊る。宮古島南西部では大人数で隊列を組むが、多良間島では二人一組である。使用する棒は短い棒と長い棒があり、特に宮古島南西部一帯では三尺前

後の短い棒を使用することが特徴である。

八重山地区では、祭事や民俗芸能は多種多彩で、島ごとの由来・来歴と歴史的な変遷も加わりながら様々な特徴がみられる。同一集落においても豊年祭や結願祭、節祭などの複数行事で棒術等が披露される事例も少なくない。また、由来や伝来の伝承では、沖縄本島からの伝来で広まったもの、八重山地区の他の島から広まった事例もあり、島への伝来のあり方として注目される。武術的身体表現の種類としては、棒術（型の演武と対面形式が主なタイプのほか、総巻きのタイプ）や綱引きでの型の演武や対面での打ち合い、フェーヌシマ（南又島）系統の棒と獅子舞などがある。

また、文字資料によって得られる情報の制約もあるが、近代の資料を通した歴史的事例（棒術或いは棒踊りに絞った地域行事）をまとめている。この中で、行事の場で供される棒術は、一つ目に純粋な武技としての棒術、二つ目に武技としての棒術を基盤としながら意図的に娯楽性を加えた棒術、三つ目に客体満足度を重視して創作された棒術に大別された。また事例を性質別に分類すると、ムラの祭祀行事では八月十五夜や葬送儀礼で用いる龕の修繕祝いなどで「棒踊」が披露されていたことが確認できた。その他には要人・賓客の来県にともなう接待行事、天長節の皇室関連行事、開校式や新校舎落成式などの学校行事、凱旋軍人歓迎会の行事などで棒術の披露が行われた。得られた事例のほぼ全てが祭祀やハレの席で、他者の鑑賞を前提とするもので、武術大会や実戦的事例は認められなかった。

なお、沖縄での空手や棒術などの武術的身体表現を考察する上で参考とするために、全国における民俗行事における武術的身体表現に関する歴史的変遷を紹介している。具体的には、武術は近世中頃からは広く世の中に定着し、実践する人々のあり方に合わせて拡張していき、民俗芸能として地域社会に定着している全国の事例を多く取り上げている。併せて、日本各地の武術的身体表現を伴う民俗芸能について、沖縄に多い「棒術」に絞って全国的な事例を紹介している。これらは、棒を呪具として用いる芸能、風流の道具として棒を用いる芸能、武術の披露として棒を用いる芸能、演劇的に棒を用いる芸能に分類されるが、2つ以上の要素を併せ持つ場合もある。

（学術的観点から）調査の総括について

沖縄では空手や棒術などの武術的身体表現がムラ（村落）の年中行事に多く取り入れられている。空手や棒術は「豊年祭」や「綱引き」、「八月十五夜」、「盆行事」、「種子取祭」、「結願祭」など重要な節目としての行事において披露され、その広がりや濃淡がみられるものの、沖縄本島北部から中・南部、本島の周辺離島、さらには宮古・八重山諸島まで及び、沖縄県内各地に分布していることが判明している。

空手は棒術ほど多くはないが、各地で祭事の演目として披露される。呼称も「空手」や「トーディ（唐手）」、「ティー（手）」として伝わり、「クーサンクー」など型の名称も流布している。注目されるのは「舞方（メーカタ）」として空手を舞踊化した演武があり、これは幕開けでおこなうことでその場の邪気を払い清める意味とされている。

棒術については、「棒」や「棒術」、「棒踊」、「棒振り」、「棒合わせ」等の名称で広く伝承されている。地域ごとに伝わる技は基本の構えや型、組棒の構成など様々であるが、型の演武と対面での打ち合いが多くみられる。それらの名称も「一人棒」、「二人棒」、「三人棒」、「四人棒」など組み合わせの人数によるもの、棒術全員参加による「総巻」や「棒巻」、地名を冠した「津堅棒」、「座喜味棒」、「棒読谷山」、「泊根組棒」

等があり、さらには「フェーヌシマ（南ヌ島）」と称される独特な棒術が沖縄本島や八重山地区において伝承されている。演目の出る順番により、「ハタボー（旗棒）」、「メーボー（前棒）」、「ナカボー（中棒）」、「シーボー（後棒）」と呼び分けられ、棒術の難易度の高低を示したり、演武の所作による「トーヌギヤー（飛棒）」、「ヨコウチボー（横打棒）」など多様な展開がみられる。さらには本島南部では獅子舞との組み合わせもあり、沖縄空手の型を取り入れた獅子舞もある。

棒は一般的に三尺棒、六尺棒その他があり、素材は桜、チャーギ（いぬまき）、クルチ（黒木）などがある。演武の際に組み合わせて使用される武具には槍や長刀、刀、古武道の「トウフアー」や「ティンペー（盾）」ヌンチャク、また一般庶民が農具や漁具で用いるクワ（鍬）や鎌、櫂（エーク）などもみられる。

これらの空手や棒術は御嶽など神聖な場所において奉納演武として行われたり、舞台の清めとして最初に演じられたり、祭事の最後に演じられたりもする。全体として清めと祓いの意味づけがなされている。

このように空手や棒術など（武術的身体表現）は、地域の自治会や保存会、町道場などによって支えられつつ、地域の重要な年中行事で保存・継承されてきた。

以上のとおり、沖縄の伝統的な「空手・古武道」に由来する空手や棒術が、県内各地に普及しながら地域の年中行事に取り入れられてきた実態がある。これら民間に伝承された空手や棒術は、祭事における奉納や、舞台の最初や最後の祓いや清めの意味合いを持ちながら、必須の演目として位置づけられている特色を有している。

第 1 章

「武術的身体表現」

第1章 「武術的身体表現」

第1節 「武術的身体表現」の民俗的事例（寄稿）

著：久保田 裕道

日本の民俗芸能は、武術との親和性が高い。まず武具そのものが、民俗芸能との親和性が高いといえることができる。除魔の呪具として武具を用いる呪術が存在し、また法具などの中には呪具そのものが武具である例も見られる。さらに刀剣や弓矢のように武具が対人や対獣のみならず、霊的な存在に対しても除魔の効力を発揮するものと考えられたことから、自然と武具を用いる民俗芸能は数多く存在している。

ただしそれは、必ずしも武術的表現に結びつくとは限らない。「武術的」をどのように定義するのかにもよるが、ただ採物として手にしているだけであれば、武術とまでは言い難い。一方、中には剣劇のように演劇的な所作の中で武術的表現が用いられる場合もある。演劇であっても一定の武術的修練を必要とすることは確かだが、あくまでも演劇的表現の一環とすれば、武術とは区別して考えるべきかもしれない。

一方、武術側から見た場合にも民俗芸能に結びつく例を上げることができる。武術とは本来は闘争のための手段ながら、その習得課程における技術披露の手段として、あるいは広報手段として演武が披露される機会が往々にしてある。それゆえ祭礼や民俗芸能の中に武術が入り込む事例が見られる。むしろ演舞としての武術が、民俗芸能化したということもできよう。

さらに芸能ではないが、風俗慣習としての「競技」もまた民俗の中には数多く存在する。特に相撲、射的（騎射を含む）、競馬、舟漕ぎ競争、綱引きなどは神占とも結びつき、全国の祭礼・年中行事で見ることができる。これをどこまで武術に含めるべきなのか、定義は難しい。

しかしこのような定義と分類は、そもそも何を目的とするのかによって変わる。今回の調査においては、沖縄における武術的表現を伴う民俗芸能を悉皆的に把握することを目的としている。それゆえ、沖縄以外の地域における民俗芸能と武術との関係性を提示することで、比較の視座を想定してみたい。ただし武術全体では規模が大きすぎるため、ここでは沖縄に圧倒的に多い「棒」に絞って全国的な事例を挙げることにしたい。棒（棒術あるいは杖術）は沖縄でも古武術の一つとしてよく知られるが、日本各地でもさまざまな流派を生み出している。他の武具に比べても製作・入手が容易であり、身分や階層に捉われず広く行われてきたことから豊富な事例が存在する。棒を捉えることで、武術全体を論じる上での足掛かりになることを期待したい。

（1）田楽・田遊び

田遊び・田楽系の芸能には、しばしば棒が使われる。例えば東海地方に多い修正会系の芸能の一つ、「法多山の田遊び」（静岡県袋井市）では、牛ぼめ・鳥追い・五月女といった田遊びの前に、太刀と棒振りの方固めの舞が演じられる。中世神事芸能の名残を残すとされる「どうじゃこう」（岐阜県関市）は、四方浄め・薙刀振り・棒振り・宝獅子・箕獅子・どうじゃこう（からくり芸）・豊年踊りで構成されている。箕獅子までの5演目は祓い浄めを目的としており、そこに薙刀と棒とが含まれている点は注目できよう。その後に田楽・田遊び芸となる。田植神事として有名な「住吉の御田植」（大阪府大阪市）では、神田で田植を行っている間、田の周囲で風流武者が紅白に分かれ、陣鉦・太鼓・ほら貝を鳴らしながら六尺棒を打ち合う。



写真1-1-1 住吉の御田植「棒打合戦」(大阪府大阪市)

このように田楽系芸能と棒との結びつきは多々見ることができる。この点は中村茂子が指摘しているように、予祝のための「祝い棒」や修正会における「乱声」儀礼との関連性が考えられよう（1）。祝い棒とはいわ

ゆる小正月の「削りかけ」に当たり、乱声は棒などで床や壁を打ち叩く儀礼である。こうした予祝儀礼に用いる呪術的な棒が、予祝儀礼としての芸能に加わるという傾向を見出すことができる。

(2) 風流踊

令和4年(2022)にユネスコの無形文化遺産となった「風流踊」には、棒などの武具を用いた舞踊が多く見られる。棒ではないが、例えば滋賀県守山市・甲賀市・東近江市・蒲生郡竜王町に伝承される「近江のケンケト祭り長刀振り」は、鉦・ササラを奏する踊りと、棒振り・長刀踊りとが組み合わさり、さらに傘鉦や花・鷺と呼ばれる大きな鉦が付く。特に長刀踊りは、一人ずつの演武も披露され、見どころとなっている。

島根県津和野町の「弥栄神社の鷺舞」は、京都の「祇園祭」における風流踊の形態を残す芸能として知られ、鷺舞が有名だが棒振りも付随しており、鷺と羯鼓の外側を棒振りがゆっくり大きく回るような構成が見られる。山口県周南市の「八代の花笠踊」も風流踊の一種で、念仏踊の要素もある。花笠をつけた男女の踊りが中心となっているが、最初に露払いとして「道分けの乱れ」と呼ばれる棒踊が演じられる。山口県から福岡・大分県にかけて見られる「楽」「楽打ち」などと呼ばれる太鼓踊にも、棒術が加わっているものがある。香川県



写真1-1-2 綾子踊「棒持」(香川県まんのう町)

まんのう町の「綾子踊」では、大踊・側踊・子踊の前に、長刀持と棒持による踊りが見られる。徳島県三好市の「西祖谷の神代踊」は雨乞祈願の芸能とされるが、棒振・獅子・薙刀と踊子らが円陣を作って踊る。

このように風流踊には、もともと棒を始めとする武具が用いられる傾向がある。このことは中世的な古態を残す風流踊のみならず、風流系統の芸能一般にも見て取ることができる。例えば「綴子の太鼓」(秋田県北秋田市)は、巨大な太鼓が出ることで知られるが、ヤツパリ・出陣行列・獅子方・露払い・笛・太鼓方が行列で練り、境内で芸能を奉納する。ヤツパリが棒術を披露するが、ヤツパリとは「野次払」のことで、野次馬を追い払う警護のための棒術として組み込まれている。元来、風流踊に付随していた棒が、警護など現実的な役割としても認められたということであろうか。

(3) 棒踊り

さらに「棒踊り」と呼ばれる棒が主体となった風流系の芸能が、高知県や熊本・宮崎・鹿児島県など南九州で見ることができる。一対一で棒を打ち合う組手を行うほか、大人数での演武なども見ることができる。棒以外に太刀、薙刀、鎌、あるいは尺八などを持つ場合もある。

この一大中心地といえるのは鹿児島県で、ほとんどの地域で棒踊りは伝承されてきた。さらに熊本・宮崎県下までにその影響が及んでいる。これは薩摩藩が武術奨励のために行かせたことが理由だともいう。例えば「境棒踊り」(鹿児島県垂水市)では、三人一組で、三尺棒・六尺棒・鎌をそれぞれ持ち、三尺棒と六尺棒を打ち合わせる間で鎌を振る。下野敏見の研究によれば、薩摩の棒踊りは、御田植祭との関係が深いという(2)。祝い棒と呼ばれる棒を突く様が棒踊りにも共通し、田歌もまた棒踊りの中で歌われる。こうした予祝儀礼に風流踊りが結びつき、さらに薩摩で栄えた棒術(浅山流)や剣術(示現流)が結びついたと下野は考えている。



写真1-1-3 山北棒踊り「本棒」(高知県香南市)

さらに四国南部にも、九州ほどではないものの棒踊りが見られる。例えば「山北の棒踊」（高知県香南市）では、二人一組の「小棒」と、20人が一斉に打ち合う「二十人棒」とが披露される。同じ高知県仁淀村では、秋葉神社の祭礼に、幟・台笠・立笠・囃子・柳・鳥毛・踊子などの行列が練り歩き、途中でサイハライが棒踊や太刀踊などを見せる。風流踊がより武術性を高めた事例として捉えることができる。なお高知・愛媛県では「太刀踊り」あるいは「花取踊り」と呼ばれる太刀を主体とした舞踊も数多く見られることも特徴である。

（４）民俗的棒術

ここまで棒による芸能を見てきたが、さらに武術として高められた棒術を、芸能的に披露している事例がある。殊に有名なのは愛知県下を中心に伝わる「棒の手」であろう。豊田市、長久手市、名古屋市、尾張旭市、春日井市、小牧市、西尾市、江南市、安城市、日進市、瀬戸市、みよし市、豊明市、多治見市に60か所以上で伝承されている。起源ははっきりしないが、領主が村人に学ばせたとも、自衛手段として習得したともいう。

約20種の流派も存在し、例えば愛知県名古屋市の善進町「真影流棒の手」、中根町「見当流棒の手」、猪高町「鷹羽検藤流棒の手」、鍋屋上野町「源氏天流棒の手」のように名称に反映されているところもある。また必ずしも棒（六尺棒）だけではなく、木刀、真剣、薙刀、槍、鎖鎌、十手、傘なども用いられる。例えば岐阜県多治見市の「小木棒の手」では「無二流」と称しており、棒・太刀（木刀・真剣）・金倉・鎌・櫓・楯が使われる。異なる武具同士の対戦となり、十三演目が披露され、最後は真剣対鎌の一番となる。こうした組手形式や型の演武を芸能的に見せるという形式は、あるいは民俗芸能というよりも民俗武術というべき存在でもあり、両者の境界は曖昧ともいえる。

一方、棒の手などと同様の組手形式の演武ながら、棒術が獅子舞に付随した例が関東地方には顕著に見ることができる。いわゆる三匹獅子舞（三頭立て獅子舞、風流獅子舞などとも）で、それ自体は東日本全域に分布するが、棒術が付属するものは関東地方の特徴となっている。

例えば「関白獅子舞」（栃木県宇都宮市）は関白流獅子舞の家元とされる。栃木や群馬など北関東にはこのように三匹獅子舞もまた流派を名乗る傾向がある。この三匹獅子舞の前座として、棒と太刀の演武が行われるのである。同じ栃木県の栃木市都賀町には、木八幡宮に杖術・獅子舞が伝えられている。獅子舞はやはり関白流ながら、杖術は獅子舞に付属するものではなく、独立したものとみなされるという。小天狗流を名乗っており、棒対棒、棒対太刀など、土俵上で四十八手の型が演じられる。なお三匹獅子舞が土俵で舞われるという光景も、関東ではよく見ることができる。しかしなぜ三匹獅子舞に棒術が付随するようになったのかについては、明らかになっていない。



写真1-1-4 原馬室獅子舞・棒術「棒術」（埼玉県鴻巣市）

考え得る要因としては、いわゆる農民武術が獅子舞に結合したということであろうか。例えば「尾崎獅子舞」（東京都あきる野市）では、新撰組で知られる天然理心流の棒術を取り入れたという伝承がある。これは天然理心流の門弟であった大西政十（1827 - 1906）が郷里で教えた際に、獅子舞に取り入れられたのだという。さらに「箱根ヶ崎獅子舞」（東京都瑞穂町）では、獅子舞の前に棒使いが登場し、鎖鎌・長刀・六尺棒を用いた演武をするが、これが「曾我の仇討ち」として演じられている。獅子舞に付随した農民武術が、さらに地芝居的な解釈をされて展開を遂げた例といえよう。

（５）獅子舞

三匹獅子舞に付随した棒術では、獅子舞そのものに棒術が絡むことはほぼなかった。獅子舞とは別個に棒術が存在しているということができた。一方、三匹獅子舞以外の獅子舞でも棒術との結びつきが見られ、その

場合は獅子と対峙するいわゆる獅子あやしの役が、その技を披露することになる。三匹獅子の棒術が組手形式や型の演武であるのに対し、獅子あやしの棒は対獅子の個人技になることが多い。

最も顕著なのは、金沢市をはじめ石川県の加賀地方に分布するいわゆる「加賀獅子」であろう。加賀獅子は、長さが10メートルもあるような巨大な胴幕（カヤ）を用いるのが特徴だが、その獅子の前に棒・刀・薙刀・鎖鎌などを手にした棒振りが立ちはだかるのである。そしてこの獅子を退治するという「殺し獅子」が見どころとなっている。この棒振りには武術道場も関わっており、土方流や半兵衛流といったさまざまな流派のもと発展してきたという経緯もある。



写真1-1-5 鶴来ほうらい祭り「棒振り(獅子方)」(石川県白山市)

隣接する富山県西部では、胴幕に多人数が入るいわゆる「むかで獅子舞」が多数伝承されているが、ここでも獅子に対峙する天狗役などが棒・長刀・太刀・鎖鎌・御幣などで獅子に挑む。そして「獅子殺し」をするという展開となる。加賀獅子のように武術として発展しているわけではないが、獅子あやしの芸として継承されてきた武術的表現だといえよう。

平安時代成立の「信西古楽図」で獅子の前に立つ治道（鼻高面）とも思しき獅子あやしは、手に払子らしき棒を持つ。また同じく鼻高面を付け、獅子などと共に祭礼を先導する役割を担う「王の舞」も、鉾などを持つことから、獅子あやしが棒などの武具を持つことになったのかもしれない。

北陸地方以外でも、全国各地の獅子舞において、そうした獅子あやしを見ることができる。例えば鳥取県東部・兵庫県北西部で百か所以上に伝承される「麒麟獅子舞」にもまた、獅子あやし役の「猩々」が「朱棒」と呼ばれる棒を持ち演技をする。山形県の西村山地方に伝承される「黒獅子」と呼ばれる大型の獅子には、「警固」（力士とも）と呼ばれる役が棒を持って獅子に寄り添う。獅子を導くともになだめることもあり、時に競い合うこともある。この役を務めるためには、各神社で行われる相撲の勝者にならねばならず、祭りでは神主や氏子総代とともに重要な位置づけとなる。また岡山県中央部の旭川中流域では獅子舞とともに「棒使い」という役が出る。この棒使いは鼻高面の鬼であったりするが、これには王の舞の要素も考えられよう。

このように獅子舞における棒は、集団群舞や組手の棒とも異なる要素を有しており、むしろ呪術的な目的と見なすべきかもしれない。ただしここでもまた、武術と結びついたり、演劇化するような事例が見られ、一概に分析することは難しい。なお中国では、清朝末期に獅子舞を武術として促進させた歴史があるという。現代中国で獅子舞がスポーツ競技と見なされる点も含め、別途考える必要があろう。

（6）小括

ここまで、大雑把に各地の棒を用いる民俗芸能を概観してきたが、大まかな流れを想定することができよう。すなわち棒を呪具として用い、予祝儀礼として演じた田楽・田遊びなどの芸能がある。さら主に除魔を目的とした風流踊に、棒などの武具を用いた踊りが組み込まれていることから、風流としての棒が想定できる。さらには、武術的要素を高めた「棒踊り」などの芸能も登場する。中には実際の武術と結びつき、より武術性の高い踊りもある。一方、武術が大衆化する中で演武もまた祭礼や獅子舞などと結びつき、より芸能性の高い見せる武術が登場するに至る。さらに、武術的な所作が演劇的に解釈され、芝居化するという展開も見られた。ただしこれらは、実際の個々の民俗芸能における歴史的展開を示しているわけではない。あくまでも大局的に見た際に、段階的な差異が見られるということに過ぎない。

実は棒を用いる民俗芸能としてはいま一つ大きな分野として、修験道系の芸能がある。しかし、ここでは敢えて触れてこなかった。修験道系の芸能では、修験者が超人的な力を誇示するために様々なアクロバティックな技を見せる傾向があり、棒や刀剣を用いた技も多い。例えば「関山の仮山伏の棒遣いと柱松行事」（新潟

県妙高市）・「山北のお峯入り」（神奈川県山北町）・「松会」（福岡県苅田町）などでは、棒を打ち合う様子を見ることができる。また山伏神楽などの修験系神楽においても棒を用いる演目を多々見ることができる。元来、修験道と武術の結びつきは強く、山伏が担った棒術も存在しており、宗教的武術といった観点から捉える必要がある。ただしこうした修験道系芸能の場合、棒や武具と芸能の結びつきを見る以前に、修験道的要素がどのようにして取り入れられているのかを把握する必要がある、一概に棒・武具との関係性のみで語ることは難しい。

同じことはアイヌの芸能についても言うことができる。「アイヌの古式舞踊」にも棒踊りがあり、儀式的性格の強い「剣の舞」や「弓の舞」に対して、「棒踊り」は、娯楽的要素が強いという。これもまた棒の持つ意味を考える上で重要な事例ではあるが、アイヌ文化側からの理解が必要であって、一概に棒の芸能として論じることが難しい。

以上の点を踏まえ、最後に全国的な棒の芸能について、とりあえず次のような分類をしてみたい。

- ①呪具としての棒を持つ芸能
- ②風流の道具として棒を用いる芸能
- ③武術の披露として棒を用いる芸能
- ④演劇的に棒を用いる芸能

これは必ずしも一つの芸能が一つに当てはまるということではなく、例えば②でありながら①として始められたものもあれば、③を②としてアレンジしたもの、②が③と結びついてより高度な技を披露するようになった芸能もあろう。また③が④に展開する場合もあれば、④であっても③の要素を持つ場合もあるかと思われる。これを沖縄に当てはめてみたとき、特に武術の普及が著しい沖縄では、①～④の境界を見定めることは難しいと言わざるを得ない。それでも沖縄以外の地域における武術的表現を伴う民俗芸能との接点は①～④において共通するのではないかと推察を行ってみた。沖縄空手を始めとした武術と、民俗芸能の中に見られる武術的表現の関係性を捉える際の参考となれば幸いである。

第2節 「武術的身体表現」の歴史的事例

日本の民俗行事における「武術的身体表現」

前項において示してきたように、日本には全国的に武器を用いる民俗行事が数多く存在している。本項では、その中でもとりわけ流派名を名乗り伝承されるものを取り上げたい。

流派名を名乗り伝承されることからわかる通り、それらの民俗行事は流派武術として実践されてきたものの今日的な姿でもある。例えば、薩南地域に多く伝承がみられる棒踊りは、その系譜を辿ると、現在も古武道として実践される示現流や浅山一伝流に位置付くという〔下野 2009〕。また、現在の金沢市を中心に行われる加賀獅子の棒遣いは、それぞれに様々な流派名を名乗るが、いずれも近世末期～明治中頃に金沢を中心に実践されていた流派武術を基とした、土方流や半兵衛流を源流に持つ〔小倉 2005〕。このような流派武術をもとにした「武術的身体表現」を有する民俗行事は、全国に数多く残る。しかし、そうした存在はこれまでも認知されてきたものの、民俗芸能を扱う研究領域において流派武術との関係から論じられることはほとんどなく、動作や武器自体の象徴的な意味からの理解に留まってきた。また、武術を研究対象にする領域においても、その関心はあくまでも近代に誕生した「武道」がいかに形成されたのかに集中しており、本稿が扱うような民俗世界において実践される武術への関心は低い¹。では、民俗や武術を扱う各領域においても関心が向けられることがなかった「武術的身体表現」を有する民俗行事からは、いかに民俗世界に位置づけられるのか。現代の私たちに対して何を示すのだろうか。

本項では、流派武術をもとにした「武術的身体表現」を有する民俗行事を対象に、はじめに近世からの現代にいたる大まかな流れを示す。そうした前提が必要である理由は、民俗世界における武術を理解するためには、流派武術のあり方についても簡単に触れておく必要があり、そのためには流派武術が広く村落社会に受容された近世から理解する必要があると考えるためである。以下では、まず流派武術について説明を行い、特に近世以降に村落社会において実践された流派武術がどういった実践であったかについて述べる。その後、そうした流派武術がどういった経緯から今日のあり方へと移行していたかを、筆者が調査した事例から示す。

1 流派武術と民俗社会

流派武術とはその名が示すように流派名を名乗り実践される武術であり、日本においてはほとんどの場合において、武術は流派名を名乗り伝承を行ってきた。ここでその起源や個々の歴史的経緯については触れないが、流派形成の最初期は室町期であり、江戸期に入りかなりの拡大があり、剣術をはじめ、柔術、槍術、薙刀術、鎖鎌術、馬術、弓術、砲術、築城術など、様々な流派が生まれた。これらの流派武術は、いわゆる「家元制度」と呼ばれる師弟関係を結んだ上で実践される。家元制度は武術に限らず、茶、華、礼法などにおいても取られる日本独特の実践組織の形態といえるが、武術の場合はそれらとは違う点があった。それは「完全相伝制」と呼ばれる方法を採用したことである。「完全相伝制」とは、ごく簡単に述べれば、免許や目録といった習得段階を示す証明に関する発行権一切を相伝者に対して受け渡す方法である。通常は「不完全相伝制」を採用することにより、流派の統たる人物は免許発行権の一切を持ち、流派内の隅々までその威光を示すことができる。「完全相伝制」を採用すると、この権利も相伝することになるため、相伝を受けた人物はそういっ

1 こうした学術界における関心の低さについては、対象の理解のし難さも関係していると考えられる。端的に言えば、武術のわざに関して理解するためには調査者自身にある程度武術についての造詣が求められる、と思われやすい。必ずしもそのようなことは無いはずだが、身体性を伴い、かつ対人に対して有効かどうか重要である武術のわざは、そもそも関心がない人物には理解し難いと思われる。ゆえにそもそものハードルが高く、関心の低さにつながり、民俗学の対象となり得なかったのではないだろうか。関心の低さは、また武術の研究者たちにも同様である。武道研究者の多くが剣道・柔道を中心とした武道経験者、ないし実践者であり、彼らにとつての武術とは慣れ親しんだ武道である。実際に「武術的身体表現」を有する民俗行事を指して「あれは武道(武術)ではない」という発言は、まま聞かれるものである。つまり対象に対して、暗黙の了解のなかでその範疇が決まっていることに原因がある。詳しくは、田邊〔2013〕を参照。

た利権を得ることが出来るようになる。結果としてどんどん独立が進み、新たに一派、ないしは新流派を打ち立てられたために、武術には数多くの流派が誕生することとなった〔西山 1982；魚住 2021〕。

こうした流派武術の拡がり、すなわちそれだけ弟子として入門する人びとがいたということである。すでに歴史学が明らかにしているところではあるが、武術は武士階級が独占していたわけではない。戦国時代を経て泰平の世であった江戸時代になったとはいえ、日々の危険は存在しており、当然のことながら村単位の自警は必要であった。村には武器が保有され、旅に出るときには身分に関係なく帯刀していたことが明らかにされている〔藤木 2005〕。こうした武器の保有は、当然その武器の使用方法への関心にも向くことになったのであろう。江戸中期以降に、流派武術が村落で実践されるようになっていった。ただし、そのあり方は先述したような「完全相伝制」に限らず、個々の事情に合わせたものであった。例えば北信濃では、日常的には農民として農地を耕し生活を送り、非常時には武士として戦う「半農半士」といえるような境界的身分の人びとが流派武術を「不完全相伝」で伝承し、その地域社会において家元組織を形成していた。そして、彼らが行う武術には殺傷技術としての武術に限らず、呪術的な技法、また日常的に行う遊び、いわば今日的な「スポーツ」のようなあり方も含まれていた。加えて、職能と関わるような規則も武術習得の過程で教えられていたという〔榎本, 1994, p.35.〕。一方で、愛知県東部を中心に広く伝承されている「棒の手」と呼ばれる民俗行事もまた、村落社会との結びつきが強かったことが知られるものの一つである。「棒の手」とは総称であり、実際にはそれぞれに様々な流派名を名乗り行われており、それぞれに複数の武器術を含み行われる総合的な流派武術をもとにしている。そのうち、尾張旭市を中心に行われている無二流や東軍流、直心我流は、江戸時代中期に当地において修験者²として活動していた人物を祖としている。こうした修験者たちは、里山伏という村落社会における周縁的な宗教者であり、江戸中期に活動していたことが知られる。尾張旭市の「棒の手」とは、まさにそうした修験者たちの信仰圏と関わるなかで伝播されたようだ。「棒の手」には殺傷技法としての武術がある一方で、呪術的な意味合いを持つような技法も数多く伝えられていた〔尾張旭市誌編さん委員会, 1980, pp.465－624.〕。こうしたあり方から分かることは、当時の武術実践が宗教信仰の実践と切り離せないような形で存在していたということである。以上の例に挙げたように、村落社会における流派武術のあり方は、いわゆる武士階級が行っていたような武術実践のあり方とはまた違った、実践者たちそれぞれの生活世界と関わっていた。実際に、今日古武道と呼ばれ実践される流派武術のなかには、馬庭念流や甲源一刀流、竹内流などを筆頭に、そうした村落社会とのつながりの中で実践されてきたといわれる流派武術も多く存在している。

こうした江戸時代の地域社会における武術の拡がり、明治維新を迎えてから様ざまに辿ることとなる。武術は近代にいたり、そのあり方を大きく問われることとなる。身分制度の解体や、実戦における実用性の問題などから「旧弊」として捉えられるようになった。そうした中で「武道」という名称が生まれ、精神修養や道徳的な意味合いが前景化し、その実践の場を学校教育や警察組織に移し、殺傷性を極力軽減させ競技化することで生き延びていく〔中嶋, 2017〕。では、村落社会における武術はどうなったのか。一部の流派武術は幕末期に大いに活躍する剣士たちを生み出した。例えば、新選組の隊士たちの多くが身に付けていた天然理心流は、現在の東京都多摩地区の半農半士のような人びとや、生活に余裕があるような中流以上の農家などが修練していたという。また幕末に撃剣で名を馳せた甲源一刀流は、現在の埼玉県秩父市を中心に伝承される流派武術であるが、その弟子たちの多くは武士階級以外の人びとであった。そうした人びとが明治維新後に困民党として活動したことも知られる〔森山 1981〕。こうした流派武術は剣術が中心であったことから、江戸中期頃から流行しだした撃剣、のちに剣道へと向かう防具と竹刀を用いるスタイルに迎合されつつも、流派武術のあり方も共存させていく道を歩み、古武道として今日実践されている。一方で、先に挙げた尾張旭市の「棒の手」

2 多くの流派武術において、超自然的な体験から流派開眼に至った流祖伝が存在する。そのため、そうした超自然的な世界と武術のつながりがあること自体は珍しくはない。また流祖や継承者のなかに、「〇〇坊」や「〇〇院」といった名を名乗る人物が存在する流派武術もある。

は近代がもたらした別の影響を受けた。それは神仏分離である。修験が宗教者として認められなくなることにより、「棒の手」各流派は修験との関係を断つことになった。その結果として、宗教的な意味を帯びて実践されていたわざは消えていき、代わりに祭りにおいて意味をもつわざへと比重が移っていく。それはすなわち、「みる／みられる」という関係性を前提とした、パフォーマンスとして喜ばれるものである。「武術的身体表現」に付随していた呪術的側面は後景化し、より盛大に祭りを盛り上げるような役割を得ていく〔尾張旭市誌編さん委員会、1980, pp.573－587.〕。他方で、冒頭で紹介した金沢の土方流や半兵衛流の場合は、祭りに参入することでその系譜を残した。土方流は、土方氏に継承されてきた流派武術であり、近世末期には金沢藩の藩校においても教授され、また土方氏自宅の道場においても市中の人びとへ教授していた。そうした中で土方氏は、金沢周辺で行われる獅子舞における棒遣いのために、土方流の武器術を改変した祭り用の形を考案し、それを教授した。これが爆発的に流行し、幕末から明治期になっても入門者が続いたという。また、半兵衛流は町田半兵衛という武術好きの農民が明治中頃に、自身が教授していた流派武術である水野一伝流や袖岡流、無拍子流などをもとに考案した。祭りの前になると入門者が増大したといわれるが、これは町田半兵衛の直門として教授をされたことが、周辺の地域社会との関係において意味を持っていたためのようだ。流派武術としての実践では他流に圧され両氏とも大正期前後には道場を閉じてしまうが、祭りにおける「武術的身体表現」としての人気はその後も続き、小規模な家元の登場や流派の分化が起きつつ地域社会に定着し、現在に至っている〔小倉、2005, pp.161－185.〕。

以上が、日本における流派武術と、そこから派生する形で生まれた「武術的身体表現」の見取り図である。次に、実事例として筆者が以前調査を行った、村落社会における流派武術の今日までの系譜を示したい。

2 「武術的身体表現」の実態：神道香取流を事例に

ここでは、現在の埼玉県熊谷市の上川原地区で、今日も継承される「上川原の棒術」と呼称される民俗行事について、近世から現代までのあり方を追うことで日本における「武術的身体技法」の現在を示したい。

「上川原の棒術」は、正式には「神道香取流」と呼ばれ、その内容は木刀を用いた剣術の形の演武が中心である。いくつか現存している伝書や由来書からは剣術だけではなく、槍術や柔術、長刀術なども存在していたようだが、現在は剣術のみを伝える。いつか



写真1-2-1 「香取様」における神道香取流の演武

らかは不明であるが、上川原地区における春夏の祭り「香取様」において演武されることとなり、今日まで続く。上川原にこの流派武術を伝えた人物は中津川又右衛門といい、1650～1660年頃に当地へ訪れ、その後定住し神道香取流を伝えたという。神道香取流は香取神道流という、現在継承される古武道の流派において最古に位置するといわれる流派武術の系譜に位置付くものと推察され、類似する技法も見出せる。ただし、あくまでも地域社会における祭りにおいて「武術的身体表現」を行うものであり、いわゆる古武道のように道場が存在し修練されるものではない。

神道香取流は、史料的に追える範囲である近世末期には、先述したような村落社会のあり方と密接に関わり実践されていた。上川原地区は、近世には小島村の一地区であり、全戸農家であった。まず、流派武術のほとんどのあり方がそうであるような師弟関係の系譜が、神道香取流の場合にはみられない。では、どのように教授されていたかといえば、上川原地区に住む老人たちが師となり、その技の伝授を行っていたという。また習う側には厳格な決まりが存在しており、それは上川原に住む家の長男でなければならない。仮に次男以降が習う場合は分家をつくることを報告し、神道香取流の人びと、すなわち上川原の家を継ぐ人びとに認められる必要があった。一方で、長男であれば養子であっても問題はなく、むしろ将来的に上川原を背負っていく

人物は必ず行う必要があるという認識が存在していた。後述する「剣術伝授」の儀礼を受けた者は「相続人」と呼ばれ、その誕生を 1960 年あたりまでは祭りのように盛大に祝われてきた。ここにも家を相続することと神道香取流を習得することが合わせて考えられていたことが伺える。

では、メンバーシップが厳格に定められたなかで、どういったことが教授されていたか。神道香取流には表十二手と裏十二手の合計二十四手の形があり、これらを適正な年齢になった段階で老人から教授される。まず、初めに表十二手から習い、ある程度の習熟後に裏十二手の教授がされる。特に、裏十二手は「剣術伝授」の儀礼を通じて教授されるもので、技術的にも高度であり秘伝とされており、現在でも相続人たち以外には公開しない。「剣術伝授」の儀礼は、表十二手の教授をされた者が一定数集まった段階で行われたようで、記録によれば近世末期から現在まで概ね 10 年毎に実施されてきた。この「剣術伝授」の儀礼は二週間ほど行われるといい、神道香取流のメンバー以外には内容を知られることが無いように蔵のなかで人目を憚り実施される。当然内容は他言無用であり、仮に観た者がいればその者には天罰が下るとされる。その他にも、教えられることのなかには技術とは関係のないことも教えられる。例えば、近世末期に書かれた文書には、稽古時における飲食の禁止や喧嘩口論の禁止といった振舞いに関わることや、「香取様」の祭りにおける決まりが記されている。いわば、日常生活と関わる事項であり、神道香取流を实践することと上川原の生活とが結びついている様子が伺われる。

ところで、神道香取流は「香取様」の祭りにおいて演武されるものであるが、上川原に香取社があった記録は今のところ存在しない。現在も香取市の香取神宮から請けた御札を供えて仮宮を設けて祭りを実施しており、過去にも香取社は存在していなかったと考えられている。そのため日常的に香取社と関わることはなかったが、そうした役割の一部は神道香取流に頼っていた。例えば、疫病が流行した際には、上川原地区の境において演武を行う「四方かため」が行われたり、神道香取流に関わる伝書等を用いることで鎮めたりしたと伝わる。このように、神道香取流の技には殺傷目的以外にも意味が付与されており、それは疫病という生活と近い部分で関わる問題と密接であった〔田邊 2019〕。

以上のようなありようは、近世末期以降、時代の変遷を受けつつも上川原のあり方に沿いつつ行われてきた。しかし戦後になり、高度経済成長期を前後に上川原の農家もその数を減らし、兼業農家が生まれていくことにより従来通りに実施できなくなっていく。成人期前後には例外なく「剣術伝授」の儀礼を受けてきた上川原の長男たちも数を減らし、70～80 年代くらいからは裏十二手の伝授も行われなくなり、その形の実態が分からなくなる。そうした中で新たな動きが生まれた。それは、担い手たちによる神道香取流の「ルーツ」を探る試みである。具体的には伝承されてきた伝書から「過去に存在していた」とされる形を復元し、またルーツとされ現在も活動している古武道流派である香取神道流と交流を持つことを試みた。こうした活動の過程において「武術」としての意識を持つなど、自身のあり方を問う動きも生まれている〔田邊 2019〕。

3 小括

本稿では、内地における「武術的身体技法」の系譜を見取り図的に描いた。本稿が示したように、武術は近世中頃からは広く世の中に定着し、実践する人びとのあり方に合わせてそのあり方を拡張してきた。そうした経緯はこれまでも散々指摘されてきているものの、やはり武術のイメージは近代に誕生した武道に因るものが非常に強い。武道概念を提示した中心的人物である西久保弘道は「餘興的興行的にやると云ふ弊に陥らない様に努めなければならぬ。」（西久保, 1915, pp. 7-9）と述べ、観戦者の態度に至るまで徹底し、精神修養的な側面を前面に出すことを目指した。実際、今日でもオリンピックの度に「武道はスポーツではない」といった発言などがみられるが、本項でみてきたように、武術は現代の私たちが持つイメージよりも、より広い実践を含むものであった。しかし、今日の武道の持つイメージは、そうした武術が持っていた世界への人びとの認識を狭めているように感じる。だが、一方で民俗芸能と呼称され現代にも実践が続く「武術的身体表現」の姿からは、私たちが認識している以上に武術が私たちの生活世界に浸透していたためであろう。だからこそ、今

日も地域社会に定着しているのではないだろうか。本報告書が全体で示す「武術的身体表現」とは、まさに沖縄社会全体に武術が浸透している一端を示すものであろう。今後、生活世界と武術の関係はより議論される必要があるだろう。

引用文献

榎本鐘司 1994 「北信濃における無雙直傳流の伝承について：江戸時代村落の武術と『境界性』」、『スポーツ史研究』7, pp.21－36.

藤木久志 2005 『刀狩り：武器を封印した民衆』, 岩波書店.

森山軍治郎 1981 『民衆蜂起と祭り 秩父事件と伝統文化』, 筑摩書房.

中嶋哲也 2017 『近代日本の武道論：〈武道のスポーツ化〉問題の誕生』, 国書刊行会.

西久保弘道 1915 「武道講話」, 警察協会編『警察協会雑誌』, 警察協会

西山松之助 1982 『家元の研究』, 吉川弘文館.

小倉學 2005 『加賀・能登の民俗 小倉學著作集第2 巻 民俗芸能』,

尾張旭市誌編さん委員会 1980 『尾張旭市誌 文化財編』, 尾張旭市.

下野敏見 2009 『南日本の民俗文化誌2 鹿児島県の棒踊り』, 南方新社.

田邊元

2013 「「芸能武術」論序説：長谷川流棒術と田山花踊りの「棒振り」を事例として」, 『スポーツ人類学研究』15：45－66.

2017 「村落における武術伝承組織の検討：神道香取流を事例として」, 『体育学研究』62（2）：631－646.

2019 「つながりの中で生まれる技：神道香取流にみる技の復元」, 『現代民俗学研究』11：37－50.

魚住孝至 2021 『日本の伝統文化6 武道』, 山川出版社.

著：田邊 元

第2章

「武術的身体表現」を有するムラ行事について

第2章 「武術的身体表現」を有するムラ行事について

第1節 地域の生活文化に根差した武術的身体表現の歴史的事例

はじめに

本節は地域の生活文化に根差した武術的身体表現の歴史的事例を、近代の諸史料中に求めていくものである。他の節が現時点での民俗学的な調査に基づく内容となっているのに対し、本節のみは過去の出来事を同時代史料によって見ていく、という事になる。地域の生活文化として見ていく行事の性質としては他節との整合・親和を求め、いわゆる地域行事における棒術ないし棒踊をその対象とする。

しかし文字史料によって得られる情報には実際のところ制限も多い。地域が曖昧な場合をはじめ、演じられた棒術・棒踊がどのようなものであったかなど、具体的な情報に欠けているものが多々ある。

近代史料における事例採集は特に新聞記事がそのほとんどを占めることになるが、元記事自体がそもそも「棒術」または「棒踊」の字句を伴っていない場合もある。例えば単に「六尺棒」を振るったというような、棒の記述はあるもののそれを棒術または棒踊であると特に言及しない記事もある。そのほかにも武具としての棒の存在は確認されるものの、どのような芸能や演目だったのか皆目見当がつかないものの中にはある。これらの事例もここでは広く取り上げることとした。

それにしてもこの行事の場で供される棒術は、およそ次の三種に大別されるのではないだろうか。まず一つに純粋な武技としての棒術。二つに武技としての棒術を基盤としながらも、意図的に娯楽性を加味した棒術（客体満足度の高まりを期待した芸能方向への改編）。三つには客体満足度を重視し、あらたに創作された棒術である。これから紹介していく事例が、この三種の棒術のうちいずれに該当するものなのかという判定は、多くの事例においておそらく不能であろう。

以上のような限界を抱えつつも、とにかく採集できた歴史的事例（1906 年を下限とする）をまとめていきたいと思う。

なお事例採集にあたり関した主な資史料は以下の通りである。

新聞 『琉球新報』（1906 年以前）

雑誌 『琉球教育』 1 ～ 116 号（本邦書籍復刻版第 1 ～ 12 巻、1980 年）

『沖縄教育』 1,2,6 ～ 13 号（不二出版復刻版第 1 巻、2009 年）

県史 『沖縄県史料 近代 3 尾崎三良岩村通俊 沖縄関係史料』（1980 年）

『沖縄県史 第 12 巻資料編 2』（1989 年）

『沖縄県史 第 13 巻資料編 3』（1989 年）

『沖縄県史 第 14 巻資料編 4』（1989 年）

その他 山縣有朋「南航日記」（1886 年）

笹森儀助『南島探験』（平凡社東洋文庫版、1983 年）

「斎藤用之助日記」（『第 11 代島尻郡長 斎藤用之助資料』1999 年所収）

採集事例とその類型

関した同時代史料によって得られた事例は 43 件で、結果として新聞記事（全て『琉球新報』）に事例採集が 36 件を数えそのほとんどを占めた。残る 7 件の内訳は 6 件が雑誌『琉球教育』、1 件が山縣有朋「南航日記」となる。

これら採集事例は一覧表にまとめ、本節末尾で別表「近代史料にみえる武術的身体表現（棒術）の歴史的事例一覧」として掲げている。得られた武術的身体表現（棒術）のキーワードとしては、単なる「棒」のほか、

「棒踊」、「棒遣」、「棒使」、「棒つかひ」、「棒較へ」、「六尺棒」、「棒仕合」、「棒振」、「沖縄棒」、「棒合せ」、「棒打」があった。わずかにその演武風景（実際には「演舞」の場合もあろうが、本稿では以下「演武」を用いる）を伝える記事もあるが、例えば演武は二人一組で行われたという人数程度の情報しかなく、そのほとんどが事象として「棒踊」があったという記述に過ぎない。これは本節のはじめにで示した文字史料の限界でもある。

それはそれとして試みに採集事例を性質ごとに分類・整理し、次のような類型とその内訳を得た。

- | | |
|-----------|----------|
| ①祭祀行事…6件 | ②学校行事…8件 |
| ③戦争行事…18件 | ④皇室行事…4件 |
| ⑤接待行事…3件 | ⑥その他…4件 |

以上のうち地域で古くから継続的に行われてきたであろうものは①祭祀行事のみで、特に②学校行事や③戦争行事、④皇室行事は、沖縄県設置後の近代化あるいは日本化の流れの中で形成されてきたものと言えよう。

類型ごとの事例概観

それぞれの類型ごとに事例を概観してみよう。

①祭祀行事は、ムラ行事とも言え換えることができる。八月十五夜や、葬送儀礼で用いる龕の修繕祝いなどで「棒踊」が披露されている。それぞれ別表（表2-1-1）の事例番号で示せば八月十五夜は事例9と事例15、龕の修繕祝いに該当するのは事例14である。少々変わった事例には、感染症であるコレラの退治を祈祷したものがある（事例21）。

②学校行事は各種学校が主体となった行事である（会場が各種学校だとしても、他の団体等が主体となっている場合はここに分類していない）。確認できた8件のうち7件が開校式や新校舎落成式での棒術披露（事例4、5、6、16、19、20、23）で、運動会における事例を見つけることはできなかった（管見の限り、運動会での棒術披露は1908年の沖縄県師範学校における事例が初出）。

③戦争行事は調査対象となった1879～1906年の間に、日清戦争（1894～96年）と日露戦争（1904～05年）があった事から比較して多く、18件の事例が見られた。祝捷会における棒術披露は8件（事例2、13、26、28、29～32）、次いで凱旋軍人歓迎会が4件（事例37～40）、招魂祭が3件（事例35、36、43）と続く。

④皇室行事の4件は、全て天長節に係るものである（事例3、10、27、34）。

⑤接待行事は要人・賓客の接遇行為である。当時の内務大臣・山縣有朋の来県（事例1）、明治天皇の侍従・北条氏恭の来県（事例17）、皇族・北白川宮妃富子の来県（事例18）の3件が認められた。

⑥その他の4件にも触れておくと官公署開庁式が2件（事例12、33）、道路開通式が1件（事例24）、物産品評会並展覧会での披露が1件（事例42）あった。

おわりに

本節は同時代史料中に、地域の生活文化に根差した武術的身体表現（棒術）を求めたものである。得られたほぼ全ての事例が他者の鑑賞を前提とする、いわば芸能系武術という事になった。つまり演武大会や武術試合といった芸能色を帯びていない、まさに武術然とした事例、あるいは実戦的事例は1件も認めることができなかった。

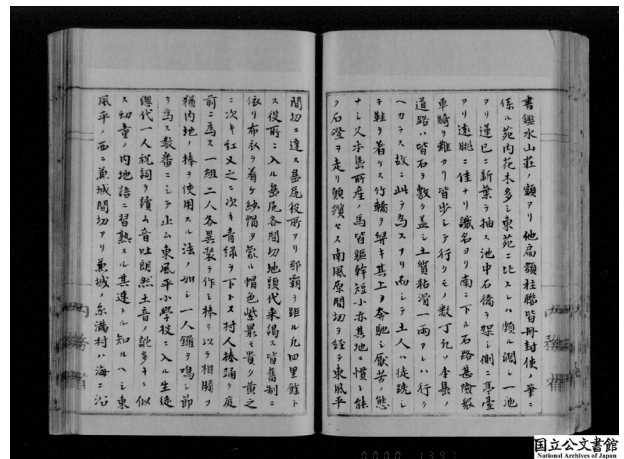


写真2-1-1 山縣有朋「南航日記」(国立公文書館所蔵)
左頁四行目から五行目にかけて
「村人棒踊ヲ庭前ニ為ス一組二人各異装ヲシ棒ヲ以テ相戦フ」とある。

これが採集できた事例の少なさに拠るものなのか、あるいは他の要因に拠るものなのかについては、さらなる事例採集と分析とが必要となるだろう。

しかしながら本調査に拠って、さまざまな行事の中に武術的身体表現（棒術）が息づいていること明らかとなった。併せてそれが県内全域において共通してみられるということも、表2-1-1（近代史料にみえる武術的身体表現（棒術）の歴史的事例一覧）によって確認できる。

これらのことから、棒術は確かに地域の生活文化に根差したものである、と断ずることが出来よう。

別表（表2-1-1） 近代史料にみえる武術的身体表現（棒術）の歴史的事例一覧

本表について

本表は近代沖縄における武術的身体表現のうち、特に棒術についての事例を同時代史料に求めてまとめたものである。調査期間等の制約から 1879（明治 12）～ 1906（明治 39）年までの事例採集（全 43 件）となっている。

凡例

- ・得られた事例は年月日順に排列したうえで、それぞれ通し番号を付した。
- ・年月日欄には事象の生じた日を記した。但し採集事例が後日の予定を報じるものである場合は、その予告記事の掲載年月日を記した。またその場合は事項欄の冒頭に「【予告記事】」と明記した。
- ・地域欄には事象の生じた当時の地域・自治体名等を記した。但し一部の地域・自治体名については、直後の括弧内に現行の自治体名等を記した。
- ・事項欄には原典における武術的身体表現（棒術）がどう記されているのかを、鉤括弧でくくってこれを記した。
- ・類型欄には採集事例を以下の性質に分類し、それぞれに割り当てた類型番号を記した。

類型番号 ①……祭祀行事（呪禱行為も含めた）

類型番号 ②……学校行事（開校式、落成式、御真影奉戴式等）

類型番号 ③……戦争行事（祝捷会、餞別会、歓迎会等）

類型番号 ④……皇室行事（天長節）

類型番号 ⑤……接待行事（要人・賓客の接遇）

類型番号 ⑥……その他

表2-1-1 近代史料にみえる武術的身体表現（棒術）の歴史的事例一覧

番号	年月日	地 域	事 項	典 拠	類型
1	1886. 3. 4	東風平 (八重瀬)	島尻役所（東風平間切番所内）を訪れた山縣有朋に「棒踊」を披露	山縣有朋「南航日記」	⑤
2	1895. 5. 7	名護	【予告記事】名護市中を会場に計画中の祝捷会（日清戦争）での「棒踊」	『琉球新報』 (明治 28 年 5 月 7 日付)	③
3	1896.11. 3	中城	中城尋常小学校で催された天長節行事で「棒」が披露	『琉球教育』12 号 (明治 30 年 1 月 16 日発行)	④
4	1897. 3.21	真和志	真和志尋常小学校の開校式で「棒遣」が披露	『琉球教育』16 号 (明治 30 年 5 月 27 日発行)	②
5	1898. 4.21	大宜味	喜如嘉尋常小学校の開校式で「棒踊」が披露	『琉球教育』30 号 (明治 31 年 8 月 20 日発行)	②
6	1898. 4.24	本部	謝花尋常小学校の開校式で「棒踊」が披露	『琉球教育』30 号 (明治 31 年 8 月 20 日発行)	②

番号	年月日	地 域	事 項	典 拠	類型
7	1899. 8.19	首里	【予告記事】首里赤田で催される予定の弥勒踊で「棒較へ」	『琉球新報』 (明治 32 年 8 月 19 日付)	①
8	1899. 9.15	糸満	座波村でおきた火災を「棒踊」練習中の村民が消火する ●座波村の火事 島尻郡兼城間切座波村四十二番地大城牛去十五日午後四時頃より家族一同と共に外出したるに午後八時頃火し家屋二棟を焼失したり人畜の死傷なく出火の源因不明なり斯く家屋二棟の焼失に止まり地に延焼の災なかりしは舊八月十五日の節句に催すへき棒踊下稽古の爲め村民一同全村前道に群集せしを以て一同消防に儘力し消止めたるに因れりと云ふ 記事見出「座波村の火事」(明治32年9月27日付『琉球新報』所載)左端三行目に「旧八月十五日の節句に催すへき棒踊下稽古の爲め村民一同全村前道に群集せしを以て一同消防に尽力し消止めた」との記述がある。 たまたま棒踊の稽古で集まっていた人々が、火事を消し止めたことを報じている。	『琉球新報』 (明治 32 年 9 月 27 日付)	①
9	1899. 9.19	具志頭 (八重瀬)	具志頭村と玻名城村の十五夜行事で「棒」「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 32 年 9 月 21 日付)	①
10	1899.11. 3	名護	大兼久馬場で催された天長節行事で「六尺棒」が披露	『琉球新報』 (明治 32 年 11 月 13 日付)	④
11	1899.11.11	北谷 (嘉手納)	野国尋常小学校で催された北谷間切新兵餞別会で「棒」が披露	『琉球新報』 (明治 32 年 11 月 25 日付)	③
12	1900. 1. 1	石垣島	八重山区裁判所の開庁式で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 33 年 2 月 5 日付)	⑥
13	1900. 8.20	泊	潟原で催された義和団の乱鎮圧（北京陥落）祝捷会で「棒仕合」が披露 ●泊の祝捷会 再昨廿日北京占領の東電に接するや那覇區字泊に於ては同志會員の發起にて全日午後四時より潟原に於て祝捷會を開きたるよりなるか開會の時刻となるや同志會員名城政成氏開會の趣意を述べ右より池盛酒と饅頭の馳走あり一同歡を尽して散會したる由なるか當日の餘興には中學校生及び教員の樂舞屋宜曹長及び高良軍曹の凱旋躍り小學校生徒の軍歌（四百余州）其他例の若者衆の柔術（支那柔術）棒仕合等もありて中々盛況ありしよしなるか當日の會員の同志會員三百余名高等尋常小學校生徒六百余名其他役員及び中學校生徒等打罷して無慮千人以上に達したりといふ 記事見出「泊の祝捷会」(明治33年8月23日付『琉球新報』所載)左端四行目に「若者衆の柔術(支那柔術)棒仕合等もありて」との記述がある。 記事中の「柔術(支那柔術)」は、当時における空手の表記・表現の一つで、本記事はこの祝捷会において、徒手の空手と武具操作術(棒術)が行われたことを報じている。	『琉球新報』 (明治 33 年 8 月 23 日付)	③

番号	年月日	地 域	事 項	典 拠	類型
14	1900. 9. 6	大里 (南城)	大里間切南風原村の龕の修繕祝賀会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 33 年 9 月 11 日付)	①
15	1900. 9. 7	具志頭 (八重瀬)	【予告記事】具志頭村と波名城村の十五夜行事での「棒」	『琉球新報』 (明治 33 年 9 月 7 日付)	①
16	1900.10.25	粟国島	粟国尋常小学校の落成式で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 33 年 11 月 9 日付)	②
17	1901. 5.30	石垣島	八重山島庁で同地へ巡礼に來た北条氏恭侍従に「棒踊」を披露	『琉球新報』 (明治 34 年 6 月 25 日付)	⑤
18	1901.11. 7	佐敷 (南城)	來沖（中城湾）した北白川宮富子の奉迎にさいし「棒踊」を披露	『琉球新報』 (明治 34 年 11 月 9 日付)	⑤
19	1901.11.15	大里 (南城)	大里尋常小学校の落成式及び御真影奉戴式で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 34 年 11 月 17 日付)	②
20	1902. 2.27	本部	本部尋常高等小学校の新校舎開校式で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 35 年 3 月 3 日付)	②
21	1902.10.16	小禄	垣花にあった監獄署の前でコレラ退治祈禱の一環で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 35 年 10 月 17 日付)	①
22	1902.12.27	宮古島	下地尋常小学校の御真影奉戴式で「棒振」が披露	『琉球新報』 (明治 36 年 1 月 19 日付)	②
23	1903. 4.17	名護	国頭郡各間切島組合立農学校の開校式で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 36 年 4 月 19 日付)	②
24	1904. 1.24	佐敷 (南城)	佐敷街道（那覇と馬天を結ぶ）の開通式で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 37 年 1 月 25 日付)	⑥
25	1904. 3.20	那覇	【予告記事】奥武山公園で催される「軍人家族救護剣舞会」での「沖縄棒」	『琉球新報』 (明治 37 年 3 月 20 日付)	③
26	1904. 9. 8	仲里 (久米島)	久米島高等小学校で催された日露戦争祝捷会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 37 年 9 月 25 日付)	③
27	1904.11. 3	国頭地区	国頭地区の学校（不明）で催された天長節行事で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 37 年 11 月 13 日付)	④
28	1905. 1. 3	小禄	小禄尋常高等小学校における日露戦争祝捷会で「棒つかひ」が披露	『琉球新報』 (明治 38 年 1 月 5 日付)	③
29	1905. 1. 4	恩納	恩納村字御殿崎で催された日露戦争祝捷会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 38 年 1 月 9 日付)	③
30	1905. 1. 4	平安座島	平安座尋常小学校で催された日露戦争祝捷会で「棒」が披露	『琉球新報』 (明治 38 年 1 月 15 日付)	③
31	1905. 1. 5	国頭	辺土名海岸で催された日露戦争祝捷会で「棒合せ」が披露	『琉球新報』 (明治 38 年 1 月 11 日付)	③
32	1905. 1. 5	大宜味	大宜味高等小学校で催された日露戦争祝捷会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 38 年 1 月 21 日付)	③
33	1905. 6.22	石垣島	八重山島庁の開庁式で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治 38 年 7 月 19 日付)	⑥

番号	年月日	地 域	事 項	典 拠	類型
34	1905.11. 3	石垣島	八重山島高等小学校で催された天長節で「棒打」が披露	『琉球教育』114号 (明治39年1月20日発行)	④
35	1906. 4.10	那覇	【予告記事】招魂祭協議会（翌5月挙行予定の招魂祭を議論）での「棒踊」採用	『琉球新報』 (明治39年4月10日付)	③
36	1906. 5.16	羽地 (名護)	羽地尋常高等小学校で催された招魂祭で「棒使」が披露	『琉球新報』 (明治39年5月24日付)	③
37	1906. 6.16	浦添	浦添尋常小学校で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治39年6月19日付)	③
38	1906. 7. 1	玉城 (南城)	上江洲口馬場で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治39年7月3日付)	③
39	1906. 7. 4	佐敷 (南城)	佐敷尋常高等小学校で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治39年7月7日付)	③
40	1906. 7. 5	知念 (南城)	知念尋常高等小学校で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治39年7月7日付)	③
41	1906. 9.26	東風平 (八重瀬)	東風平馬場で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治39年10月2日付)	③
42	1906.10. 8	美里 (沖縄)	美里尋常高等小学校で催された物産品評会並 展覧会で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治39年10月9日付)	⑥
43	1906.11.11	真壁 (糸満)	真壁間切役場前馬場で催された招魂祭で「棒踊」が披露	『琉球新報』 (明治39年11月15日付)	③

著：仲村 顕

第2節 行事別の特徴

1 豊年祭

沖縄本島から宮古・八重山の島々では、旧盆の後や旧八月十五夜、旧九月九日などの折に、地域の御嶽などの神々にその年の五穀豊穡や村人の健康や幸せを感謝し、来たる年の五穀豊穡、子孫繁栄、健康祈願などの予祝・祈願を行い、御嶽の境内や神アサギ前の庭、あるいは遊び庭や公民館前広場で獅子舞や棒術などを演じる。そして広場内に作られた仮設舞台（普通バンクと呼ばれる）で長者の大主や若衆踊り、二才踊り、女踊、雑踊、組踊、芝居など各種の芸能を演ずるのである。これを豊年祭と呼ぶことが多いが、呼び方には地域差がある。

沖縄本島北部ではムラウドウイ（村踊り）、本島中部ではムラアシビ（村遊び）・マールアシビ（廻遊び）、本島南部ではジュウグヤアシビ（十五夜遊び）などと呼ばれる地域が多い。ここでは北部、中部、南部、宮古・八重山という地域ごとにその特徴と武術的身体動作を含む芸能との関わりを概観してみたい。

（1）沖縄本島北部

本島北部の名護市近辺では、豊年祭のことを一般にムラウドウイ（村踊り）と呼ばれる地域が多いが、そのほかにもハチグワチウドウイ（八月踊り）、ムラシバイ（村芝居）などと呼ばれる地域もある。旧八月十五夜や旧九月九日を中心として、メージクミ（前仕込み）、スクミ（仕込み）、ソーニチ（正日）、ワカリ（別れ）などの日程に分かれて数日間行われることが多い。

本部町では豊年祭と呼ばれて旧8月に行われている。宜野座村では旧8月15日に十五夜あそび、または豊年祭と呼ばれている。金武町では旧8月15日に行われ、豊年祭または観月会と呼ばれている。

ア 名護市

名護市全域で、ムラウドウイ（村踊り）に道ジュネーの後や舞台芸能の前後にボー（棒術）が行われる地区が多い。ボー（棒術）は、ボーホー（棒方）とも呼ばれる。その芸態はスーマチ（総巻、潮巻、数巻などと表記）ボー（棒）とクミボー（組棒）に大別できる。スーマチ棒は何十人もの集団で渦巻きなどの隊形を作るような集団的演武の性格を持つ。一方のクミボーは二人または三人一組で行う演武で、ほとんどの地域では主に六尺棒を使用するが、その他に三尺棒、槍、カマンタ（釜蓋）、サイなどの武具を使用する地域もある。

イ 本部町

並里区では4年に一度、旧八月に行われる豊年祭において「満名棒」（三人棒）が演じられ、村の無形民俗文化財にも指定されている。また槍と矛の組手「ゴーリティンペー」も復活して演じられている。

瀬底区では、旧8月11日後の日曜日に、豊年祭が行われる。拝所での祈願後、道ジュネーと綱引きを行い、その後公民館前広場にて舞踊と棒術（一人棒と組棒）が行われる。

ウ 宜野座村

宜野座区では旧8月15日頃、十五夜アシビが行われる。拝所での祈願後、道ジュネーでは獅子舞、舞踊「かぎやで風」、スーマチ棒および棒、舞踊「スーリ東」が演じられる。その後仮設舞台にて、組踊と歌劇、京太郎他数多くの舞踊が演じられる。

松田区では旧8月15日頃、十五夜アシビが行われる。拝所での祈願後、道ジュネーでは舞踊「かぎやで風」とスーマチ棒および棒が演じられる。その後平松毛での仮設舞台にて、組踊や京太郎、数多くの舞踊が演じられる。

漢名区では、隔年の旧8月15日に豊年祭が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにて旗頭のガー

エー（競い合い）を行い、その後アシビナーに作られた舞台にて数々の舞踊が演じられる。

エ 金武町

伊芸区では、旧8月15日に観月祭が行われる。拝所での祈願の後、広場にてエイサーが演じられる。その後舞台にて、獅子舞、フェーヌシマ（南の島、棒踊り）などが演じられる。戦後数十年は旧8月13、15、16日と村芝居を行ない、組踊や長者の大主が演じられていた。

屋嘉区では、隔年で豊年まつりが行われ、公民館の舞台で数々の舞踊が演じられる。

金武区では、旧8月15日に奉納祭（観月祭）が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにて獅子舞とミルクが演じられる。その後金武公会堂前の舞台にてなぎなたや数々の舞踊が演じられる。

字並里区では、旧8月15日ジウゴヤムラアスピ（十五夜村遊び）が行われる。拝所での祈願に続き広場での獅子舞の後、大松下の舞台にて、長者の大主やなぎなた、数々の舞踊が演じられる。

（2） 沖縄本島中部

読谷村では、豊年祭はムラアシビと呼ばれ、旧7月16日、旧八月十五夜、旧9月などの機会に行われたが、現在では旧八月十五夜を観月会と称して行われる地域が多い。宜野湾市や西原町では数年に一度豊年祭が行われることから、マールアシビ（廻る遊び）と呼ばれる地区が多い。また宜野湾市、浦添市あたりでは十五夜獅子舞として獅子舞を中心に演じる地域もある。

ア うるま市

田場区では、豊年祭はジューグヤ（十五夜）と呼ばれ、その中で棒が演じられる。

イ 読谷村

長浜区では、もともと旧八月十五夜に観月会として催されていたが、現在では敬老会、生年合同祝などで棒が演じられる。

座喜味区では、9月に行われる敬老会と12月総合共進会で棒が演武される。

宇座区では旧8月15日観月会と、旧7月16日のウークイでのエイサーのつなぎに演武される。

波平区では、旧7月16日と八月十五夜アシビ（観月会）にハンジャボー（波平棒）が演じられる。

ウ 嘉手納町

野里区では、旧八月の村芝居で野里棒が行われていた。現在は嘉手納町野里共進会により団体が主催している行事のほか、町内外で行われる芸能祭などで披露する。また旧7月17日には、旗スガシ祈願として野里共進会施設にて「かぎやで風」とエイサーが演じられる。

屋良区では、旧8月15日に、八月十五夜として道ジュネーでの獅子舞や屋良のあやぐが演じられる。

エ 北谷町

下勢戸区では、生年祝いのカジマヤー（一般的には旧9月7日）でボー（棒術）が演じられる。字北谷ではフェーヌシマ（南の島）が、12年に1回（寅年）、旧6月15日に行われる北谷大綱引きの道ジュネー、スネーの演目として演じられる。

砂辺区では、旧8月17日にジューグヤアシビ（十五夜遊び）が行われ、獅子屋での祈願後、道ジュネーでの獅子舞および舞台上にて長者の大主に続いて民謡や舞踊が演じられる。

伊礼区では、旧8月15日にクランモー（蔵森）広場にてシーシモーラシ（獅子舞）が行われる。

オ 沖縄市

諸見里区では、旧7月16日に旗スガシーとして、拝所での祈願と獅子舞とエイサーによる道ジュネーを行い、公民館舞台にて古典音楽や舞踊が演じられる。

池原区では、旧8月15日に、八月十五夜として広場でウスデークと舞踊が演じられる。

カ 宜野湾市

大謝名区では、旧8月15日に秋まつり（十五夜獅子舞）が行われる。拝所での祈願の後、公民館前広場にて獅子舞、棒術や民舞、民謡などが演じられる。

キ 浦添市

勢理客区では、旧8月15日に十五夜祭が行われる。午前の拝所での祈願の後、公民館内で獅子舞、舞長者の大王、舞踊などが演じられる。

中西区では、旧8月15日に十五夜獅子舞が行われる。拝所での祈願の後、公民館庭の舞台にて獅子舞が演じられる。かつては道ジュネーも行われていた。

前田区では、旧六月に綱引き（綱引き後に棒使い、昼間）と村芝居（夕方から夜）が隔年で行われていたが、近年村芝居は行われていない。戦前は旧8月1日から一日越しに踊りと棒を行った。10日にメーアシビー（前遊び）、13日、15日、17日がショウニチ（正日：本番）、18日にアトアシビー（後遊び）があった。現在は綱引きの際に棒が行われている。

ク 西原町

棚原区では、12年に一度のマールアシビ（廻遊び）が行われ、舞台上で数々の芸能が演じられる。字小波津では、7年に一度の七年マールムラアシビ（村遊び）が行われる。戦前までは、旧8月13日、14日、15日の三日間行われていた。集落内の道ジュネーの後、小波津集落センター広場の仮設舞台で棒術や組踊をはじめ数々の芸能が演じられる。

幸地区では12年に一度（酉年）に十五夜アシビが行われる。道ジュネーや広場での獅子舞や舞台上で長者の大王のほか数々の芝居や舞踊が演じられる。

小波津区では、6年に一度（辰、戌）の旧8月15日後の週末に七年マール村遊びが行われる。当日は配所での祈願の後、集落内の道ジュネーにおいて獅子舞、舞踊、棒術（一人棒、組棒）が演じられる。その後集落センター前広場に設置された舞台にて、獅子舞、棒術、舞踊、組踊、歌劇などが演じられる。戦前には村遊びは旧暦8月13日、14日、15日の3日間行われていた。

（3） 沖縄本島南部

本島南部において豊年祭は、南風原町、豊見城市ではジューグヤー（十五夜）と呼ばれる地域が多い。糸満市では共通した呼称はないが、綱引きや獅子舞、ウシデークなどの芸能が旧8月15日頃に行われる事例が多い。八重瀬町では、八月十五夜アシビ、豊年祭と呼ばれる他に旧8月に鼈甲祭として行われる地区がある。南城市では旧7月16日にヌーバレーと呼ばれる行事が分布している。

ア 南風原町

宮平区では、9月下旬に宮平十五夜まつりが行われる。敬老会の後、公民館の舞台にて古典音楽、獅子舞（六尺棒あり）に続いて数々の舞踊が演じられる。

本部区では、9月下旬に敬老会（十五夜あしび）が行われる。拝所での祈願の後、公民館の舞台にて舞方棒、獅子舞が演じられ、その後舞踊が演じられる。

喜屋武区では、旧8月15日近くの土曜・日曜にジューグヤ（十五夜）を行う。公民館での祈願の後、公民館舞台で獅子舞、舞方（棒を使用した舞踊）、長者の大主、組踊などを演じる。

照屋区では、旧8月15日頃に十五夜遊びを行う。公民館の舞台にて、民謡、古典音楽、舞踊などが演じられる。

神里区では、9月中旬に敬老会に合わせて十五夜遊びが行われる。ムートウヤー（元屋）においてシーサーケーラシ（獅子舞）と言って獅子が祈願をする。公民館の舞台にて、舞方棒と獅子舞が演じられる。かつては長者の大主や組踊も伝承されていた。

イ 豊見城市

保栄茂区では、6年に一度（卯年・酉年）旧8月15日・16日にジューグヤー（十五夜）が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにて舞踊と棒術が演じられる。その後広場にてタンカー（組）棒、マチボー（巻棒 棒の集団演武）、綱引きが行われる。この後馬場の中央舞台に移動して、長者の大主、数々の舞踊や長刀、棒、笠踊などが演じられる。

翁長区では、数年に一度、旧8月15日に豊年祭が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーの中で舞踊と棒術、旗頭のガーエー（競い合い）が演じられる。その後馬場に設置された舞台にて、唐手（空手）や棒、数々の舞踊が演じられる。

ウ 糸満市

与座区では、旧8月15日に朝の拝所での祈願の後、夕方広場にてウシデークが踊られる。

国吉区では、旧9月9日にティラムヌメー（クングワチクニチ）が行われる。字内拝所での祈願の後、舞踊「かぎやで風」、「花風」が演じられる。

真栄里区では、旧8月16日近くの日曜日に大綱引きが行われる。正午頃のメーミチ（中央広場）における綱引きの後、獅子舞や棒術が演じられる。夕方、メーミチにて再び棒と子供踊り、エイサーが演じられ、その後メーミチ脇の舞台にて古典音楽や数々の舞踊が演じられる。

真栄平区では、隔年の旧8月15日頃に、十五夜行事が行われる。拝所での祈願の後、広場にてエイサーが演じられ、その後公民館の舞台にて舞踊が演じられる。

名城区では、旧8月15日・16日にジューグヤー（十五夜）行事の一環としてウシデークが演じられる。拝所での祈願の後、広場においてウシデークが踊られる。15日は「大殿内」庭とトマンザ（公民館前）、16日は神アシャギ前庭とトマンザで踊られる。

米須区では、旧8月15日にジューグヤー（十五夜）が行われる。拝所での祈願の後、獅子舞とウシデークによる道ジュネーが行われる。

エ 南城市

当間区では9月30日に十五夜行事が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーで獅子舞が演じられる。その後、公民館にて棒術と獅子舞が演じられる。

大城区では、旧7月16日後の週末に豊年祭が行われる。また5年毎にシタク綱引きと組踊を交互に開催する。拝所での祈願の後、道ジュネーを行う。その後、広場にて綱引きを2回行い、続いて子供綱、子供棒、獅子舞が演じられる。その後、広場舞台で民謡やエイサーが演じられる。

糸数区では、旧8月15日後の週末に十五夜、敬老会、アカナースーヅが行われる（シーシンヌウーエーとも言われる）。拝所での祈願の後、公民館の舞台にて、掃除サーブー（狂言）、舞方、獅子舞、数々の舞踊が演じられる。

知名区では、旧7月16日にヌーバレー行事が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにおいて各所

で舞踊「クーダーカー」、「今帰仁ヌー」、「稲しり節」、そして棒術が演じられる。続いてアシビナーの舞台に移動し、長者の大主に始まり、棒術や数々の舞踊が演じられる。

安座間区では、旧7月16日にヌーバレー行事が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにて舞踊「稲しり節」、「今帰仁ヌー」が演じられる。公民館の舞台にて民謡や舞踊が演じられる。

玉城区では、旧8月15日に十五夜が行われる。拝所での祈願の後、公民館前庭と神屋にて獅子舞が演じられる。

オ 八重瀬町

友寄区では、旧8月15日後の日曜日に、八月十五夜が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーで獅子舞と棒巻・棒術が演じられる。その後、公民館に作られた舞台にて、長者の大主や棒術、舞踊が演じられる。

小城区・当銘区では、数年に一度、旧8月10日に龜甲祭が両区合同で行われる。これが豊年祭として旗頭を先頭に獅子舞、棒術（団体棒、組棒）、舞踊を奉納し、公民館（馬場）に作られた舞台にて舞方棒、長者の大主、舞踊や組踊が演じられる。

志多伯区では、数年に一度、旧8月15日に志多伯獅子加那志豊年祭が行われる。午前中の拝所での祈願の後、道ジュネーでは獅子舞、舞踊、棒術が演じられる。翌日夕方の後遊びでは、馬場に作られた舞台にて舞方棒、長者の大主他、数々の舞踊や喜劇、組踊、古武道が演じられる。

具志頭区では、旧8月15日に大綱引きと八月十五夜アシビが行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにおいて「スーリ東」などの舞踊と舞方棒が演じられる。その後、公民館横に設置された舞台にて、古典音楽や舞踊が演じられる。

玻名城区では、旧8月15日に豊年祭が行われる。夕方の拝所での祈願の後、道ジュネーにおいて舞踊と棒術が演じられる。その後公民館広場に作られた舞台にて、「かぎやで風」、長者の大主、獅子舞が演じられる。

安里区では、旧8月15日に十五夜綱引きが行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにおいて組棒、ブリ棒、棒巻、ガーエーが演じられる。その後、綱引きが行われる。その後公民館前に作られた舞台にて、小学生、青年会による舞踊が演じられる。

（４） 宮古・八重山

宮古・八重山地区においては、豊年祭や種子取祭、結願祭、節祭といった祭りにおいて、武術的身体表現をとまなう棒術等の演武が多く披露される（詳細は第2章第3節4宮古地区、5八重山地区を参照のこと）。

ア 宮古島市

宮古島市において、新里では旧暦6月（日を撰ぶ）に豊年祭、野原では旧暦8月15日にマストウリヤー、来間では旧暦9月（8月の場合もある）の初辰日から末日までの四日間行われる ヤーマスィウガンにおいて棒術が演じられる。

イ 多良間村

多良間村では、毎年旧暦の8月8～10日の3日間にわたって八月踊りが塩川、仲筋の両集落にて行われる。1日目の午前には仲筋の正日で、塩川字民を招待し八月お願の祈り後、民俗踊りや古典踊り、組踊り、忠臣仲宗根玄雅公等が演じられる。午後には午前部と同じく民俗踊りや古典踊り、組踊り「忠孝婦人（村原組）」が演じられる。

2日目午前は塩川の正日で、仲筋字民を招待して民俗踊りや古典踊り、組踊り「忠臣公文組（忠臣身替）」が演じられる。午後には民俗踊りや古典踊り、組踊り「多田名組」が演じられる。3日目はワカレと称し、仲筋、塩川の両字に分かれて1日目、2日目に演じられた踊りが演じられる。

ウ 石垣市

石垣市では、登野城、新川、石垣、大浜で豊年祭が行われる。

石垣市四箇の豊年祭は旧暦6月頃に、新川、石垣、大川、登野城の四つの字が合同で二日間にわたって行なわれる。一日目のオンプールは各々の御嶽にて行なわれる。二日目の「ムラプール」では、新川の真乙姥御嶽（まいつばうたき）に四箇の字が集結し、神事や奉納芸能が演じられる。

白保では旧暦6月にプーリン（豊年祭）が三日間にわたって行われる。1日目をバンプトウギ（願い解き）、2日目をブープーリン（大きい豊年祭）、3日目をエンヌユーニンゲー（来たる世の願い）と呼んでいる。1日目、2日目は集落内四ヶ所のオン（御嶽）にて神女たちによる祈願が行われる。3日目は午前中に各オンでの祈願を行う。夕方、カツアリバオン（飾場御嶽）に集合してイビに礼拝する。昔はこの後に巻き踊りが演じられていた。その後、カツアリバオン前で旗頭奉納に続いて豊年祭祈願の祝典が始まる。その後ミルク（弥勒）を先頭に仮装行列「イネの一生」が行われる。行列後、五穀の種を授けるブヤーメーアツパーメーという儀礼が行われる。その後4つのオンの人々は東西二組に分かれて綱引きを行う。

川平では旧暦8月頃に結願祭が行われる。太鼓や獅子舞、棒術を境内で行う前半と、舞踊や狂言を舞台上で披露する後半の二部構成で行われる。前半は神が鎮座する「ウブ」の前に出演者全員で拝礼した後、年配女性らが歌う「与那覇節」に乗せて弥勒神が登場する。境内を1周する総踊りが行われる。座を清める「座見舞い」の後、本舞で太鼓や棒、獅子舞などが奉納される。棒では刀棒や六尺棒、三人棒、エーク棒、鎌棒、カニパ棒などが演じられる。後半は初番に始まり、御前風、川平鶴亀節、瓦屋節、かしきなどの舞踊が舞台上で披露される。

エ 竹富町

竹富町の各島では、種子取祭、結願祭、豊年祭、ムシャーマ、節祭など多様な祭が行われている。

竹富島では、毎年、旧暦9月の庚寅、辛卯の2日間を中心に種子取祭が行われ、40余りの伝統芸能が神々に奉納される。昭和52（1977）年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

小浜島の結願祭は、旧暦8月の戊亥（スクミ）から始まり、翌日の己子（ショーニチ）には御嶽に作られた舞台にて数多くの芸能が神に奉納される。結願祭を含む小浜島の芸能は平成19（2017）年に文化庁から国の重要無形民俗文化財に指定されている。

黒島の豊年祭は、新暦7月最終日曜日の開催を基本として行われる。ハーリー（爬竜船競漕）の他、様々な芸能が、神に奉納される。

西表島（祖納・干立）の節祭は毎年旧暦の10月前後の己亥に行われ、祭り2日目には芸能や船漕などの様々な催しものが披露される。平成3（1991）年には「西表の節祭」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。

波照間島では、旧暦7月14日に先祖供養、豊作・安全祈願のためにムシャーマが行われる。広場と舞台では仮装行列の他、太鼓、棒、狂言、舞踊など多彩な芸能が奉納される。

オ 与那国町

与那国では旧暦10月の庚申の日から25日間がカンヌティ（神の月）と呼ばれる。この期間がムラマチリである。島の集落としては東（祖納）、嶋中（祖納）、西（祖納）、比川、久部良の5箇所ある。ムラマチリにおいては、（1）クマブラマチリ（久部良）、（2）ウラマチリ（東）、（3）ンディマチリ（比川）、（4）ンマナガマチリ（嶋中）、（5）ンダンマチリ（西）と各集落順に祭が行われる。各々のマチリの終わりには、参加者全員でダウンタ（巻踊り）が踊られる。また各々のマチリにおいて、は舞踊が奉納される。また集落のマチリに合わせて、特定のキナイ（家）において行われるマチリがあり、そこではマタと呼ばれる神器（頭か座、弓矢、太刀、長刀、槍、ハカリ、算盤など）が保持されており、それらを使った舞が行われる。

著：久万田 晋

2 盆行事及び関連行事

(1) 北部地区

北部地区で盆行事において武術的身体表現をとまなう棒術等の演武が行われる事例はあまりない。北部の多くの村落では旧暦八月の十五夜前後に行われる豊年祭の中で披露されており、むしろ十五夜行事との結びつきが強く、他にはシヌグ・ウンジャミなどの行事で散見される程度である。

今回の調査において、北部では名護市久志の盆行事（七月ウドゥイ・ムラ踊り）において棒術等の演技があるのが唯一の事例である。旧7月13日のスクミ（踊庭）、旧7月16日のソーニチ、旧7月17日のワカリアイのそれぞれにおいてスーマキー（総巻）と、棒の演技として二人棒（タイボー）、三人棒（ミツチャイボー）が行われる。なお、ムラ踊りの演目の中には、戦後に伊良波尹吉の指導による「メーカタ」とよばれる空手を舞踊化したものがある。これは舞台の清め締めくりとしてプログラムの最後を飾るものとされている。なお、2005年以降、盆行事はムラ踊り、エイサー、やぐら踊りの順番に行われるが、ボウ（棒）はユニゲ（世願い）の意味をもつとされ、その性格付けから毎年行われるという。

久志では北部の他の地域と違って、8月十五夜でのムラ踊りがなく、盆の行事のムラ踊りの中で棒術が行われている点が特色といえよう。

(2) 中部地区

次に中部地区では西原町小波津、うるま市具志川字田場、読谷村の宇座と波平の4つの村落では盆行事に棒術等が披露される。



写真2-2-1 「サイと棒」の演武〔西原町小波津〕



写真2-2-2 うるま市具志川田場から習った「ウエーク・トゥジャの型」〔うるま市勝連南風原〕

小波津の棒術等は旧6月の「綱引き（チナヒチ）」、旧7月の「盆踊り」、旧8月十五夜の「獅子又御願」、旧1月2日ハチウクシー、それに卯年と酉年に行われる「七年まーる村遊び」（卯年、酉年）に披露される。

旧7月の「盆踊り」は15日（ウークイ）後の日曜日に行われる。盆踊りは、昭和37年頃にエイサーから盆踊りに変わって、地域行事として実施されるようになり、踊りの合間に伝統芸能（棒、獅子舞）の演舞が披露され、現在まで行われている。盆踊りでの棒の演武は、無病息災、五穀豊穡、子孫繁栄を祈願し、踊りの合間に披露される。また、小波津の獅子舞の演目には棒手（ボーディー）があり、前踊りとしてウフクン（一人棒）の演舞を行うが、空手の型を取り入れた「クファチディ（小波津手）」の獅子舞があるところは留意される。

このように、一つの村落において複数の行事において棒術等を披露する事例は中部や南部地区では行事の組み合わせの違いはあるものの、いくつかの村落で確認できる。

うるま市具志川の田場では旧盆と豊年祭（十五夜）、新年会、夏祭りなどにおいて棒術の型の演武が行われる。田場公民館内ホール 露払いで棒の手（独演型、棒対棒）演武、ティンペーの手（ティンペー対槍）、ナギナタの手（薙刀対槍）、エンクの手（櫓対トゥザー）、獅子舞の順で構成されている。トゥザーは三叉鉈のこと。棒の手（独演型）はクーサンクーのような演武線になっている。

また、読谷村の宇座区では盆行事（シチグアチエイサー）、ジューグヤー（旧暦8月15日 ハチグアチジューグヤーアシビー。観月会ともいう）の3回、棒術が披露される。旧暦7月16日ウークイには、エイサー演舞のつなぎに棒術が行われる。宇座では、戦前は邪気払い・豊年祈願・健康祈願が主で、青年たちが旧7月16日の盆踊りと、旧8月15日の観月会の二回にわたって「アシビ」を行った。十五夜アシビーで演武していたが、戦後、旧盆ではエイサー演舞のつなぎの間として、また十五夜では組踊や上い口説・囃しなどの部落芸能の一つとして行われるようになった。棒術は、火棒（ヒーボウ）・牛若（ウシワカ）の2種類は前棒（三尺）、後棒（六尺）の組み合わせで、後割（クシワイ）・踊り棒（ウドウイ棒）の2種類は六尺棒の組み合わせである。これら4種類の棒術を2組が順で繰り返す。この他にクラシン（暗闇）棒（前後共六尺棒）、エーク（櫓）棒（前後共サバニを漕ぐ櫓）、スーマチ（潮巻）などがあったが、現在は途絶えている。

同じ読谷村の波平では盆行事（旧暦7月16日）と八月十五夜あしびの観月会に、五穀豊穡・健康長寿・子孫繁栄を祈願し、ハンジャ棒（波平棒）14種の組棒（組手）がエイサーと合わせて披露される。ハンジャ棒は2人・三尺棒（3種）、2人・六尺棒（3種）、2人・三尺六尺（8種）の組み合わせである。

これら読谷村宇座と波平の盆行事は、今回の調査ではいずれも旧盆16日として報告されているが、後述する「ハタスガシー」行事が同じ旧盆直後の16日に行われており、それぞれ名称は異なるものの、実質的には同一の行事としての性格をもつと考えられそうである。

（3） 南部地区

南部地区では八重瀬町志多伯と坡名城では盆行事の中で棒術等がみられる。志多伯の棒術は、旧暦6月15日のウマチー綱引き、旧暦7月15日の七月綱、旧暦8月十五夜（ジューグヤ）の獅子加那志豊年祭（シーシガナシホウネンサイ:15日・16日）、さらに字敬老会に披露される。棒術は、主に六尺棒、ティンペー、サイ、トウンファー、エーク、ヌンティーなど古武道具を使用した、個人または団体演武による「型」、2人または3人による組棒の演武となっている。

豊年祭の道ズネーや馬場にて、豊年祭 舞台の広場で巻棒が行われ、夕方からの舞台では獅子舞の前に座清めと演じられる舞方（かぎやで風にのせた棒の舞）や武の舞（組棒や型の演武を琉球音楽と融合した演出構成）が演武される。綱引きでは、主に子どもたちと志多伯獅子舞棒術保存会会員による棒術演武が行われる。綱引きは、旧6月15日（ウマチー綱引き）、旧7月15日（七月綱）の年に2回行われ、そのなかで棒術やエイサーが1回目の綱引きの後に披露される。豊年祭がない年の9月には敬老会が開催され、その中でも複製獅子による獅子舞演舞と棒術が披露される。

同じく八重瀬町坡名城では旧暦7月16日のシーサーウークイでは獅子舞と棒術が登場する。シーサーウークイの「道ズネー出発の際に六尺棒を使用し、獅子と対峙してワクヤー棒の演武がある。「坡名城のお宮」で棒と子どもたちによる踊りが奉納される。舞方棒、ワクヤー棒、体操棒、アブシヌティー、チキンヌティーの型が伝えられている、すべて一人棒である。道ズネー出発に際し、演武するのがワクヤー棒と呼ばれている。7月16日のシーサーウークイは無念仏をあの世へ送り帰す儀式ともいわれていて、獅子舞と棒が払いの手段として位置づけられていることがよくわかる事例である。

（4） 宮古・八重山地区

宮古地区において、調査では盆行事の中で棒術等が行われるという事例は確認できていない。棒術は旧暦6月や旧暦8月十五夜の豊年祭のマスウリヤー、多良間の八月おどり、旧暦9月（もしくは8月）のヤーマスイ^oブナカの行事など披露されている。

一方、八重山地区では、石垣市登野城と真栄里、それに竹富町波照間において盆行事の一環で棒術等がみられる。

登野城では旧暦7月の盆行事においてシーシマチイリ（獅子祭）が行われる。庭の上座に牡・牝の獅

子と弥勒仏を飾り置き、獅子舞をする家の家長が「七月に獅子と弥勒仏の祭を仕上げるのは、村中を守護して下されて悪疫が流行しても島の風下へ追いやって村中へ風邪など罹らして下さるように」などと村人の健康を願う祝詞をする。その後、一同で「無蔵念仏」を合唱し、次に「弥勒節」を歌い、獅子舞に移る。太鼓の合図で南又島棒（一名「カンター棒」）が演じられて幕が開く。次に獅子使いが現れ、獅子が登場するという流れである。〔石垣市史編集委員会、2007 年、243 ～ 244 頁〕同市の真栄里でも旧盆の獅子舞に一番棒として披露されるという。登野城の事例からわかるように、ムラを悪疫などから払いのけるために獅子舞と棒が演じられており、真栄里での意味づけの聴取はなされていないが、同様の趣旨であった可能性が高い。

波照間島ではムシャーマにおいて棒術等が披露される。ムシャーマ旧盆中の7月14日に行われる豊年予祝祭の祭りで、村人総出による島の大祭でもある。14日の午前中は「ミチサネ」と称される仮装行列が西組・東組・前組に分かれて行われる。その際に各組のボー・テーク（棒・太鼓）のシンカによる演武がおこなわれる。棒は獅子とともに行列の中では各組ともに最後のとりを務める。仮装行列の終了後、公民館の中庭の棧敷前で、西組・東組・前組の三つの組によるテークと棒の演舞が行われ、最後にニンブチャー（念仏踊り）で終わる。午後には中庭の棧敷に設置された舞台で各種芸能が披露されるが、その中でも「シーシン棒」が演目としてある。その後再びミチサネとして帰りの仮装行列が行われる。各組はそれぞれの会館もしくは所定の場所に戻るとそこで太鼓と棒が演舞されて、すべての祭事が終了となる〔詳細は第5章第5節（5）参照〕。



写真2-2-3 ムシャーマのシーシン棒〔波照間島〕

ムシャーマはその昔、豊年祈願をするプーリンのエンヌユーニゲー（来年の豊作祈願行事）の仮装行列としてあったものが、プーリンに行われていた綱引きにともなう双方の喧嘩沙汰にともない、島の役人（目差役もしくは首里大屋子）の命令で綱引きは廃止され、プーリンは御嶽での豊作を祈願する神行事が中心となり、仮装行列はソーリンの行事の中に組み入れられ合併された経緯がある。このように王国時代に盆行事に組み込まれ変更されたことがわかる。

以上のように、石垣市登野城と真栄里では盆行事において獅子舞とのセットで棒が演じられていることがわかる。ただもう一つの事例である波照間島のムシャーマは、綱引き問題に絡んで盆行事に組み込まれたという特殊な経緯と事情があるため、本来はプーリンの豊年祭において棒術等が披露されていたものであるが、ムシャーマの祭事の中ではそれぞれ儀礼の節目節目である最初と最後に棒術が演じられており、清めや払いとしての意味づけが如実に現れていることが指摘できる。

3 ハタスガシー・ヌーバレー・イタシキバラ行事

盆行事は通常旧暦7月13日から15日もしくは16日までであるが、この旧盆直後に悪霊や無縁仏などを払うための行事がある。地域により名称は異なるが、ハタスガシー・ヌーバレー・イタシキバラなどの祭事が行われ、その際に棒術等が披露されることがある。

（1）ハタスガシー

ハタスガシーは沖縄本島中部で盆行事の直後に行われる五穀豊穡を願ったり、災厄や悪霊を払う行事とされている。名称は、旗をなびかせて集落内を練り歩いて浄め、旗の下でムラアシビ（村遊び）をすることからきたと言われ、スガシーには風を通す、風に当てるという意味がある。今回の悉皆調査において、ハタスガシーにともなって棒術が行われている事例は北中城村の大城・荻道が唯一で、他の地域でもかつては棒術や獅子舞などをともなった行事は行われていた。

北中城村の大城と荻道では両自治会の合同で「ハタ（旗）スガシー」という行事がある。旗スガシーは旧

盆の直後の旧暦7月17日、住民の無病息災を願って実施されるものとされている。旗スガシーは、荻道自治会と大城自治会において旗頭を各々組み立て、拝所を拝んだ後、両集落の境界である兄弟広場（チョーデーヒロバ）に集い、両集落代表により、兄弟棒（チョーデーボー）の演武が行われる。棒の内容としては一人棒（個人形）と二人棒の約束組棒を披露する。以前はけんか棒と呼ばれるほど、真剣に対決し、アザができる程であったと聞いている。2010年頃からは地域の空手家から指導を受けて練習をおこなっており、現在では型と約束棒となっている。戦前から戦後の一時期までは、ハタスガシー終了後に村芝居が行われていた。この行事は住民の無病息災を願って隣接する大城と荻道の合同で行われているが、北中城村の他地域にはこうした事例はみられないが、他市町村ではハタスガシーは行われていた。〔北中城村教育委員会、2021年、330～331頁〕

調査票には反映されていないが、読谷村でも16日は盆踊りとしてエイサーを行うところが多く、この日は「ハタスガシー」ともいい、旗頭や優勝旗を出して風にあて干す日とされている。その日は一日中、外に出して立てた。渡慶次ではかつて旗頭を先頭にして、アサギで棒踊りを三組奉納して、字の繁栄を祈願した。瀬名波でも旗頭を先頭に道ジュネーをした。長浜では旧家を廻って祈願したといい、字によっては獅子舞をしたり、宇座や喜名ではこの日に村芝居をしたという。喜名ではこの村芝居の中で劇や組踊とともに棒術が披露された。〔読谷村史編集委員会、1995年、132～133頁〕この日には既述のように宇座や波平でも棒術が披露された。読谷村ではかつてこのハタスガシーには獅子舞をする村もあったといい、棒術とも合わせて悪霊や厄災を払う意味合いがあったことがうかがえる。

このような点は同様に沖縄市でも確認でき、安慶田では獅子を先頭に道ジュネーを行い、トゥヌモー（殿毛）の広場で棒術や空手を披露し、その後仲宗根・胡屋の獅子舞が演じられた。安慶田ではウークイの翌々日（7月17日）のこの行事を「ヌーバレー」とも呼んでいる点は注目される。長老たちが神屋と御嶽に祈願を行い、ムラ内を払い清めるための行事とされている。この他にも棒術は伴わないものの、ハタスガシーは上地、諸見里などでも行われ、諸見里では獅子舞が披露された。〔沖縄市総務部市史編集『沖縄市史 第三巻資料編2 民俗編一冊子編一』沖縄市役所、2015年、128頁〕

こうしたハタスガシーの行事では棒術が見られないところもあるが、嘉手納町嘉手納ではエイサーが行われ、またうるま市石川では村旗をアシビナー（遊庭）に立て、エイサー、臼太鼓などを舞ったことが記録されている。〔沖縄県教育委員会、2018年、88頁〕

以上のように、地域によってハタスガシーの行事内容に変差はみられるものの、行事の意味合いから棒術や獅子舞がともなっていたりすることには留意すべきであろう。

（2）ヌーバレー

ヌーバレーは沖縄本島南部で行なわれる旧盆直後の行事名である。五穀豊穡を祈るとともに、旧盆のウークイの時に帰りそびれた霊たちをグソー（あの世）に送り出すいわれがあるという。語源については諸説あるが、「ヌー」とはイノー（礁池）の欠け口のこと、ここから文物のほか様々な霊も入ってくるので、それらの霊を再びヌーから払うことから「ヌーバレー」というようである。

ヌーバレーは調査票では南城市佐敷字津波古が報告されている。ヌーバレーの行事は、南城市佐敷字新里、字屋比久、字手登根、字外間、さらには南城市知念字知名、字安座真、字久手堅などでも旧暦7月16日に行われるか、あるいは行われていた。例えば知名や安座真では旗頭行列（ミルクも加わる）が道ジュネーをする点は中部の「ハタスガシー」の行事と共通している。知名や安座真のヌーバレー行事では道ジュネーのあとに村芝居の舞台芸能が披露されるが、棒術の演武はみられない。したがって、旗頭による道ジュネーが行われ、その下で村芝居を行うという点ではヌーバレーとハタスガシーの行事は由来をひとつにしていると解釈してよいと思われる。

現在、このヌーバレー行事において棒術が披露されるのは南城市佐敷字津波古の行事である。かつては字屋比久でも棒術がヌーバレーの日に行われるムラアシビにおいて披露され、棒マチや、ティンペー（盾・刀と槍）

とカマンティー（鎌と六尺棒）と呼ばれる古武道を取り入れた屋比久独特の演武も行われた。また、手登根でも同様のムラアシビにおいては芝居の幕開け（ザジリ）には場を清めるために、「かぎやで風」の楽曲に合わせたメーカタ（舞方）の一人棒が演じられたというが、現在は中断した状態にある。

津波古のヌーバレー行事はムラアシビの日でもあり、かつてはトゥティーケン（土帝君）前の広場にバンクの仮設舞台が作られ各種演目が披露された（現在は公民館にて実施）。この日旗頭が立てられ、道ズネーイにおいて棒の演武が2～3組行われた。その後舞台演目としてメーカタボウ（舞方棒）、棒マチ、組棒の三種類が披露され、合わせて組踊や狂言、踊りなどが演じられ、合わせてシシケーラシ（獅子舞）も行われた。

メーカタ棒は一人で六尺棒をもって歌・三線にのせて祝いや行事の最初に演ずるもので、楽曲は「かぎやで風節」である。なお、津波古には三種類のメーカタ棒があったという。

津波古の棒マチは「ゼーマチ」と呼ばれる。棒マチは巻き方によって、ゼーマチ、グーヤーマチ、ウママチ、ナミマチの四つあるが、津波古はおもにゼーマチが演じられる。ゼーマチは200人近くの棒人衆が前棒組（奇数組）と後棒組（偶数組）の二組からなり、入場は飾りをつけた薙刀を持つ組頭の先導で、一列隊列になって、左回りに円陣を作りながら、3回小走りにまわる。3回、まわり終わると、行進をやめ、前棒組と後棒組が一斉に組棒を行う。さらに3回まわって、薙刀が出発地点に戻ると、前棒組はそのまま進んで内円を作り、後棒組は反転して外円を作る。両組ともまわりながら相手の棒にカチカチと合わせる。前棒組と後棒組は二手に分かれて行き、円の中央で組棒体勢に入る。中央でタンカー棒（一対一）を順次全員で行い、一列隊列で退場する。前棒組と後棒組は二手に分かれて行き、円の中央で組棒体勢に入る。中央でタンカー棒を順次全員で行い、一列縦隊で退場する。

組棒は銅鑼鉦の調子に合わせて演ずるもので、①チュイボウ（一人棒）、②タイボウ（二人棒）、③ミツチャイボウ（三人棒）、④ユツタイボウ（四人棒）、⑤グニンボウ（五人棒）、⑥ハジリボウ（はじり棒）などがあった。大抵の組棒に約束ごとがあるのに対し、ハジリ棒は約束ごとがなく、自由に打ち合うケンカ棒である。ミツチャイボウ（三人棒）は津波古独特のものといわれ、大正12（1923）年頃に創作された。ユツタイボウ（四人棒）は、明治43（1930）年頃に地元の四人の棒好きの若者が、勝連津堅島の「棒まつり」で四人棒をこっそり盗み見て覚え、津波古に持ち帰って伝承したと伝えられる。〔佐敷町史編集委員会、1984年、424～447頁〕

以上、ヌーバレーの行事では盆に集まった先祖以外の霊をあの世に戻す意味合いがあり、それにとまって棒術や獅子舞などが払いの位置づけとされていることが看取できる。

（3） イタシキバラ

イタシキバラは、八重山において、石垣市宮良では「イタシキバラ」、同大浜では「イタツキバラ」、波照間島では「イタスケバラ」とか「イタシキバラ」などと呼ばれている。語源は「いたつき（痛い）ばら（払）い」の転訛ともいわれる。〔石垣市史編集委員会、2007年、244頁〕旧盆直後に行われる祭りで、村落に出没する悪霊払いが目的である。そのために棒や獅子舞が行われるという。このイタシキバラは沖縄本島のハタスガシーやヌーバレーと系統を同じくする行事とされている。〔崎原恒新、1999年、227頁〕

今回の調査では棒術を伴うイタシキバラは石垣市大浜の事例が報告されている。ただイタシキバルの行事自体は石垣市宮良、竹富町波照間など他の地域でもみられる。

大浜では旧盆の送り日の翌日（16日）に棒術が獅子舞と一緒に演じられる。この祭事を「イタツキバル」と呼んでいるが、棒術と獅子舞は夜に行われ、お盆に招かれなかった無縁仏や悪魔払いと、村を清める行事だと伝えられる。獅子棒は、獅子の登場前に二人一組で演舞する。六尺棒を持った二人が会場内を一周し、向かい合って戦う。勝負はつかず、再度会場内を一周し、向かい合って演舞し、その後退場し獅子を会場内に招き入れる。悪魔祓いの行事といわれるので、新築家ではカルイ（吉例）として招待して獅子舞をする慣習もある。宮良では「イタシキバラ」といい、3日間の祖先供養を終えて休養すべきだが、ショウマキ（精負け）をしないように昼アングマ踊りを催したという。いくつかの旧家を順に巡り、午後8時頃に獅子舞とアングマをし

て終了する。宮良では棒術の披露はない。〔石垣市史編集委員会、2007 年、244 ～ 247 頁〕

石垣市伊原間では送り日の翌日 16 日を「イタシキビラ」といい、お盆に招く者がいない無縁仏や悪霊などがムラウチを彷徨って後生へ帰らずにいるので、それを獅子舞によってムラの外へ追い払う行事とされている。当日の朝は字民総出で溝を浚う清掃や藪の伐採作業をして、夕方にムラの出入り口で獅子舞をして魔物を追い払うことをした。一方、白保では盆の翌日は「ミチブシ」と称して農道の補修をして、その後は角力大会や棒術の練習をした。また夜には獅子の家元の宮良家で獅子頭に祈願して、獅子納めの儀式を行ったという。〔石垣市史編集委員会、2007 年、246 ～ 247 頁〕

以上これまで紹介してきた盆行事及び関連行事において、現在でも実施され披露される棒術等をまとめると、次のようになる。

表2-2-1 盆及び関連行事で棒術等が行われる地域

	北部	中部	南部	宮古	八重山
盆行事	名護市久志	うるま市田場 読谷村宇座・波平 西原町小波津	八重瀬町志多伯 八重瀬町波名城	なし	石垣市登野城 石垣市真栄里 竹富町波照間
ハタスガシー	なし	北中城村大城・荻道	なし	なし	
ヌーバレー	なし	なし	南城市津波古	なし	
イタシキバラ	なし	なし	なし	なし	石垣市大浜

著：萩尾 俊章

4 その他

(1) 南ヌ島（フェーヌシマ）

沖縄各地には、フェーヌシマ（南ヌ島）と呼ばれる棒を使う独特の芸能が伝わっている。ここではその分布状況と、各地域での特徴を概観してみたい。芸能研究者の大城学は、フェーヌシマの芸能的特徴として以下の7点を列挙している（大城学 1992）。

- (1) 4人以上の人数で、主に男性が演じる。
- (2) 仮面を被ったり、仮装したりする。その場合、顔を隠す工夫をする。特異な服装をする。
- (3) 棒を持つ。棒の先端に金属輪を付けることもある。棒を打ち合う所作がある。
- (4) 跳躍したり、転がる所作がある。また、手を高くあげたり、足を高くあげる所作もある。上体を後ろに反らす所作などもある。
- (5) 演技中に、掛け声や奇声を発する。
- (6) 使用される楽器はドラ、太鼓、ホラ貝、鉦、笛、三振などである。
- (7) 意味不明な歌詞がうたわれる。

また大城は、フェーヌシマ系の芸能について次のように総括している（大城学 1992）。

フェーヌシマ系の芸能は、かつては県内二十数カ所の地域で演じられていたようだが、現在演じている地域は、ほぼ半数に減っている。

フェーヌシマ系の芸能は、沖縄本島及び周辺離島では、旧暦七月・八月のムラ踊り（豊年祭）で演じる。宮古島の上野村字野原は旧暦八月十五日のマスウリヤー、上野村字新里は旧暦六月の豊年祭で演じ、多良間村は旧暦八月の八月踊りで演じる。八重山諸島では旧暦八月・九月の種子取祭や結願祭、節祭で演じている。その他、不定期に催される民俗芸能大会等に出演して、上演の機会を得ている。

『那覇市文化財調査報告第1集 那覇安里のフェーヌシマ』によると、沖縄県内にはフェーヌシマ及び同系統と思われる芸能が27カ所に分布している。この中には、現在は行われなくなっている地域もあるが、ここでは名称別に以下のように分類する。

・フェーヌシマ：

名護市嘉陽、恩納村字名嘉真、・仲泊、金武町字伊芸、読谷村長浜、北谷町字北谷、
宜野湾市普天間・野嵩・新城、北中城村字熱田、中城村字津覇、那覇市安里

・ペンシマ：伊江村字西江上

・棒：糸満市字真栄里、玉城村字垣花、与那国町与那国（祖納）

・棒ふり：上野村字野原・新里

・ヨンシー・棒：多良間村字塩川

・ハイヌスマカンター棒：石垣市新川

・ハイヌスマ棒：石垣市大川・登野城・平得・大浜

・サングルロー：竹富町字竹富

・ダートウダー：竹富町字小浜

・獅子棒：竹富町字黒島（東筋）

・タイラク：竹富町字黒島（保里）

これらの中から、ここではいくつかの事例を紹介してみよう。

ア 恩納村字名嘉真のフェーヌシマ

はじめに指笛と三線に合わせてトンツン小と称する者2人が登場する。トンツン小は白地の長袖シャツ・長ズボン、打ち掛け、白黒縦縞脚絆に陣笠を被り、拍子木を持っている。トンツン小が舞台中央奥に立つと、麻の繊維のかつらを被った者たちが勢いよく登場して、「ハウ」という掛け声をかけながら、舞台を一巡し、舞台中央で左右二組に分かれる。歌に合わせて踊った後、向かい合って腕を組んで力比べをし、退場する。トンツン小も退場すると、再び、麻の繊維りかつらを被った者たちが、今度は棒を持って登場し、二組に分かれる。棒を打ち合った後、退場して演技は終了する（大城 1992）。

イ 伊江村西江上のペンシマ（国指定重要無形民俗文化財）

伊江村ではペンシマと伝えられ、西江上区に継承されている。県内のフェーヌシマ系の踊りでもペンシマは唯一、鬼面を被り、4場面からの構成となっている。

ペンシマ面は鬼面で、黒色である。鬼は白ズボン、白襦袢に黒の陣羽織を着け、黒脚絆、そして鬼面を被る。はじめに、鬼面を被った者6人が、棒を片手に持って登場し、歌に合わせて踊る。次に、やぶついの比屋（武士）が登場して、「このごろこのムラに鬼が出没して人びとに危害を加えているので退治してやる」と唱える。やぶついの比屋は鬼の住処に行き、鬼退治に来たから勝負せよと迫る。鬼は一匹ずつ出てきて、やぶついの比屋と戦うが負けてしまい、降参して一からげにされて退場する、という鬼退治の内容である（大城 1992）。

ウ 金武町伊芸のフェーヌシマ（南ヌ島）

言い伝えによると、恩納村名嘉真から伝わり、うるま市（旧具志川市）田場にも伝えたとされている。赤く染めた蔓を被り、打掛け服装で鉄の鎖をつけた六尺棒を持つ4人が、「ハウー」の掛け声とともに登場し、棒の演技を終えて退場する。それに代わって三尺棒を持った4人が入場し、演技を終えて退場する。次に、8名が「ハーイーヤ」の囃子で入場し、演技を終えて退場する時、独特な「サールーゲー」で退場する。これまで途絶えていたこの踊りを復活し、南ヌ島保存部を中心にして継続に努力している。部員によって定

期的に練習が行われている。(2013 年沖縄県文化協会資料)

エ 北谷町北谷のフェーヌシマ

北谷区のフェーヌシマは、12 年に1回（寅年）、旧6/15 に行われる北谷大綱引きの道ジュネー、スネーの演目として演じられる。棒を振り回したり、打ち合う（棒巻）。空手の型の「手」と「タッチムッチー」がある。その由来は不明であるが、宜野湾間切普天間から伝わったという説がある。

昭和61(1986)年までは、メンダカリ、クシンダカリの二組に分かれ、雄綱、雌綱の側で演じた。平成10(1998)年の大綱引きでは、1組で雌綱の最後尾から雄綱の最後尾に向かい単独でスネーした。

出演者は、戦前は字北谷出身の青壮年（17、8歳から30代前半まで）で、メンダカリ、クシンダカリ各組に鉦打ち1人、12、3人で構成された。

演武としては、棒を振り回し打ち合う「棒巻」と、空手の型のような「手」がある。2人組み合わせで回転する「タッチムッチー」があるが、昭和30(1950)年以後は演じられていない。

オ 北中城村熱田のフェーヌシマ

熱田のフェーヌシマが演じられるのは、昔は旧盆の七月遊びと称した十四日と十六日であった。現在では88歳の長寿を祝う合同祝いの時や字外から招待される時に演じられる。明治17(1894)年を最後に途絶えていて、大正14(1925)年、天皇御代典記念行事を機会に復活した。戦争時は中断していた。

演武としては、踊りは手踊りと棒踊りの二種がある。最初に歌三線に合わせて8人で手踊りを演じ、その後4人一組で棒踊りを演じる。前半は南島歌 ハウー、ハウーと奇声を発しながら出てゴーマチ（輪）を作る。歌に合わせてゆっくりした振りで踊り始める。後半は、エ三エ節に変わると、一の棒、二の棒、三の棒、四の棒の順に連続して棒の打ち合い、跳躍と激しい演技がある。これらを済ませると再びホウ、ホウと奇声を上げながら上手に退場する。

カ 那覇市安里のフェーヌシマ

安里のフェーヌシマには、四尺棒で互いに打ち合う棒術と、瓢箪を持って踊るヒュータン踊りと、トンボ返りを見せるサールゲーイの三つの演技がある。棒術では、銅鑼の合図で演技者が集まると、各自の左側に立つのが相棒である。この一対の相手が二つで、四人が一組になって演技をする。すべて銅鑼の合図で演技を運んで行く。ヒュータン踊りは四人一組で二人が一対となって立つ。銅鑼が鳴ると、「ハーイヤ」の掛け声で両手を腰に当てて出る。再び銅鑼が鳴ると、掛け声で互いに空手の構えで左右に向かい合う。この構えでハッシハッシと応えて、互いに左腕をかけ左に回る。回り終わると腰の右手を伸ばし、左から頭上に回して右になると同時に体を右に向けて右手のこぶしを立て、左手を腰に当てて構える。これを続けて演技が始まる。サールゲーイは一種のトンボ返りのような芸である。二人の組み合わせで、相手の股ぐらに頭を突っ込み、相手の腰を抱え、この形で前後に二人でくるくる回る。

(『那覇安里のフェーヌシマ』を要約)

キ 竹富町字竹富のサングルロー

サングルローは赤く染めた芭蕉の糸で顔を覆い、黒頭巾をかぶり、芭蕉衣にわら縄を締めて踊る。この踊りの最後は、4人の踊り手が転がりながら幕内へと入っていく(『竹富町史 第二巻 竹富島』)。

ク 竹富町字小浜のダートウダー

ダートウダーの面の形状は、伝承によると、祭りのときに神酒を入れる木製の容器であるパダスを縦に半分に割った形だという。面は黒色で鼻が高く、口や目は大きくて、目尻が細くて長い。額には横皺がある。

(中略) ダートウーダーの入羽で演じる所作に、二人の両肩にもう一人が乗るのがある。(中略) 小浜島のダートウーダーは、結願祭で南ムラの演目として、最初に演じられるものであった。南ムラのダートウーダーに対して、北ムラの出し物は「弥勒」である。それからすると、ダートウーダーは神事芸能としての要素を有していたと考えられる(大城 1992)。

著：久万田 晋

(2) シヌグ・ウンジャミと綱引き行事

ア シヌグ・ウンジャミ

シヌグやウンジャミの中に位置づけられる場合もみられる。第3章に取り上げられた「ビークイクイ」という儀礼である。本島最北端の奥集落では旧盆明け亥の日におこなわれる「シヌグ」(3日間)と「ウンジャミ」(2日)が隔年で行なわれる。シヌグ行事は、1日目に「フーヨーサレー」行事、2日目は休みで、3日目に「ビークイクイ」とよばれる集落の長老の長寿を祝す行事が行なわれる。その行事の道ジュネーの先導役を務めるのが空手と棒術の演武者である。王国末期首里の士族が奥に定住し、その子孫が首里の御殿・殿内に奉公していた際に習得したとされる。士族の武芸であった「手」や「唐手」が奥区に伝わり、この行事に導入されたと考えられる。

大宜味村謝名城、饒波、大兼久の村落では、戦後のある時期まで豊年祭やシヌグ・ウンジャミの舞台演目の中で空手や棒術が行われていた報告はあるが、現在は途絶えている。饒波では旧盆明け亥の日、ウンジャミの際に棒術による型の演武があった。公民館前の広場において、ブラーというほら貝で作った笛を連続的に吹き鳴らしながら駆け足で広場を右回りで一周し、やがて奇数偶数に分かれて外から中心へ、中心から外へのとまわる。先頭の人は薙刀を持ち、後続の人は、六尺棒、三尺棒を持つ。両先頭のなぎなたを持つ人はヒヤーという声を発して身をかわすふりをする。その後に個人個人の棒術が続き、一人棒、二人棒、巻き棒などいろいろな型を披露した。鎌を使用した演舞もあった。大宜味村内では棒術が行われる集落は他になく、なぜ饒波だけだったのか、どのように伝わってきたのかは不明である。終戦直後は行われていたが、『大宜味大工一代記』の記録からは、昭和63年にはすでに中断していることがわかる。復活を望む声もあるが、指導者や記録がなく復活できないという。

一方、大宜味村大兼久では旧盆明けの翌日に、無事に納税をすませたことを祝する「ゾーガリー」という行事があり、その中に空手の演武がみられる。「ゾーガリー」がシヌグ・ウンジャミ系統の祭事として位置づけてよいのか検討の必要もあるが、現在でも三線の曲にあわせて、「クーサンクー」と呼ばれる型の演武がある。旧盆明けの翌日であること、また海に向かって祈願したり、演武すること、豊作祈願の目的なども含むことからこの中で扱った。大まかな型の所作は決まっているが、明確な型の決まりはなく、アシビのなかで先輩から後輩へ見よう見まねで受け継がれているものとされる。ナハンゾー(中の門)と呼ばれる集落内の海に向かう道路上で、海に向かって拝み、奉納儀礼として行われる。道沿いに演奏者が座って三線を演奏する。三線と太鼓で開始を告げてから、御願をする。その後3曲演奏し、3曲目でクーサンクーと呼ばれる空手の演武を行う。海の方へ向かって演武する。大宜味に間切番所があったころ、大兼久の浜辺から出向した上納船の航海安全と来年の豊作祈願、首里への年貢の上納が完了した祝いであると伝わる。大宜味村内の他集落にはまったく伝わっていないため、どのように伝播したのか詳細はわからず、なぜ空手の型が演じられるようになったかまったくわからないという。

北部離島の伊是名村仲田・伊是名・勢理客・諸見では、シヌグ・ウンジャミでは、ウンナジャーレーとも呼称する儀礼がある。ゲーサン(棒)を杖状に構え、地面や家屋内(拝所含む)を練り歩きながら、床面をドンドンと打ち鳴らしながら、「ウンナジャーレーホイホイ」や「ウナザレホホヒヌネーホホ」などと叫び、庭のある拝所や住宅では、二人一組や三人一組で三尺棒により棒術の型を披露する。各字とも伊是名城

跡にある御嶽前の庭にて演舞した後、集落の神アサギやムラ火の神、旧家を周り、道中声がかかれれば飛び入りにて民家でも行う。集落内の悪魔払いを軸に実施されるが、併せて村落の繁栄や五穀豊穡、健康祈願なども行われている。棒術の型は青年会で傳承されており、青年会が子どもたちの稽古と指導をしている。



写真2-2-4 ウンジャミのウンナジャーレー〔伊是名村〕

表2-2-2 シヌグ・ウンジャミで棒術・空手演武が行われる地域

	北部地区
シヌグ・ウンジャミ	伊是名村仲田・伊是名・勢理客・諸見・国頭村奥、(大宜味村謝名城、饒波)
ゾーガリー	大宜味村大兼久

※ () はかつて行われたところ

イ 綱引き行事

ムラの棒術はその代表的なものですが、綱引きには棒術の演武や青年達による激しいぶつかり合い、婦人達による対峙した歌合戦など、双方の集団による誇示行為、いわゆるガーエー（示威的行為・競い合い）が知られているところで、綱引き行事には棒術や空手などの武術的身体表現が多く見られる。

少しだけ歴史的記録をひもといておきたい。綱引きに関して一定程度記録が残るものとしては、那覇大綱挽の前身となる「那覇四町綱」や特別な例として国家的慶事で行われた首里の「綾門大綱引」がある。

首里の綾門大綱引（アイジョーウーンナ）は王国時代には国王一代に一度即位祝賀として大綱引が行われた。尚泰王の即位祝賀（1867年）でも引かれ、日清戦争凱旋祝賀（1898年・明治31年）が最後の実施とされている。五穀・豊饒・豊年を祝う平和を旨とし、2回引いた。村（ムラ）綱では綱を寄せる際には、雌雄共に大力無双の者が一人で頭を支え、双方をかぶせると同時に、空中に跳びはね抜け出る技が必要で、首里にしかない芸当で、この役目はブシ（武士）＝空手の達人でないとできなかったとされる。首里のガーエーは手を握り頭上に上げて交差させ、互いに背を向けあって、押し合い、チームチ（松明持ち）の合図でかけ声勇ましく渦巻きながら踊り回った。

那覇の大綱挽はよく描かれたようで、慎思九（泉川寛英）「親見世綱之図」（1829）をはじめいくつかの絵図が残されている。絵図では大綱とともに、旗持ち、鉦子打ち、太鼓打ち、法螺吹き、紅衣人（娼妓）などが確認でき、中には棒を持った人物もみえる。那覇でもガーエーがあり、両方の集団がウラスン（罵詈雑言）からオーエー（けんか）へと発展することも多かった。そのため「棒突き」と呼ばれる警護がいて、事前の巡回警備をしたり、綱引きの際にはルクシャクボー（六尺棒）を振り、拳やひじでこずいたりして相手をおどしたりしたという。〔島袋全発『那覇変遷記』1978年、P.152-173〕

さて、本報告書において綱引きに伴うシタク（戸板）上での演武の事例が本島北部の伊平屋村我喜屋の綱引きで報告されている。綱引きの前に東である内村と西である兼久双方が体をぶつけ揉みあい、力比べの「ガーエー」がおこなわれた。女性から始まり、次に男性のぶつかり合い行われ、そこに内村からは亜麻和利、兼久からは護佐丸に扮した2人の若者がハシルーと呼ばれる木板（一般にいうシタク）に担がれ登場し、一騎打ちとなる。こうしたシタクの上での演武が伊平屋島に継承されているのは注目される。歴史上の人物などに見立て武具を持ち構えるという対抗の表現事例で、本島中南部の綱引きでは多く見られるものであるが、型の披露や対面打ち合いなどはないため本項では割愛してある。

綱引きに伴う棒術として糸満市真栄里の事例をあげておく。綱引きの道ズネーでは、シタクには人物の扮装、獅子、綱などが行列を組み、会場となるメーミチの広場に到着する。アガリ（東）、イリー（西）の棒旗が二人一組となって、互いににらみ合い、三角状の旗を付けた槍をふったり、突いたりして中央まで進むという具合である。綱引き時に激しく揉み合うガーエーの後に棒の演武がある。東西ともトゥマインクー（一人棒の型）、タンカーボー（二人が向き合って打ち合う）、サンリンボー（六尺棒一人と三尺棒二人の組み合わせ）、トゥンボー（四人棒の型）であるが、それぞれ型が異なるという。真栄里にはヘーシマー（棒踊り）も伝わる。東はトン棒、クンの棒、三人棒、組棒、タンカ棒、チーグ、棒一、なぎなた、西はトン棒、津堅棒、三人棒、泊棍組棒、タンカー棒、チーグ、棒対なぎなたの組み合わせである。

一方、八重山の黒島では旧正月に綱引きがあり、シタクの上では北から鎌を持った演者、南から槍を持った演者が出てきて打ち合いの演武をする。これとは別に型の演武があり、演武構成は仲本の棒（ティンバイ）、一番棒（東筋）、仲本のカッキ棒（鎌と棒）、各部落の棒、保里のエークである。獅子に対峙しての武術である獅子の棒（東筋部落）もある。行事の中での演武の意味は防御の手としての意味があるという。黒島にはもともと棒や空手はないことから、外から「村芝居」（芸能団）が来て、もともとあった黒島の舞踊と混ざったのではと語られる。黒島は東筋、仲本、宮里、保里、伊古の5部落があり、それぞれで行事を担っている。

綱引きのガーエー（示威的行為・競い合い）のなかで棒術が披露される、あるいは披露された地域は、中部では西原町小波津、同棚原、（北谷町桑江）で、南部では浦添市前田、豊見城市高安、同根差部、糸満市真栄里、八重瀬町宜次・志多伯・安里・具志頭などで、八重山では竹富町黒島が唯一の事例である。また、空手の型が披露されたのは中部では中城村新垣、（北谷町桑江・北谷・野里）、南部では豊見城市根差部、糸満市真栄里などである。さらには、綱引きの行事に際して相撲（角力）が行われることもある。宜野座村宜野座、金武町金武、沖縄市大里、沖縄市与儀、宜野湾市真志喜、（西原町幸地・小橋川・内間）では相撲（角力）が行われた。



写真2-2-5 棒マチの演武〔八重瀬町安里〕



写真2-2-6 棒マチで渦を巻く〔八重瀬町安里〕

表2-2-3 綱引き行事で棒術・空手等が行われる地域

	北部	中部	南部	宮古	八重山
棒術	なし	西原町小波津 西原町棚原	浦添市前田、八重瀬町志多伯・ 宜次・安里・具志頭、豊見城市 高安・根差部、糸満市真栄里	なし	竹富町黒島
空手	なし	宜野湾市宜野湾 中城村新垣	豊見城市根差部 糸満市真栄里	なし	なし
相撲 (角力)	宜野座村宜野 座、金武町金武	なし	南城市津波古	なし	なし

(3) 特別な行事

ア 龕の年季祭

豊見城市高安や饒波、八重瀬町小城・当銘では龕を所有、もしくは共同所有していて、その龕の年季祝いに際して棒術・舞踊の奉納と空手の演武が行われる。棒術と舞踊の奉納は、龕の霊を鎮め慰めるとともに、字内の悪霊を追い払う意味があるという。

高安では旧暦 8 月 9 日・12 年に 1 度の辰年に龕の補修を行い、行列や余興などもある盛大なガンゴーが行われるが、それ以外の年は無病息災を祈る御願のみが行われる。御願の前に公民館前広場で、旗頭や六尺棒やヤイ・ナジナタを掲げ銅鑼鐘を打ち鳴らし氣勢を上げるヘーイ棒（1 組、2 組）がある。宜保殿内と波平の両家で奉納棒術としてヘーイ棒（1 人）、タンカー棒（2 人）、ヤイ・ナジナタ（2 人）を行う。道ズネー出発前にヘーイ棒を行い、旗頭を掲げてガーエーをする。龕屋前では奉納棒術として個人棒（1 人）、タンカー棒（2 人）、ヘーイ棒（1 組 10 人・2 組 10 人）、ヤイ・ナジナタ（2 人）がある。そして「コーヌユーエー」で、ヘーイ棒、個人棒、タンカー棒、ヤイ・ナジナタの棒術が披露される。最後に龕を解体して龕屋へ納め供え物をし、ここでも棒術や舞踊を奉納してから、龕屋を閉じて施錠する次第である。これらは高安空手同好会によって行われる。

イ 観音堂祭

南城市玉城の奥武区では観音堂祭で棒術を披露する。観音堂は 1600 年代初めに遭難した中国の船を救助したお礼として奥武島の人々に贈られた金の観音像が祭られてたことに由来する。2020 年 11 月 3 日に「奥武島観音堂 405 年祭」が開催された。観音堂 380 年祭までは、旧暦 9 月 18 日に行ってきたが、385 年祭からは 9 月 28 日以降の日曜日に階催されるようになった。5 年ごとの観音堂祭に演武するので、それに合わせて稽古する。棒術は 1750 年代に奥武島に伝えられた。

棒術は 9 つの型があり、特に棒術の原型とされている津堅暗間（チキンクラシムボウ）は技が非常に難しく、長いため上級者しかできない型である。一般的な棒術は六尺棒で演武し、四方に向きを変えるが、津堅棒は八方に向きを変える。幕開けで行う舞方（メーカタ）はその場の邪気を祓い清める意味がある。団体演武の潮巻チ（スーマチ）、大槍ぬ手（ウフヤヌティー：槍が前棒、ナギナタが後棒）、槍小ぬ手（ヤイグアーヌティー：大槍ぬ手の抜粋）、尺小ぬ手（シャクグワヌティー：六尺棒と三尺棒の組棒）、砂掛ちぬ手（スナカチヌティー）漁師のエークが前棒、釣り人の鉛が後棒、尺小ぬ手（シャクグワヌティー）、ブイ小ぬ手（ブイグワヌティー）薪を取る人が、短い 2 本の棒を持ち、農夫が六尺棒、櫓ぬ手（エークヌティー）エークの 1 人棒、津堅暗間（チキンクラシムボウ）の構成である。

津堅暗間は棒術の原型とされているが技が非常に難しく、しかも演武が長いため上級者しかできない型である。メーカタ棒は、四方に向きを変えるが、津堅棒は八方に向きを変えるという特徴がある。

ウ 集落の移転記念日

久米島町具志川の棒術は字移転記念日に披露される。字具志川移転記念日は明治 28 年字仲村渠古島から現在の字具志川松の口に移転した旧暦の 8 月 19 日を基本として、実行委員会・部落で日程調整し、10 年に一度棒術を行っている。

棒術は 3 場面構成される。一の場面は入場「たかまち・グーヤー巻き（現マチ棒）、全員参加でホラ貝、太鼓、ドラの音に合わせ「ファイイ」のかけ声で棒を上下し横歩きで入場し、会場に入ると前を向き棒を上げるときに右足を大きく上げ行進する。その後左巻きの大巻に入る。渦を巻ききったところで渦を解き、敵味方の二組に分かれ小渦をつくり、巻ききったところで渦を解き対戦の隊形に入る。二の場面は対戦「タンカー棒」で、基本全員が棒術のメインとなる場面で 1 人対 1 人、2 人対 1 人の秘術をつくしての攻め守りの激しい打ち合いをする。三の場面は基本型の「ダンヌ棒」で 8 名で演じる。棒術の締めくくりとして数名の若者によ

て、棒術の基本を東西南北に向け披露する。ダンス棒が終わると隊形を組みなおし大巻き、そして退場となる。

以上、ムラ行事として武術的身体表現をともなう棒術や空手等の演武が行われる行事を取り上げてきた。

これら以外にも様々な機会に棒術等が披露される。栗国村字西では旧正月の「マースヤ行事」の棒踊り(棒術)が行われ、富盛の八月十五夜では棒術が披露されるが、その中の唐人行列では空手の組手が演じられる。その他、敬老会や共進会などでも棒術等が披露されている。本節では行事別の特徴として、行事に分けた上でのそれぞれの棒術等をまとめて照会したが、各々に特徴があるというよりは、むしろ様々なムラの行事に棒術等の演武が取り入れられ、県内に幅広く分布し普及していることが大きな特色であるといえよう。



写真2-2-7 棒術の演武 八重瀬町富盛



写真2-2-8 空手演武 八重瀬町富盛

著：萩尾 俊章

第3節 武術的身体表現を有するムラ行事の総括

1 北部地区

特徴①分布

国頭・大宜味村、東村の北部3村では、今日空手や棒術の演武の事例は確認することができないが、本島最北端の奥（国頭村）のシヌグに含まれる行事に、棒や空手の所作による先導役が確認される。王国末期に首里からの旧士族の移動に伴い空手や棒の伝播の伝承を確認することができたが、元来の行事の中にどの時点で導入されたかの時期は不明である。また、謝名城の豊年祭に演目の中で空手の所作が舞踊化されたものがあつたりするが、一般的な二才踊りと思われる。本部半島の今帰仁村では今日でも今泊、仲宗根、湧川の3つのムラでは豊年祭の中で「ボー（棒、棒術）」と呼称されるものが盛んに行われる。湧川では「スーマキ（総巻き）」と呼ばれる集団による棒演武がある。本部町では瀬底と並里の2つのムラでも棒が確認される。特に、並里区では棒術の中に、「ウッチェンボー（一人棒）」、「フタリボー（二人棒）」、「サンニンボー（三人棒）」や「タチンティー（太刀手）」と呼ばれる刀の演武や「ゴーリーティンペー（転びティンペー）」と呼ばれるやりと盾・刀の組型があり希少な武術的な身体表現があつたりする。名護市では旧羽地村の3つのムラ、旧屋我地村で5つのムラでも「ボー」が確認される。東海岸沿いの旧久志村では久志、辺野古の2つムラでは「ボースケ（棒使い）」や「ボージュツ（棒術）」がある。宜野座村、金武町では、「十五夜あすび」や観月会の中でも、「ボースケ（棒使い）」や「ボー（棒）」がある。また、中部地区と近接する金武町では旧暦八月十五日に十五夜ムラアシビや観月会の行事で、「フェーヌシマ（南又島）」と呼ばれる棒踊りがあり、伊江島では「ペンシマ」と呼ばれる。

特徴②名称

北部地域では、棒の集団演武がある村落ではその呼称を「スーマキ」と呼ぶが、その表記の仕方は「総巻き」、「数巻」があつたりする。個々の棒術の呼称については、棒術と棒演武者の呼称が混在して、「ボー」、「ボウ」、「ボーカタ」、「ボースケ」、「ボースケー」と呼ばれ、その表記の仕方は「棒術」、「組棒」、「棒組」とするのが多い。

特徴③行事との関係

北部地域では、大きく次の3つに分類される。大半は本部半島一帯から東海岸の地域において旧暦8月15日の「豊年祭」や「村ウドウイ」、「八月あしび」の行事名の中で演じられることが多い。また、旧暦7月16日の盆行事の中の「ムラ踊り」（久志）や「シヌグ」または「ウンジャミ」（伊是名村）の中で位置づけられるものもある。

特徴④芸能との組み合わせ

北部地域の棒術は、基本的には豊年祭を始めるにあたり、舞台や場を清める意味を持たせて棒を演じる場合が多い。棒術の数少ない指定文化財である本部町指定無形民俗文化財「満名棒」を有する並里区では、「棒シンカ」によって、豊年祭の開幕前の舞台で「トゥーシ」としてすべての棒術・武術を行った後、豊年祭の舞台の幕開けが行われる。棒術は他の舞踊とともに上演されるが、5年マールで開催される同区の豊年祭全体の演目14演目のうち、前半と後半に「棒術・武術」の演目が各1回行われる。その1つのプログラムに6演目の棒術が含まれ、延べ12演目が披露される。型や組棒による1演目の演武時間は1～2分だが、演目数は全体の半分を占める。祭祀的には、舞台が始まる1時間ほど前に、棒シンカによって集落の山裾に位置する並里神社の前で奉納演武を行った後、舞台に上がることから棒シンカが豊年祭を行う上で場を清める役割を果たす一例として考えることができる。同様に今帰仁村湧川でも、ボーカタ（棒方）による3か所（前ヌピャー、

シシヤー（獅子屋）、野外ステージ前）での棒や路次楽、獅子舞の演舞（ママ）後、踊りの部が開始されたりする。豊年祭の舞台芸能は、性差による分類も可能である。男性のみで行われるボーとその他の演舞は、女性を含めた男女混合で行われる演武（舞）に分かれる。

特徴⑤棒術の組織

北部地域では棒を行う組織は、豊年祭の「ウドイカタ（踊方）」や「ウドウイグミ（踊組）」に対し「ボーカタ（棒方）」や「ボーグミ（棒組）」や「ボースケ」と呼ばれ、中学生以上で構成される青年団や青年会を中心とした組織で行われるが、地域によっては保存会を設置し、技術伝承の基盤形成を積極的に行う団体もある。宜野座村宜野座は、15～49歳の青年会・成人会の男性で組織される「ニーセーダン（二才団）」という強固な組織をつくり、集落の伝統行事を牽引する事例もある。

特徴⑥棒術等の編成と内容

北部の棒術の編成は、大きく3種類に分かれる。一人で演武する一人棒（並里では「ウンチューボー」と呼ぶ）は、一人で型の演武を披露する。組棒の場合は、2人1組の場合、さらに3人1組の場合がある。戦前は、並里では5人棒もあったというのが現在は確認できない。また、集団演武の場合は先導役と後尾役が衣装や帯や所持するもので判別できるようになっている。その要因としては演武の最中に誰が先導役であるかについて演武者全員が明確にわかる必要がある。単純な呼称、例えば、演武する人員数での呼称があったりする。一人棒（ウンチュンボー）、二人棒（フタリボー）、三人棒（サンニンボー）（並里）や、演目が出る順番で、ハタボー（旗棒）、メーボー（前棒）、ナカボー（中棒）、シーボー（後棒）と、より棒術の難易度の高低を示すものもある（湧川）。棒術の演武形態で大きな違いは、組棒の際に二つの棒の打ち合うことの有無である。並里や湧川は、ひとつの例外（シーボー）以外に打ち合うことはない。打ち合わず力強さと迫力を伝えることが真髓だと考える。一方、数久田では棒が折れることがあるほどに激しく打ち合うことの勇壮さに加え、地名（ボーユンジャ（棒読谷山））や所作【トーヌギヤー（飛棒）、カラブイ（空振り）、ヨコウチボー（横打棒）など】、用具と部位【ロクシヤクヌウラ（六尺裏）、ヤリと尺（槍と尺）】、動物【マヤボー（猫棒）】、新作【ミーボー（新棒）】と多様な型名で呼称する事例もある。

特徴⑦上演場所

北部地区での棒術を披露する上演場所は、奉納演武の場合は特定の場所（ニーヤー（根屋）前、神アサギ（アシャギ）前、獅子舞がある場合はシシヤー（獅子屋）前、御嶽、集落内の旧家）を経て、公民館前に舞台をつくったり、屋外ステージと呼ばれる集落の行事の舞台が備えられている場合がある。今帰仁村では、公民館とは別に、豊年祭用の「特設ステージ」と呼ばれる鉄筋コンクリートの舞台が公的資金で整備されており、湧川区はその嚆矢だとされる。

特徴⑧棒等の種類

北部で使用される棒の種類は、大半は六尺棒（約180cm）を使用するのが一般的である。今帰仁村の湧川や本部町並里、名護市数久田、宜野座村宜野座の事例を後章で紹介するが、中には、「タチンティー（太刀手）」と呼ばれる木刀（三尺）や「ゴーリティンベー（転びティンベー）」と呼ばれる短剣と盾と組型があったりする（並里）。

特徴⑨その他

北部に伝わる「クーサンクー」と呼ばれる演武

戦後のある時期まで大宜味村謝名城、饒波、大兼久の集落では、豊年祭やシヌグ・ウンジャミの舞台演目

の中で空手や棒術が行われているという事例の報告があったが、現在は確認ができない。その中で、大宜味村の大兼久区（ハニク）では、旧盆明けの翌日に、無事に納税をすませたことを祝する「ゾーガリー」という行事があり、現在でも「クーサンクー」と呼ばれる三線楽にあわせて、「クーサンクー」と呼ばれる型の演舞があるという。大まかな型の所作は決まっているが明確な型の決まりはなく、アシビの中で先輩から後輩へ見よう見まねで受け継がれている。」とされる。旧羽地村の田井等、親川でも踊り手に、唐手の「九三九」と呼ばれるものがあつたり、古我知や我部祖河でも、一番棒、二番棒など14種類の棒型名に「クーサンク」と呼ばれる2人1組の型名があつたりする。今日に空手界で呼称される「クーサンクー」²は首里・泊手の躍動感があり難度が高い型名として知られるが、空手の型名称が地域の伝統行事の中に組み込まれていることは、首里那覇から地方への文化伝播を考える上で興味深い。

シヌグやウンジャミの中に伝わる武術的身体表現

本島最北端に奥集落では旧盆明け亥の日に行なわれるのが、無病息災と五穀豊穡を神々に祈願するウイミ（折目）行事に、「シヌグ」（3日間）と「ウンジャミ」（2日）が隔年で行なわれる。シヌグ行事は、1日目に「フーヨーサレー」行事、2日目は休みで、3日目に「ピーンクイクイ」とよばれる集落の長老の長寿を祝す行事が行なわれる。その行事の道ジュネーの先導役を務めるのが空手と棒術の演武者である。興味深いのは、戦前から行なわれているというが、王国末期首里の士族が奥に定住したことにより、その子孫が首里の御殿、殿内に奉公していた中で、唐手（ママ）を習得し「国頭カニー」と呼ばれるほどに武芸にすぐれたものとなり、「武士ウンメー」として名を馳せた。その人物の存在によって奥の人々に空手や棒術が伝承されシヌグ行事の中のピーンクイクイの先導役として空手や棒術の所作が入ってきたのではないかと推察される。この事例は王国時代首里、那覇の士族の武芸であった「手」や「唐手」が人々の交流によって地方の伝統的な民俗行事の中に組み込まれたことを意味し、空手や棒術の地方伝播を考える上で興味深い事例と思える。

出演順や構成人員等に因んだ棒術名と多様な棒演武

名護市は旧羽地村、旧屋我地村、旧屋部村、旧名護町、旧久志村が合併してできた。羽地ターブク（水稲田）とよばれ復帰前県内有数の米所であった旧羽地村は豊年祭が盛んにおこなわれ、豊年祭の舞台では踊りや棒、獅子舞が行われた。羽地地区の北側に位置する真喜屋・稲嶺（まじやがねく）では、綱引きが終わった後に棒がある。ボーカタ（「棒方」）人数22名。全員による棒「スーマキ」があり、その後で2人1組による棒「組棒」（15種）があつた。仲尾次では、棒はイズミ（伊豆味）、シーク（瀬底）、ワクガワ（湧川）などから移入してきて、少し型を変え交流の歴史が型の近似を意味するとされる。時代の人口の増減によって変化する姿もみられる。大正時代から昭和初期の棒は「三棒」（2人1組）があつた。「三棒」とは、2人1組の3組で行う棒のことを意味した。その後、若者が多くなったことで1960年（昭和35）には「六棒」にしたという。さらに若者が増えたので、三尺棒等を増やし、2005年当時は「十三棒」になったという。サイとヤリはもともとなかったが、その頃に空手家から習ったとの伝承があり、人口の増加に伴い棒演武の披露演目が増加している。アシャギミャーとハンカジョーミャーに道ズネーを行い「かぎやで風」節にのせて棒演武の奉納があつた。

集落社会のみならず、地域連携の姿もみれる。戦前までは「ガッコウボー（学校棒）」もあつたという。尋常高等小学校（高等科）の先輩から習い、運動会の時に各区（豊年祭のある区）からの棒が出たという。仲尾次からは六棒が出た。六尺棒、三尺棒、サイとヤリで、区の棒組への参加は高等科を卒業した人から35歳ごろまでの男性によって行なわれたという。田井等・親川の豊年祭でも同様に棒方、獅子舞の催事が行われる。棒の出演者は、「ボウカタ（棒方）」と呼ばれ、「田井等・親川の獅子舞の由来」の記録では「・・・

2 第3回沖縄空手アカデミー（2023年11月30日開催）の筆者による報告。1939年（昭和14）年6月18日に大日本武会沖縄支部によって創設された沖縄武徳殿での開殿式の空手道型単独演武で、沖縄を代表する空手家22人によって、19種の空手型が披露された。「公相君」（クーサンクー）のつく型名は3種類（北谷屋良ノ公相君、公相君大、松村ノ公相君大）が披露された。

踊る時間は二十分。踊る手は唐手の九三九と称し、今より百七十年前親川孝一氏の振付けで授したもの³とある。振慶名、古我知、我部祖河、呉我でも豊年祭で棒が盛んにおこなわれた。古我知や我部祖河では、一番棒、二番棒、三番棒、上払い、チッタッチャ、イサ棒、二段切り、四方切り、マルヌキ、ウラースグイ、クーサンクの呼称の棒術が二人一組で披露された。古我知では、日露戦争の終結後の不況下で中断された棒であったが、ある老人による神のお告げで、「昔のように踊りや棒を盛んにして、神のおもてなしをしないと、我が古我知は繁栄しませんよ。村中の人々が心を合せて気張りなさい。これは神のお告げだよ」との話があり、村ではお告げが話題となり、戸主会（ユレー）を開き踊りの再開を満場一致で賛成決議し、戦前、旧羽地村で一番早く棒が復活した⁴という。先の大戦で中断したが、戦後松川源傑の計らいと全字民の賛同と協力によって復活、その後ハワイ、アメリカ在住の字出身者から踊り衣装類が贈られ、1947年からは字民総参加で戦前以上の踊りとなった。1957～1964年にかけて、パイン造りが盛んになり、パインの収穫と踊りの時期がかちあったため、毎年の実施を中止し、1965年からは三年に一回、字を挙げて盛大に行われるようになった、とされる。我部祖河では、ミチジュネーの際に、奉納棒を演武する。スーマキは二組に分かれて一方ずつ巻きに入る。他方は、巻きの外円を取り巻き、固める。その後、巻いた一方がほどこに入っている間、他方は外円を回る。ほどこいたところで、他方が巻きに入る。一方は円を回る。同じくほどこいた時点で円を描く。その後、再び一列となり、三人棒に入る。（二組のスーマキの流れが外見では複雑に見え、独特の趣がある。また、大勢による三人棒の演武も勇壮で見所がある。イチバンボウ（一番棒）、ニバンボウ（二番棒）、サンバンボウ（三番棒）、ヨンバンボウ（四番棒）、サンジャクボウ（前方三尺棒、後方六尺棒）、ゴバンボウ（五番棒）、ロクバンボウ（六番棒）、ナナバンボウ（七番棒）、シーボウ（終わり棒）が行われた。呉我ではサンジャクボウ、ナカサンジャクボウ、ハマンタ（六尺のやりと、ハマンタ（一・五尺程度）と一・五尺程度の棒）、長槍とハマンタと短棒をもった二人の組棒で、やりの攻撃をハマンタでかわしながら棒で攻めを繰り返す。ハマンタとは、昔のシンメー鍋等の蓋やバショウなどのような植物で編んだ盾のようなものをいう。また、サイと六尺棒の棒で、棒の攻撃を鉄製サイで自由自在にかわし対抗するものもある。棒術以外の武術が伝わっていることは、テインペーとサイは戦後仲井間憲孝⁵が当時稲田小学校教頭をしており、その指導を受けたことによるものだという。

今帰仁村では今泊、仲泊、仲宗根の旧暦八月の豊年祭で、今泊では30～40組の組棒が勢ぞろいして、集落の中央にある大道で、各組の演技を披露し、「スーマチ（総巻）」とブリボーを行った、と紹介される（『今泊誌』）。

仲宗根区でも40名程度によるスーマキ（総巻）にくわえ、「チュイボー（一人棒）」、「タイボー（二人棒）」が行われたが、『仲宗根誌』によると、現在は毎年開催される豊年祭では、5年マール（満4年）で行われ、1925年（大正14）までは旧暦の「シチガチオドリ（七月踊り）」であったとされるが、1926年（昭和元）から旧暦の「ハチガチオドリ（八月踊り）」に変更されたという。8月13日が「スクミ（仕込み）」、15日が「ソーニチ（正日）」、17日（ウワイ（終り））の三日間が開催されたという。銅鑼の調子に合わせて演ずる棒術で、「チュイボー（一人棒）」、「タイボー（二人棒）」などの組棒があった。また専門家が一人で演ずる棒や、大勢でにぎやかな演技もあったと記される。衣裳はジュバンを着け、頭にはサージ（手巾）を巻いてウービ（帯）でたすきをかけ、足にはキャハン（脚絆）を巻き、素足で演技する（『仲宗根誌』）。

名護市数久田には、ケンカ棒とされる激しく打ち合う棒があり、総勢20名によるスーマキ（総巻）や2人1組による組棒も多彩である。現在でも毎年の旧暦8月の豊年祭の際には披露される。詳細は第3章で述べることにする。

3 『名護市史研究資料第91集 芸能調査資料5 羽地地区の芸能・1』 359～360p.p.

4 松川源傑『古我知手さぐり記』に紹介される。

5 仲井間憲孝（1911～1989）は劉衛流の4代目で、幼少の頃から一子相伝の劉衛流の技を厳しくしこまれ37歳で免許皆伝。沖縄師範学校在学中には剣道も学び教士7段の腕前であった。60歳にして一子相伝門外不出の空手・古武道を公開した（「劉衛流の伝承について」『劉衛流空手・古武道龍鳳会 大城羽地龍鳳館』HP）

首里で修行してきた「ムリーウプー」らによって作られた満名棒と「ゴーリティンペー」と呼ばれる演武

本部町の無形民俗文化財として指定される並里の豊年祭で演武される「満名棒」（三人棒）は有名である。その歴史は、「棒術と満名棒」⁶によると、伊野波集落の「ニーヤー（根屋）」である上原家のあだ名が「ムリー」とよばれる武術に優れたものが、若い頃に首里の松山御殿に務めており、務めのかたわら空手や棒術を修行し、帰郷の際に、宿をとった恩納村富着の娘と恋仲となり、地元の青年たちに二重三重に囲まれたが、「本部サルメー」のように六尺以上も飛び上り垣根を越えて難を逃れた話しや、伊野波の幸地の高倉の火事に際して、「ムリーウプー」がきて、倉のチニブ垣を蹴落とし、稲束を取り出して火災を免れたことが評判になり人々の尊敬を集めたといった具合に、ムリーウプーの英雄伝説がある。彼は武術の修行に熱すぎたため経済的には困窮したが、明治時代に国有林の払い下げで大嵐原や谷田原の約 20 万坪が備瀬や具志堅の人々によって開墾が許され、その一部をムリーウプーも開墾して谷田原に移り住み、そこで門弟を集め武術指導をしたという。その一人が「亀うんちゅ」であり、さらに玉城興隆に棒術が伝承され、その他にも伊野波の渡久地松太郎、戦前の大見謝医師のその門弟であったとされる。昭和 8 年頃、沖縄県下にその人の右に出る者はないといわれた仲村政吉が大阪から帰郷し、仲村の洗練された棒術と先祖代々継承されてきた手数と棒術を結合、組み合わせてでき技が満名棒の基本型であり、満名棒の魂とされる。現在の満名棒は、昭和 22 年の豊年祭の時に並里甚四郎が組み合わせてできた三人棒が継承されたものとされるが、その時に五人棒もあったとされる。また、終戦直後まで伝承されていた「ゴーヤー巻」とよばれた巻棒もあったとされ、この巻棒の練習は、上のクラチャーに上っておこなったとされる。その場所は、村人が集まる場所でクージ事（公事）になると、村中から何十人もの人夫が出て大嵐山から杉の大木を切り出し、満名川に流し、そこから上のクラチャーに運び、色々な作業を行なった場所とされる。満名棒の特徴は相手の棒が当る手前で止めることである。さらに、棒術の演目の中で趣向が違ふ演武に「ゴーリティンペー」があるのが特徴。その起源は不明であるが、「ゴーリ」は棒を受けながら、転ぶことを意味し、ティンペーは、直径 37 cm、高さ 11 cm の若干の円錐形の動物皮を張り黒い漆を塗った盾で、転びながら相手の攻撃を受けることから「転び」ことゴーリティンペーと呼ばれる。右手に剣、左手ティンペーをもち、棒と組む興味深い演武も今日に伝わる。

著：園原 謙

2 中部地区

沖縄本島中部地域における武術的身体動作を含む演武について、(1) 綱引きにおける棒術、(2) 棒巻、(3) 棒術、(4) 南の島、(5) その他の武術的芸能に分けて、地域毎の特徴をまとめてみたい。

(1) 綱引きと棒術

沖縄本島中部地域では、幅広い範囲で綱引きが行われている。綱引きに伴って棒術が行われているところも多い。ここではいくつかの地域にしばって紹介したい。

ア 西原町小波津の綱引きと棒

旧六月綱引き（チナヒチ）、旧七月盆踊り、旧八月十五夜「獅子又御願」、「七年まーる村遊び」（卯年、酉年）に棒を行う。棒のことを棒チカヤーという。綱引きの前に「一人棒」、「ハジリ棒」という組棒を演武する。盆踊りや八月十五夜には一人棒や組棒の演武を行う。毎年旧一月二日ハチウクシーと、旧八月十五夜の日に公民館前庭で青年（棒シンカ）により組棒を披露する。

場所については、綱引きは小波津集落中通りの三本ガジュマル前、盆踊り、獅子又御願、七年まーる村遊びは子初集落センター前広場、獅子又御願の御願は獅子屋で行う。

6 満名棒保存会（1984 設立）会長の高良善助が「棒術と満名棒について」と題して、満名棒の歴史について記している『並里公民館落成記念誌』（並里公民館建設期成会編 1987 年）18－20p.p.

綱引きの目的は、五穀豊穡、地域子孫繁栄、防火のための「火返し（ヒーゲーシ）」である。盆踊りは、昭和 37 年頃にエイサーから盆踊りに変わった。踊りの合間に棒、獅子舞の演舞が披露される。八月十五夜「獅子又御願」は、無病息災、ムラの守護神である獅子に祈願する行事である。「七年まーる村遊び」は、豊年を祈願する行事である。昭和 50 年以来諸般の事情で途絶えていたが、平成 14（2002）年に小波津伝統芸能保存会を結成し、平成 17 年（2005）に村遊びを復活させた。

王府時代には、主に士族や役人が演じていたという。小波津の棒の特徴は「ミーヒチャティ、クシイーチ」といわれ、鋭い眼光で重心を低くした迫力ある演武である。

旧六月綱引きに先立って、一人棒、ハジリ棒 が披露される。盆踊りでは踊りの合間に披露される。八月十五夜では厄払いと五穀豊穡、子孫繁栄を祈願して披露される。

小波津伝統芸能保存会（平成 14 年～）は、小波津在住者および小波津出身者で本会の趣旨に賛同するもの。保存会に、組踊部会、獅子舞棒術部会、三線部会を設置している。出演者はかつて八月十五夜においては棒術組として 14 ～ 24 歳の男子で行っていた（小波津誌より）。日本復帰後は、小学生から壮年まで男子が地域行事に出演している。今は小中学生女子も出演している。

稽古は、かつて八月十五夜アシビの 2、3ヶ月前から練習した（小波津誌より）。近年は地域行事等の 1、2ヶ月前から練習。コロナ禍前は、毎週木曜日に集落センターで小中高生に指導していた。稽古の場所は復帰後は指導者宅等で練習していたが、小波津集落センター落成（昭和 58 年）により、センターのホールになった。盆踊りの前は、櫓の舞台で練習する。

演武の構成は、ヤイ・ナジナタ（槍・長刀）、エークディー（櫓手）、フーガキ、ウシワカ、チュイボー（一人棒）、タイボー（二人棒）、ミツチャイボー（三人棒）、ユツタイボー（四人棒）、トーディー（唐手）、ティンペー（盾・太刀と槍）、サイ、カマディー（鎌手）などがある。ただし現在、ウシワカ、トーディー、サイ、カマディーは継承されていない。楽器は三線（3～4名）と銅鑼 1 名、古老による指笛からなる。

イ 浦添市前田 綱引き 棒使い

豊年祭（綱引きと村芝居）綱引きの後で「棒使い」と呼ばれる棒術を行う。旧六月に綱引き（綱引き後に棒使い、昼間）と村芝居（夕方から夜）が隔年で行われたが、近年村芝居は行われない。旧 6 月 25 日にムラを東村渠（アガリンダカリ）と西村渠（イリンダカリ）に分かれて東が雄綱（ヨナナ）、西が雌綱（ミンナ）を作って引いた。棒は「棒つかい」と呼ばれる。綱を引き終えたら、その後 1 時間ばかりの間に、ガーエー、旗頭持ち、棒、空手を順に演武した。戦前は旧 8 月 1 日から一日越しに踊りと棒を行った。10 日にメーアシビー（前遊び）、13、15、17 日がショウニチ（正日）という本番、18 日にアトアシビー（後遊び）があった。

戦後途絶えたが、1965 年頃に復活した。浦添市でだこ祭り（1978 年）の一環での朱杖運が原動力となった。戦前は「巻き棒」も「配列棒」も集団演武として棒の花形で見せ所だったが、昭和 52 年あたりから多人数での棒つかいはなくなった。

令和 4 年はコロナ禍で綱引きは 3 年連続で中止になったが、7 月 23 日（旧 6 月 25 日）に「綱引きウガン」を集落内 16ヶ所を自治会三役など数名で回って祈願を行った。上演場所はメーシシモー（公民館の前庭）。戦後の現在の公民館（自治会館）建設前は、段差のある木々が茂る広場だった。

目的は、地域の発展、子孫繁栄、豊作祈願。ウカンヌウトウイムチ（お神の御取り持ち）である。戦前までは棒術は数え 15 ～ 35 歳までの男子全員で行なっていた。当時は棒使いができないものは男にあらずの風潮があった。現在は 30 代の保存会メンバーが小学生（男女）20 人に定期的に公民館前で指導している。

保存会会員は 15 人程度。指導は会長や数名の青年が行なっている。

演武構成は、20 種類あった。一人棒 5 種（略）、二人棒 4 種（略）、三人棒 1 種、巻き棒（マチボー）、ふえーい棒（集団棒使い）。現在、保存会では一人棒、二人棒しか伝承していない。

衣装・道具については、空手着上下を使用する。頭には紅白 2 種類の鉢巻を巻く。マチボーや二人棒で

は赤白のはちまきを巻く。衣装の管理は会員個々が保管する。音楽はドラ鐘、フィーフィーという独特の指笛がある。戦前までは太鼓もあった。

(2) 棒 巻

北中城村島袋の棒総巻

期日は決まっていない。村遊びの中で行うので、毎年行われることはない。また大きな行事の時に行う。由来は約二百年前、首里西の平の仲村親雲上が伝えたといわれている。昭和 16 (1941) 年以来途絶えていたが、昭和 39 (1963) 年に古老の記憶により復活させた。これまで、昭和 3 (1928) 年昭和天皇即位式、昭和 15 (1940) 年の紀元 2600 年祭、昭和 24 (1949) 年龍の仕立て祝い、昭和 53 (1978) 年第 1 回北中城村文化まつり、平成 21 (2009) 年・平成 29 (2017) 年島袋まつりで行われた。

継承組織としては、島袋民俗芸能保存会を中心に青年会、壮年会が協力して継承している。指導は保存会会員が行い、参加人数は 50 名程度である。島袋民俗芸能保存会は「赤木名節」および「棒総巻」を保存し、その普及と後継者育成を目的とする団体である。

演武は、奇数組、偶数組が一列縦隊になり会場内を二手に分かれて周回する。総巻きとハジリ棒と呼ばれる組み手で構成される。中央付近で交差する時、右側縦に構える棒下方を互いに相手側に出して棒を当て合う。楽器はホラ貝約 4 名、大太鼓 1 名、ドラ鐘 1 名、鉦子約 3 名が連打する。

(3) 棒 術 ここでは綱引きと関わらず棒術が行われる地域について概観する。

ア 嘉手納町野里の野里棒

概略は二人一組で行う「組棒」と「一人棒」があり、六尺棒と三尺棒を用いる。元々は旧八月に行われていた村芝居で演じられていた芸能である。現在は一般財団法人嘉手納町野里共進会により団体が主催している行事のほか、町内外で行われる芸能祭などで披露する。約 2ヶ月前から練習を始める。

特徴は一人棒の打ち込む気迫や、組棒の二人が打ち合う姿は真剣勝負そのもので圧巻である。野里出身の男性のみで行う。

由来は首里から野里に住み着いたタルガニーヌメーという人が農業の振興を図る上で若者を部落にひきとどめる必要があると考え、「道イリク」と「棒術」を習ってくるよう命じたのが始まりと言われている。

技の継承については、戦後、戦前に演武を経験していた野里出身者に演舞の仕方や演奏、衣装について聞き取り調査を行い復活させた。一般財団法人嘉手納町野里共進会により 49 組のうち 11 組が継承されている。地謡はボラ 2 名、ドラ 1 名、太鼓 1 名、三線 3 名で構成される。

イ うるま市田場

豊年祭（十五夜）その他に旧盆行事（ヒチグワチ）、新年会、夏祭りがある。豊年祭（十五夜）の中で型の演武を行う。ティンペーの手 ナギナタの手、エークの手、対面での打ち合いをヌンドウンチ（祝女殿内）神屋にて行う。由来は、いつ伝わったか定かではない。村の繁栄、豊年、厄災ばらいとして獅子舞と一緒にヌンドウンチへ奉納される。十五夜祭はおよそ 100 年続いている。コロナ禍の影響で 2 年間は観客なしで奉納のみ行った。出演者は 20 代前半から 50 代までが務める。

演武としては、露払いで棒の手（独演型、棒対棒）、ティンペーの手（ティンペー対槍）、ナギナタの手（ナギナタ対槍）、エークの手（櫓対トゥザー）、獅子舞の順で構成される。トゥザーとは三叉の鉋のこと。棒の手（独演型）はクーサンクーのような演武線になっている。

道具は、2022 年、市の補助（約 80 万円）を受けて新調した。武具の刃の部分は町工場に作成させた金属製である。法被なども手縫いで自作した。

楽器としては金鼓隊（大太鼓、締太鼓、ちようぐ、三線、銅鑼、ボラ）で構成している。楽曲は多幸山（あっちゃめ一小）を用いる。

ウ 読谷村の棒術 座喜味、宇座、波平、長浜、喜名等で行われている。旧7月16日（ウークイ）、旧8月15日、生年合同祝などで行われるのが地域的特徴である。

（ア）読谷村座喜味の座喜味棒（ザチミボウ）

演者はボウチカヤーと呼ばれ、棒術の前にスーマチ（棒巻）を行う。棒は型の演武、対面の打ち合い等がある。戦前は旧7月16日、8月15日、9月9日にアシビが開かれた。現在は9月敬老会、12月総合共進会で演武披露される。戦前のアシビはニオ頭（ニーセーガシラ）が区長に掛け合い、開催許可を得る慣わしだった。開催が決まると、ムスビーといって豚を潰して会食し、練習を始めた。ある程度仕上がるとアシビナーでスーダチグラーと称する公開練習を行い、旧9月末の最後のアシビとなる「別れアシビ」を盛大に催した。

座喜味棒の由来については、500年の歴史を持つといわれるが、何らかの理由で途絶えた。近代の復活は明治13年頃 山城平三氏が15才の時に津堅島出身の「つばやのタンメー」と呼ばれる炭焼き老人から習得したといわれる。

戦前の棒チカヤーは青年（15～25才）が中心だった。現在は、青年を中心に16～65才までが構成員となっている。

スーマチは演舞者全員によるスネーで、公民館広場で行われる。メーボー（前棒）とクシボー（後棒）に分かれ、スーマチヌユイアシと称する行進を行う。西に親旗頭、東に子旗頭が立ち、それを中心にブルマチと称して渦を巻く。その後、本番のユイアシ（ゆい合わせ）を経て、棒術が演じられる。鳴物はホラ貝、太鼓（大小）、鉦、指笛を打ち鳴らす。

棒の演武の型は11種類ある。棒は六尺棒を基本とし、三尺棒も使用する。県内の守礼堂にて入手している。衣装は以前はクルチナー（黒着物）縄帯を締めて裸足で演じた。現在は紺色系の上下に読谷花織のウツチャキを着用、ミンサー帯を締めている。

（イ）読谷村宇座の棒

旧7月16日のウークイにはエイサーのつなぎに演武する。青年会が中心となる。またジューグヤー（旧八月十五夜）には組踊、舞踊と組み合わせて演武する。伝統芸能保存会が中心となる。型の演武、対面での打ち合いがある。区内拝所、宇座山内楊姓門中、主ヌ前殿地、公民館中庭の順序で演武してゆく。

由来は宇座誌『残波の里・第一巻』によると、西原間切の豪傑ウチャートマグラーが読谷山按司家（護佐丸）と親しく、マグラーの棒術が宇座棒の元祖ではないかといわれる。戦前は旧7月16日盆踊り、旧8月15日観月会の2回アシビを行った。その際、組踊、舞踊などと共に棒術も披露した。戦後途絶えていたのを1960年頃から徐々に復活した。旧7月16日盆行事、旧8月15日観月会も復活した。

宇座区伝統芸能保存会、青年会が運営している。中高生、現役青年会（18～25才）、30代が演舞者である。練習は行事の3ヶ月前から週末の稽古が公民館敷地内外で始まる。棒の型は ヒーボウ、ウシワカ、ウドウイボウ、クシワイの4種類を2組が順に繰り返す。使用楽器は鳴物 ホラ（貝）、ドラ、大太鼓・締め太鼓である。カー太鼓は青年たちが務める。楽器演奏は演者が行う。

（ウ）読谷村波平のハンジャ棒

波平盆行事：旧7月16日、八月十五夜アシビ（波平観月会）に演じる。

14種の組棒（組手）が継承されており、ハンジャ棒、エイサーと組み合わせて演武する。上演場所は、波平東門、アシビナーである。令和2・3年度はコロナ禍で中止したが、令和4年度から盆行事、観月会を開催した。

由来については、約290年前、津堅アカナーという若者が波平に奉公し、棒術を伝えたと言われる。「津堅手」は2人三尺棒である。行事の中での演舞は、ヤイ棒を先頭に列をなして棒チカイ、エイサー共に東門

に向かい、スーマチ（総巻棒）で旗頭、大畑、小旗を走り回り邪気を払う。

波平区伝統芸能保存会により継承されている。子ども棒術クラブもあり、保存会の青年たちが指導にあたる。演武者は小学1年生～35才までの約70名。

棒の型は、ハンジャ棒に14種ある。2人三尺棒（3種）、2人六尺棒（3種）、2人三尺六尺（8種）がある。鳴物は勝負鉦、太鼓、鉦、ブラ（ホラ貝）である。

（エ）読谷村長浜の長浜棒

役員歓迎会、敬老会、生年合同祝にて演武を行う。最近では2019年1月に亥年生年合同祝が行われた。

由来は、琉球国時代、御殿勤めをしていた山内ウメが「赤坂棒」、「山内暗夜」を人々に指導した。明治時代には津堅島から津堅繁多小ウスメが「津堅棒」、「砂カチ棒」、「カジチリ棒」を伝えた。また浦添から浦添カントーが「浦添小湾ディー」を指導した。

継承組織は、長浜伝統芸能保存会（自治会長が会長）棒術部長がまとめている。男性自治会員であれば誰でも出演が可能である。催し物や出演依頼があれば、2ヶ月前から週2回程度練習を行う。

演武構成は、グーヤー巻（集団演技 左巻円陣→右巻に円陣を解く）、長刀2人「先ふい」、その後13組の組棒演技、最後にホラ、鉦、スリー太鼓で終了する。

鳴物は、ドラ、鉦、太鼓、ホラ貝で構成される。

エ 北谷町下勢戸の棒術

生年祝いのカジマヤー（一般的には旧9／7）の他、祝賀行事や出演依頼の際に演武される。下勢頭郷友会では、チンク（金鼓）隊と棒術の呼び方がある。2人一組の組み手（組棒）を複数組が順番に行う。六尺棒を使用する。

棒術は1971年に下勢頭で初めてカジマヤーを迎えた方の祝賀行事として行われることになり、読谷村波平のハンジャボーを教わった。指導を受けたのは8名である。元の波平ハンジャボーの由来は、約290年前、津堅アカナーという若者が波平に奉公し、棒術を伝えたとされる。また一説として津堅島の棒術は、ペークーガマに隠遁していた津堅親方に唐手と棒術を学んだという伝承がある。

伝承の組織は戦後、字下勢頭会から1955年に下勢頭部落会となり、下勢頭郷友会が1976年に下勢頭芸能保存会を結成した。出演者は、棒は基本的に青壮年が担当する。子供の場合は型を演武する。練習は現在、本番の2・3ヶ月前から行う。

演武の構成は、カジマヤーの祝賀行列ではチンク隊（ボラ法螺、ソーグ鉦、テーク締太鼓・大太鼓）の次に隊列を組んで行進する。七箇所十字路で披露する。

楽器はボラ（法螺）、ソーグ（鉦）、テーク（締太鼓・大太鼓）を務める。演奏者数は流動的である。

オ 北中城村大城・荻堂の旗スガシー

旗スガシーは兄弟棒（チョーデーボー）とも言われる。

荻堂自治会と大城自治会代表による約束組棒（兄弟棒：チョーデーボー）である。演武は旧7月17日に行われる。令和4（2022）年度は旗スガシーは中止となり、拝所にウガンを実施した。以前は喧嘩棒と呼ばれるほど真剣に対決し、アザができるほどであった。現在では型と約束棒となっている。

練習は2010年頃から、地域の空手家から指導を受けて10日間練習する。

演武としては一人棒（個人形）、二人棒（約束組棒）がある。

楽器はドラ鐘と指笛がある。

(4) 南の島（フェーヌシマ）

ア 北谷町北谷のフェーヌシマ

北谷のフェーヌシマは、12年に1回（寅年）、旧6／15に行われる北谷大綱引きの道ジュネー、スネーの演目として演じられる。棒を振り回したり、打ち合う（棒巻）。空手の型の「手」と「タッチムッチー」がある。その由来は不明であるが、宜野湾間切普天間から伝わったという説がある。1938年には簡素化した祭りの演目と年の大綱引き復活まではが上演なかった。

1950年の離村村民の帰村祝いでフェーヌシマが北玉小学校で演じられた。1986年までは、メンダカリ、クシンダカリの二組に分かれ、雄綱、雌綱の側で演じた。1998年の大綱引きでは、1組で雌綱の最後尾から雄綱の最後尾に向かい単独でスネーした。

出演者は、戦前は字北谷出身の青壮年（17、8から30代前半まで）で、メンダカリ、クシンダカリ各組に鉦打ち1人、12、3人で構成された。戦後は北谷大綱引きでは人員確保が難しく、出身地に関係なく2組に分けた。1998年には15～43歳までの字北谷出身の男性出会った。鉦打ち2人、演技者22人。4人1組で構成した。

演武としては、棒を振り回し打ち合う「棒巻」と、空手の型のような「手」がある。2人組み合わせで回転する「タッチムッチー」があるが、1950年以後は演じられていない。

イ 北中城村熱田のフェーヌシマ

時期は一定していないが、昔は旧盆の七月遊びと称した十四日と十六日であった。現在では88歳の長寿を祝う合同祝いの時や字外から招待される時である。

由来は、昔美里村知花から来た籠作りが教えたという伝承がある。津堅島の棒の型を取り入れて作り上げたといえられる。

明治17（1894）年を最後に途絶えていて、大正14（1925）年、天皇御代典記念行事を機会に復活した。戦争時は中断していた。

出演者は、二十代前半の冷静な若者を選んだ。

演武としては、踊りは手踊りと棒踊りの二種がある。最初に歌三線に合わせて8人で手踊りを演じ、その後4人一組で棒踊りを演じる。前半は南島歌 ハウー、ハウーと奇声を発しながら出てゴーマチ（輪）を作る。歌に合わせてゆっくりした振りで踊り始める。後半は、エ三エ節に変わると、一の棒、二の棒、三の棒、四の棒の順に連続して棒の打ち合い、跳躍と激しい演技がある。特に三の棒のミーヌジ（目貫き）、カマチワイ（頭割り）、四の棒のチンシワイ（膝割り）などは危険な組み手である。これらを済ませると再びハウ、ハウと奇声を上げながら上手に退場する。

道具は、南島棒（直径5cm、長さ130cm 堅固な木製）を使う。これは上端に直径6cmほどの特注鉄の輪を付ける。楽器は、三線1～3丁、鉦鼓打ち1人がいる。

(5) その他の武術的芸能

ア 北中城村島袋の「赤木名節」

琉球国時代から伝わる二才踊りで、1番～4番までの振りは空手の異なる受けの型を取り入れている。演武の機会は1月新年会、9月敬老会、10月島袋まつり、北中城まつりなどである。由来は、比嘉巖（T12年生）によると、首里の踊奉行から各地のシティ（上手な人）たちが習ってきた。

伝承としては、戦後しばらく途絶えていたが、1978年北中城まつりへの出演をきっかけに復活した。2人1組での演舞から世代交代で踊り手が3名から6名の踊り手になった。島袋民俗芸能保存会（会員15人）で継承している。楽器は、地方6名が務める。

イ うるま市与那城

旧1月2日に行われる15歳祝い(ジューグスージ)において、空手の方を真似て各自創作の型を演武する。場所はヌンドウチ(ノロ殿内)隣接のノロ御殿前(屋外)である。数え15歳の男子が対象となり、成人と看做す通過儀礼として行われる。各自が空手の方を真似たもの(各自のオリジナルをコーサンクーと呼ぶ)を関係者の前で披露する。ただし空手のクーサンクーではない。2011年から少子化の影響で中断している。伝承組織は、昔は宮城自治会だったが現在は各家庭単位である。上原区、池味区や伊計区でも同様の行事があり、桃原区へも伝わった。

著：久万田 晋

3 南部地区

(1) はじめに

沖縄島南部については、那覇市、豊見城市、糸満市、八重瀬町、南城市、与那原町、南風原町、久米島町、粟国村、座間味村、渡嘉敷村、渡名喜村、北大東村、南大東村が検討の対象となる。各字に調査を依頼して上がってきた調査票と文献資料、現地調査で得た情報をまとめたものが表2-3-1である¹⁾。以下、南部地区における“棒術を含む「武術的身体表現」”について論じるが、全体的な傾向については表1に基づいて、各行事の詳細については、調査票と文献資料、ならびに現地調査の情報に基づいて論じる(本文中、引用が明記されているものは文献資料からの、引用が明記されていないものは調査票ならびに現地調査からの情報である)。ただし文献資料からの引用事例に関しては、現在も変わらずおこなわれているかは不明であることを予めお断りしておく。

(2) 分布の特徴

“棒術を含む「武術的身体表現」”は、沖縄島南部地区全体にほぼ粗密無く広く分布している。その中にあって与那原町でのみ存在が認められないという事実は興味深い。南部地区の離島においては、久米島と粟国島と渡名喜島では確認できる一方、渡嘉敷島、座間味島、北大東島、南大東島では確認できなかった。南・北大東村では、沖縄系の移住者が沖縄相撲(北大東村[北大東村誌編集委員会編 1986:387])やエイサー(南大東村[南大東村誌編集委員会編 1990:751～753])を持ち込み、神社例祭や盆祭りで演じられるようになったが、“棒術を含む「武術的身体表現」”は定着しなかったようである。

(3) 名称

文献中(八重瀬町東風平[知念善栄編 1976:910]、南風原町津嘉山[南風原町史編集委員会編 2003:469])や一部地域(粟国村字西前バル原)において「棒踊り」という名称が用いられているが、広く見られるのは「ボー(棒)」「(八重瀬町富盛・当銘・志多伯・具志頭、南城市津波古[沖縄県教育庁文化課編 1994:])、「ボーチケー(棒使い)」「(糸満市真栄平)、「棒チカエー」(南風原町兼城[南風原町史編集委員会編 2003:270])などである。宮古地区のような「棒振り」系・「棒合わせ」系の名称は見られない。

(4) 年中行事との関係

年中行事との関係では、沖縄島南部においては綱引き行事と豊年祭の際に、“棒術を含む「武術的身体表現」”が見られることが多い。

南部地区では旧暦六月のウマチー当日(八重瀬町志多伯その他)やその少し後(豊見城市根差部)、あるいは旧暦六月二十五日のカシチー(豊見城市我那覇[豊見城市市史編集委員会民俗編専門部会編 2008:100]、糸満市座波[沖縄県教育庁文化課編 2006:283～285]その他)や旧暦六月二十六日の

アミシ御願（南風原町宮平〔南風原町史編集委員会編 2003：165〕、那覇市上間〔沖縄県教育庁文化課編 2006：226～228〕その他）またその両日（南風原町喜屋武〔南風原町史編集委員会編 2003：331～332〕）に綱を引く場合が多く、綱を引く前や後に、棒術や空手などが披露される。糸満市真栄里のように旧暦八月（旧暦八月十六日）に綱引きをおこなうところもある〔糸満市史編集委員会編 1991：312〕。綱引きの際の棒術は、ガーエー（氣勢上げ）の一部としても演じられたようである（豊見城市根差部〔豊見城市市史編集委員会民俗編専門部会編 2008：835～836〕）。

豊年祭（「村遊び」と呼ぶところもある）は旧暦八月十五日に開催されることが最も多く、この日に棒術が披露される場合も多い（那覇市天久〔那覇市企画部市史編集室編 1979：543〕、糸満市新垣、八重瀬町東風平・志多伯・富盛、佐敷町佐敷〔佐敷町史編集委員会編 1984：426～427〕その他）。豊見城市翁長ではかつて八月十五夜のチチウグワンの際に綱引きもおこなっていた〔豊見城市市史編集委員会民俗編専門部会編 2008：480〕。豊年祭については、六年に一度（卯年・酉年）（豊見城市保栄茂・翁長）や、数年に一度（南風原町喜屋武〔南風原町史編集委員会編 2003：356〕、南風原町神里〔南風原町史編集委員会編 2003：567〕）、特別に盛大に開催される場合あり、その際に特別に棒の集団演技をおこなう地域もある（豊見城市保栄茂）。八重瀬町志多伯では、村で大切にされている舞獅子の法要年忌（1、3、7、13、25、33年翌年から1年忌と繰り返す）の年にあたる旧暦8月15日、16日に獅子加那志豊年祭（シーシガナシホウネンサイ）を実施し、多彩な棒術を含む「武術的身体表現」を演武している（八重瀬町志多伯）。

他方、南部地区内の離島に目を向けると、村落の移転記念行事（久米島町具志川）や旧正月の三日・七日・十六日（粟国村字西バル原・草戸原、粟国村棚田原〔勝連盛豊 2019：124〕）、旧正月二日～三日（渡名喜村〔渡名喜村編 1983：508〕）など、沖縄島南部の村落とは異なる期日や行事において“棒術を含む「武術的身体表現」”が演じられている点に特徴がある。特に粟国村と渡名喜村では旧正月前後の数日間におこなわれる「マースヤ」（粟国村）「マシュヤー」（渡名喜村）という類似した名称の行事において棒術や空手（唐手）が演じられる点が共通している。

沖縄島南部においても、綱引きや豊年祭以外の期日におこなわれる“棒術を含む「武術的身体表現」”がある。例えば、九月九日の安里八幡宮の例祭で披露されるフェーヌシマ（那覇市安里）、旧暦七月十八日のシーサーウークイという行事に披露される棒術（八重瀬町玻名城）、辰年毎に開催されるガンゴー祭で披露される棒術（豊見城市高安）、卯年毎に開催されるコーヌ祝いで披露される棒術（豊見城市饒波）、年忌の年におこなわれる龕甲祭で披露される棒術（八重瀬町小城・当銘）、旧暦七月十七日のヌーバレー行事で披露される棒術（南城市津波古）、五年毎に開催される奥武島観音堂祭で披露される棒術（南城市奥武）などがある。

（5）芸能との組み合わせ

“棒術を含む「武術的身体表現」”と芸能との組み合わせでは、南部地区においては獅子舞との組み合わせが目立っている。獅子舞の前後に“棒術を含む「武術的身体表現」”がおこなわれる事例としては、那覇市天久（渦棒、組棒、跳棒、目衝棒その他）〔那覇市企画部市史編集室編 1979：543〕、那覇市末吉町（空手や棒）〔那覇市企画部市史編集室編 1979：700～701〕、八重瀬町志多伯（巻棒、舞方、武の舞）、八重瀬町玻名城（棒術）、南城市稲嶺（棒術）〔沖縄県教育庁文化課編 2006：258～259〕、南風原町宮平（尺の手、六尺）〔南風原町史編集委員会編 2003：200～201〕、南風原町本部（舞方棒）〔南風原町史編集委員会編 2003：296～297〕、南風原町神里（舞方棒）〔南風原町史編集委員会編 2003：358～359〕がある。また、南風原町宮平〔南風原町史編集委員会編 2003：200～201〕や神里〔南風原町史編集委員会編 2003：569〕の獅子舞、玻名城のワクヤー棒のように、棒を持った者が獅子を誘い出すという動きが演じられる事例もある。

上記の“棒術を含む「武術的身体表現」”の中では、獅子舞の前に座清めとしてかぎやで風節の演奏で演舞される舞方棒が多いことがわかる。または、幕開け演舞や行事の締めくくりに演舞として舞方を演ずる地域もある。

南部地域の舞方棒はすべて六尺棒を持ちかぎやで風節で演じられ、地域ならではの舞方用の歌詞を用いる。歌詞は琉歌形式にあてており、地域によっては演舞する場面によって使い分けるところもある。

そのほか、八重瀬町では琉球音楽（主に歌三線、太鼓、鳴り物）による演奏のもと演武されるものもみられる。また、組踊や芝居の中に登場する戦いの場面などに、棒術や槍など武具が登場するところもある。

（６） 組織

“棒術を含む「武術的身体表現」”の継承ならびに実践については、現在では保存会を組織している場合が多い（糸満市新垣・八重瀬町世名城・東風平・小城・宜次・富盛・当銘・志多伯・安里・玻名城・具志頭、南城市津波古・奥武・大城〔沖縄県教育庁文化課編 1994：148～149〕・志喜屋〔沖縄県教育庁文化課編 2006：270～273〕、南風原町照屋・神里）。あるいは保存会はないが、武術の部分に専門の師匠がいて、未経験者を含む参加者を指導するという地域もある（豊見城市嘉数・高安、糸満市真栄里）。一方で、保存会や師匠などを通じてではなく、住民の中の経験者が後輩を指導するかたちで“棒術を含む「武術的身体表現」”が継承・実践されている場合もある（糸満市真栄平、南風原町兼城）。

（７） 演武の編成

演武の編成は、地域ごとに伝わる技は基本の構えや型、組棒の構成など様々である。一人で演武する一人棒（チュイボウ・ドゥーチュイボウ）では、佐久川の棍という型名であるが地域によって内容がまったく異なる（八重瀬町友寄・当銘・富盛）。またほとんどの地域が右構え、右打ちが多く見られる中で、左利きを対象にしたと思われるヒジヤイ棒（八重瀬町当銘）もある。舞方は一人棒として演舞される。また櫓（エーク）や長刀、クワ、ヌンチャク、鎌など古武道具を使用した一人演武もある。組棒の場合は、2人1組の場合、さらに3人1組の構成が多く見られる。盾と槍やサイをティンバーと称し、ティンバー1人と六尺棒1人によるティンバー対棒（八重瀬町安里・東風平・志多伯）、ティンバー2人と六尺棒1人の三人棒（八重瀬町小城）や三尺棒または四、五尺棒2人と六尺棒または七尺棒1人による三人棒（八重瀬町東風平、南風原町津嘉山）、六尺棒4人による四人棒や五人棒として演武する地域もある（南城市佐敷津波古）。また、演武の皮切りとして演武される組棒、封斬り（フーチリ）や邪切り（ジャジリ）、最後に演武される末棒（シーボウ）など演武順を示す名称がある（八重瀬町東風平・小城・富盛）。目鼻抜き（ミーハナヌチ）や腹斬り（ワタジリ）、六方斬り、四方斬り、砂掛（シナカチ）など動作から型の名称となっている場合もある。古武道具のサイやトゥンファー、エーク、クワと棒との組棒もみられる。また特に型の名称はなく一番棒、二番棒のように演武する順番で呼称する地域もある（南城市玉城仲村渠）。複数で演じる団体演武を所有する地域も多く、その型を基本型として初心者向けに伝授される場合もある。棒巻きまたは巻棒においては、地域住民が同様の衣装で参加し、隊列を成す集団演武であり200名規模で演じる地域もある（豊見城市保栄茂・八重瀬町小城）。一人棒や組棒のように型として習得するものとは異なり、同じ衣装で六尺棒を持った参加者が隊列を成し氣勢をあげて渦を巻くように行動する。地域によってさまざまな形態で構成されている。

（８） 演武の場所

現在では公民館前の広場などで演武する場合が多い（豊見城市高安、糸満市新垣・真栄里・座波〔沖縄県教育庁文化課編 2006：283～285〕、八重瀬町世名城・友寄・宜次・当銘・玻名城・具志頭、南風原町照屋・兼城）。その次に多いのがウマイー（馬場）である（那覇市識名〔沖縄県教育庁文化課編 2006：223〕・上間〔沖縄県教育庁文化課編 2006：226～228〕、豊見城市保栄茂・根差部・翁長、八重瀬町東風平・小城・志多伯、南城市佐敷〔佐敷町史編集委員会編 1984：426～427〕、南風原町喜屋武〔南風原町史編集委員会編 2003：357～358〕）。

一方、公民館前の広場やウマイーでの演武に前後して、集落内の拝所を巡拝し奉納演武をおこなっている

ところもある（豊見城市保栄茂〔豊見城市市史編纂委員会民俗編専門部会編 2008：520〕・高安、糸満市新垣・真栄平・真栄里、八重瀬町富盛・志多伯・安里・玻名城・具志頭、南城市津波古）。この際にどういった拝所を巡拝するかという点に、村ごとや行事ごとの特徴が出ていて興味深い。例えば八重瀬町安里では、八月十五日の綱引きの際に、殿武林という武神を祭っている拝所で棒術の奉納をおこなう〔沖縄県教育庁文化課編 2006：70～71〕。また糸満市新垣では、ジャナブシバカという新垣の住民に棒術を教えたと伝わる武士の墓〔沖縄県糸満市字新垣棒巻き保存会・沖縄県糸満市字新垣 2008：9〕が巡拝の経路に含まれている。八重瀬町玻名城では村落民や村落を守護したカモシカ像を、人間同様に取扱い、旧暦七月十三日のお盆の初日に、カモシカ像の精霊（方言ソーロー）を迎える獅子迎え（方言シーサーウンケー）の行事を行ない、旧暦七月十六日（昭和二十年代までは十七日）に、その精霊を送る獅子送り（方言シーサーウークイ）の行事を、村民総出で行なう〔具志頭村史編集委員会編 2005：426～427〕。豊見城市保栄茂・高安・饒波や八重瀬町小城・当銘では龕供養の祭が数年おきにおこなわれるが、その際には龕を納めたガンヤー（龕屋）が拝みの対象になり、その前などで棒術が披露される。

（9） 棒の種類

棒の種類については、桎製や黒木製の六尺棒と三尺棒が最も一般的に用いられている。四尺棒を用いるところもある（八重瀬町富盛・安里、南風原町照屋〔南風原町史編集委員会編 2003：420〕）。その他には、ヤイ（槍）・ナジナタ（薙刀）（豊見城市高安）、楯と刀（佐敷町屋比久〔佐敷町史編集委員会編 1984：429～430〕）、サイ（豊見城市保栄茂〔勝連盛豊 2019：76〕）、トゥンファー・ヌンティー（八重瀬町志多伯）といった古武道具を用いる場合や、エーク（櫂）・トゥジャ（鉾）（南城市奥武〔勝連盛豊 2019：89〕）、鎌（佐敷町屋比久〔佐敷町史編集委員会編 1984：429～430〕）、クワ（八重瀬町志多伯）など日常生活で使用する道具を武具として用いる場合もある。これらの道具をどのように組み合わせて演武するかは、地域によって多様である。上記の道具以外に、鉄輪の付いた四尺棒を用いる事例が1つだけある（那覇市安里）。

（10） まとめ

以上、南部地区における“棒術を含む「武術的身体表現」”について項目ごとに整理した。それを踏まえて、南部地区における“棒術を含む「武術的身体表現」”の特徴を、以下にまとめる。

まず①分布について言えば、沖縄島南部地区の行事等においては比較的粗密無く“棒術を含む「武術的身体表現」”が見られるが、与那原町においては管見の限り見られない。その理由は不明であり、今後の課題である。一方、南部地区の離島において“棒術を含む「武術的身体表現」”が見られるのは、久米島と粟国島と渡名喜島に限られている。

次に②名称については、沖縄島南部地区においては文献や一部地域で「棒踊り」という名称が用いられているが、広く見られるのは「ボー（棒）」「ボーチケー（棒使い）」「棒チカエー」などである。宮古地区のような「棒振り」系・「棒合わせ」系の名称は見られなかった。

③年中行事との関係で言えば、沖縄島南部では綱引き行事と豊年祭の中で見られる場合が多い。他方で南部地区の離島では沖縄島南部のムラとは異なる行事において“棒術を含む「武術的身体表現」”がおこなわれる場合が多く、特に旧正月前後におこなわれる点が共通している。

④“棒術を含む「武術的身体表現」”と芸能との組み合わせでは、南部地区においては獅子舞との組み合わせが目立っている。さらに、獅子舞の前に座清めとしてかぎやで風節の演奏で演舞される舞方棒が多い。組踊や芝居の中に登場する戦いの場面などに棒術や槍など武具が登場するところもある。

⑤組織については、現在では“棒術を含む「武術的身体表現」”の継承ならびに実践のために保存会を組織している場合が多い。

⑥演武の場所は、公民館前の広場やかつてのウマイー（馬場）が多い。その他、拝所を巡拝して各所で“棒

術を含む「武術的身体表現」を演じる場合も多く、その際にどこをなぜ拝むかという点に、村ごとや行事ごとの特徴が色濃く出ている。

最後に⑦棒の種類についてであるが、最も普遍的に用いられているのは桎製や黒木製の六尺棒と三尺棒である。それ以外に古武道具を用いる場合や、日常生活で使用する道具を武具として用いる場合がある。これらの道具をどのように組み合わせて演武するかは、地域によって多様である。

註

- 1) 文献については、市町村史誌レベルまでをサーベイの範囲とし、時間的制約の都合上、字史誌レベルは除外したことを付言しておく。

表2-3-1 南部地区における“棒術を含む「武術的身体表現」”一覧

市町村名	NO.	字名(小字名)	行事名等	“棒術を含む「武術的身体表現」”の内容
那覇市	2	安里	安里八幡宮例祭・安里金満宮例祭	フェースシマ
		天久	村遊び	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒
		宇栄原	綱引き	棒術、空手
		上間	綱引き	棒術[組棒]
		末吉町	十五夜の獅子舞	棒術、空手
		識名	綱引き	棒術、空手
豊見城市	3	嘉数	嘉数の棒	棒術[組棒]
	4	保栄茂	豊年祭	棒術[組棒]、巻棒
	5	高安	綱曳き・ガンゴー祭	棒術[型]、棒術[組棒]、空手
	7	根差部	綱曳き	棒術、空手
	8	饒波	コーヌ祝い	棒術、空手
	9	翁長	豊年祭	巻棒
		我那覇	綱引き	シタク上での棒術
糸満市	10	新垣	豊年祭	棒術(型)、棒術[組棒]、巻棒
	11	真栄平	豊年祭	棒術[型]、棒術[組棒]
	12	真栄里	綱曳き	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒、フェースシマ
		座波	綱引き	棒術
八重瀬町	14	世名城	豊年祭・綱曳き	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒、舞方棒
	15	東風平	豊年祭	棒術[型]、棒術[組棒]、舞方棒
	16	小城	龕甲祭・綱曳き	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒、舞方棒
	17	友寄	豊年祭	棒術[型]、棒術[組棒]
	18	宜次	綱曳き・敬老会・夏祭り	棒術[型]
	19	富盛	豊年祭・綱曳き	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒
	20	当銘	龕甲祭・綱曳き・夏祭り・初興し	棒術[型]、棒術[組棒]
	21	志多伯	豊年祭・綱曳き・敬老会	棒術[型]、棒術[組棒]、舞方棒
	22	安里	豊年祭・綱曳き・殿武林奉納演武	棒術[型]
	23	坡名城	豊年祭・シーサーワークイ	棒術[型]、獅子に対峙しての棒
	24	具志頭	綱曳き	棒術[組棒]、舞方棒
南城市	25	津波古	盆行事(ヌーパレー)	棒術[組棒]、巻棒、舞方棒
	26	奥武	観音堂祭	棒術[型]、棒術[組棒]、舞方棒
		平良	綱引き	棒術、空手
		目取真	綱引き	棒術、空手
		稲嶺	綱引き	棒術
		古堅	芭蕉競い	棒術[型]、棒術[組棒]
		大城	不定期	棒術[型]、棒術[組棒]
		志喜屋	綱引き	棒術[型]、棒術[組棒]
		手登根	不詳	舞方棒
		佐敷	八月十五日	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒
		伊原	不詳	棒術[型]、棒術[組棒]
		屋比久	八月十五夜、ヌーパレー	棒術[組棒]
		前川	不詳	巻棒
		仲村渠	綱引き	棒術[型]、巻棒

黒字：悉皆調査票からの情報 青字：現地調査による情報 赤字：文献からの情報

市町村名	NO.	字名(小字名)	行事名等	“棒術を含む「武術的身体表現」”の内容
南風原町	27	照屋	豊年祭	舞方棒
	28	兼城	敬老会・新年会	舞方棒
南風原町	29	神里	十五夜遊び(敬老会)	舞方棒
		津嘉山	大遊び、十五夜、村あしび、綱曳き	
		与那覇	綱引き	棒術[組棒]、巻棒
		宮城	不詳	舞方棒
		宮平	綱引き	舞方棒、獅子舞での棒
		本部	大遊び	舞方棒
		喜屋武	綱引き、大遊び	舞方棒、巻棒
久米島町	30	具志川	字移転記念日	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒
栗国村	31	西(前バル原)	旧正月(マースヤ行事)	棒術[型]、棒術[組棒]
	32	西(草戸原)	旧正月(マースヤ行事)	棒術[型]、棒術[組棒]
		端田原	旧正月の三日、七日、十六日	棒術
渡名喜村		西区・東区・南区	旧正月二日～三日のマシュー	棒術、唐手

黒字：悉皆調査票からの情報 青字：現地調査による情報 赤字：文献からの情報

著：神谷 智昭 / 神谷 武史

4 宮古地区



図2-3-1 宮古諸島における棒術の伝承地（地理院地図 <https://maps.gsi.go.jp> を加工）

宮古諸島は、沖縄島から南西約 300 kmに位置する宮古島を中心に、伊良部島、下地島、来間島、池間島、大神島、多良間島、水納島などの島々により構成される。地方自治体としては、宮古島市（2005 年に平良市・宮古郡伊良部町・上野村・城辺町・下地町が合併した）と宮古郡多良間村が該当する。このうち今回の調査対象である棒術を伝承する地域は、図2-3-1に示すとおり、宮古島に3か所、来間島に1か所、多良間島に2か所の計6か所である。これを行政上の地区あるいは自治会単位でみると、①宮古島市新里（旧上野村新里）、②宮古島市野原（旧上野村野原）、③宮古島市川満（旧下地町川満）、④宮古島市来間（来間島、旧下地町来間）、⑤多良間村仲筋、⑥多良間村塩川の6地区となる。なおここで用いる資料は、新里・野原・来間・仲筋・塩川については本事業の現地調査票による。また川満については、『宮古島市の文化財』[宮古島市教育委員会編、2007、121]による。以下、宮古諸島における棒術の伝承内容をめぐり、特徴と思われるいくつかの項目について述べる。

（1）分布

宮古諸島における棒術の伝承地は上述のとおり6か所であり、沖縄県内の他地域に較べて伝承地の数が少ない。また伝承地の分布については、宮古島の南西部（新里・野原・川満・来間）と多良間島（仲筋・塩川）の2地域に集中しており、分布上は二つのグループが存在するようにみえる。宮古島南西部の伝承地は、隣接する旧上野村（新里・野原）と旧下地村（川満・来間）の一带に集まっているため、宮古島への棒術の伝来はこの地域のいずれかの地区であったことが推測されるが、各地区における伝播の有無については不明である。また多良間島（仲筋・塩川）の場合も同様で、棒術が何処から伝わったのかについては不明である。

（2）名称

棒術に対する地域ごとの名称（地方名称）については、新里では「ボーフィ」（°印は中舌母音を表す）、野原では「棒振り」、川満では「ぼう・っふ」[宮古島市教育委員会編、2007、121]、来間では「ボーフィ」、また仲筋では「ボーアース」、塩川では「ボーアース」という名称が聞かれた。このうち「ボーフィ」は「棒振り」の意味、「ボーアース」は「棒合わせ」の意味であろう。このように宮古諸島では、棒術の地方名称として「棒振り」系と「棒合わせ」系の2種類があり、宮古島南西部（新里・野原・川満・来間）は「棒振り」系、多良間島（仲筋・塩川）は「棒合わせ」系の名称で呼ばれている。

（３）年中行事との関係

棒術は、新里では旧暦6月（日を撰ぶ）の「豊年祭」、野原では旧暦8月15日の「マストウリヤー」、来間では旧暦9月（8月の場合もある）の初辰日から未日までの四日間かけて行われる「ヤーマスイウガン」の最終日、仲筋では旧暦8月8日の「豊年祭」、塩川では翌9日の「豊年祭」において行われる。いずれも各地区の重要な年中行事であり、行事内容の一部に棒術が組み込まれている。いずれも夏期の6月から9月頃の間に行われる年中行事であり、このうち新里・仲筋・塩川の事例は地区の「豊年祭」である。また野原の「マストウリヤー」は、王府時代において貢租の完納を祝ったことに由来する行事とされ、内容的に「豊年祭」に類する行事である。

（４）芸能との組み合わせ

宮古諸島の棒術は、単独で行うよりも、他の芸能と共に行われる場合が多い。新里では、獅子舞い・棒術・女性集団による踊り・男性集団による踊りの順で披露し、最後に男女一緒に円陣をつくりクイチャーを踊る。野原では、男性の棒踊りと女性集団による踊りの順で円陣を形成し、最後に男女一緒にクイチャーを踊る。来間では、神女によるジャービラキ（座開き）の踊りから始まり、女性集団による踊り・棒術の順で行う。これら宮古島西南部の事例は、男性の棒術と女性集団の踊りがセットになっている点、および最後に男女によるクイチャーで終了する点に特徴がみられる。一方多良間島の仲筋・塩川の場合は、それぞれ丸1日かけて各種の芸能（狂言や組踊りなど）を上演するが、その最初の演目である「総引」（演者の披露）の締めくくりの部分で棒術を行う。

（５）組織

棒術は青年男性が担当する。県内の他地域と同様に、地区（村落）単位で組織される例が多い。新里では、新里青年会および新里出身者らが棒術を担当している。多良間島の仲筋・塩川の場合も地区の青年が担当する。これに対し、地区（村落）単位とは異なる事例もある。野原の場合、地区内にマスムトウ（かつて王府時代に貢租を集めていたとされる屋敷のこと）が4か所あり、これを中心としてそれぞれクミ（組）とよばれる地縁組織が形成されている。棒術はこのクミ単位で組織される。また来間の場合は、地区内に3つのブナカとよばれる一種の帰属集団（3つのブナカにはそれぞれ宗家があり、神話上は長男・次男・三男の関係にあるとされる）があり、棒術はブナカ単位で組織される。このように宮古諸島では、地区単位だけでなく、クミ（マスムトウ）やブナカなどの集団によって棒術が組織される例がみられる点が特徴的である。

（６）演武の編成

棒術を行う人数は、地区ごとに決まりがある。新里では10名編成で行う。このうちナカボー（中棒）役2名が含まれる。演武では、10名揃って同じ動きをする形、5名（中棒1名）・5名（中棒1名）に分かれてそれぞれ打ち合う形、前から2名・5名（中棒1名）・3名（中棒1名）に分かれて打ち合う形などに変形しながら進む。野原では、組ごとに5名（中棒1名）編成で行う。5名1組の形、前3名（中棒1名）・後ろ2名に分かれる形、前2名・後ろ3名（中棒1名）に分かれる形などに変形しながら進む。川満では、かつて2人棒・3人棒・5人棒・10人棒があったと伝えられるが、現在は2人棒と5人棒が継承されている〔宮古島市教育委員会編、2007、121〕。来間ではブナカごとに15名編成で棒術を披露する。これら宮古島南西部の事例は大人数で隊列を組む形が共通している。これに対して多良間島の仲筋・塩川の場合は、2人1組で打ち合う形である。

（７）演武の場所

棒術を行う場所について、新里は御嶽およびウプジャー（大座の意か）と呼ばれる道路で行った。現在は

御嶽前および公民館前の公園内で行う。野原は各マスムトゥ前の路上（辻）およびブンミヤー（現公民館）前の広場で行う。来間は地区内の路上（辻）およびアマグイジャー（雨乞い座）で行う。これら宮古島南西部の事例では路上、特にジャー（座）とよばれる空間で演武をする。これに対して多良間島（仲筋・塩川）の場合は、ともに地区の御嶽内に設営された舞台上で演武をする。

（８） 棒の種類

使用する棒については、その長さに特徴がみられる。県内の棒術では、三尺棒などの短い棒や六尺棒などの長い棒が使用される。新里では短い棒（径3cm、長さ57cm）を使用し、特にナカボー役はさらに短いもの（径3cm、長さ44cm）を使用する。ナカボー役の場合、顔の前で棒を回す所作があり、怪我を避けるために少し短い棒を使用するという。野原では短い棒（未計測・三尺棒）を使用する。来間では短い棒（径4cm、長さ80cm）を使用する。これら宮古島南西部（新里・野原・来間）では三尺棒などの短い棒を使用する点が特徴である。これに対し多良間島（仲筋・塩川）では、共に長い棒（未計測・六尺棒か）を使用して打ち合う。

小括

以上、宮古諸島における棒術の全体的な特徴として、①県内の他地域と較べて伝承地の数が少なく、かつ分布地域に偏りがみられること、②地域名称に「棒振り」系と「棒合わせ」系の2種類があること、③年中行事、特に豊年祭において棒術を行う例が多いこと、④宮古島南西部一帯では棒術と女性の踊りがセットで行われ、最後にクイチャーを踊る例がみられること、⑤棒術の組織にマスムトゥやブナカなど特徴的な事例がみられること、⑥演武の編成において、宮古島南西部では多人数で隊列を組む形、多良間島では2人1組の形をとること、⑦演武の場所については、宮古島南西部では路上や広場、多良間島では御嶽に設営した舞台であること、⑧使用する棒には短い棒と長い棒の2種類があり、特に宮古島南西部一帯では三尺前後の短い棒を使用すること、等があげられる。このように、宮古諸島の棒術には、宮古島南西部一帯（新里・野原・川満・来間）と多良間島（仲筋・塩川）という、内容が異なる2つの系統がみられるが、いずれもその由来や伝播については不明であり、今後の課題といえる。

著：萩原 左人

5 八重山地区

(1) 村落行事との関わり

八重山諸島の祭事や民俗芸能は多種多様で、島毎の由来・来歴と歴史的な変遷も加わりながら様々な特徴がみられる地域である。

八重山地区については石垣市、竹富町、与那国町が対象となる市町である。石垣市は字や行政区としては全部で27となるが、歴史的に新しく成立したところや新興の市街地もあるため、実質的には登野城、大川、石垣、新川、美崎町、新栄町、名蔵、崎枝、川平、梓海、平得、真栄里、大浜、宮良、白保、桃里、伊原間、平久保、野底などの19字である。また、竹富町は竹富、黒島、小浜、新城、上原、南風見、南風見仲、西表、古見、高那、崎山、鳩間、波照間の13字で、与那国町は与那国の1字となる。ただし、行政区の字と実質的な人々の活動単位となる村落が一致していない場合もある。竹富町は、かつて竹富、黒島、新城、小浜、鳩間、西表、波照間の7カ字が行政区であった時代もあるが、現在は13カ字である。字西表は小字の村落としては祖納、干立、白浜、船浮を含んでいる。

これらの中において、いわゆるムラ（村落）において、武術的身体表現にかかるような棒術等が披露される行事として調査票があがってきたのは、石垣市は登野城、石垣、平得、新川、真栄里、大浜、宮良、白保、川平の9村落、竹富町は竹富、黒島、小浜、西表島の祖納・干立・船浮・古見、鳩間、波照間の9村落で、与那国町は行政区の字としては与那国の一字であるが、ムラとしては祖納の東村・西村・嶋仲の3小字と比川の4村落で、全体は合計22村落である。

表2-3-2は、調査票に基づく該当字名（村落）と対象行事名をまとめたものである。同一村落において複数の行事において、棒術等が披露されるケースも多いので、演武の機会は比較的多いといえよう。

この一覧をみてわかるように、八重山地区においては、豊年祭や結願祭、節祭といった祭事において、武術的身体表現をとまなう棒術等が多く披露されていることが指摘できる。それらの中にも、豊年祭と結願祭、豊年祭と節祭、豊年祭と十五夜祭など二回演ずる組み合わせや、これらに追加して三回演ずる場合がある一方、豊年祭、結願祭、節祭、盆行事の単独で行われるものもある。

その他に行事自体で注目されるものとして、波照間島のムシャーマ、大浜の盆行事後にあるイタシキバル、十五夜があり、なかには八重山では特異な事例として黒島では旧正月の綱引きで披露されていることが注目される。

とくに波照間島のムシャーマは、旧暦7月のソーリン（精霊祭・盆祭）の祖先祭祀行事においてみられるが、このムシャーマはその昔、豊年祈願をするプーリンのエンヌユーニゲー（来年の豊作祈願行事）の仮装行列としてあったものが、プーリンに行われていた綱引きにとまなう双方の喧嘩沙汰にとまない、綱引きは廃止され、プーリンは御嶽での豊作を祈願する神行事が中心となり、仮装行列はソーリンの行事の中に組み入れられ合併された経緯がある。したがって、ソーリン中のムシャーマは豊作祈願と祖先供養を総合した芸能の祭りとなったものといえよう。

他地域と異なり、十五夜で棒術が披露されるのは白保である。波照間島との歴史的関係性をもつ白保では、豊年祭では仮装行列はおこなわれず、十五夜において行われるという点は、波照間島では上述したように、豊年祭での仮装行列がなく、旧盆にムシャーマとして仮装行列が行われていることとは、祭事の成り立ちに両者の関係性を読みとることができそうである。

表2-3-2 調査票に基づく該当字名（村落）と対象行事名

市町名	NO.	字名(小字名)	行事名等	採録事例	文化財指定
石垣市	1	登野城	豊年祭・結願祭	*	市指定・南又島カンター棒
	2	新川	豊年祭・不定期の祭事	*	
	3	石垣	豊年祭・結願祭・牛ヌ願	*	
	4	大浜	豊年祭・イタシキバル・共進会		
	5	平得	結願祭		
	6	真栄里	盆行事・民俗芸能イベント		
	7	宮良	結願祭・民俗芸能イベント		
	8	白保	十五夜		
	9	川平	結願祭・節祭	*	
竹富町	10	竹富	種子取祭・十五夜祭	*	国指定・種子取祭
	11	古見	結願祭		
	12	西表(祖納)	節祭	*	国指定・節祭
	13	西表(干立)	節祭	*	国指定・節祭
	14	西表(船浮)	節祭		
	15	黒島	豊年祭・結願祭・旧正月		
	16	小浜	結願祭		
	17	鳩間	豊年祭		
	18	波照間	ムシャーマ(豊年祭・旧7月14日)	*	国指定・ムシャーマ
与那国町	19	与那国(東村)	豊年祭他の祭事	*	国指定・祭事の芸能
	20	与那国(西村)	豊年祭他の祭事	*	同上
	21	与那国(嶋仲)	豊年祭他の祭事	*	同上
	22	与那国(比川)	豊年祭他の祭事	*	同上

[注] * 印と文字囲は第3章で取り上げた行事。文化財指定については国指定は祭事全体が指定対象となっている。

(2) 分布の特徴

八重山地区における棒術等の分布について触れておきたい。石垣市については市の中心である石垣四箇の登野城、新川、石垣、大浜をはじめ、市街地に含まれる平得と真栄里にもみられる。市街地からは離れるが宮良、白保、そして川平の各地域において事例を確認することができる。基本的には石垣島の南側の沿岸部に分布は集中しており、開拓集落が多い島の北側には棒術等の事例を確認することができなかった。

一方、多くの島々からなる竹富町では、竹富島の竹富、黒島、小浜島、西表島の祖納・干立、船浮、古見、鳩間島、波照間島の8地区で確認できる。

さらに与那国島では行政区の字としては字与那国で村落としてひとまとまりになるが、小字にあたる集落としては祖納と久部良、比川の3つに分かれる。しかしながら、豊年祭などの伝統的祭事では、小字の集落とは関わらず、東棒座(東一組、東二組)・あんか^{いむら}(東村)、嶋仲棒座(西五組)・ンマナガ(嶋仲)、比川棒座(比川地域)比川村(ンディムラ)に分かれて、芸能保存会として機能している。そのような意味では、通常の区域割りとは異なる仕組みで、独特な芸能組織を作り上げている。

芸能全体を支える組織は、あんか^{いむら}(東村)の東区、イリマイ(西村)の西区、ンマナガ(嶋仲)

の島仲区、ンディムラ（比川村）の比川区に分かれる。また、本稿に関係する棒術については、東村には東棒座があり、東一組と東二組の二つで構成され、西村には西棒座があり、西一組、西二組、西三組の三つで構成され、島仲には嶋仲棒座（西五組）、さらに比川は比川棒座となっており、全体では4つの棒座で構成されている。

以上みてきたように、八重山諸島においては、基本的に新城島を除く有人島の各島々にはこうした棒術などが広く分布していることが確認できる。

（3）棒術等の武術的身体表現の特徴

ここでは棒術等の武術的身体表現の特徴について、名称、由来・伝来、上演の場所、伝承組織、芸能との組み合わせ、武術的身体表現の種類に分けて、概観しておきたい。

ア 名称

名称としては、武術的身体表現にかかるものではやはり「棒術」に関連するものが圧倒的に多い。石垣島の新川・登野城・石垣、川平、竹富島や西表島、波照間島などでも、一般に棒は「ボウ」とか「ボー」と呼称されている。波照間島でも「ボー」と呼ばれ、「棒打ち」とも称されている。与那国島では棒は方言で「ブ」と呼ばれているが、演目プログラムでは「棒踊」として表記されている。いずれにしても、基本的には「棒」を元にした名称が定着しているといえる。

ボー（棒）のことを「棒芸」という名称で記述されることもある。棒芸は八重山各地で豊年祭やお盆などの各種の行事で様々に演じられている。これを大別して棒術として武芸的要素をもつ「マーボー（真棒）」と、石垣市新川にみられるような、武芸として舞踊的要素をもつ「パイヌシマボー（南之島棒）」に分類されるとの見方もある。波照間島の棒は武芸的要素と舞踊的要素を兼ね備えてたもので、与那国島の「マヌムヌ棒」も両要素を盛っているといわれる。〔波照間民俗芸能保存会：1982年、P69〕

「棒術」に地域の名称を付して呼ぶ場合もある。登野城の棒は「トウヌスクボウ（登野城棒）」、宮良の棒は「メーラボウ（宮良棒）」と呼称される用法である。また、棒術の演武に特色があるものについては、例えば新川の棒術は「新川南風ぬ島（ハイヌスマ）カンターボウ（棒）」と称されている。なお、竹富町西表島の見古では旧暦八月に行うキチガン（結願祭）で奉納する棒については「棒打」という名称が使用されている。字真栄里では全員が大広場で同時にやる棒を「集団棒つかい」とも呼んでいる。

空手の所作を取り入れたものとして竹富島の種子取祭で演じられる女性たちによる「腕棒」がある。この腕棒は「ウディボー」と呼ばれており、竹富島特有の武芸である。

イ 由来・伝来

次に由来や伝来についての伝承をみておきたい。字新川では、棒術の新川南風ぬ島（ハイヌスマ）カンター棒が伝承されている。由来としては、昔、漂流民から唐眞家に棒踊りが伝わり、南風ぬ島カンター棒として唐眞家の家宝として伝承されていた。1757年に新川村が創建されたのを機に、新川村の宝として後世に伝えていくこととなったとされる。

波照間島には「シーシンボー（獅子の舞）」という五尺棒を持って、三組の獅子舞との演舞が行われる演目がある。これの伝来の年来は不明であるが、伝承によると昔、南方諸島からの漂流民が波照間島と新川ムラに伝えたと言われ、波照間島では「シーシンボー（獅子の舞）」、新川ムラでは「ハイヌシマ（南風ぬ島）棒」と称されたという。波照間島のシーシンボーは新川のそれと共通するところが多かったといわれるが、その演技が複雑で伝授に困難があったので、簡略化されて現在のように踊られているとされる。

字登野城の棒術がいつ始まったかの口碑はないとされるが、明治期以降は名声のある「トウヌスクボウ（登野城棒）」の名手がいたことがわかっている。棒は当初、六尺棒だけであったとされ、次第に三尺棒（尺棒）

と呼ばれる短い棒、刀、なぎなた、槍、鎌などが加えられ、後さらに沖縄から中国由来のサイ他も入ってきたという。演目の種類によって、例えばナギナタやカタナなどを使用する組手は、他村（字）の棒術演武を参考にその当時の師匠等が創作したと伝わっている。〔牧野、1975 年 p144 ～ 148〕

字川平の棒術は、約 500 年前、川平村に仲間満慶山という人物が生まれ、武術の優れた青年となった。満慶山は毎日棒術、剣術、弓術を考案し、自己流で攻防戦の稽古に余念がなく、村の若者達が指導乞うて始まったと伝えられている。

西表島の古見では旧暦八月に行う結願祭で奉納する「棒打」（一番棒～五番棒）があるが、石垣島の川平地区からの伝承だとされる。また、小浜島・小浜の結願祭では、棒の演武や対面での打ち合い等があるが、ここも石垣島の川平地区からの伝承だとされる。

石垣島の宮良棒は、廃藩置県以降に、沖縄本島から来た空手家によって、隣村の白保村と宮良村に「棒術」が伝授されたことが始まりだという古老の伝承がある。伝授された棒術は、個人の技術、道場所有的なものと位置づけられ、行事の際に師匠が村行事に協力する形で村の若者たちによって演舞集団が構成された。

一方、白保の白保棒は、勝連出身の佐久間某から「カッチン棒」を伝授されたものという。そのため、1999 年には白保棒術保存会が、ゆかりの地である勝連城跡において十通りの組棒を奉納したことがあった。〔勝連：2019 年、p127〕

宮良の伝承にある沖縄本島から来た空手家と、白保に伝わる勝連出身の佐久間某が同一人物なのかはつまびらかではないが、沖縄本島からの伝来で広まったことは確認でき、伝授されたのが廃藩置県以降という時代が特定される点は貴重な伝承である。

黒島では、芝居の中で武術的所作が演じられる、その他獅子に関する表現では、獅子の棒（東筋部落）がある。黒島にもともと空手はないため、島の外部から「村芝居」（芸能団）が来て、もともとあった黒島の舞踊と混ざったのではと語られる。また、鳩間島でも豊年祭のプールで棒術が演じられるが、そのルーツや伝来に関する有力な伝承はなく不明であるという。

与那国島の棒術は、およそ 320 年以上の歴史を持つといわれる。乾隆年間末期の西暦 1700 年頃、首里出身の棒術者、幸地氏が与那国島に漂着し、島の娘と結婚した。8 名の子のうち 7 名の男子は怪童であまりにも激しい気性と怪力の持ち主たちだったため、彼は棒術の伝授の後の危険性を恐れ、ひとり娘にひそかに棒術を伝授した。娘が年頃になり、東迎家の先祖にあたる満名と結婚する際に、棒踊道具一式を持たせてやった。娘はその道具を用いて自分の息子 4 人に棒術を教えたのが始まりとされる。その棒踊道具は、東迎家で老朽するまで永らく伝えられていた。また一説には幸地氏が東迎家の孫に伝授したのが、始まりであるともいわれる。

このように由来・来歴が伝承として明確に伝わっているところもあるが、すべて島々の系統を明らかにできる状況にはない。川平村の伝承にみられる「約 500 年前」の根拠を示すものは確認されていないが、川平湾に停泊したマラン船の船員から棒を修得したとか、与那国島のアーサという人物が寄留した際に「三人棒」を習った、さらには沖縄本島の佐久川という人物が六尺棒を教えて「佐久川棒」と呼び、同じく沖縄の真境名スーグワ（小柄の人）が棒を教えたので「真境名棒」と呼んだなど、様々な由来・経緯を持ちながら川平の棒術が形成されたことがうかがえる。〔川平村の歴史編纂委員会：1976 年、p319 ～ 320〕

西表島の古見や小浜島は石垣島の川平から伝わったという伝来ルートが確認できる点は重要である。また、宮良や白保の例のように沖縄本島からの空手家からの伝授とか、与那国島では漂着した首里の人物から棒術が伝わったとされる点は島への伝来のあり方として注目される点である。また、字新川の南風ぬ島カンター棒や波照間島のシーシンボーのように、南方からの漂流民により伝授されたという棒による演舞もある。一方、石垣島の登野城の棒は明治期以降の棒術の名手は確認できるものの、それ以前についての口碑は残されていないとか、黒島や鳩間島のようにどこからの伝来かなどははっきりしないところもあり、由来伝承に関する今後の課題は多く残されている。

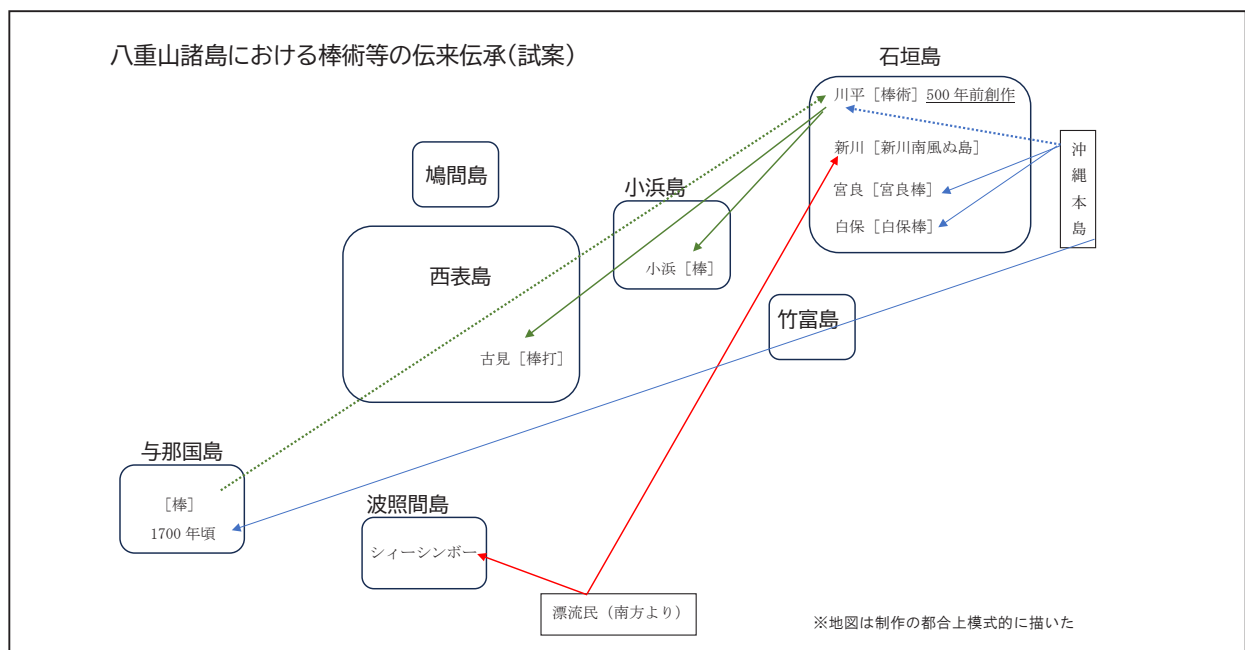


図2-3-2 八重山地区における棒術等の伝承に基づく伝来ルート

ウ 上演の場所

豊年祭や結願祭などでの棒術等の演武は、御嶽のカミ（神）への奉納芸能としての意味合いや祭りの初めの祓い清めがある。したがって、上演の場所はほとんどが御嶽の境内や近くの広場・砂浜などである。

石垣市新川・登野城・石垣では、登野城の開催場所は豊年祭・結願祭とも天川御嶽（アーマーオン）である。天川御嶽境内において奉納演武として棒術演武を行う。宇石垣の行事では宮島御嶽への豊作の願い

川平では群星御嶽で棒術が奉納される。奉納芸能には「庭の芸能」と「舞台の芸能」がある。「庭の芸能」では狂言、舞踊などを紹介するスーブドゥリ（総踊り）、祓いの意味で太鼓、棒、獅子舞の座見舞、本舞がある。〔沖縄県教育委員会：1979年、P15〕

竹富島では種子取祭は世持御嶽（ユームチオン）で執り行われ、十五夜祭（ジングヤ）は以前は各集落の指定場所で行われていたが、電線やその他の障害の為、旗頭の移動が困難なため、学校の校庭で行われた。種子取祭では「庭の芸能」で行列と言われる演目があり、最初が棒（ボー）であり、祓い清め意味があり、対面での打ち合いが基本である。その後、各種芸能の他に女性による腕棒の演武行列も奉納される。

西表島の祖納・干立の節祭は、集落前の前泊海岸にある前泊御嶽前にある「フナムトウ（舟元）の座」という祭場が主な場所である。ウガンの神々、ミルク神を侍らせ、海の彼方から「ユー（世＝幸）」を舟で漕ぎ寄せ、その喜びを数々の芸能を演じて祝うという内容で、その際に「ヤフヌティ（ヤフの手）」と呼ばれる櫓を使った武芸や棒術がその他の芸能とともに演じられる。順番は狂言、棒芸、アンガマ踊り、男のアンガマ踊り、獅子舞いの順である。

与那国島では棒踊は豊年祭のウガンフトゥティにおいて奉納や披露の目的で行われる。午前中の祈願や綱引き（隔年）が終わると、午後からは島内のウガンの本山として合祀されたトヤマウガンの前で踊られ、チムバタイ〔棒座師匠（チス）の世代交代の行事〕がある場合は新しいチスの家の前で踊られる。ウガンフトゥティ、チムバタイ、どちらも神様への奉納、披露、お祝いする目的で踊られる。

以上のような御嶽のカミへの奉納とは違う事例もある。波照間島のムシャーマでは上演場所が他地域と異なり、島の公民館は「オーセー」と呼ばれる琉球王国時代の番所の跡地で、そこの中庭で棒術他が披露される。旧暦7月14日に道サネーの行列で演武を披露しながら公民館へ向かい、公民館の中庭では奉納演武を披露する。これはかつて綱引きや旗頭問題により部落間や部落内での揉め事があり、それを采配して治めた島の役人（首里大屋子）への感謝を示すものとして、行事の成り立ちの経緯に由来するものと考え

られる。

石垣市字白保では十五夜に棒術が披露されるが、その上演場所は「オーセ」と呼ばれる琉球王国の時代の番所（役所）の跡地において行われる。これは白保がかつて明和の大津波のため多大な被害を受け、波照間島からの移住により再興されたという歴史的経緯により、行事の場所や形態・組み立てにも影響があったものと推察される。白保では「オーセ」への奉納のための演武であると目的が説明されており、この点は波照間島の演武の目的とも底流で共通しているように思える。なお、字大浜の豊年祭でも崎原道路沿い番所（オーセイ）の前で演じられることへの理由は不詳であるが、波照間島や白保のあり方と合わせて解釈していくこともできるかもしれない。

エ 伝承組織

八重山地区において、棒術等を演武する組織は、字会・区が中心となった組織、青年会が基本となるもの、基本棒術等に特化した保存会、そして字の下位組織が主体となるものに分かれるが、全体の傾向としては保存会の名称で組織を設立する動きが顕著である。その傍ら、行政行為により保存会が設立された地域もある。すなわち、与那国島の民俗芸能は「与那国島の祭事と芸能」として国の無形民俗文化財に指定されているため、各々保存会が設立されている。竹富島の「種子取祭」や西表島の「節祭」も同様である。

字会のもとに保存会が設立されたところをみておきたい。石垣市宮良では、行事の際に師匠のもとでムラの若者たちによって演舞集団が構成されていたが、個人で集団を構成し指導することは負担が大きいことから、昭和 20 年代にはすでに保存会を結成し、公民館の傘下団体として位置づけされるようになったという。

登野城字会では武術の部分は専門の師匠がいる。棒術は男性のみで構成され、年齢制限はない。したがって、青年会組織を中心とした若者が演武を担い、経験を積んだ青年会 OB 等が組織運営を行ってきた。最近では現役世代が役職を担うようになってきたことから、副師匠を 2 ～ 3 名、会計も加えた組織に変化してきており、登野城字会が主体となって保存会を設立し、地域内で継承者の育成に努めている。

字新川では新川字会の中に 1989 年に「南風ぬ島カンター棒保存会」が発足しその継承に努めている。保存会のメンバーは新川に在住する 10 代～ 50 代の男性を中心としている。字石垣では運営組織の主体は石垣字会である。武術の部分に特化した組織として「棒・獅子保存会」がある。字大浜では 2000 年に、既存の獅子保存会としてハッサン会に、棒を加えた獅子棒保存会が結成された。字平得でも「平得獅子舞棒術旗頭同好会」が設立されている。さらには、字川平では武術の部分は専門の師匠がいて、毎年公民館から役割が言い渡され、棒・太鼓の責任者を中心に演者を決定してきたが、近年は保存会が中心になって組織、役割を決定しているという。

同じ保存会とはいっても、行政による文化財指定などにともなって、保存会が設立されたところもある。

西表島祖納・干立（星立）の「節祭」は同様に国指定の無形民俗文化財となったことから、両集落を網羅した形で「西表民俗芸能保存会」が組織化されている。実際の組織運営にあたっては、公民館の青年部にて実施し、性別の制限はないが、男性が中心となり運営されている。

字会のもとに保存会が組織化されるが、その保存会が字の下位組織の中で設立されているところもみられる。それらが竹富島と与那国島である。

竹富島では種子取祭に関して「竹富島民俗芸能保存会」が設立されている。その中の組織形態は石垣島や西表島のそれとはまた異なっている。竹富島の字は大きくは玻座間ムラと仲筋ムラに分かれ、玻座間ムラはさらに東と西の集落に分かれている。そのため、奉納芸能の狂言部（男子）は玻座間と仲筋の二つの組織に分かれており、踊り部（女子）は玻座間東（玻座間村の東集落）・玻座間西（玻座間村の西集落）・仲筋の三つの組織である。狂言部（男子）の担当は「庭の芸能」で、その中に棒が含まれる。他には太鼓・馬乗者と「舞台の芸能」のホンジャー・ミルク（弥勒神）・狂言・組踊・芝居を受け持つが、玻座間と仲筋の担当する演目は決まっている。踊り部（女子）は玻座間東（玻座間村の東集落）・玻座間西（玻

座間村の西集落）・仲筋支会に分かれており、それらの演目もほぼ固定している。なお、演目の一つである「腕棒（ウディボー）」は仲筋支会が担当しているという具合である。

一方、与那国島の祭事については全体を総括する組織として与那国民俗芸能保存会がある。かつて与那国では社会組織として各ムラの部落総代制があったが、戦後にムラの公民館制度に移行した。この公民館制度に基づき、嶋仲公民館（嶋仲区）、東公民館（東区）、西公民館（西区）、比川公民館（比川区）の各公民館の毎に、ブデ（踊り）、ブ（棒踊）、クミ（組踊）、キングイ（狂言）、旗の各座に分かれて準備や実演が行われる仕組みである。したがって、実質的な役割は各公民館ごとの芸能保存会が担っている。その芸能保存会には各棒座が置かれていて、保有する棒踊りは、その棒座のみ特化している。東区には東棒座があり、東一組と東二組の二つで構成され、西区の西棒座は西一組、西二組、西三組の三つで構成され、さらに嶋仲区は嶋仲棒座で、西五組となっている。比川区は比川棒座である。なお、西棒座・東棒座・嶋仲棒座・比川棒座ともに男性のみで構成され、年齢の制限は特になく、「チス（師匠）」を経験すると「コモンウヤ（顧問）」の立場にあがる。それぞれの出身地であれば、他の地域に住んでいても、出身地の棒座に所属することができるとされている。

波照間島のムシャーマは「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」、すなわち国選択無形民俗文化財で、すでに「波照間民俗芸能保存会」が組織化されている。波照間島は行政区としては字波照間であるが、字は名石、富嘉、北、南、前の5つの集落（部落）からなり、各集落には集落の会場となる部落会館がある。また全体を総括する中央公民館にあたる公民館は名石に所在する。したがって、ムシャーマの行事では前組（前部落）、西組（名石部落・富嘉部落）、東組（北部落・南部落）という3つの組で組織化される。各部落会館にボーシンカ（棒衆）、テーク（太鼓打ち）、ブドリクマリ（踊り係）、コンギンシカ（狂言衆）、行列各演目係が置かれるという組織である。棒は中学生から青年が主体となっている。

以上みてきたように、石垣島では従来取り組まれてきたような字や自治会、青年会という形式ではなく、保存会としての組織化が多く確認することができる。また、行政行為による文化財指定にともなって、すでに保存会が設立されていて、各地域によって様々な組織形態がみられるものの、その基本ベースは伝統的なムラ区分や公民館制度に基づく地域集団を母胎としながら、棒術等の保存会が設立されていることが指摘できる。

オ 芸能との組み合わせ

ここでは棒術等がどのような芸能との組み合わせで演じられているのかをみておきたい。石垣市四箇の豊年祭は新川、石垣、大川、登野城の四つの字が合同で行なわれる。一日目のオンパールは各々の御嶽で行なわれる。登野城字会は天川御嶽にて、奉納として旗頭入場・奉納（旗頭・太鼓・巻き踊り入場整列）、開式のことは、祈願文奉読、神事・ミシャグパーシィ、イリク太鼓の手奉納、巻き踊り奉納、夜雨節・よーほ一節があり、続いて「祝宴の部」として舞台奉納芸能がある。石垣市無形文化財「大胴小胴（ウードウクドウ）」と太鼓の段のもの他、続いて棒術の奉納がある。塩を撒いて境内が清められた後、棒術保存会による棒術の演武が始まる。最後は獅子舞の奉納で、その際もまずは獅子使いが棒術のような踊りを披露してから、獅子二頭が順に登場して獅子舞が行われるという具合である。したがって、登野城では最初に棒術が披露されるのではなく、最後の方に演じられることから清めのような位置づけといえるかもしれないが、全体として祓いと清めの意味合いがある。

同じ四箇の字石垣でも御嶽の境内において伝統芸能が披露されるが、こちらではムラの旗頭・太鼓・ションク（鉦）・銅鑼・棒術・獅子舞・巻踊り・舞踊などが順に奉納される。この点では字登野城と順番が異なり、棒術が最初の祓いの意味が強調されている。

二日目の「ムラプール」では、新川の真乙姥御嶽（まいつばうたき）に四箇の字が集結し、神事や奉納芸能が行われる。その後、五穀の種子授けの儀礼や女性だけで大綱を結び合わせる「アヒャー綱」が

あり、次に行われる「ツナヌミン」では東西から長刀や鎌を持った武者が現れ、勇壮な戦いが演じられる。これも綱引きにともなう武術的要素をともなう演武で、このツナヌミンのあと、地域住民総出の大綱引きが始まる。

字大浜では棒術が旧盆の送り日の翌日に獅子舞と一緒に演じられる。この祭事を「イタシキバル」と呼んでいるが、棒術と獅子舞はお盆に招かれなかった無縁仏や悪魔払いと、村を清める行事だと伝えられる。

字川平では「庭の芸能」と呼ばれるスーブドゥリ（総踊り）では、座見舞として太鼓、棒、獅子舞、次に本舞としてやはり太鼓、棒、獅子舞が演じられる。次に「舞台の芸能」として五穀豊穡感謝の口上をはじめミルク行列、各種の舞踊や狂言などが演じられる。「庭の芸能」の組み合わせでわかるように、祭祀的側面が強く、祓いの意味で行われる。

竹富島の種子取祭では、庭の芸能での行列の順序は①棒（ポー）、②太鼓、③マミドーマ、④ジツチュ、⑤真栄（マサカイ）、⑥祝種子取、⑦腕棒、⑧馬乗り（ンマヌシャ）である。最初に棒術が行われるのは、青年らによる「棒術」で場を清めるものとされている。竹富小中学校の「太鼓」、仲筋支会の働く女性を表した「マミドー」、西支会の琉球王に拝謁する喜びを表現する「ジツチュ」、東支会の農耕作業の様子を映す「マサカイ」、石垣竹富郷友会の「祝い種子取」、仲筋支会の女性同士が力勝負する「腕棒（ウディボー）」、玻座真芸能保存会の馬に乗り飛び跳ねるしぐさの「馬乗者（ンマヌシャ）」が順に奉納される。

西表島の祖納・干立の節祭では、演武構成は奉納演武として棒術、ミルク行列、アンガマ行列、フナムトウの行事として奉納舞踊（「祖納岳節」「まるまぼんさん」「西表口説」）が披露狂言、獅子舞、ユークイのフナクイ（舟漕ぎ）という紅白の二艘による競漕がある。

波照間島のムシャーマでは、旧7月14日の午前「ミチサネ」と称される仮装行列が西組・東組・前組に分かれて行われる。その際に各組のポー・テーク（棒・太鼓）のシンカによる演武がおこなわれる。棒は獅子とともに行列の中では各組ともに最後のとりを務める。例えば、前組の場合、ブーパタ（大旗9・ナーリ（実り）・弥勒・五穀の籠・弥勒の子ども・弥勒節・かりゆし節・豆どうま節・崎枝節・からちゃん踊り・六調節・山崎ぬアブジャーマ・ブーブザー・魚つり・パピル節・ポー（棒）・テーク・シーシー（獅子）の順番である。仮装行列の終了後、公民館の中庭の栈敷前で、西組・東組・前組の三つの組によるテークと棒の演舞が行われ、最後にニンブチャー（念仏踊り）で終わる。



写真2-3-1 前泊の浜での二人棒〔西表島祖納〕2014年

午後は中庭の栈敷に設置された舞台芸能が披露される。「かぎやで風」、「一番コンギ」（西）、「世界報節」、「一番コンギ」（東）、「五月雨節」、「安里屋節」、「崎山ゆんた・みなと一ま」、「かしきき」、「コームツサー」、「シーシン棒」、「獅子舞」が披露され、その後再びミチサネとして帰りの仮装行列が行われる。各組はそれぞれの会館もしくは所定の場所に戻るとそこで太鼓と棒が演舞されて、すべての祭事が終了となる。

与那国島の嶋仲区では、最初に棒踊が座ならしとして披露され、その後には舞踊の「ミティ唄」、狂言「ウブンダ」、棒踊の「ミティアギ」・「スナイ」・「六尺なぎ刀」・「六尺イララ」・「六尺二人棒」・「六尺三人棒」、その後は舞踊「旅果報節」・「ティンナ節」、空手の演武、舞踊「亀甲節」ほか9演目が続き、そして最後に棒踊の「ティンバイ」・「三尺イララ」・「六尺四人棒」・「三尺二人棒」・「三人棒」・「チチヌ棒」で締められる。こうした最初に棒踊で座ならしがあり、途中で舞踊や狂言、組踊などをはさみ、最後は棒踊でしめるというプログラム構成は、東区・西区・比川区ともに同じである。

以上のように、八重山地区では棒術が単独で披露されるという例はなく、御嶽の前で行われる奉納芸能では、太鼓や獅子舞などとともに祓いや清めの意味で披露されている。波照間島のムシャーマでは祭事の最初に太鼓と棒が演舞され、また各組に分かれての最後の締めにも太鼓と棒が演舞されることから、祓いと

清めの意味合いが強くあわられている。一方、与那国島では棒の最初の演目を「ダーナラシ（座ならし）」といい、開演を告げる意味合いがあるという。棒踊がプログラムに含まれていない時も、すべてに先駆けしで演じられるという。棒の演武にはそうした幕開けとしての意味合い付与されていることも留意すべきであろう。

カ 武術的身体表現の種類

武術的身体表現の演武について種類を分けて紹介しておきたい。棒術、南風之島系統の棒と獅子舞、綱引きのツナヌミンにみられる演武、その他の芸能にみられる演武に分類して記述する。

（ア）棒術

a 型の演武と対面形式が主なタイプ

字登野城の演武としては型の演武（舞）と対面での打ち合い等がある。六尺棒、三尺棒、ヤリ、ナギナタ、カタナ、カマ（ガギ）、サイ、トンファー、ヌンチャクを二名一組の組手で演武する。ただし、ヌンチャクの演武は1985年以降の記録がなく、演じられていない。1973年の登野城敬老会に披露した記録によると、棒の手としては、前ヌ手、ガギ（鎌）ヌクス手、ヤリとナギナタ、六尺ヌ手、ベンケイヌ手、六尺ヌクイ手、新六尺、ヤリトウヤリ、六尺ヌ手、ナギナタ、後ヌ手二人、サンチンヌ手、ガギトウ鎌などがあった。基本すべてが二人一組による演武である。

前ヌ手と後ヌ手二人はいずれも尺棒（三尺棒）による演武。クス手はくずし手のことで、応用変化の手。六尺ヌ手は六尺棒の手の意味。クイ手は頭上を跳び越える手のこと。サンチンヌ手は棒術の基本型を示した手のこと。〔牧野：1975年、p144～149〕

字川平では座見舞にて披露される棒の種類は豊富で、刀棒、六尺棒、三人棒、佐久川棒、眞境名棒、鎌（ガギイ）棒、ティンバイ棒、百姓棒、エーク、カニパー（クワ）がある。三人棒以外は二人一組であり、数組から十数組で構成される。本舞では棒の演技は二回おこなわれ、演技中は銅鑼、大太鼓が打ち続けられる。一組ずつ庭の中央に出て演ずる。基本的には仲間満慶山から伝承された棒術を基本とし、役人と百姓の戦いや三人棒（大男と小人の戦い）等、迫力ある棒術が特徴である。〔沖縄県教育委員会：1979年、P15〕

竹富島の種子取祭では、庭の芸能で行列と言われる演目があり、最初に一番棒～五番棒まで、二人一組の十人が入場し演技を行う。楽器の銅鑼鐘太鼓ホラ貝（ブラ）の音で演技を行うもので、一番棒は二人とも六尺棒での棒合わせ、二番棒は刀と槍、三番棒は槍と刀、四番棒は鎌と薙刀、五番棒は薙刀と刀の組み合わせである。対面での打ち合いが基本で、最初に一番、三番、五番の奇数の者が打ち合い、次に二番、三番の者が打ち合うある流れである。

西表島祖納・干立の節祭では「棒芸」とか「棒踊り」と呼ばれ、鎌と棒（ガヒヤー棒）、二人棒、三人棒、鎌棒、五人棒で構成される。ドラ、太鼓、笛の伴奏とともに、青年、小学生、中学生、郷友会も参加して勇壮に演じられる。

波照間島のムシャーマでは棒の演武が行われる。西組・東組・前組のそれぞれのボーシンカが、二人一組の10人で順に披露する。西組の一番棒はジンバイ（笠と長刀）、二番棒は刀棒（刀と長刀）、三番棒はガツキヤ（鎌）棒（鎌と六尺棒）、四番棒は六尺棒（六尺棒と長刀）、五番棒はマンチョー（六尺棒と六尺棒）という形式である。一番棒から五番棒までの名称や内容は組ごとに少しずつ異なり、東組はでパナ棒（笠



写真2-3-2 登野城字会の結願祭の棒 2010年



写真2-3-3 ムシャーマのガツキヤ棒（長刀と鎌）
〔波照間島〕

と長刀)、ガッキヤ棒(鎌と長刀)、ヤラ棒(長刀と長刀)、ボンタ(五尺棒と長刀)マ、トゥム棒(六尺棒と六尺棒)、前組はジンバイ(長刀と長刀)、ガッキヤ棒(鎌と薙刀)、刀棒(刀と長刀)、六尺棒(六尺棒と長刀)、トゥム棒(六尺棒と六尺棒)である。最後に六尺棒の対戦でしめる点は共通している。

与那国島では棒の演武の種類は多くあることが特徴である。四つの組が各々演じるが、西区では16種類、東村区では20種類、嶋仲区では15種類、そして比川区では16種類である。そのうち、種類が一番多い東区を例にすると以下のようなものである。①ミティアギ、②六尺一人手棒、③イララ六尺棒、④ティンバイ、⑤三尺二人棒、⑥六尺二人棒、⑦ペラ棒、⑧イララ三尺棒、⑨サグ棒引きティニ人、⑩サグ棒イララ、⑪ンビフティ棒、⑫三尺三人棒、⑬ハディリ棒、⑭マラウティ棒、⑮六尺四人棒、⑯マーヌムヌ棒(マンナ棒)、⑰五人棒、⑱ブリ棒、⑲チチヌ棒、⑳ンビチ棒というようになる。東区にあって他の区にない演武があったり、逆に東区になく、他の区にみられる演武があったりと異同がみられる。

ウガンフトゥティ、チムバタイ、どちらも、神様への奉納、披露、お祝いの意味あることから、ウガンフトゥティでは、開演を告げる「座ならし」、六尺一人が登場する「ミティアギ」と他全出演者が揃う「スナイ」のあとに3演目ほど棒踊りを行う。なお、豊年に・豊穰に関係するイララ(鎌)を使った踊りは定番となっている。



写真2-3-4 棒の演武：六尺薙刀(嶋仲棒座)[与那国町教育委員会蔵]



写真2-3-5 棒の演武：ティンバイナギナタ(西棒座)[与那国町教育委員会蔵]

b 型の演武・対面形式と総巻きのタイプ

宇登野城の棒術はかつて十八組まであった。「スーマキ(総巻き)」という集団演技もあって、他ムラにはあまり類例がなく、最も宇登野城の特徴を示したものであったとされる。他のムラからも型を盗むために密かに見に来たりしたが、複雑でまねをすることができなかったという。〔牧野：1975年 p144～149〕

宇白保では六尺棒、三尺棒、ヤリ、カマ(ガッケ)、サイ、ナギナタを二名一組の組手で、十組により演武する点は同じであるが、編成の順番が四通りあり、いわゆる「総巻き」のような形式をもつ。

最初は「スネ棒」といい、オーセーの広場に入場する際には二人一組で銅鑼の音に合わせ「ユイ」という掛け声と共に、すり足により境内で列を作って直進して整列し、その後十組の棒術演武が行われる。棒術演武の最後には、ティー棒と呼ばれる型の演武が二名により行われる。

次に「スカシ棒」がある。ブラと銅鑼の合図で二列に並び駆け足で左周りに境内を移動し、境内中央から対角線になるように前と後ろの演武者が向かい合う形に配置する。ブラの合図と共に一番棒から順番に演武していく。演武する際は、ブラの合図でお互いに「ヤー」と掛け声を上げ立ち上がり、銅鑼の音と共にゆっくりとすり足でお互い相手に向かっていく。徐々に早足になり、最後はお互いの肩で勢いよくぶつかり、棒術の演武が始まる。演武終了後は、お互い向かい合ったまま、ゆっくりとすり足で後ろに下がってゆき、最初の位置に戻り「ヤー」の掛け声で睨み合って終了する。十組の演武の後にブラと銅鑼の合図でティー棒の演武が境内正面に向かって行われる。

スカシ棒が終わると「ブラ打ち」といい、ブラと銅鑼の合図で一列に並び駆け足で左周りに境内を移動し、

一つの大きな円になるように配置する。ブラと銅鑼の合図で演武者全員で一斉に棒術の演武を行う。

ブラ打ちが終わると、「スーマチ（渦巻き）」の演武である。ブラと銅鑼の合図で一列に並び駆け足で左回りに境内を移動し、中心に向かって渦巻きを作りながら小さな円になっていく。先頭が中心に来たら、体を反転させ逆回り（右回り）に駆け足を行い、渦巻きを作りながら、大きな円になっていく。最後はそのまま鳥居から駆け足で退場する。

（イ）綱引きのツナヌミンにみられる演武

字新川のツナヌミンでは、型の演武（舞）や対面での打ち合い等がある。演武には、東の大將と西の大將と呼ばれる2人の武者が登場する。東の大將はナギナタを持ち、ナギナタで振り払う、切り込む、振り下ろすなどの攻撃をする。一方、西の大將は鎌をもち、相手の攻撃を飛んでかわす、身を入れ替えてかわす、鎌で受け止めるなどをし、終盤に唯一、相手に鎌を足元めがけて足払いの攻撃を行う。また、それぞれの動作の合間には、お互いに見えを切り、威嚇して激しい攻防を繰り返す。

竹富町黒島では、旧正月に綱引きがあり、双方の綱の上には、北から鎌を持った演者、南から槍を持った演者が出てきて打ち合いの演舞をする。

（ウ）南風ぬ島系統の棒と獅子舞

字新川の南風ぬ島カンター棒は、鳴物（笛吹、太鼓打、銅鑼）と、棒舞組（10～15組）、獅子2頭で構成される。棒舞組は、地謡の音に合わせ、2列に整列して入場し、ニナイディ（備えの構え）、廻り舞い、舞いティ（一番の舞）、ツキディー（二番の舞）、カミディー（三番の舞手）、ウツディー（4番の打ち手）、マキティー（巻き手）、カクティーを演舞する。演舞が終わると、雄雌の獅子が登場し、獅子パーシーの声かけの元、獅子舞が演じられ、獅子舞が終わると、全体で退場する。

波照間島には「シーシンボー（獅子の舞）」という五尺棒を持って、三組の獅子舞との演舞が行われる演目がある。これの伝来の年来は不明であるが、伝承によると昔、南方諸島からの漂流民が波照間島と新川ムラに伝えたとされ、波照間島では「シーシンボー（獅子の舞）」、新川ムラでは「ハイヌシマ（南風ぬ島）棒」と称されたという。波照間島のシーシンボーは新川のそれと共通するところが多かったといわれるが、その演技が複雑で伝授に困難があったので、簡略化されて現在のように踊られているとされる。



写真2-3-6 シーシン棒[波照間島・西組]

（エ）その他の民俗芸能にみられる武芸

西表島の祖納・干立の節祭は、集落前の前泊海岸にある前泊御嶽前にある「フナムトウ（舟元）の座」という祭場が主な場所である。ウガンの神々、ミリク神を侍らせ、海の彼方から「ユー（世＝幸）」を舟で漕ぎ寄せ、その喜びを数々の芸能を演じて祝うという内容で、その際に「ヤフヌティ（ヤフの手）」と呼ばれる櫓を使った武芸が演じられる。また、黒島の豊年祭や結願祭でも同様のエークの演武がみられる。

竹富島の種子取祭では、庭の芸能の行列で女性による「腕棒（ウディボー）」という行列がある。腕棒も銅鑼鐘とホラ貝で行う。棒というが棒は用いず、女性が二人一組で、素手により演技するという竹富島特有の女性による演武である。

腕棒は、かつて玻座間村の男子が演じていたが、それほど人気がなく、いつしか演じられなくなった。そ

のようなとき、仲筋村の狂言部の師匠であった仲里長正さんがこの腕棒を女性に演じさせようと考えた。長正さんは奥さんの仲里ハルさんと友人の小底ハルさんを使いに行って、玻座間の師匠に頼んだところ、師匠は「ウリヤ、ウムッサンネンバ、ムチハリ（これは面白くないので、持っていきなさい）」と快く承諾してくれたという。それで腕棒は仲筋の女性が演じる人気演目になった。

竹富島の種子取祭では「鬼取り（鬼狂言）」があり、この中には福仲親雲上という棒術使いの武士、空手の特異とする佐久間里主などが登場する。また、踊りには空手の型がみられる。さらに、黒島の豊年祭や結願祭の舞踊には空手の動きが混じっているものがあるという。

著：萩尾 俊章

第4節 町道場とムラ行事との関わり

本項では、道場とムラ行事との関りについて、いくつかの事例を紹介する。関わり方は様ざまであるが、いずれも道場の在地である地域社会との関わりの中でムラ行事と関わってきた。

どういったムラ行事に、どういった関わり方をしているのか。最も多い関わりとして挙げられたのはムラ行事内での空手演武であるが、空手演武と一口にいてもその関わり方には幅があった。すなわち、イベント内の余興として演武を行うような関わり方から、綱引きにおける重要な役割として演武を行うような関わり方である。関わる行事は様ざまであり、綱引き、豊年祭、道ジュネー、エイサー、農耕儀礼である「アブシバレー」、行政主体に行われるイベント、自治会まつりや納涼祭、敬老会が挙げられた。また聞取り時には、かつて関わったことがあるものとして、ハーリー（龍舟競漕）における舟上での鼓舞のための演武を行ったことがあるという話もあった。

また民俗行事としての棒術に指導として関わっている道場もあった。指導には二つの場合があり、一つはその地域社会に伝承される棒術に対して、空手や古武術の知識から指導を行うというものである。もう一つは、もうすでに地域社会には棒術の伝承が失われており、代わりに自身が身につけていた空手や古武術を地域社会の人びとへ指導し、ムラ行事の棒術として実践するというものである。

以下では、ムラ行事との関りを持つ町道場の道場主らに聞取りを行い得られた、具体的な関わり方について述べる。その後、筆者が実際にムラ行事や道場での稽古を訪れ観ることが出来た八重瀬町志多伯について、その様子や聞取りで得られたことを述べたい。その上で内地との違いを示し、沖縄空手の道場と地域社会の関わりについて考察を行う。



写真2-4-1 沖縄空手道小林流小林館協会八重瀬道場



写真2-4-2 沖縄小林流空手道協会宮城空手道場

1 ムラ行事における空手道場

沖縄空手道古武道小林流武心館（以下、「武心館」と略す）は、区長からの要請で、南城市玉城船越地区の農耕儀礼である「アブシバレー」における余興として空手演武を行ったという。武心館に限らず、余興による演武は様々な道場が依頼されると聞く。武心館の場合も、地域社会と道場の関係から呼ばれて演武を行うこともあるが、毎年声が掛かるということではないようだ。しかし、後述するように、こうした余興として空手演武が行われること自体は注目すべき点だと考える。

次に挙げる事例は、ムラ行事自体に深く関わる人物が道場にいたために、強いつながりが生まれた事例である。那覇市壺屋にある究道館道場の比嘉康雄氏（以下、「康雄」と略す）は、沖縄で最も知られる綱引きである那覇大綱引きにおいて、西側の旗頭とガーエー演武を担っている。こうした役割が究道館道場に任されている理由は、究道館創始者であり沖縄空手界に広く名が知られている、小林流の比嘉佑直（1910－1994、以下「佑直」と略す）が那覇大綱引きの復活に関わっていたためである。那覇大綱引きは1935年に一度途

絶え、その後 1971 年に復活し現在まで続く綱引きであるが、佑直は復活以前的那覇大綱引きにおいて旗頭を務めたこともあり、那覇大綱引きの復活に対して実行委員会理事長として大きく尽力したという。71 年の復活時から佑直の甥であり、彼の死後に究道館を引継いだ比嘉稔氏（以下、「稔」と略す）も参加し、のちに旗頭やガーエーの演武を行う立場を長く務めた。そして、稔の息子である康雄もまた幼少期から綱引きと関わってきた。康雄は「最も誉ある役割」と語る。こうした、ある特定の場において空手演武すること自体が誉として、羨望を向けられるということは、空手演武が沖縄社会において一定の力を示すことの現れに感じる。

一方で、以下の事例は、ムラ行事において実践される棒術との関わりを持つ道場の事例である。八重瀬町の小林流小林館八重瀬支部道場は、道場の在所在地である八重瀬町小城や隣接する当銘において実践される棒術に対して指導を行ってきたという。当地では、棒術は綱引きや籠甲祭などにおける道ジュネーやエイサー祭り、村あしび等において登場する。その際に、動作に対する武術的な意味を伝えている。例えば、棒の目付けの位置や構えについて、こういう意味があるということを教えているという。ただし、行われている形については絶対にアレンジしないという。というのも、そもそも地域社会に定着している棒術とは、かつては各家でそれぞれに「〇〇家の棒術」といった形で継承してきたものであり、それぞれの家で独自の決まりが存在していたという。そのため、個々の形には何か意味が込められていることもあるため、あくまでも武術的な意味を伝えることにしているという。一方、恩納村山田では獅子舞の棒術に対して、小林流妙武館恩納支部道場の支部長で、山田出身者である比嘉秀康氏（以下、「秀康」と略す）が自らも参加しながら指導を行っているという。こうした棒術の指導は 2016 年に獅子舞の保存会が発足した際に始まった。当時、山田の獅子舞では棒術が失われており、秀康が身につけていた古武道の型から、一人で行う型と組棒の型を創作した。秀康自身も演武を行っているが、どうしても古武道の型をそのまま入れることは出来ず、創作に至ったようだ。その後も秀康自身も演武者として、指導もしながら参加している。

以上の二つの事例は、いずれも道場が土地に存在しており、また道場主もその土地の人間であるため、地域社会の成員としてそもそもムラ行事と関わりがあり、その延長で指導や創作を行っている事例であった。同様に、浦添市にある沖縄小林流空手道協会第四代会長でもある宮城驍氏（以下、「宮城」と略す）の道場である宮城道場の場合は、地域社会の綱引きに道場として積極的に関わってきた。浦添市城間の綱引きは、30 年ほど前まで途絶えていたが復活の声が高まり、1992 年に復活を果たした。その際にガーエーの役が宮城道場に依頼され、宮城道場は門下生の子どもたちを 2 つに別けガーエーをさせた。その後、ガーエーの際に行う組棒も空手の武器術をもとに考案した。また綱引き前に空手演武を地域内の各所で行うことも始めた。こうした場合は、いつからか道場に通う子どもたちの稽古成果を見せる場となっていくたようだ。通常であれば、道場生であっても城間出身者でなければなかなか地域の民俗行事に参加できない。しかし、宮城道場では城間外の子どもたちも綱引きに関わる一連の行事へと参加させ、彼らも含めた子どもたちを積極的に地域社会へと紹介する場としていった。例えば、自治体の子ども会での活動を頑張った子を「シクタ」役とし、地域社会の人びとの前で披露した。そうした子どもたちのなかには、非行に走ろうとしているところを宮城らが気づき、宮城道場で空手を学ばせることでそうした方向へと進ませなかったような子どももいたという。ほかにも、例えば行政などから依頼され行う空手演武にも積極的に門下生を参加させることで、彼ら／彼女たちの演武機会と、地域社会の人びとに覚えてもらう場を作ってきた。宮城道場は大学生までの門下生の教授を無料としており、民俗行事との関りに限らず、地域社会の子どもや青年たちに対して開かれた場として存在している。宮城道場の場合、道場が地域社会に存在していたことも大きいですが、宮城自身が教師として勤めてきた経歴もあり、子どもたちの育成に対して目を配っていたことも大きいだろう。

以上のように、ムラ行事に対して積極的に関わりを持つ道場の人びとは、いずれもそれぞれの地域社会の成員としての意識から、そうしたムラ行事への空手を通じた関与も生まれているようだ。そして、地域社会の側も空手道場が存在していること自体を認知しており、一定の役割を期待している様子もみられる。

2 八重瀬町志多伯における棒術

本項では、沖縄古武道連盟志多伯支部の活動について、観察と聞き取りから示していく。沖縄古武道連盟志多伯支部は古武道の道場でありながら、別の名称も持つ。それは、志多伯獅子舞棒術保存会（以下、「棒術保存会」と略す）という名称である。連盟支部道場でありながら、地域社会の保存会組織でもあるという、二つの立場を持つ。このような二つの面を持つ棒術保存会は全国的にも珍しい。棒術保存会は武術道場として積極的にムラ行事、地域社会と関わっており、さらには「よそ者」もそこに加わり活動を行う組織である。そうした意味では前述した浦添市の宮城道場も同様であるが、棒術保存会の場合は特定のムラ行事に限らない活動を展開しており、その活動範囲は沖縄を越え、海外に出向くこともあったという。本項では、棒術保存会を二つの面を持つ道場として捉え、その上でその活動を示す。なお、棒術保存会については、2018年の志多伯豊年祭「志多伯獅子加那志」（以下、豊年祭と表記する）を中心に分析した山本〔2023〕において、その誕生や組織のあり方について論じられている。本項では山本〔2023〕による分析を踏まえつつ、2024年9月17日に開催された13年忌の志多伯獅子加那志の調査をもとに述べる。

八重瀬町志多伯では綱引きや青年エイサー会、豊年祭などにおいて棒術が登場する。この棒術は棒術保存会により継承されるものであるが、ムラ行事に登場する棒術をルーツとするものではなく、古武道の棒術である。当地にはかつて棒術が伝承されていたようであるが、先述した恩納村山田同様に、その継承は途絶えてしまっていた。そのため、棒術保存会の現会長である神谷政光氏（以下、政光と略す）が、自身の修得していた古武道の棒術を志多伯の人びとに教え、新たな志多伯の棒術として復活させた。山本〔2023〕において「仲間集団」として描かれる棒術保存会であるが、武術の道場として考えた場合、年齢層が圧倒的に低い。中心的に活動するのは10代後半～20代であり、10代以下や10代前半の子どもたちが多数を占め、20～30代が少なく、40以上が継続的に稽古する一般的な武術の道場とは様子が違った。また女性の数がかかり多く、その点も少し違っている。こうした様子は、いわゆる「仲間組織」が持つイメージとも違う。確かに参加している人たちのほとんどは志多伯の人びとであり地縁により担われていることは間違いなが、一方で他県から仕事で沖縄に赴任してきて参加している人物や、八重瀬町で生まれ育っているものの志多伯出身ではない人物も参加していた。前者はもともと古武道をやっており、その伝手で棒術保存会へ参加して始めた。彼女は、一般的な道場のあり方とは違うものの、在所から1時間半掛けてでも通いたいと思えるほどに楽しんでいると語る。また後者は、同じく棒術保存会に参加する友人の「かっこいいからやろう」という誘いで参加したという。当初は全く関心もなかったものの、やっているうちに友人の言う「かっこいい」が分かるようになり、楽しんでいると語ってくれた。その友人という人物もまた、もともとは棒術保存会に関りがあったわけではなく、教員として赴任する小学校の運動会において、棒術保存会が関わり小学生たちを指導し行われた出し物に感動し、自らやってみたいと強く思うようになり参加したという。また志多伯在住である、いずれも10代後半である三姉妹は父がやっていたことに加えて、長女が進学で沖縄を離れることが決まっているなかで、何か沖縄らしいことをしたいという気持ちから始めたという。こうしてみると、同級生などによって組まれるいわゆる「仲間組織」と違った人びとの加入も、近年になり進んでいるようである。また参加理由も様ざまであるが、祭り組織への参加理由の多くが地縁であるなか、武術道場である側面が、より多様な参加背景をもつ成員を増やしているようだ。

このように、棒術保存会は一般的な武術の道場とは少し雰囲気は違っている。特に「かっこいいからやりたいたい」という点は、地域社会や人びとに対して演武をみせることの持つ力が関わりそう。事実、棒術保存会には「武の舞」と呼ばれる、舞台演武に特化した創作型が存在する⁷。そうした地域社会に対してみせる棒術保存会の姿は、13年忌の豊年祭において明確にみられた。台風直撃のなか行われた2024年の豊年祭ではあったが、演劇や獅子舞と共に行われる棒術保存会の「武の舞」は、ひと際歓声が沸くなかで行われてた。こうした様子に筆者は驚いた。なぜなら、内地の武道や古武道の演武において、歓声が沸くということはほとんど

7 この「武の舞」は本学術連絡会委員であり、政光の息子である神谷武史氏が考案したものである。

無いからである⁸。特に政光による鎖鎌の演武時に起こった大歓声は、まさにデュルケームがいう「沸騰状態」⁹といえるほどであった〔デュルケーム 2014〕。こうした状態は次の演劇に移るまで途切れることなく続いた。この様子からもわかるように、棒術保存会による「武の舞」は、志多伯の人びとや筆者のような外から豊年祭を観に来た者を含めた人びとの間に、演武を通じた情動的つながりを生み出していた。



写真2-4-3 豊年祭における「武の舞」(田邊撮影)

以上の様子からは、棒術保存会がただの武術の道場に留まらない存在であることがわかる。こうしたあり方は空手としてもしかすると認められないのかもしれない。しかし一方では、沖縄の地域社会において空手が今なお失わずにいる力の一端も垣間見られたように感じた。

3 小括

本項では、沖縄空手の道場とムラ行事のかかわりについて、ごく少数の事例からではあるが、どういった関係があるのかを述べてきた。綱引きやハーレー、豊年祭など、その行事における重要な役割として空手演武が位置づけられ、そこでの演武が誉として存在していることは、沖縄の社会における沖縄空手の存在意義が、いまなお失われていないことを現わしているだろう。こうしたあり方は、余興として空手演武が選ばれることからわかる。例えば、結婚式における余興として空手演武は必ずといって良いくらい行われるという話も多く聞かれたが、結婚式がかつてのような地域社会をあげての行事ではなくなっているものの、人びとの生活に位置付く儀礼であることは変わらない。空手が沖縄の人びとの生活レベルに浸透しているために、そうした場において余興として登場するのではないだろうか。余興というあり方は、近代に誕生した「武道」では禁止されたため、未だに一般的ではない。一方で、空手の場合はそうした場において演武をみせることに意義が認められ、社会的にも定着している。志多伯の棒術保存会が積極的に「武の舞」を創始したことや、宮城道場や妙武館恩納支部道場がムラ行事のために型を考案したことも、こうした余興が持つ意義を積極的に認めているためではないか。

以上を踏まえ、現代社会における地域社会と武術の関係について、沖縄空手と内地の武道のあり方を比較すると何が見えてくるのか。沖縄空手と同様に流派により継承される内地の古武道各流派の道場の多くは、現代では地域社会との関係性が希薄になってきている場合が多い。1章で述べたように、そもそも地縁と関係なく伝承される場合もあるが、現代社会においては人びとの移動が常態化していることもあり、継承した人間が土地を離れることも多々あり継続的な地縁を築きにくい。武道と違い、学校教育の文脈にも位置付かない古武道は、現代社会において非常にマイナーな存在であり、個人の趣味の範疇で実践されてきた。多くは、そうしたシリアスに取り組む個人により担われており、そうした背景もあるために地域社会と接続する文脈が希薄である。こうした点は沖縄空手の場合も同様のようであり、本項でみてきた、いずれの道場においても、中高生に

8 近代に誕生した「武道」は、観客の態度に対しても制限を設けてきた。こうした状況は未だに続いており、剣道ではスポーツ観戦時にみられるような歓声は禁止されており、まさに固唾を飲んで見守るかのような状況で観戦をする。詳しくは第1章を参照。

9 儀礼にみられる演劇的な側面について、デュルケームは以下のように述べる。「それらの上演は、どんな功利的な目的とも無関係に、人びとに現実の世界を忘れさせ、想像力がくつろぐ別の世界へと彼らを運ぶ。それらは気晴らしをもたらすのであり、娯楽の外観を呈することさえある。参加者たちが公然と笑い、楽しんでいるのが見られるのである。」(デュルケーム, 2014, p.306.)。

なると受験勉強や部活動などが優先され、また就学・就職により空手から離れる者が多いと聞いた。そのため10代までは流動的であり、20～30代の数もそれほど多くない場合が多かった。しかし、流動的とはいえ常に空手を習いに来る子どもたちが数多く存在する点は、前述した古武道のあり方とは違う。この点において、空手を経験すること自体が意義を持っていると考えられる。

また道場のあり方も関係するだろう。つまり、道場という存在が社会的に見え難くなるのが、地域社会との関係性を希薄化させる要因ではないだろうか。今日、内地の古武道流派のほとんどは固有の稽古場を持っておらず、公共の体育施設等の道場を利用して稽古を行っている。そのため、その存在が認知されにくい。そうした点は、剣道や柔道も同様であるが、しかし前述したように存在自体が非常にマイナーであるため、そうした公共施設において稽古が行われていること自体が認知されないのである。一方で沖縄空手の場合、近年では公共施設を道場代わりに利用している空手道場も増えてきているというが、そうとはいえ、沖縄の町々には空手道場が健在である。現在でも多くの道場が看板を掲げ、地域社会のなかにその存在を示している。人びとの目に映る風景の一部として道場が存在していることが、ムラ行事との関わりが保たれている理由ではないかと考えられる。

本項では、道場とムラ行事との関わりから分かることは、様々な場において空手演武や棒術が登場すること自体に、沖縄の地域社会では一定の力や意義が見出されるからではないかと考察してきた。志多伯の豊年祭において、演武が行われる場に集まる人びとの間に情動的なつながりをもたらされた様子は、空手やその演武が地域社会の文脈に根付いている一つの形の現れではないだろうか。

引用文献

エミール・デュルケーム 2014『宗教生活の基本形態 下 オーストラリアにおけるトーテム体系』, 筑摩書房.

山本素世 2023「伝統祭祀行事の継承と地域社会——八重瀬町志多伯を事例として——」, 平井順編『沖縄的共同性の構築と継承：シリーズ沖縄の地域自治組織2〈南部離島編〉』, ナカニシヤ出版.

著：田邊 元

第3章

各地区の調査報告
(代表事例)

第3章 各地区の調査報告（代表事例）

第1節 北部地区

北部地区の代表事例を紹介するにあたり、豊年祭やムラウドウイ、盆行事の中で棒術が披露されるが、詳細な代表事例の紹介については、次のような基本的な考え方に基づいて選定した。

- ① ムラ社会で今なお行事が盛んにおこなわれており、棒術の呼称に多様な特徴を有していると思われること。
- ② 棒術を体現する組織基盤が比較的強固で、地域の特性を有すると思われるような棒術が現存すること。

1 名護市数久田（シッタ）豊年祭

【行事の概要】

令和5年度の「ホウネンサイ（豊年祭）」は、旧暦8月9日、11日、12日【新暦9月23日（土）、25日（月）、26日（火）】の3日間開催され、その中で、「ボー（棒）」が数久田区出身の高校生以上40歳未満の男性によって「ボーグミ（棒組）」が構成され披露される。数久田では豊年祭への社会人男子の参加が義務づけられているという。ここでいう社会人男性とは、高校生、大学生を除く40歳未満をさす。構成員にもかかわらず参加できない場合は、「ウガンヒー（御願費）」と呼ばれる費用7千円が徴収されることになり、ムラ行事への積極的に参加することが求められる。

参考までに、2024年（令和6）、4月現在の数久田区民は810人（男性421名、女性389名／世帯数は327）。1981年（昭和56）当時の調査¹⁰によると、人口が1,109（男性553名、女性556名／世帯数250）で、40年余りで人口が27%減少しており、特に女性人口が30%減少した。ただ、世帯数は31%増加しているが、全体的には世帯構成員の減員と高齢化やアパート新築による世帯増が一因と思われる。

豊年祭初日の翌日は、「ヒヒョウカイ（批評会）」と呼ばれ、豊年祭初日の演目について先輩方が批評する会がもたれる。以前は、「ヒハンカイ（批判会）」とも呼ばれたというが、ネガティブな表現だということで呼称を改めたという。批評会の指摘を受け、残り2日間の行事の充実を期することになる。

豊年祭初日の朝は、ボーシンカ（棒組）は「ブクジー（福地原）」のテイシンドコとよばれる拝所にてニガミ（根神）とよばれるカミンチュ（神女）と一緒にウガン（御願）を行い、午前9時から午後3時頃まで、その場でボー（棒）の演武を行う。そこでの演武は、奉納と練習を兼ねるという。豊年祭の3日間は、舞台芸能22演目のプログラムが始まる前後で各30分の棒組による2回の演武が公民館前の広場で披露される。とくに後半のみ棒組のトリを務める演武は、「サンニンボー（三人棒）」が行われ、豊年祭のプログラムをしめる。この一連の行事は、今日では「ホウネンサイ（豊年祭）」と呼ばれているが、かつては「ムラウドウイ（ムラ踊り）」や「ハチガチウドウイ（八月踊り）」、「ムラアシビ（ムラ遊び）」などと呼ばれた。

豊年祭初日の朝、ニーガミ（根神）はアサギで祈願する。午前中は、ボーシンカだけがトドロキノタキ（轟の滝）近くの拝所（福地原のテイシンドコ）に向かう。午後には、テイシンドコでの練習を終えて、集落に下りてくるが、この時三線や笛でカチャーシーを踊り「トーシンドーイ」の音曲に合わせて繰り出す。また、棒といっしょに山から取ってきたタケ（竹）を5本ないし7本をとってくる。

『名護市史 研究資料第93集 芸能調査資料7 名護地区の芸能』では「棒組」の表記に「この竹に乗せて『棒の神様』をお連れする」¹¹という興味深い記載があるが、2005年に聞き取りされた、この伝承については、70代の前区長に確認したがわからないといい、伝承が断絶している可能性がある。ただ、戦後集落内にあった公民館（2005年頃まで）の頃には、竹は公民館の前に小さな舞台（バンク）の上で遊ぶ子どもらを追い払うために実用的に用いられていたと語る。新公民館では、舞台製作をしなくなり、竹を使用することの現実的な役割がなくなかった。そのため、その伝承も消失した可能性もあるが、現在は竹を取ることもなくなったという。

10 津波高志他著『沖縄国頭の村落 下』（1982）24p.

11 『名護市史研究資料第93集 芸能調査資料7 名護地区の芸能』（2009 名護市教育委員会文化課市史編さん係）の「棒組」

2005 年（平成 17）6月に竣工した体育館を備えた、国道側の埋め立て地に立つ区公民館の円形になった前庭が 2023 年現在、豊年祭の際にスーマキを演武する場所になっている。

ボーシンカが山から下りてきたときに、屋号メージョーヤーの島袋門中本家近くのアジマー（交差点）で島袋一門に迎え酒をふるまわれ、この場で棒の型（三種類）を演じるという。メージョーヤーこと島袋家での棒演武披露には、ムラ踊りの導入の始祖を顕彰する意味が読み取れる。メージョーヤ（前門屋）の初代・島袋山戸はムラ踊りを数久田に導入したとされるキナーヤの娘を嫁にしたという。その縁でメージョーヤは棒で重要な役目を担ってきた。ただ、ボーがいつ頃に伝わったかは不明とされるが、ムラ踊りと同じ時期ではないかとされる。棒にまつわる言い伝えとして、夕方には、棒シンカを先頭に道ジュネーが始まり、「クニムトウ」の拝所でも神女による御願が行われ、アサギに着いたら道ジュネー一行のうち棒シンカだけがニガミとともに御願をし、ニガミと酒を交わす。豊年祭の三日間（旧8月9日、11日、12日）、毎日棒術に出る人たちがメージョーヤー（島袋家本家）で拝みがされる。

【由緒・来歴】

『名護市史 芸能編』によると、豊年祭は集落の豊年満作と区民の健康祈願を目的に開催される。ムラウドウイそのものは 1851 年（尚泰5／咸豊元／嘉永4）に数久田に伝わったとされ、導入したのは「ウェーキヤー（富裕家）」で知られるキナーヤ（喜納屋・玉城家）とされる。これとは別に、幸喜部落（数久田から南側2つめの集落）は首里の踊奉行だった人物から踊りを習い、数久田はその幸喜から習ったとの伝承もある。ただ、後者のことは 1879 年（廃藩置県）以後の時期のことをさすようである。

【演武の種類と内容】

棒材は釘さえ打てないほどの強度の高い桧材の棒を使用するが、練習時から毎年 10 本ほどが折れるので、国頭村森林組合から桧材を調達し、安富祖の製材所で毎年 30 本補充しているという。それほど強く互いの棒をたたきあうことが数久田のボーの魅力として人々は誇りにしており、思い切り強く叩き、組棒でも相手の攻撃をかわして高く飛び上がるほど観衆の評価は高く声援を得ることができる。数久田のボーの特徴は、型による演武、2人以上の打ち合いの演武、棒組全員による集団演武の「スーマキ（総巻き）」の3通りがあるが、打ち合いボーの激しさから「オーイボー（喧嘩棒）」とも呼ばれている。

棒の型は 13 種類。最初は棒組全員による「スーマキ（総巻）」、次に「マヤー（猫）棒」、「ロクシャクノウラ（六尺の裏）」は六尺棒と三尺棒の組棒と続く。前半の3つの型はこの順序による。（写真3-1-1～10参照）。「スーマキ（総巻）」は全員で行う（令和5年度は 20 名）。赤帯（奇数）と青帯（偶数）に分かれてチングー巻（機織の道具）やナカジン（中陣割り）といって、中心から二手に分かれ、それぞれにゆっくり歩きながら円陣を組みながら、赤帯と青帯の先頭者が円陣の6時の位置に移動した時に棒の型を紹介して、その後の者が列を成し隊列を作り、出入口へはけていく。詳細な陣形の推移については、図 3-1-1 のとおりである。スーマキが終わると、基本的には二人組による型の演武が公民館前の中庭で紹介される。使用する棒は六尺棒、三尺棒、ヤリの突いた六尺棒と三尺棒。マヤー棒は、演武内容が猫の喧嘩を表しているといい、手数が最も多いため経験を積んだ上手な人が担当する。最初の3つの型の次は「中棒」として二人一組で行う。「ムッコーガメー（向こう構え）」、「ミーボー（新棒）」、「ユンタンジャグワ（読谷山小）」、「ヤイトウシャク（やりと尺）」、「ハラボー（空棒）」、「ヤイヌウトウ（やりと弟）」で構成される。6つの型を織り交ぜて演目数を増やしている。ムッコーガメーは、棒を両手で頭上に持ち上げ、頭（向こう）を打たれるのを防ぐ構えをもつ。ミーボー（新棒）、は戦後、数久田で創作された型をいう。ユンタンジャグワは、戦前読谷から習ってきた型だという。ヤイトウシャクは、槍と三尺棒を使った型。ハラボーは他と異なり、棒を叩き合わせないという特徴がある。ヤイヌウトウは、手数が少なく、他の棒よりもやさしい型とされる。後半は、「トゥヌギヤー（飛棒）」、「大読谷山（ボーユンタンジャ）」、「ヤイボー（やり棒）」、「サンニンボー（三人棒）」の順に行う。（2006 年の演目の後半はこの通りにはなっ

いなかったという。) トウヌギ(ジ) ヤーは「トビボー」ともいい、あちこちに飛ぶのが特徴である。サンニンボーは、三人で演じることによるもので、この型は舞台芸能の後半の部のみに行われるものだという。『名護市史 芸能編』)

令和5年豊年祭での棒はプログラム順につぎの通りである。全部で22 演目であった。①「スーマキ」、二人一組による演武が②「マヤ棒」、③「ロクシャクヌウラ(六尺の裏)」、④「ムッコウガメ(向こう構え)」、⑤「シャクノウラ(尺の裏)」、⑥「ユータンジャーグウ(読谷小)」、⑦「ムッコウガメ(向こう構)」、⑧「ヨコウチボウ(横打棒)」、⑨「ミーボー(新棒)」、⑩「シャクノウラ(尺の裏)」、⑪「ヨコウチボウ(横打棒)」、⑫「カラブイ(空棒)」、⑬「ヤリと尺」、⑭「ムッコウガメ(向こう構)」、⑮「シャクノウラ(尺の裏)」、⑯「ヤリとウトウ(弟)」、⑰「ムッコウガメ(向こう構え)」、⑱「ムッコウテイ(向こう手)」、⑲「トウヌギヤ(飛棒)」、⑳「ボーユンタンジャー(大読谷)」、㉑「ヤイボウ(ヤリ棒)」、三人一組による「サンニンボウ(三人棒)」。市史の記述にはない型がいくつかみられるが、基本的には伝統的な順番の構成で演武された。



写真3-1-1 スーマキの先頭者の赤帯(左)グループと青帯(右)グループに分かれた後の隊列

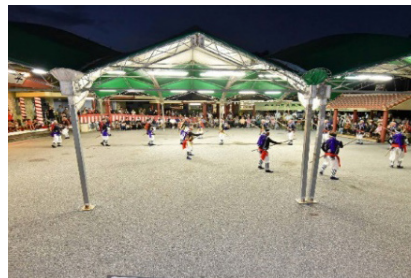


写真3-1-2 スーマキの青帯(舞台側)グループと赤帯グループ(出入口側)



写真3-1-3 スーマキ後、最初の演武のマヤー棒(三尺棒と六尺棒による演武)で手数が最も多い棒



写真3-1-4 ムッコウガメ(向こう構え)



写真3-1-5 戦後数久田で作られた棒型のミーボー(新棒)



写真3-1-6 ヨコウチボー(横打棒)



写真3-1-7 ヤイヌウトウト(ヤリと弟)



写真3-1-8 ボーユンジャー(大読谷)

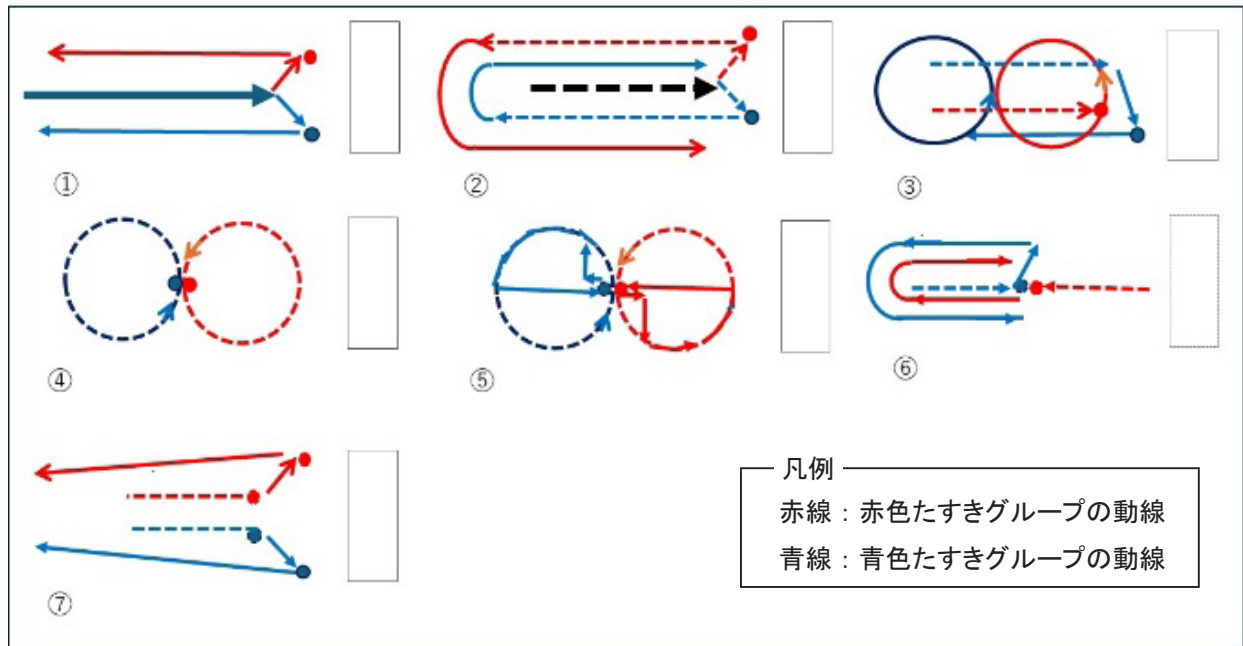


写真3-1-9 棒演武の最後を飾るサンニンボー(三人棒)



写真3-1-10 豊年祭当日の公民館前に特設のテントが張られた広場が作られ、舞台が設置される。棒演武はその中庭で行われる

図3-1-1 数久田区スーマキの隊列の推移図



1. 出入口からバンク（舞台）へ向けて一列で赤色のたすきグループ（以下「赤色G」と略す）。赤色Gは腰には紫色の帯をしめる。また、紫色のたすきのグループ（以下「紫色G」と略す。）は腰には赤色の帯をしめる。赤色Gと紫色Gの先頭者は各金色の羽織を着け、六尺棒をもつ、グループ構成員も羽織に六尺棒をもつ。ただ、最後尾者は金色の陣羽織に、唯一槍をもつ。
2. 赤色Gが外回り、紫色Gが内回りで二列隊列で並んだ後、かけ声とともに棒を高く掲げる。
3. 紫色Gの先頭者がバンクに向かって左列から右側に飛び跳ね、移動して列に対面する。その後を同グループが外回りに移動し後方に円陣をつくる。その二つの円陣を「カホウ」と「ゴホウ」と呼ぶ。同様に赤色Gの先頭者の後に続き、前方にそれぞれ反時計回りに円陣をつくる。
4. 赤色Gと紫色Gの円陣は、大太鼓の叩く拍子に合わせて、足を広げてゆっくり歩く。赤色Gと紫色Gの先頭者がそれぞれ中央に来た時に、両者がお互いに肩をぶつける。その合図で、アナウンスは「以心伝心」と叫ぶ。
5. 先頭者は各自陣の内側に飛び跳ねて、棒の所作を行い、半分ほど移動して各右側に移動し、反時計回りに半分ほど回ったところで、お互いに直列に向き合う。両者が中央で向き合った時に、先頭者が下段打ちを行う。
6. 紫色Gの先頭者が左側に飛び跳ねて、今度は紫色Gが外側から、赤色Gが内側から移動して二列になる。
7. 最後に全員が「エイ！」と棒を高く掲げ、構えを行った後、各先頭者が左右に飛び跳ねて、列に対面するように移動して、その後を各グループの構成員が追隨して、出入口にはけて終了する。

【演武の組織と稽古・継承方法】

豊年祭では、「ウドウイグミ（踊り組）」と「ボーグミ（棒組）」によって演じられるが、棒の経験があり演目全体に詳しく、「ジブンモチ（知恵者）」が「ボーカシラ（棒頭）」と呼ばれるリーダーになる。ウドウイグミが豊年祭全体を仕切る会長職で、令和5年度は知花広が務め、指導的な教師も兼ねた。また、棒頭は比嘉将が務め、教師助手には島袋崇也須があたった。ボーグミは、男性のみで、年少者は中学生から40歳未満の男性であるとされるが、年配者がでることもある。

棒の練習は旧暦8月1日の「ボーウガン（棒御願）」を経て始まる。この日程は若干の変更もあるが。夕刻、「ミーバシ（新しい橋／前平橋のこと）」に集まり、轟の滝に向かって安全祈願をする。これをティクバイ（手配）といい、この時に各棒の配役を決める。2日後の旧8月3日から「ハマ（浜）」（現在は野球場のグラウンド）で練習を開始する。浜では安全祈願の「ハマウリウガン（浜下り御願）」をする。旧8月9日の本番当日は午前10時頃から午後4時頃まで轟の滝近くで練習の仕上げをする。〔『名護市史 芸能編』〕

数久田のボーは、互いの棒を思い切り強く叩いたり打ち込んだりするという手加減をしない勇壮さにある。そのため所定の箇所には棒が合わない、骨折などの大けがになるため、ケガも絶えないという。棒の強度に関して、公民館で1年～2年寝かせ熟成させることで強度を高め折れないような工夫をするという。ボーシンカは全員が思い切り棒を合わせ打つ演武を行うため、少しでも気を抜くとケガをしてしまうことになる。区長さんが豊年祭行事を行う上で、一番気を遣うのが「豊年祭」が終了するまで棒方にケガ人がでないことだという。

【演武の衣装と道具・楽曲】

衣装は、白の上着に白のズボン、黒地に青の縁取りのある羽織（マヤー棒の二人はきらびやかな羽織）に赤や紫の長巾でたすき掛けをし、腰も赤や紫の長巾で締める。足には脚絆を巻き、地下足袋、頭は紫の長巾で締めるか、白鉢巻である。地下足袋だけは自前であるが、それ以外は区が用意する。演武の際に使用する楽器は、ドラ鉦と大太鼓、ピーラルラー（路次楽）がある

【行事継承の今日的課題】

踊り手が少なくなっていることもあり、男女関係なく中学生、高校生、大学生も豊年祭で演舞（武）を行う。踊りに関しては数久田に女性の舞踊の教師がいるので、指導してもらっている。以前は豊年祭の前、2カ月ほど前から練習していたが、仕事を持っている人もいたり、期間が長くなり負担も大きいので、最近は短期間（ほぼ2週間）で練習を重ね仕上げるという。コロナ禍後の2021（令和3）年度の豊年祭は1日のみの開催として、舞台芸能も通常演目の半分くらい（通常は23ほどの演目数）にして縮小して開催したという。また、外部の招待や案内も廃止して区民だけを対象とし、全体のプログラムも午後10時頃には終了した（通常は午前0時近くで、昔は組踊が長いもので3、4時間のものがあり、午前3時頃までかかったこともあったという）。2022年度からは通常のような形に戻して実施している。コロナの影響などもあり、芸能の踊り手も少なくなったという。写真や映像による記録保存も心掛けており、令和4年度、令和5年度はアルバムやDVDを制作し記録保存を心がける。



写真3-1-11 令和5年度数久田区豊年祭
アルバムとDVD(2本組)

2 宜野座村宜野座区の八月アシビの棒演武

【行事の概要】

宜野座の八月アシビは、2005 年（平成 17）2 月 21 日に国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択され、宜野座区と宜野座区二才団が保護団体として行事を支えている。宜野座村（教育委員会）は『記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 宜野座の八月あそびー記選 宜野座の八月あしび 民俗文化財調査（祭り・行事を含む）報告書―』（2014 年3月刊行）で詳細に記録保存を試みている。

宜野座の八月アシビは2年に1回開催される。宜野座区の青年会（18 歳～ 34 歳）と成人会（35 歳～ 54 歳）で組織する「ニーセーダン（二才団）」が中心となり、旧暦8月 15 日頃に開催される。宜野座区では「ハチガチアシビ（八月遊び）」と呼ばれる。この豊年祭の中では、午後3時頃から「ヌンドウルチ（ノロ殿内）」、「ニーヤ（根屋）のニシンダ」、「ウッカー（大川按司）の屋敷跡」、「シシヤー（獅子屋）、またはシシアンチコー（獅子（頭）安置庫）」の拝所の順序で、ウガン（御願）を行い、その場でジカタ（地方）の「カジャデフー（かぎやで風節）」の音曲に合わせて、女性2人による舞踊とニーセーダン2人1組によるボー（棒）を楽曲が終わるまでに3組の演武が次々と奉納される。その後、獅子（ニーセーダン2人によって扮し）と地方【棒の場合はドラ（銅鑼）使用】、獅子舞の場合はサンシン（三線）、タイコ（太鼓）、ショウ（鉦）、ホラガイ（ホラ貝）、ピーラルラを使用】とともに集落内を巡る道ズネーが3箇所（図3-1-2¹²）で行われ「ヒラマチモー（平松毛）」と呼ばれる「アシビナー（遊庭）」に到着。ヒラマチモーに設置された「バンク（仮設舞台）」で八月アシビが午後6時頃から12 時頃まで行われる。八月アシビの中でも冒頭の演目である「獅子舞」については、メーカタ（舞方）が座を清めた後、獅子に化身した「カミ（神）」をバンクに招き入れることで、舞台公演が始まるという意味があるという。

2018 年（平成 30）の催事以降、コロナ禍で中止され 2023 年（令和5）に6年ぶりに開催された宜野座の八月アシビは、2023 年には新暦で9月 30 日（土）に行われ、舞台では 24 演目披露された。これら演目の中で棒が披露される。

「ボー」は六尺によるものがあり、ニーセーダンのみならず、子ども育成会や婦人会も参加して開催される。ヒラマチモーでの舞台の最初の演目は「シシマイ（獅子舞）」で、メーカタ（舞方）が「クーサンクー」の三線音曲で登場することで舞台を清める意味があるとされる。勇壮な舞踊である「メーノハマ（前之浜）」は空手の型が取り入れた一般的なものである。

2024 年（令和6）4 月現在の宜野座区の人口は 1,307（男性 658 人、女性 649 人）、世帯数 464。参考までに 1981 年当時¹³は人口 897 人（男 426 人、女 471 人）、世帯数 244 である。40 年余りで、人口で 46% や世帯数で 90%と顕著な増加傾向がみられる。

【由緒・来歴】

宜野座の八月アシビがいつの頃から始まったかについての詳細は不明だが、琉球王国時代から番所の筆者、その子弟の一部、また選ばれたシンカ、士族によって五穀豊穡を祈願するアシビが催されていたという。明治の頃になると、首里・那覇・泊から寄留した士族が伝えた芸能「ウカンシンウドゥイ（御冠船踊）」や「サムカーシバイ（寒川芝居）」などや「ウザガク（御座楽）」の演奏技術、さらには、沖縄戦中の 1945 年（昭和 20）では、米軍の民間人収容地コチャ（古知屋収容所）にいた県内各地の芸達者の影響を受けて、現在の形になったといわれる。

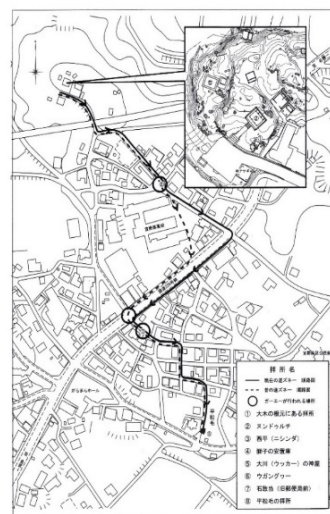


図3-1-2 集落の拝所位置と道ズネー順路

12 2024 年5月初旬の宜野座区の聞き取り調査による（出典は 2014 年の報告書）。

13 1981 年の人口統計は宜野座村勢要覧『GINOZA1981』による。

【関連祭祀儀礼】

令和5年度はコロナ禍の中で、中止していた八月アシビは6年ぶりに開催された。八月アシビの祭祀では、ノロ代役（大城）、区長（島袋）、ニセーダン（ニオ団）長（仲地）、その他4名で、ヌンドウルチ（ノロ殿内）、ニーヤ（根屋）、ウッカー（大川按司）の屋敷跡、シシアンチコ（獅子安置庫）の拝所でウガン（御願）とともにかじやで風節と3組（6名）のニーセーダンによるボーが奉納される。その後、集落内を巡る道ズネー（道巡り）を図3-1-2のとおり行う。「アシビナー（遊庭）」に設置された「バンク（仮設舞台）」で演舞が披露される。冒頭の演目の「獅子舞」では舞方が舞台の場を清めた後、獅子に化身した「カミ（神）」をバンク（仮設舞台）に招き入れる（図3-1-3）。

【演武の種類と内容】

棒は小学4年生以上の男子によって「ショウガクボー（小学棒）」が行われる。二人1組よってボーは六尺棒による二人組の棒が15組が行われる。中学生の男子による「チュウガクボー（中学棒）」も同様に二人1組よって型が披露され、六尺棒による二人棒が9組行われる。「サンシャクヤイ（三尺槍）」は2組、「シシマイ（獅子舞）」は舞方1名、獅子1頭に2名で行われる（写真3-1-12～19参照）。

「メーヌハマ（前之浜）」は2名で踊り、音曲は「前之浜節」「坂原口節」「与那原節」の3曲で構成された舞踊である。また、組踊『伏山敵討』の登場人物は次の8役で構成される。ティンガンヌアンジ（天願の按司）、タナバルヌワカアジ（棚原の若按司）、アンマー（母親）、カミチヨ（亀千代）、トウムイヌウフヌシ（富盛大主）、ヘンザウフヌシ（平安座大主）、イシカーヌヒーヤ（石川の比屋）、カリード（狩人）で構成される。



写真3-1-12 ヌンドウルチ前のかじやで風節の奉納演舞



写真3-1-13 ヌンドウルチ前での小学棒による奉納棒



写真3-1-14 ニーヤ（ニシンダ）の前で小学ボーを披露する小学生たち



写真3-1-15 ウッカー（大川）前で中学棒を披露する中学生たち



写真3-1-16 神アサギ前の広場で獅子を取り囲んでスーマキ



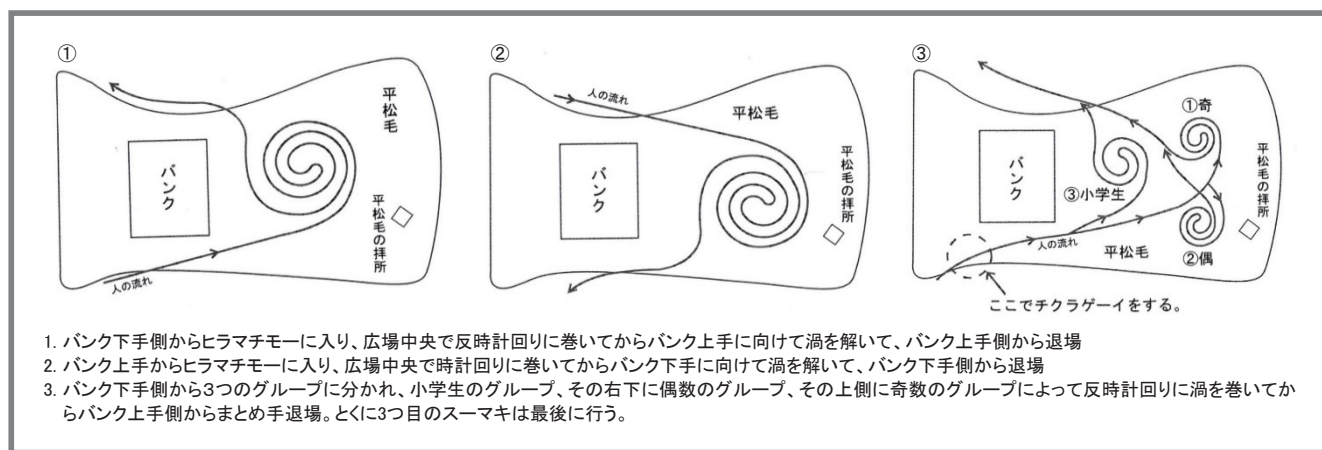
写真3-1-17 ヒラマチモーでの旗頭を中心にスーマチ



写真3-1-18 ヒラマチモーでの中学棒



写真3-1-19 ヒラマチモーでの成人によるボー



3 今帰仁村湧川（ワクガー）の豊年祭の棒術

2002 年（平成 14）に沖縄県指定無形民俗文化財に指定されたのが「湧川の路次楽」（保存団体湧川路次楽保存団体）で有名であるが、湧川は今帰仁村の東部、羽地内海に面して位置し、村内最大の面積を誇り、甘蔗とパインを生業とする農村集落で、1975 年（昭和 53 年）発刊の『統計なきじん（創刊号）』によると、当時湧川の人口は 1,185 人（男性 577 人、女性 608 人）、世帯数 282 戸であったが、2024 年 8 月末現在の人口は 708 人（男性 369 人、女性 339 人）、世帯数 397 戸で約 50 年を経て人口が 4 割減少する一方で世帯数は増加する傾向がみられ、過疎化に襲われている。

【行事の概要】

行事名はホウネンサイ（豊年祭）と呼ぶ。毎年旧暦 8 月 10 日にトーカウガン（十日ウガン）を経て翌日の 11 日に豊年祭を行っていたようだが、同日が平日の場合は豊年祭は夜遅くまで行われるため、出演する児童生徒の就学に影響がでたようである。20 年ぐらい前（平成 14 年頃）から、就学児童・生徒への教育的配慮がなされ、トーカウガンを経ての最初の土曜日に豊年祭を開催することになったという。本来は、3 日間の開催であったが、過疎化等で 1 日のみで実施するようになった。

2024 年度は、当初は新暦 9 月 14 日（土）の予定であったが、同日最接近した台風 13 号の影響で 1 週間後の 9 月 21 日に開催された。夕方 5 時半から祭祀儀礼が始まり、7 時半から公民館野外ステージ前で棒術、路次楽をはじめとする豊年祭の舞台が演じられる。

豊年祭では、集落の人前で演じる前に、奉納の演武（舞）がある。まず最初に、集落西側の小高い丘の上に関係者がメースピヤー（前スピヤー）に列をなして移動し、その広場で棒術演武、路次楽、長者の大主（若衆・二才踊り）が演じられる。その一行は約 60 名。旗棒を先頭に、棒シンカ（49 名）、ロジガク（路次楽）（4 名）、長者の大主一行 9 名（ジカタ 4 人を含む）ある。その次にシシヤー（獅子屋）とよばれる獅子を安置する場所の前庭（7m × 7m）で同じように演武（舞）を行うが、メースピヤーとの違いは、ここでは最後にシシヤーから獅子を招く先導若衆の踊りとシシヤーから飛び出た獅子による獅子舞が披露される。獅子屋の入口は、安和岳（あわだけ）に向かっているという。いいつたえによると、安和岳には魔物住んでいるとされており、湧川の獅子が集落の守り神としてそれに対峙しているとされる。

日清戦争後、旧慣打破の風潮と経済的な負担過重などの理由により、明治 28 年から中止したが、明治 35 年に再開されたとされている。

【演武の種類と内容】

『湧川誌』（昭和 62 年）によれば、上のアサギにて、「スーマチ（総巻）」が行われる。「ボーカタ（棒方）、またはボーシンカ（棒シンカ）」全員が棒を斜め上下に振りながら広場いっぱい到大円陣をつくり、次第に二重三重と中央に向かって進む。円陣の中央に旗棒が達し、全員が一塊になると旗棒者による「ヒーヨーユイ」の音頭で、全員が「ユイ」の掛け声と共に飛び上がる。今度は反対に、中央の旗棒が四重五重の円陣の間を次第に外側へと出ていくとされる。

2024 年度の豊年祭でも、同様に屋外ステージの舞台右側の通りに赤組、白組に列をなし、赤の旗棒を先頭に白の旗棒が続き、赤白交互に反時計回りに円陣をつくっていく。数巡しながら、円陣を狭めて一塊になり、旗棒を掲げ、棒シンカも棒を掲げる。先頭の赤組の旗棒者による「ヒーヨーユイ」の合図で外側に飛び跳ねる。その次は先導者の赤の旗棒者が時計回りに再び円陣を描きながら行進し、数巡して塊になり、再び「ヒーヨーユイ」の合図で、赤の旗棒者は円陣から飛び出し、半時計周りに、また白の旗棒者は、時計回りに、それぞれの棒シンカが列をなし退場する。また、道沿いに最初同様に列をつくり待機して、紅白の鉢巻きをつけた二人 1 組の棒の演武を行う。同豊年祭では、スーマチ（総巻）の総員は 49 名であった。70 代の年配者から今年度初めて参加する中学 1 年生まで演武する。組棒は、紅白の鉢巻きをした棒シンカ 2 人一組で行う。最初は

紅白の三角旗をもつ旗棒から始まる。その後は、メーボー（前棒）7組、ナカボー（中棒）4組。シーボー（後棒）2組で棒の演武は終わる。シーボーが棒術がより難度の高い型である。湧川の棒は基本的には棒同士を合わすことはないが、最後のシーボーのみ、二つの棒が合わせる型がある。その後に路次が太鼓2人、ピー2人によって演じられる。一説によれば、スーマチ（総巻）は、一人の強力な武芸者を鎮圧する大衆棒の使い方が表現されていると言われている。『湧川誌』によると、昭和10年頃、津堅棒の名手と言われた北谷の桑江小タンメーが湧川の棒を観て、この棒は「クヌヌ手（棍の手）」であるから大事に保存するように言われたと記される（写真3-1-20～27参照）。



写真3-1-20 メーヌピャーの棒シンの円陣は旗棒を先頭に半時計廻りに1周半（手前の西側が正面になる）手前の黒胴衣が後尾になる。



写真3-1-21 メーヌピャーでの奉納棒は、ハタボー（旗棒）、メーボー、ナカボー、シーボーの10組が演武する。トリを飾るは旗棒をもつ二人のシーボー。湧川の棒は基本的に二つの棒を合わすことはないが、シーボのみは例外である。



写真3-1-22 メーヌピャーからシシヤー（獅屋）へ向かう一行



写真3-1-23 シシヤー（獅子頭を安置している場所）で半時計廻りに円陣をつくり、最初にハタボー（旗棒）を演武する。



写真3-1-24 屋外ステージ前庭へ入場する。赤の旗棒をもった者が先頭に半時計回りに円陣を描く



写真3-1-25 半時計周りに前庭を2、3周する状態



写真3-1-26 一塊になり棒を掲げるところ。



写真3-1-27 屋外ステージの前で棒演武のトリを担うシーボー（後棒）の2人。

【演武の組織と稽古・継承方法】

棒シンカの構成員は湧川区の男性で、2024年度は中学生4名～70代まで49名であった。『湧川誌』によると、旧暦8月7日にミヤイジャシ（庭出し）で予行演習が行われる。2024年度では2、3週間前から練習を始めたという。棒や空手着やタスキは、毎年使うために公民館で管理される。

【演武の衣装と道具・楽曲】

衣装は、市販の空手着で白胴着、白帯と黒胴着と黒帯の2種類である。どちらも赤いタスキを胸で×字になるよう背中で×字に蝶結びをする。また頭に赤組と白組にわかれるため赤と白の鉢巻きをつける。黒胴着をつける者は熟練者でシーボー（後棒）を演武する2組4人のみである。黒胴着の着ける者は旗棒を持つ者が先導役、棒を持つ者が最後尾を務める。戦後1971年に復活した那覇大綱曳行事の第1、2回の際に湧川の棒術、路次楽、獅子舞が那覇市から招待を受けたことを契機に、現在のような衣装の整備がされたという。それ以前はステテコであったようだ。当時、参加した嘉陽宗敬（76歳／指導者）、当時を振り返って沖縄県庁から安里までの道ジュネー6か所で、湧川の棒術、路次楽、獅子舞を披露したという。その際に、現在のような衣装を空手着として整備したという。棒は、ガク、ドラ、太鼓の音に合わせた掛け声で演舞する。

【行事継承の今日的課題】

2021年から2023コロナ禍で3年間豊年祭が実施できていない。指導者たちも演舞を忘れてしまうことが懸念される。2024年からは、少し早めに豊年祭の準備を始めたいという。少子化で継承者不足が懸念されるため、高校生にも参加してもらうことで伝統文化の継承に努める。

4 本部町並里の八月アシビの満名棒

北部地区で唯一棒術の無形民俗文化財として市町村指定を受けているのが本部町並里区の「満名棒」である。1945年頃には人口が1千人余もいて豊年祭では組棒が37組もあり、旗頭持、ブラフチャー（ボウ吹き）やハイヤーボンボン合わせて80人もいて、巻棒やゴーヤー巻もでき、イッチャイボー（五人棒）、打込棒などもあったようだが、1984年の豊年祭では人口が3百人位に減少した。そのため組棒10組、部員も25名に減少した中で、先祖代々の遺産の継承のために、若い方々が集まり1984年9月に満名棒保存会が結成された。保存会では毎月1回集まって、失われつつある棒術の掘り起こしをおこなった。その成果が実り、1997年に本部町指定無形民俗文化財（民俗芸能）として「並里の満名棒（三人棒）」が指定され、その保持団体として並里区村踊り保存会が認定された。

北部地域の例にもれず、集落の過疎化により、集落行事の縮小が顕著に表れている。参考までに1980年（昭和53年）発刊の本部町要覧『本部 MOTOBU' 80』によると、当時並里の人口は303人（男性161人、女性142人）世帯95戸であったが、2024年5月現在の人口は211人（男性110人、女性101人）、世帯数109戸で人口は30%減少する一方で、世帯数は14戸増加し、一世帯あたりの人員が減少しつつある。そのような中でも、豊年祭は8年ぶりに開催され、集落外に居住するゆかりの人々によってにぎわった。

【行事の概要】

5年に1回開催される豊年祭。旧暦8月11日には、並里から伊野波まで道ジュネーをして伊野波神社に奉納することが恒例となっていたが、1955年に伊野波においては、経済的その他の理由でこの道ジュネー、踊りとともに並里神社のみに奉納することになった。豊年祭の開催場所は公民館建物の後方が舞台になり、外側の広場に観客席が設けられ、舞台をみることができる。2024年度は、2016年以降8年ぶりの開催になった。本来は、2000年に行う予定であったが、コロナ禍により中止になった。

元々、伊野波区の拝所の前にあったニーヤー（根屋）である財産家の上原家にあだ名を「ムリー」という武術に優れた人がいたという。若い頃首里松山御殿につとめていて、勤めのかたわらに空手や棒術の修行をしていた。勤めが終わり帰る途中、恩納村の富着に宿を取り暫く滞在するうち宿の娘と恋仲となった。ある日、地元の青年に二重三重に取り囲まれたが、「本部サルメー」の様に六尺以上も飛び上り、垣根を飛び越えて難を逃れた。また、伊野波の屋号幸地の高倉に火がつき人々が騒いでいる所に、「ムリーウッパー」が来て、倉のチニブ垣を蹴落とし、稲束を取り出して火災を逃れた事で評判になり、地域の人々から尊敬されたとい

う。彼は谷田原を開墾して、移り住み、そこで門弟を集めて武術を指導した。その中の一人がメーヌトンチ（前ぬ殿内）の「カミ（亀）ウンチュ」であり、さらに（故）玉城興盛に棒術が引き継がれた。その他にも伊野波の渡久地松太郎、戦前の大見謝医師も「ムリーウップ」の門弟であり、「かくり武士」がいたことが満名棒として継承されてきた伝来とされる。

【演武の種類と内容】

棒の種類は、三尺棒、四尺棒、六尺棒がある。六尺棒を自身の手に馴染むように加工し、黒色を塗ったりと自身の手に馴染むようにして、自身で保管する。

【演武の組織と稽古・継承方法】

豊年祭の開催には実行委員会が立ち上げられ、舞方と棒シンカによって練習が積まれる。8年ぶりの開催にあたり、1カ月前から練習をしてきたという。無形民俗文化財に指定され、棒術演武のとりを務める満名棒は、並里（屋号上殿内（ウントゥヌチー））三兄弟が務めた。

【演武の衣裳と道具・楽曲】

上下の白の空手着、紫の頭巾、脚絆に、紅白のたすきを胸前でX字にかけて、背中で蝶結びを行う。

【練習状況】

2024年度の豊年祭は、旧8月11日の1ヶ月前から練習したという。特に、タイボーや最も難度の高い満名棒とよばれるミッチャイボーは練習を行ったとされる。

【行事継承の今日的課題】

2000年の豊年祭のプログラムでは27演目の中で、4つの棒演目が含まれる。その次ぎが2004年後、2008年、2012年、2016年に豊年祭を行なったが、2020年がコロナ禍にあり中止され、本年（2024）が8年ぶりの開催になり、新暦の9月22日に開催した（写真3-1-28～33参照）。



写真3-1-28 並里公民館の後方が全面開いて舞台になる。



写真3-1-29 2024年豊年祭の舞台。



写真3-1-30 2016年の豊年祭の棒シンカのメンバー（当時）



写真3-1-31 並里の棒を代表する「満名棒」(三人棒) (2024年9月22日)



写真3-1-32, 33 ゴーリーティンペーの演武で使用するティンペーと呼ばれる盾の表裏。公民館で保管される。動物皮に黒漆が塗られ、持ち手もしっかりとしたつくりと2016年以来、復活した演武。

第2節 中部地区

沖縄本島中部地域における武術的身体動作を含む演武・芸能について、(1) 綱引きに伴う武術的芸能（棒術、相撲、空手、ガーエー）、(2) 棒巻、(3) 棒術、(4) 南の島、(5) その他の武術的演武・芸能に分けて、地域毎の特徴をまとめてみたい。

1 綱引きに伴う武術的芸能

沖縄本島中部地域では、夏季に幅広い地域で綱引きが行われている。綱引きに伴って武術的演武や芸能が演じられるところも多い。ここではその中で棒術、相撲、空手、ガーエーに分けて事例を紹介する。

(1-1) 綱引きに伴う棒術

ここでは、綱引き行事に伴って相撲が演じられる地域、またはかつて演じられていた地域について紹介する。

ア 西原町小波津の綱引きと棒

小波津区では、旧六月綱引き（チナヒチ）、旧七月盆踊り、旧八月十五夜「獅子又御願」、「七年まーる村遊び」（卯年、酉年）に棒を行う。棒のことを棒チカヤーという。綱引きの前に「一人棒」、「ハジリ棒」という組棒を演武する。盆踊りや八月十五夜には一人棒や組棒の演武を行う。毎年旧一月二日ハチウクシーと、旧八月十五夜の日に公民館前庭で青年（棒シンカ）により組棒を披露する。

場所については、綱引きは小波津集落中通りの三本ガジュマル前、盆踊り、獅子又御願、七年まーる村遊びは子初集落センター前広場、獅子又御願の御願は獅子屋で行う。

綱引きの目的は、五穀豊穡、地域子孫繁栄、防火のための「火返し（ヒーゲーシ）」である。盆踊りは、昭和37年頃にエイサーから盆踊りに変わった。踊りの合間に棒、獅子舞の演舞が披露される。八月十五夜「獅子又御願」は、無病息災、ムラの守護神である獅子に祈願する行事である。「七年まーる村遊び」は、豊年を祈願する行事である。昭和50年以来諸般の事情で途絶えていたが、平成14（2002）年に小波津伝統芸能保存会を結成し、平成17年（2005）に村遊びを復活させた。

王府時代には、主に士族や役人が演じていたという。小波津の棒の特徴は「ミーヒチャティ、クシイーチ」といわれ、鋭い眼光で重心を低くした迫力ある演武である。

旧六月綱引きに先立って、一人棒、ハジリ棒 が披露される。盆踊りでは踊りの合間に披露される。八月十五夜では厄払いと五穀豊穡、子孫繁栄を祈願して披露される。

小波津伝統芸能保存会（平成14年～）は、小波津在住者および小波津出身者で本会の趣旨に賛同するもの。保存会に、組踊部会、獅子舞棒術部会、三線部会を設置している。出演者はかつて八月十五夜においては棒術組として14～24歳の男子で行っていた（小波津誌より）。日本復帰後は、小学生から壮年まで男子が地域行事に出演している。今は小中学生女子も出演している。

稽古は、かつて八月十五夜アシビの2、3ヶ月前から練習した（小波津誌より）。近年は地域行事等の1、2ヶ月前から練習。コロナ禍前は、毎週木曜日に集落センターで小中高生に指導していた。稽古の場所は復帰後は指導者宅等で練習していたが、小波津集落センター落成（昭和58年）により、センターのホールになった。盆踊りの前は、櫓の舞台で練習する。

演武の構成は、ヤイ・ナジナタ（槍・長刀）、エークディー（樵手）、フーガキ、ウシワカ、チュイボー（一人棒）、タイボー（二人棒）、ミツチャイボー（三人棒）、ユツタイボー（四人棒）、トーディー（唐手）、ティンバー（盾・太刀と槍）、サイ、カマディー（鎌手）などがある。ただし現在、ウシワカ、トーディー、サイ、カマディーは継承されていない。楽器は三線（3～4名）と銅鑼1名、古老による指笛からなる。

イ 浦添市前田の綱引きと棒使い

前田区では、豊年祭（綱引きと村芝居）綱引きの後で「棒使い」と呼ばれる棒術を行う。旧六月に綱引き（綱引き後に棒使い、昼間）と村芝居（夕方から夜）が隔年で行われたが、近年村芝居は行われぬ。旧 6 月 25 日にムラを東村渠（アガリンダカリ）と西村渠（イリンダカリ）に分かれて東が雄綱（ヲンナ）、西が雌綱（ミンナ）を作って引いた。棒は「棒ツカイ」と呼ばれる。綱を引き終えたら、その後 1 時間ばかりの間に、ガーエー、旗頭持ち、棒、空手を順に演武した。戦前は旧 8 月 1 日から一日越しに踊りと棒を行った。10 日にメーアシビー（前遊び）、13 日、1 日 5、17 日がショウニチ（正日）という本番、18 日にアトウアシビー（後遊び）があった。

戦後途絶えたが、1965 年頃に復活した。浦添市でたこ祭り（1978 年）の一環での朱杖運が原動力となった。戦前は「巻き棒」も「配列棒」も集団演武として棒の花形で見せ所だったが、昭和 52（1977）年あたりから多人数での棒ツカイはなくなった。

令和 4（2022）年はコロナ禍で綱引きは 3 年連続で中止になったが、7 月 23 日（旧 6 月 25 日）に「綱引きウガン」として、集落内 16ヶ所を自治会三役など数名で回って祈願を行った。上演場所はメーシシモー（公民館の前庭）。戦後の現在の公民館（自治会館）建設前は、段差のある木々が茂る広場だった。その目的は、地域の発展、子孫繁栄、豊作祈願である。ウカンヌウトウイムチ（お神の御取り持ち）である。戦前までは棒術は数え 15 ～ 35 歳までの男子全員で行なっていた。当時は棒使いができないものは男にあらずの風潮があった。現在は 30 代の保存会メンバーが小学生（男女）20 人に定期的に公民館前で指導している。

保存会会員は 15 人程度で、指導は会長や数名の青年が行なっている。演武の構成は、かつては 20 種類あった。一人棒 5 種（略）、二人棒 4 種（略）、三人棒 1 種、巻き棒（マチボー）、フェーイ棒（集団棒使い）。しかし現在、保存会では一人棒と二人棒しか伝承していない。

衣装・道具については、空手着上下を使用する。頭には紅白 2 種類の鉢巻を巻く。マチボーや二人棒では赤白のはちまきを巻く。衣装の管理は会員個々が保管する。音楽はドラ鐘、フィーフィーという独特の指笛がある。戦前までは太鼓もあった。

ウ 西原町棚原の綱引き

棚原区の綱引きにおいて、旧 6 月 25 日のウファチヂナの時には「ウファチ」という女歌が歌われ、三尺棒と五尺の棒による棒術が披露された。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』p.211）

（1-2）綱引きに伴う相撲（角力）

ここでは、綱引き行事に伴って相撲が演じられる地域、またはかつて演じられていた地域について紹介する。

ア 宜野座村宜野座の綱引き

宜野座区では、綱引き終了後、平松毛において相撲が開始される。本土復帰の頃までは、相撲が翌朝まで続くことも珍しくなかった。また当時は対抗意識が強く、勝ち星の数で自組が不利になると寝ている者まで起こして相撲に参加させたという。現在は小学生・中学生・高校生・一般の部に分かれて 3 番から 5 番ずつ行われ、深夜 0 時頃に終了する。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』p.141）

イ 金武町金武の綱引き

金武区では、綱引きにおいてテービー合戦を行う。これは燃えている松明を頭より下がらないように火の粉を散らしながら押し合い、叩き合うもので、両軍向かい合っただけの示威行動である。綱引き終了後に角力大会（シマ）があるが、挑戦者が居なくなるまでの勝ち抜き勝負である。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』pp.148-149）

ウ 沖縄市大里の綱引き

大里区では、綱引きにおいて現在は子供の相撲を行なっている。昭和 50（1975）年頃から相撲になった。はじめは、大人同士の相撲であった。相撲を始める前は、棒術（ガーエー）が行われていた。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.167）

エ 沖縄市与儀の綱引き

与儀区では、綱引き終了後、アガリモウ（東の野）に場所を移して、相撲大会を催した。相撲大会には、近隣の集落（スニンジマ）の人も参加した。現在、相撲大会はない。

（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.170）

オ 宜野湾市真志喜の綱引き

真志喜区では綱引きの前に、コンベンション通りにおいて老人会、婦人会、子供会による空手、舞踊、力チャーシーなどが披露される。綱引きを公民館前の路上で行なっていた頃は、綱引きが終わってから、子供相撲や大人相撲があった。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 pp.188-189）

カ 西原町幸地の綱引き

幸地区では、綱引きの綱を引く前後のガーエーでは、主に青年ら（年配の男性や女性 1 人も参加）が飛び跳ねながら軽くぶつかる。棒は先端を持ち、もう一方の手で支えて他人に当たらないようにしなければならない。以前は綱引き後に角力があったが、現在はない。公民館で綱を丸めて土俵を作り中に砂を入れていたが、その後池を埋めた場所にホースで土俵を作り、数年前まで子供を中心に行われていた。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.201）

キ 西原町小橋川の綱引き

小橋川区では、綱引き終了後、公民館の前で子供相撲が行われる。終戦直後は組踊などもやったそうだが、現在は行われていない。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.206）

ク 西原町内間の綱引き

内間区では、以前は綱引きの時にイフの御嶽で子供達が相撲をしていたが、現在は行われていない。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.208）

（1-3）綱引きに伴う空手

ここでは、綱引き行事に伴って空手が演じられる地域、またはかつて演じられていた地域について紹介する。

ア 中城村新垣の綱引き

新垣区では綱引きにおける示威行為として男性がメーカタ（空手の型）を披露する。これは相手を捕まえて倒すことまではしない。かつては女性達も、チデンを打ちながら歌を歌った。現在は行われていない。また上、下それぞれのトゥールバイ（灯籠張り）が壊れるまでぶつけ合う。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.178）

イ 旧北谷村桑江

旧北谷村桑江では、旧 6 月 24 日のカシチーの日に毎年綱を引いた。綱を引く前にはナカミチ（中道）で 10 分～ 20 分程、メンダカリ、クシンダカリの青年男性が互いに押し合ったり、棒を使ったりするガーエーを行なった。その時はテービー（松明）も使われた。興奮してテービーでもって相手の頭や背中を叩いたりす

ることもあったが、翌日には相手に労いの言葉をかけた。ガーエーで使う棒には、三尺棒と六尺棒があった。桑江には廃藩置県の頃に鹿児島県から移住してきた「ナカダのボンサン」と呼ばれていた方がおり、この方が三尺棒を使っていたようである。婦人たちがチヂンを打ったりすることはなかった。それで、綱引きが終わるとシマ（角力）をとった。

1937（昭和12）、38年頃の綱引きには、綱を引く前に、ドラガニの合図でメーカタ（舞方）が行われた。メンダカリ、クシンダカリのいずれかの青年が1人出てきて、相手を威嚇するようにメーカタをみせた。メーカタには、特に決まった型はなく、個々人によって上手下手があった。これに対して相手が出てくると、レスリングのように相手を倒すトーセーとなった。綱引きのメーカタの時にはドラガニで音頭をとるが、モーアシビ（毛遊び）の時には三味線に合わせて行なった。

メーカタで対戦相手が出てこなくなると、次にメンダカリ、クシンダカリの青年たちが互いにぶつかり合うシーチェーを行なった。仲村渠吉三さんがかつて先輩から教えていただいた相手にぶつかる方法は、左手を曲げて自分の胸を守り、左の方から二の腕で相手にぶつかる。そして右手で相手を叩くという。メーカタやシーチェーには、字内の男性が参加し、他字の者は参加しなかった。テービーを使って綱引き場を明るくしていたが、時にはテービーでもって相手を叩くこともあった。綱引きを終えると、ンマイー（馬場）に場所を移し、他字の人も参加してシマ（角力）が行われた。（『北谷町の綱引き』 pp.162-163）

ウ 旧北谷村北谷

旧北谷村北谷では、旧6月25日のカシチーウユミに綱引きを行なった。これは昭和13、14年ころまで毎年行われていた。綱引きに使われた楽器はドラガニでメンダカリ、クシンダカリに各一個ずつあった。綱引きが終わると、その場でメンダカリ、クシンダカリ双方が「サーサーガーエー」と言ってシーチェー（押し合い）を行なった。シーチェーはメンダカリ、クシンダカリ、あるいは男女関係なく入り交ざって「サーサーサーサー」と叫びながら背中や腕を使って押し合う競技であった。

これが終わると、メーカタ（舞方）が行われた。このメーカタには、先のサーサーガーエーとは異なり腕力のある青年男性が参加した。メンダカリがクシンダカリに対して、クシンダカリがメンダカリに対して意地を表す競技であった。青年男性が出て空手の型を相手に示した。これをメーカタと言った。型は特に決まっておらず、個々の型を披露した。そのため上手な人、下手な人がいたようである。型の囃子は「タチミソリ、メーカタ・・・」などと三味線のリズムに合わせて歌を歌ったりすることはなく、ドラガニを使った。そして「トー、ナイシガ ウラ ンジレー」と言って相手を誘い出した。相手が「トー、クレーワーガ ナイン」と思っ出てくると、組み手となり、相手を倒す勝負となった。これをトーセークルバセーといった。メーカタとトーセークルバセーを含めて、メーカタと言った。このトーセークルバセーは、相手を転ばした時点で勝負はついたが、メーカタの型を示した後に必ず行われるわけではなかった。例えば相手側から自分より年齢の離れた年配者が出てきた場合などには、お互いにメーカタの型を披露するだけで、そのまま退場することもあった。メーカタの周囲を円になって取り囲んで見物し、誰も双方の加勢には加わらなかった。このメーカタで勝つことは名誉なことだった。メーカタは、綱引きだけに行われるのではなく、モーアシビ（毛遊び）にも行われた。この時は歌や三味線のリズムに合わせてメーカタをし、そのままトーセークルバセーが始まった。（『北谷町の綱引き』 pp.167-168）

エ 旧北谷田野里

旧北谷田野では、例年の綱引きは旧6月24日のカシチーウユミの日に綱を引くカシチージナであった。毎年の綱引きは昭和12（1937）年に廃止となったが、昭和30（1955）年に野里共進会によって復活された。二度にわたる綱引きが終わると、勝利した側は一番カニチをはずして、メージナをみんなで担いだ。その際には「ワワワワワ、サー、ファイ、ファイ、ファイ・・・」と掛け声を出し、ドラや太鼓を叩いた。綱の上には

シタクとして、踊りの上手な者と空手のできる者が乗って踊ったり、空手の型を披露したりした。

次にテービー（松明）でもって相手と叩き合うムンドー（ガーエー）となった。このガーエーには、青年男性をはじめ、年配者も参加した。時には女性同士のムンドーもあったようである。青年男性によるガーエーは、テービーで叩きながら押し合うもので、中にはテービーを持って向かってくる者からテービーを奪い取って逆に打ち返す者もいた。テービーの熱で周囲の木の葉が無くなったという。（『北谷町の綱引き』 p.185）

（1-4）綱引きに伴うガーエー

ここでは、綱引き行事に伴って身体をぶつけ合うガーエー（競い合い）が行われる地域、またはかつて行われていた地域について紹介する。

ア 恩納村谷茶の綱引き

谷茶区の綱引きでは、ガーエーという男性による身体ぶつけ合い、倒し合いがあり、その様子は喧嘩のようである。これにも勝敗があり、最近では綱引きで負けた側を勝者とし、公平にお互いが気分よく終われるよう配慮している。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.145）

イ 金武町金武の綱引き

金武区の綱引きではテービー合戦が行われる。これは燃えている松明を頭より下がらないように、火の粉を散らしながら押し合い、叩き合う。両軍向かい合っただけの示威行動である。綱引き終了後に角力大会（シマ）があるが、挑戦者が居なくなるまでの勝ち抜き勝負である。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 pp.148-149）

ウ 与那城町屋慶名の綱引き

屋慶名区では、昭和 47（1972）年綱引きのときには、綱の示威行動・道ズネーの後、相対した綱の前で東の棒と西の棒がそれぞれ 1 回ずつ演じられた。

棒が使われた場所で今度はヤーサイモーが行われる。ヤーサイモーイとも言う。参加者は男達である誰でも参加できるものであるが体力が必要とされる。昭和 47（1972）年の場合、東と西の若者達がワツショイ・ワツショイとかけ声をあげながら押したり離れたりするのを 4～5 度繰り返した。これは双方が押し合うものである。その間、2ヶ所から放水が続いた。1ヶ所は若者達の横から、もう1ヶ所は屋根の上からである。放水しないと押し合う力が強い為に体力が続かず倒れてしまうということであった。水道の普及する前はバケツに汲んで押し合いしている若者達にぶっかけたという。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.42）

エ 勝連町平敷屋の綱引き

平敷屋区の綱引きでは、会場の平敷屋小学校グラウンドに到着後、青年達によるヤーサイ（押しくらまんじゅうのように押し合う）が行われる。東西の青年が出てきてぶつかり合う。双方のぶつかり合いの頃合をみて、周りで見ている男性が水をかけると、ヤーサイを終える。それを 2、3 度繰り返す。一方では、女性達による綱引き歌が歌われる。（『沖縄の綱引き習俗調査報告書』 p.161）

2 棒 巻

ここでは、綱引きとは別に棒巻が行われる地域について紹介する。

ア 北中城村島袋の棒総巻

島袋区の棒総巻は期日は決まっていない。村遊びの中で行うので、毎年行われることはない。また大きな行事の時に行う。由来は約二百年前、首里西の平の仲村親雲上が伝えたといわれている。昭和 16(1941) 年以来途絶えていたが、昭和 39(1963) 年に古老の記憶により復活させた。これまで、昭和 3(1928) 年昭和天皇即位式、昭和 15(1940) 年の紀元 2600 年祭、昭和 24(1949) 年龍の仕立て祝い、昭和 53(1978) 年第 1 回北中城村文化まつり、平成 21(2009) 年・平成 29(2017) 年島袋まつりで行われた。

継承組織としては、島袋民俗芸能保存会を中心に青年会、壮年会が協力して継承している。指導は保存会会員が行い、参加人数は 50 名程度である。島袋民俗芸能保存会は「赤木名節」および「棒総巻」を保存し、その普及と後継者育成を目的とする団体である。

演武は、奇数組、偶数組が一行縦隊になり会場内を二手に分かれて周回する。総巻きとハジリ棒と呼ばれる組み手で構成される。中央付近で交差する時、右側縦に構える棒下方を互いに相手側に出して棒を当て合う。楽器はホラ貝約 4 名、大太鼓 1 名、ドラ鐘 1 名、鉦子約 3 名が連打する。

3 棒 術

ここでは綱引き行事とは別に棒術が行われる地域について紹介する。

ア 嘉手納町野里の野里棒

野里区には二人一組で行う「組棒」と「一人棒」があり、六尺棒と三尺棒を用いる。元々は旧八月に行われていた村芝居で演じられていた芸能である。現在は一般財団法人嘉手納町野里共進会により団体が主催している行事のほか、町内外で行われる芸能祭などで披露する。約 2 ヶ月前から練習を始める。その特徴は一人棒の打ち込む気迫や、組棒の二人が打ち合う姿は真剣勝負そのもので圧巻である。野里出身の男性のみで行う。

その由来は、首里から野里に住み着いたタルガニーヌメーという人が農業の振興を図る上で若者を部落にひきとどめる必要があると考え、「道イリク」と「棒術」を習ってくるよう命じたのが始まりと言われている。

技の継承については、戦後、戦前に演武を経験していた野里出身者に演舞の仕方や演奏、衣装について聞き取り調査を行い復活させた。一般財団法人嘉手納町野里共進会により 49 組のうち 11 組が継承されている。地謡はボラ 2 名、ドラ 1 名、太鼓 1 名、三線 3 名で構成される。

イ うるま市田場の棒

田場区では、豊年祭（十五夜）その他に旧盆行事（ヒチグワチ）、新年会、夏祭りがある。豊年祭（十五夜）で棒の演武を行う。ティンバーの手 ナギナタの手、エークの手、対面での打ち合いをヌンドウンチ（祝女殿内）神屋にて行う。由来は、いつ伝わったか定かではない。村の繁栄、豊年、厄災ばらいとして獅子舞と一緒にヌンドウンチへ奉納される。十五夜祭はおよそ 100 年続いている。コロナ禍の影響で 2 年間は観客なしで奉納のみ行った。出演者は 20 代前半から 50 代までが務める。

演武としては、露払いで棒の手（独演型、棒対棒）、ティンバーの手（ティンバー対槍）、ナギナタの手（ナギナタ対槍）、エークの手（櫓対トウザー：三叉鉾）、獅子舞の順で構成される。棒の手（独演型）はクーサンクーのような演武線になっている。

道具は、2022 年に市の補助（約 80 万円）を受けて新調した。武具の刃の部分は町工場に作成させた

金属製である。法被なども手縫いで自作した。楽器としては金鼓隊（大太鼓、締太鼓、ちょうぐ、三線、銅鑼、ボラ）で構成している。楽曲は多幸山（あっちゃめ一小）を用いる。

ウ 読谷村座喜味の座喜味棒（ザチミボウ）

座喜味区では、棒の演者はボウチカヤーと呼ばれ、棒術の前にスーマチ（棒巻）を行う。棒は型の演武、対面の打ち合い等がある。戦前は旧 7 月 16 日、8 月 15 日、9 月 9 日にアシビが開かれた。現在は 9 月敬老会、12 月総合共進会で演武が披露される。戦前のアシビは二才頭（ニーサーガシラ）が区長に掛け合い、開催許可を得る慣わしだった。開催が決まると、ムスビーといって豚を潰して会食し、練習を始めた。ある程度仕上がるとアシビナーでスーダチグラーと称する公開練習を行い、旧 9 月末の最後のアシビとなる「別れアシビ」を盛大に催した。

座喜味棒の由来については、500 年の歴史を持つといわれるが、何らかの理由で途絶えた。近代の復活は明治 13（1880）年頃 山城平三氏が 15 才の時に津堅島出身の「つぼやのタンメー」と呼ばれる炭焼き老人から習得したといわれる。戦前の棒チカヤーは青年（15 ～ 25 才）が中心だった。現在は、青年を中心に 16 ～ 65 才までが構成員となっている。

スーマチは演舞者全員によるスナーで、公民館広場で行われる。メーボー（前棒）とクシボー（後棒）に分かれ、スーマチヌユイアシと称する行進を行う。西に親旗頭、東に子旗頭が立ち、それを中心にブルマチと称して渦を巻く。その後、本番のユイアシ（ゆい合わせ）を経て、棒術が演じられる。鳴物はホラ貝、太鼓（大小）、鉦、指笛を打ち鳴らす。

棒の演武の型は 11 種類ある。棒は六尺棒を基本とし、三尺棒も使用する。棒は県内の守礼堂にて入手している。衣装は以前はクルチナー（黒着物）縄帯を締めて裸足で演じた。現在は紺色系統の上下に読谷花織のウッチャキを着用、ミンサー帯を締めている。

エ 読谷村宇座の棒

宇座区では、棒は旧 7 月 16 日のウークイにエイサーのつなぎに演武する。青年会が中心となる。またジューグヤー（旧八月十五夜）には組踊、舞踊と組み合わせて演武する。伝統芸能保存会が中心となる。型の演武、対面での打ち合いがある。区内拝所、宇座山内楊姓門中、主ヌ前殿地、公民館中庭の順序で演武してゆく。

その由来は宇座誌『残波の里・第一巻』によると、西原間切の豪傑ウチャートーマグラーが読谷山按司家（護佐丸）と親しく、マグラーの棒術が宇座棒の元祖ではないかといわれる。戦前は旧 7 月 16 日盆踊り、旧 8 月 15 日観月会の 2 回アシビを行った。その際、組踊、舞踊などと共に棒術も披露した。戦後途絶えていたのを昭和 35（1960）年頃から徐々に復活した。旧 7 月 16 日盆行事、旧 8 月 15 日観月会も復活した。

運営については宇座区伝統芸能保存会、青年会が運営している。中高生、現役青年会（18 ～ 25 才）、30 代が演舞者である。練習は行事の 3 ヶ月前から週末の稽古が公民館敷地内外で始まる。棒の型は ヒーボウ、ウシワカ、ウドウイボウ、クシワイの 4 種類を 2 組が順に繰り返す。使用楽器は鳴物 ホラ（貝）、ドラ、大太鼓・締め太鼓である。カリー太鼓は青年たちが務める。楽器演奏は演者が行う。

オ 読谷村波平のハンジャ（波平）棒

波平区ではハンジャ棒を、旧 7 月 16 日（盆行事）、八月十五夜アシビ（波平観月会）に演じる。14 種の組棒（組手）が継承されており、ハンジャ棒、エイサーと組み合わせて演武する。上演場所は、波平東門、アシビナーである。令和 2・3 年度はコロナ禍で中止したが、令和 4（2022）年度から盆行事、観月会を開催した。

その由来については、約 290 年前、津堅アカナーという若者が波平に奉公し、棒術を伝えたと言われる。「津堅手」は 2 人三尺棒である。行事の中での演舞は、ヤイ棒を先頭に列をなして棒チカイ、エイサー共に東門

に向かい、スーマチ（総巻棒）で旗頭、大畑、小旗を走り回り邪気を払う。

伝承については、波平区伝統芸能保存会により継承されている。子ども棒術クラブもあり、保存会の青年たちが指導にあたる。演武者は小学1年生～35才までの約70名。

棒の型は、ハンジャ棒に14種ある。2人三尺棒（3種）、2人六尺棒（3種）、2人三尺六尺（8種）がある。鳴物は勝負鉦、太鼓、鉦、ブラ（ホラ貝）である。

カ 読谷村長浜の長浜棒

長浜区の長浜棒は役員歓迎会、敬老会、生年合同祝にて演武を行う。最近では令和元（2019）年1月に亥年生年合同祝が行われた。その由来は、琉球国時代、御殿勤めをしていた山内ウメーが「赤坂棒」、「山内暗夜」を人々に指導した。明治時代には津堅島から津堅繁多小ウスメーが「津堅棒」、「砂力チ棒」、「カジチ棒」を伝えた。また浦添から浦添カントーが「浦添小湾ディー」を指導した。

継承のための組織としては、長浜伝統芸能保存会（自治会長が会長）において棒術部長がまとめている。男性自治会員であれば誰でも出演が可能である。催し物や出演依頼があれば、2ヶ月前から週2回程度練習を行う。

演武構成は、グーヤー巻（集団演技 左巻円陣→右巻に円陣を解く）、長刀2人「先ふい」、その後13組の組棒演技、最後にホラ、鉦、スリー太鼓で終了する。

鳴物は、ドラ、鉦、太鼓、ホラ貝で構成される。

キ 北谷町下勢戸の棒術

下勢戸区では、生年祝いのカジマヤー（一般的には旧9/7）の他、祝賀行事や出演依頼の際に棒術を演武する。下勢戸郷友会では、チンク（金鼓）隊と棒術の呼び方がある。2人一組の組み手（組棒）を複数組が順番に行う。六尺棒を使用する。

棒術は昭和46（1971）年に下勢戸で初めてカジマヤーを迎えた方の祝賀行事として行われることになり、読谷村波平のハンジャボーを教わった。指導を受けたのは8名である。元の波平ハンジャボーの由来は、約290年前、津堅アカナーという若者が波平に奉公し、棒術を伝えたと言われる。また一説として津堅島の棒術は、ペークーガマに隠遁していた津堅親方に唐手と棒術を学んだという伝承がある。

伝承の組織は戦後、字下勢戸会から昭和30（1955）年に下勢戸部落会となり、下勢戸郷友会が昭和51（1976）年に下勢戸芸能保存会を結成した。出演者は、棒は基本的に青壮年が担当する。子供の場合は型を演武する。練習は現在、本番の2、3ヶ月前から行う。

演武の構成は、カジマヤーの祝賀行列ではチンク隊（ボラ法螺、ソーグ鉦、テーク締太鼓・大太鼓）の次に隊列を組んで行進する。七箇所十字路で披露する。楽器はボラ（法螺）、ソーグ（鉦）、テーク（締太鼓・大太鼓）を務める。演奏者数は流動的である。

ク 北中城村大城・荻堂の旗スガシー

大城区と荻堂区の合同行事である旗スガシーはチョーデーボー（兄弟棒）とも言われる。荻堂自治会と大城自治会代表による約束組棒（兄弟棒）である。演武は旧7月17日に行われる。令和4（2022）年度は旗スガシーが中止となり、拝所でウガンを実施した。以前は喧嘩棒と呼ばれるほど真剣に対決し、アザができるほどであった。現在では型と約束棒となっている。

練習は平成22（2010）年頃から、地域の空手家から指導を受けて10日間練習する。演武としては一人棒（個人形）、二人棒（約束組棒）がある。楽器はドラ鐘と指笛を使う。

4 その他の武術的演武・芸能

ここでは、その他の武術的身体動作を含む芸能・演武が行われる地域について紹介する。

ア 北中城村島袋の「赤木名節」

島袋区の「赤木名節」は、琉球国時代から伝わる二才踊りで、1番～4番までの振りは空手の異なる受けの型を取り入れている。演武の機会は1月新年会、9月敬老会、10月島袋まつり、北中城まつりなどである。その由来は、比嘉巖（大正12年生）によると、首里の踊奉行から各地のシティ（上手な人）たちが習ってきたという。

伝承としては、戦後しばらく途絶えていたが、昭和53（1978）年北中城まつりへの出演をきっかけに復活した。2人1組での演舞から世代交代で踊り手が3名から6名の踊り手になった。現在は島袋民俗芸能保存会（会員15人）で継承している。楽器は、地方6名が務める。

イ うるま市与那城のジューグスージ

与那城区では、旧1月2日に行われるジューグスージ（15歳祝い）において、空手の方を真似て各自創作の型を演武する。場所はヌンドウンチ（ノロ殿内）隣接のノロ御殿前（屋外）である。数え15歳の男子が対象となり、成人と看做す通過儀礼として行われる。各自が空手の方を真似たもの（各自のオリジナルをコーサンクーと呼ぶ）を関係者の前で披露する。ただし空手のコーサンクーではない。平成23（2011）年から少子化の影響で中断している。伝承組織は、昔は宮城自治会だったが現在は各家庭単位である。上原区、池味区や伊計区でも同様の行事があり、桃原区へも伝わった。

※文献名を記していない事例については、「令和3～4年度沖縄空手ユネスコ登録推進事業学術研究連絡会」による調査資料に基づいている。

著：久万田 晋

第3節 南部地区

1 詳細調査報告① 南城市玉城仲村渠綱曳き

【行事名・開催日・開催場所】

令和6年度の「仲村渠綱曳き」は、8月3日（土）（旧暦6月29日）午後7時から開催された。後述するように、仲村渠綱曳きは毎年旧暦6月25日におこなわれるアミシ御願の後におこなうのが本来の姿であったが、なるべく多くの参加者が集まるように、近年ではアミシ御願実施後の週末に開催されるようになっている。開催場所は仲村渠児童館前の広場である。児童館の後方は高台になっていて、そこには「ニードゥクル」と呼ばれる拝所が存在する。

仲村渠集落では綱曳きの綱を毎年作り替えており、綱曳き開催予定日の2週間前の週末に、住民総出で綱編みがおこなわれる。綱を編むための藁の一部には、仲村渠の稲作を復活させようと、近年青年達を中心に結成された「稲作会」が栽培した稲藁が用いられ、足りない分の稲藁は金武の農家から購入している。綱曳き終了後の綱は、志喜屋集落に譲られるという。

【関連祭祀儀礼】

仲村渠綱曳きに先だってはアミシ御願がおこなわれる。仲村渠集落の南側には浜川御嶽、受水走水、エーバンタ嶽、藪薩御嶽等が点在する「藪薩の浦原」と呼ばれる一大聖地集中地となっている〔湧上一九七七：三七～三八〕。また集落内や周辺にも、アサギの神屋や奥武の殿やミントングスクといった拝所や、クダカガーや番屋ヌカーといった井泉が多く存在する〔玉城村字仲村渠祭祀委員会編 一九九〇〕。まず午前5時頃に、区長が山開けの鐘を鳴らす。そして午後2時頃、村の有志が児童館に集まり、青年の組と壮年の組に分かれて上記の聖地や拝所や井泉を巡拝する。多くの聖地や井泉を巡拝するため、1時間半～2時間近くかかる。巡拝を終えると、一行はニードゥクルに集まる。現在のニードゥクルは一坪ほどのコンクリート製の小さな社の中に香炉が置かれているだけであるが、戦前は、石積と草葺き屋根でできた3坪ほどの建物で、その中に半球状の石と火ヌ神が祀られていたという〔玉城村字仲村渠祭祀委員会編 一九九〇：六〇〕。ニードゥクルの前に、綱曳きの際に用いる法螺貝や銅鑼、金鼓（チンク）、小太鼓、棒などを並べ、全員でニードゥクルを拝む。その後、ニードゥクル前の広場に藁を敷き、その上に上記の楽器を並べて、上組、下組それぞれが、使用する楽器を選ぶ。これは良い音の出る楽器を選んで、ガーエーの際に有利になるようにするためだという。楽器が決まると、楽器担当の者は楽器を、棒担当の者は棒を手にして、囃しながらミントンの神屋に向かう。神屋に到着すると、神屋の庭で円になって、棒を振り楽器を打ち鳴らしてガーエーをおこなう。ガーエーの後、ミントンの神屋を参加者全員で拝んで、儀礼は終了する。その後、夕方から綱曳きとなる。

【棒の材料と演舞の種類】

棒の材料については不明。演舞並びに棒術の出番については、以下、綱引き行事の流れに沿って記述していく。

夜7時頃、全体ガーエーが始まる。全体ガーエーは、楽器を持った壮年たちが一列、棒を持った青年たちが一列になり、二列が向かい合う形でおこなわれる（写真3-3-1）。壮年たちが法螺貝や銅鑼、チンク、太鼓を打ち鳴らすと、青年たちが棒を体の正面に垂直に立てて回しながら、「スイヤースイ」と応じるというのが基本のかたちとなる。そのうえで、時々演奏の調子が変わり、楽器を持った壮年たちと棒を持った青年たちが中央に集まってより高く楽器と棒を掲げてながら「サー、サー、サー、サー、サー、サー、サー」と囃し合う。演奏のリズムをとったり変調のタイミングを操るはチンクの役目であり、それだけ難しのために、「チンクを持つ人が花形だ」と言われている。この際のガーエー棒は動作も単純で簡単なため、希望者であればだれでも参加できる。30分ほどガーエーを続けた後、今度は女性たちが楽器の列と棒の列の間に入ってくる。女性たちは

手に小太鼓を持っていて、楽器に合わせてそれを叩く。太鼓を持たず手踊りをする女性もいる。そうして計1時間ほど全体ガーエーがおこなわれる。

全体ガーエーの後には、棒術の演舞がおこなわれる。演舞のための特別な舞台はなく、先程全体ガーエーがおこなわれていた場所でおこなわれる。演舞はまず、上組・下組それぞれ3人ほどが出てきて一列に並び、全員で動作を合わせて同じ型を披露する。その後、上組、下組の演者が交互に出てきて、型を披露するかたちでおこなわれる(写真3-3-2)。型は4つあると言われているが、それぞれに特別な名前はついておらず、「一番の型」「二番の型」などと呼ばれている。仲村渠の棒術は全て個人が一人で演舞するかたちで、複数人が向かい合って実際に棒を打ち交わしたりすることはない。

棒術演舞の後には、スーマチ棒がおこなわれる。このときは小学校高学年～30代くらいまでの男性が一斉に参加し、総勢20人ほどの人数になる。児童館前の広場の東側と西側に上組と下組の旗頭がそれぞれ立てられ、その周囲を棒を持った青年たちの列が周回したり渦を巻いたりしながら行進する(写真3-3-3)。スーマチ棒の際には、人がすれ違う際に棒の下部分をわざと当てて音を出す。スーマチ棒の最中にも銅鑼、チンク、太鼓が打ち鳴らされ、全体のリズムを取る。

スーマチ棒が終わると、上組・下組の青年たちと旗頭そして住民たちは、それぞれの綱が置かれている広場の東側と西側に移動する(東側に上組の綱、西側に下組の綱が置かれる)。青年たちは旗頭を囲み、棒を体の正面に垂直に立てて回しながら、楽器の音色に合わせて再びガーエーをおこなう。

ある程度ガーエーがおこなわれた頃に、テービー(松明)に火が付けられる。テービーを持つのは、ある程度年をとった男性の役割であるという。青年たちと住民たちは自分たちの綱を担いで広場の中央まで綱を運ぶ。この時、ただ綱を運搬するだけではなく、法螺貝や銅鑼、チンク、太鼓を持った人々が先頭に立って楽器を打ち鳴らし、そのリズムに合わせてながら行進がおこなわれる。テービーはさらにその先に立って、行列の行く先を照らす役割を果たす。広場の中程に差し掛かったところで、上組・下組それぞれから1名ずつ青年が出てきて、行列の前で棒術の演舞を披露する。さらに行列が進んで広場の中央まで来たところで、改めて上組・下組から1名ずつ青年が出てきて、広場に書かれた中央線を挟んで向かい合って棒術を演舞する(ただしこの際も棒を打ち交わすことはしない)。

棒術演舞が終わると、いよいよ綱曳きとなる。上組・下組双方が綱を中央に運ぶ。このとき、双方の青年たちは棒を使って綱の頭を上げて接合しやすくする(写真3-3-4)。雌綱の頭部に雄綱の頭部が通され、カナチ棒が挿入されて綱の接合が完成するやいなや、区長の号令で一斉に両側から綱が引かれる。勝負はだいたい1分ほどで決する。勝負が決まると、勝った側の青年たちは円になって棒を突き上げながら、氣勢を上げて勝利を祝う。その周囲では壮年たちが楽器を打ち鳴らして囃し、女性たちは小太鼓を叩き手踊りして歓びを表現する。綱曳きは2回おこなわれる。

綱曳き行事の最後には、カナチ焼きがおこなわれる。綱の頭部の一部を切り取って、数人の青年たちがそれを持って集落の西に向かって歩いていく。集落の西の外れまでくると、そこで切り取ってきた綱の頭部の一部をテービーで焼き捨て、泡盛を献げて手を合わせて拝む。こうして綱曳き行事は終了する。

【由緒・来歴】

仲村渠の棒術は、メーカタ棒に由来があるという。元々は大城マサさんという男性(明治33年生)が、字玉城の屋号ミーヤという家からメーカタ棒を習ってきて、祝いの席などで演舞していたという。それが今から30年ほど前に、継承者を育成しなければならないという声上がり、それならば綱曳でも棒術を披露しようということになって、綱曳行事の中に取り入れられたという経緯がある。さらにその後、綱曳行事の中にスーマチ棒が取り入れられたという。ちなみに現在でもメーカタ棒は継承者の青年たちによって、敬老会などの場で披露されている。

【棒組の構成員】

綱曳き行事の中では上組・下組の区別があり、それぞれの組に所属する青年が別々に棒術を披露することはあるが、これは集落内のメンバーシップに基づく区別であって、それ以外に特別に「棒組」というものは存在しない。区別があるとすれば、メーカタ棒を習得して棒術演舞や棒術指導の際に主導的役割を果たす継承者の青年と、継承者の青年から手ほどきを受けて綱曳き行事などの当日のみ演舞を披露する一般の青年という区別である。

【棒の衣装・演舞時の音楽】

衣装は、白い長ズボン（特に指定は無く、白っぽいズボンであれば何でも良い）に、区で作った揃いの長袖Tシャツを着る。そして紫色のタスキを締める。頭には上組は赤、下組は白の鉢巻きを締める。綱曳きでの棒術演舞の際に音楽の演奏はないが、後述のメーカタ棒の際には唄三線が演奏される。

【練習状況】

綱曳きの際の棒術演舞に参加する一般の青年は、綱曳き開催予定日の一週間ほど前から数回、児童館前の広場において、メーカタ棒継承者から指導を受けながら練習をおこなう（写真3-3-5）。スーマチ棒に関しては、基本的には列の前の人の動きに追従していけば良いので、事前の練習は特におこなわれない。

メーカタ棒継承者の一人の男性によると、メーカタ棒は唄三線に合わせる必要があるため、習得が難しいのだという。そのためきちんと型を習得している継承者は、各世代に数人ずつしかいない。継承者の青年は、先輩の継承者の青年から指導を受けたり、ビデオを参考したりしながら練習をおこなっているという。この練習は不定期である。

【コロナ感染症等をはじめ行事継承の今日的課題】

仲村渠集落の世帯数および人口は、令和6年6月現在で106世帯219人となっていて（南城市ホームページ）、南城市の中でも人口の少ない集落の1つに数えられる。背景には過疎化と高齢化があるが、その理由の一つは、働き口を求めて集落外に出て行った若者が結婚などを契機に現地に居を構えそのまま定着してしまうことがあるという。現在40代のある男性は、6人いた同級生のうち、集落に残っているのは自分一人だと語る。そのため、毎年の綱作り作業のための人員を集めることが年々難しくなっており、また、仕事や学業の都合で棒術の練習に参加する青少年が減少してきて、綱曳き行事で棒術を披露する演者を確保することにも苦労するようになっている。こうした困難な状況は、2020～2022年の3年間、コロナ禍のために綱曳き行事が中断されて以降、ますます顕著になっている。

一方で好転の兆しも見えている。数年前から、集落の北東側にある区所有の土地を住宅地として分譲し始めたことによって外部からの移住者が増え、仲村渠の人口は最近はある一定数を維持することに成功している。そうした移住者は若い夫婦である場合が多く、子ども連れで移り住んでくることで、集落の若返りにも寄与しているという。そうした移住者の人々が、元住民との関係構築のため、あるいは子どもたちを楽しませるため、積極的に綱曳き行事の準備や実行、行事の現場に参加するようになっている。最近仲村渠集落の外れにオープンしたインド料理店の外国人従業員たちが全体ガトーエーに参加するということもみられた（写真3-3-6）。移住者と元住民との関係構築の場という新たな機能が、綱曳き行事に生じてきている。同様に、様々な理由から集落を出ていった元住民たちも、綱曳き行事に合わせて帰ってきて、当日の全体ガトーエーやスーマチ棒に参加したり、踊り手や観客として行事を盛り上げたりするなど、行事成功のために欠くべからざる存在となっている。その意味では仲村渠の綱曳き行事は、集落から出ていった元住民と現在集落に住んでいる元住民同士の繋がりを維持する役割を果たしているとも言えるだろう。



写真 3-3-1 網曳き前のガーエー



写真 3-3-2 棒術の演武



写真 3-3-3 スーマチ棒



写真 3-3-4 雄網・雌網の接合



写真 3-3-5 棒術練習の様子



写真 3-3-6 全体ガーエーに参加する移住者の人々

著：神谷 智昭

【引用文献】

玉城村字仲村渠祭祀委員会編 一九九〇『ミントン』 仲村渠祭祀資料No.1 玉城村字仲村渠
湧上元雄 一九七七「「藪薩の浦原」考」『琉球大学法文学部紀要』第二一号 琉球大学法文学部
南城市ホームページ (<<https://www.city.nanjo.okinawa.jp/shisei/jichikai/tamagusuku/nakandakari/>>)

2 詳細調査報告② 八重瀬町字富盛

【行事名・開催日・開催場所】

八重瀬町字富盛の棒術は、2023（令和5）年10月1日曜日に富盛公民館前通りと隣接する広場で十五夜行事にて演武された。十数年前までは、平日であれ旧暦8月15日に合わせて行っていたが、現在は旧暦8月15日直後の日曜日に開催している。富盛の十五夜行事の特徴は、集落を南（フェー）と北（ニシ）に2分し、それぞれの出し物として演目が繰り広げられる。舞踊については現在も南北で分けて演目を展開するが、棒術は南北がひとつになり、公民館前広場にて演武と棒巻が行われている。戦前は、南の棒人衆は勢理城に集合し、棒術の演武を奉納してから祭りに参加するしきたりになっていた。

【関連祭祀儀礼】

八重瀬町字富盛の旧暦8月15日の八月十五夜行事である豊年祭（17世紀頃）の中で演じられる演目には唐人行列・大和人行列（いずれも町指定文化財）がある。その起源は不詳ながら口伝では17世紀頃から十五夜で踊られていた。豊年祭は村の豊作を祈願し行われる。北と南の各出発場所から旗頭、金鼓隊、棒術衆、シタク、芸能衆、女行列の順で隊列を成し豊年祭の遊び庭を目指して進む。遊び庭に結集した字民は八重瀬の御嶽に向かって奉納と感謝を捧げ、無病息災を祈願した後に奉納の芸能が始まる。北・南の出し物として芸能が演じられ現在まで継承されている。行事の中での道ジュネーイにおいて、旗頭、今年カーラー、大和人行列、唐人行列、大なぎなた、棒術、棒巻、女行列、綱引きの順序で演武する。唐人行列の中で、中国の役人一行の行列の様子を再現した演出構成があり、その中で按司の所望により二人体制で組手を行う場面がある。

【棒の材料と演武（舞）の種類】

南北それぞれ型をもっているが、対抗意識が強く同じ名称の型でも相手との違いを強調している。以前は、稽古も相手に見せないよう別々に行っていたという。棒術の型は、以前は以下のとおり南北に分かれて構成されていた。現在は1つになって行っている。

南：①邪斬り（ジャジリ）邪気払い ②ハジリ ③イリクマー ④牛若 ⑤サヤと棒 ⑥一方斬り ⑦四方斬り ⑧六方斬り ⑨不明 ⑩シー棒 ⑪棒巻（ウラ巻）現在は、①②③④⑥⑦⑩を演舞している。

北：①邪斬り（ジャジリ）邪気払い ②ハジリ ③タチヌ手 ④エイの手 ⑤サヤと棒 ⑥トウンボー ⑦佐久川のクン ⑧津堅手 ⑨ティンペー ⑩シー棒 ⑪棒巻（グーヤー巻）現在は、①②③④⑧⑩⑪を演舞している。

棒巻（ボウマチ）は、子どもと年寄りを除く男性全体で行う。南と北に分かれて隊列をなし、それぞれから一列で入場しグーヤー巻でひとつの円形になり棒巻を行う。演武に用いる楽器の内容と呼称について、道ジュネーイの棒術の際は、アナウンス（司会）が演武者や型の紹介を行いドラ鐘（カニ）は演舞者に合わせて打つ。カニ役は棒術の型や隊列のことを把握している方が行い指揮役を担う。棒巻の時には、カニ役が演舞者を囲むように配置される。棒の材質は桤材を使用し、六尺棒、四尺棒、三尺棒の種類がある。用具の調達には県内の武具専門店から購入している。富盛棒術の衣裳は、棒巻の先導は赤色の打掛、白黒脚絆、紫サージ、棒人衆は上下白衣裳に白黒脚絆、紫のタスキ、紫サージ。シー棒は胸に「富盛棒術保存会」と書かれた黒空手着上下を着用、頭に紫サージ、足のすねに白黒脚絆を着用。鐘打ちは青色の打掛、白黒脚絆、白上下に紫タスキ、紫サージ。いずれも履物は、白の運動靴を履く。衣裳・棒、他の用具の管理について、紫サージと白黒脚絆は個人管理と公民館管理がある。打掛は公民館で管理する。棒などの用具の修繕や製作、購入の方法は、個人の予算で購入、修繕したものと伝統芸能保存会予算で購入、修繕したものがある。

【由緒・来歴】

富盛の棒術は、村を守るために実戦ながらの訓練のなかから編み出されたと伝えられている。戦後、生活様式が多様化し、集落の伝承行事や生活習慣が次第に姿を消した。このままでは消滅してしまうのではないかと危機感が芽生え保存会を結成、月二回の稽古日を設けて伝承保存に取り組んだ。戦前の富盛には保存会などはなく、十五夜行事の練習に入る前に、師匠が各演目の配役や役割分担を決めた。復帰後、1986（昭和 61）年に富盛棒術保存会、1987（昭和 62）年に富盛伝統芸能組踊保存会、1988（昭和 63）年に富盛伝統芸能保存会が結成され、2001（平成 13）年には 3 つの保存会を 1 つに統一し名称を、富盛「十五夜祭り」伝統芸能保存会と改称した。

【棒演武・組織の構成員】

棒術の出演条件は、富盛在住、富盛出身者であること。戦前は 20 歳位から 40 歳までの男子、40 組（80 人）程度で行っていた。現在は、小学 4 年生以下の子ども、年寄りを除く男子のみで行っている。

【練習状況】

稽古のスケジュールについても戦前は、旧暦の 8 月 10 日に主だった人々が集まって各種出演者の人選をして、翌日の 11 日からは午前から猛特訓で、練習期間は僅か 3 ～ 4 日間で本番を迎えていた。現在は、本番の 2 週間前から練習を開始し、仕事や学校を終えてからの夕方などに行っている。棒の練習場所は、公民館前広場にて行っている。

【コロナ感染症等をはじめ行事継承の今日的課題】

後継者の育成やドラ鐘や棒を購入する予算の確保が課題である。コロナで影響を受けたこととしては、十五夜祭りが 3 年間中止となったため、指導や演武が停滞してしまった。

【引用文献】

『甦る伝統芸能 20 周年記念誌』（富盛伝統芸能保存会／2008（平成 20 年）8p.13p.26p.

『甦る十五夜綱』（企画／八重瀬町 製作／海燕社）地域創造 2008（平成 20 年）



写真3-3-7 南のシー棒



写真3-3-8 南のシー棒



写真3-3-9 棒巻



写真3-3-10 ハジリ



写真3-3-11 四方斬り

著：神谷 武史

3 詳細調査報告③ 八重瀬町字志多伯

【行事名・開催日・開催場所】

志多伯の調査を2024（令和6）年2月20日の聞き取りと9月17日火曜日に開催された獅子加那志豊年祭（シーシガナシホウネンサイ）に行った。豊年祭では、道ズネー並びに豊年祭舞台前広場における巻棒、舞台中に組棒が行われた。豊年祭の道ズネーは、獅子を祀る野呂殿内、根屋、4つの門中本家など8か所の拝所や御嶽を廻る。豊年祭のメイン会場は、志多伯西方にある馬場にて行われた。

【関連祭祀儀礼】

志多伯の棒術は、志多伯年中行事である旧暦6月15日のウマチー綱曳き、旧暦7月15日の七月綱、獅子加那志豊年祭（シーシガナシホウネンサイ）（旧暦8月15日、16日）、字敬老会にて行われる。獅子加那志豊年祭は、人の年忌法要周期と同様で1年忌、3年忌、7、13、25、33年忌のあたり年に行い、翌年からまた1年忌と繰り返す。その年の旧暦8月15日、16日に字民総出で実施される。年忌年以外の旧暦8月15日は獅子拝みが行われる。2024年は、戦後3巡目の13年忌豊年祭が9月17日盛大に開催された。旧暦8月16日にあたる2日目は、台風の影響により中止となった。次期は、2036年の25年忌豊年祭に開催される。豊年祭当日は、行事の主軸である獅子加那志を獅子屋から迎え、各拝所や門中を廻る道ズネーや豊年祭のメイン会場である馬場において巻棒と組棒、舞方が行われる。舞方は琉球古典音楽のかぎやで風節の演奏に合わせた棒術の舞で、獅子舞の前座に座清めとして演じられる。また志多伯棒術の演武構成の特徴として組棒や型の演武を、琉球音楽と融合した武の舞がある。その他、琉球舞踊や組踊、芝居、狂言なども継承されており、組踊の場面にて棒術を取り入れた演出もある。綱引きは、旧6月15日（ウマチー綱曳き）、旧7月15日（七月綱）の年に2回馬場にて行われ、そのなかで棒術やエイサーが1回目の綱曳きの後に披露される。主に子どもたちと志多伯獅子舞棒術保存会会員が演武する。豊年祭がない年の9月には字志多伯敬老会が開催され、その中でも複製獅子による獅子舞の演舞や棒術が披露される。

また、1980（昭和55）年から1990年（平成2）年までの間、地元の小学校運動会において全校生徒で行う綱引きの応援合戦にて志多伯出身の5～6年生男子が棒術を演武した。同町内にある高校の体育祭では120名による巻棒や集団演武の指導を担った。コロナ明けの2022（令和3）年には同小学校運動会にて学年毎の集団演武において志多伯棒術が採用され指導を担った。

【棒の材料と演武（舞）の種類】

志多伯の棒術では組棒や個人演武に六尺棒、サイ、トウンファー、ティンバー、ヌンティー、槍、長刀、エーク（櫓）、クワ、ヌンチャク、鎌などの古武道具を取り入れている。演武構成は、かぎやで風節の演奏に合わせて演舞する舞方、団体演武の型として「周氏の棍」「津堅の棍」「大掛の棍」「朝雲の棍」「佐久川の棍」「大屯棒」「添石の棍」がある。組棒は実戦的な戦いを想定した約束組手として構成される。双方六尺棒を持ち打ちあう二人棒、サイ対棒、トウンファー対棒、ティンバー対ヌンティー、エーク手、エーク対クワ、長刀対槍、3名が六尺棒を打ちあう三人棒、琉球古典音楽揚作田節の演奏で演舞する長刀舞、ヌンチャク、鎌の手などがある。舞方は古典音楽のかぎやで風節（歌詞：豊なる御代のしるしあらわれて 雨露の恵み 時もたがぬ）の曲に乗せて演じられる。また武の舞（ぶのまい）と称して多彩な古武道具による組技の演武と琉球音楽（主に三線、太鼓、鐘、法螺貝）を組み合わせた構成は、舞台芸能としての新たな演出である。獅子舞においても、前役の頭を支える構え方は空手の型「平安（ピンアン）」の型から取り入れた動作と伝えられている。演武に関する音楽や楽器については鐘（2名）、法螺貝（1～2名）、鉦鼓（1～2名）、太鼓（1名）が主体となり、「武の舞」の時は三線（2～3名）が加わる構成で行っている。

豊年祭の巻棒（一般参加者）の衣装は、豊年祭黒Tシャツ、黒ズボン、白黒脚絆、黒サージ、白タスキ、

白帯を着用する。保存会は、黒空手着（上下）、黒サージ、白黒脚絆、白タスキ、白帯を着用する。鐘打ちも同様である。いずれも履物は、運動靴か地下足袋で舞台では裸足で演武する。保存会が演目として「武の舞」（琉球音楽と融合した演出）を演じる際は、黒空手着上下に武の舞用衣装と入道頭巾、黒帯を着用する。棒をはじめとする古武道具、衣装管理は保存会で行い、公民館に保管する。また衣装の変遷について戦前は不明、戦後から1993（平成5）年までは白上下、紫タスキ、紫サージで個人所有であった。現在は、衣裳や道具の管理は保存会が基本行うが、会員個人で衣裳や棒など武具を所有しているものもある。一般参加者の白黒脚絆、サージ、タスキ、棒は公民館が所有し、参加者は公民館から配布された黒色の豊年祭Tシャツを着用する。衣裳・棒、他の用具の修繕や製作、購入は保存会会費や字補助金を活用している。これまで国や県の文化保存関連の助成金を活用し整備した道具もある。

棒の材質は、復帰後しばらくは県産桧材を使用していた。近隣に木工所があり、組棒用や個人演武用を製作依頼し購入していた。近年では、木工所もなくなり棒以外の武具も含め県内にある武具専門店やネット販売で購入している。

【由緒・来歴】

志多伯棒術の由来については、昭和初期から中期ごろまでは家庭ごとに棒術の型を持ち、その直系の子孫のみ伝授する環境であった。現在まで継がれている家系は、舞方の型を所有する1か所のみである。棒術や組棒については、戦前からの伝統的な型が途絶えたため、1975（昭和50）年当時、沖縄古武道道場に通う3～4名の志多伯出身者が、道場の師匠より基本型「周氏の棍」の地域での活用の許可を得て豊年祭や綱引きなど字行事で指導し現在に至る。

【棒演武・組織の構成員】

1997（平成9）年には「志多伯獅子舞棒術保存会」が組織された。棒術や獅子舞の主な活動人員は10代後半から40代で、鳴り物や演奏、また理事役員には60代から70代と幅広い世代が関わっている。1993（平成3）年に開催された13年忌豊年祭の後、次期25年忌豊年祭まで12年の空白期間に継承が途絶えることを懸念した高校生、中学生が自主的に集い棒術愛好会を結成したのが始まりで、その後、字志多伯では若者の文化活動支援組織として獅子舞棒術保存会を結成した。

【練習状況】

通常の稽古は、毎週木曜日と土曜日の夜19時30分から22時まで志多伯公民館で行われている。保存会活動の一環として字外からの出演依頼など、演武機会をつくることで後継者育成や指導者養成の場となっている。豊年祭の開催年においては、4月の字総会後、豊年祭実行委員会が設立され約3～4ヶ月の期間、棒術や芝居、舞踊などの稽古が行われる。棒術は馬場、それ以外の演目は公民館で行われ、一般参加の巻棒については豊年祭本番の2ヶ月前から実行委員により各世帯に呼び掛けが始まり、1ヶ月前から全体練習が3回ほど行われる。

【コロナ感染症をはじめ行事継承の今日的課題】

コロナ禍において保存会3代目となる現会長が、公民館にて沖縄古武道志多伯道場として開設したところ女性や子どもの参加が増えた。道場と保存会活動が融合し、これまで男性会員のみであった保存会に女性も加わり活動が再開された。コロナ禍を通じて女性や子どもたちの参加が増えたことは大きな収穫となった。また稽古場である志多伯公民館の老朽化に伴う建て替えなども字の課題であり、保存会活動の拠点施設保全についても関わりを持っていく予定である。戦後直後までは豊年祭には男性のみ参加であった規則を緩和し、時代に沿った体制づくりが求められている。2024（令和6）年に開催された13年忌豊年祭には、外部からの参加希

望者の受入れや女性による棒術の出演も認めた。獅子舞に関しては未だ原則男性としている。

【引用文献】

- ・『志多伯の獅子加那志豊年祭一年忌行事の八月十五夜豊年祭一』（上）
（志多伯伝統文化保存会／2010（平成22）年ふるさと文化再興事業）
- ・『志多伯の獅子加那志豊年祭一年忌行事の八月十五夜豊年祭一』（下）
（志多伯伝統文化保存会／2011（平成23）年ふるさと文化再興事業）
- ・『獅子加那志が鎮まる村』（企画／八重瀬町 製作／海燕社）
地域創造（2011（平成23）年度映像記録保存事業）



写真3-3-12 舞方



写真3-3-13 周氏の棍



写真3-3-14 巻棒



写真3-3-15 クワ対エーク

著：神谷 武史

4 詳細調査報告④ 八重瀬町字東風平

【行事名・開催日・開催場所】

東風平の調査を2024（令和6）年9月21日に行われた豊年祭で行った。東風平棒術は、豊年祭（旧暦8月15日・16日の2日間）にて演武披露される。近年は、旧暦8月15日直後の土日に開催している。豊年祭当日、旗頭・獅子・祝女・字役員・長寿会・ミルク・芸能衆・棒人衆の順で村屋（公民館）から「上大城」「ヌンドウンチ」「氏神」「城」「佐久間」「獅子脚洗井泉」の各拝所を順に巡って後、馬場の舞台前で演武を行う。地元での呼称は、「棒」（ポー）と呼ばれ、演武される型は西（イリ）と東（アガリ）に分類されている。

【関連祭祀儀礼】

行事は、村の豊年、区民の健康祈願を目的に行われてきた。加えて現在では区民の親睦を深め、稽古期間をとおした世代間交流によるコミュニティー力強化の面もある。字東風平では毎年選出される「十人頭（ジュウニンガシラ）」と呼ばれる役職と、字役員が連携して執り行われる。

【棒の材料と演武（舞）の種類】

西：フーチリ、サク（尺）棒、ワタジリ（腹斬り）、ウラワタヂ」リ、ピンアン、クーサンクー、スナキリ、ティンベー、三人棒

東：フーチリ、サク棒、ワタヂリ（腹斬り）、クミダ棒、チキン（津堅）手、ピンアン、クンヌ手、トゥン棒、ウシワカ（牛若）、三人棒

上記以外に、現在は演じられていない型でエークと棒、サイと棒、トゥンファーと棒、ヤマチ棒、シヌビグサンがあるが、復活の目途は立っていない。

棒巻（ボウマチ）は、西・東の演武者が合同で一列になり行列し、その後二列に分かれ「ヒーヤーイ・ユイ」の掛け声を合図に全員でヘーイ棒と呼ばれる三手ほどの所作を行う。再び一列になり円形の棒巻（ボウマチ）へと至る。巻が解かれ行列になったところで棒巻が一か所に退場する。棒巻の後、舞台に向かって上手側から演武者が登場し、舞台前で棒（型の演武や組棒）が披露される。最初は、西東双方から1名ずつ出て合同で組棒「フーチリ（封切り）」が披露される。その後、西東それぞれで、班単位、青年会、保存会という順で演武が1時間ほど披露される。また、舞台幕開けの演目である舞方棒は、琉球古典音楽のかぎやで風の曲にのせて演じる。棒術の演武の際は、ドラ鐘を演武に合わせて緩急をつけて鳴らす。

また舞方棒については、歌三線による演奏で曲はかぎやで風節で、歌詞は「石なぐぬ石ぬ 大瀬なるまでも 御掛けぶせみしより 我御主加那志」が歌われる。

東風平棒術の衣裳は、保存会会員は胸に「東風平棒術保存会」と書かれた黒空手着の上着に白空手着ズボン、頭には黒サージ、布製の白タスキを胸前でクロスするように掛けて背中で結ぶ。腰にも同様の白帯を巻き、足のすねには白黒脚絆を着用する。棒巻などを先導する保安員は、白上下の運動着に黒タスキ、頭には手拭はちまき、足には白黒脚絆を着用する。棒や古武道具の種類は、三尺棒（素・槍・長刀）、四尺棒（長刀）、六尺棒、七尺棒（槍・長刀）、ティンベー、サイなどがある。六尺棒以外は特注で製作される。

それら衣裳や棒など用具の管理は会員個々人が保管する。棒の調達は、以前は個々人で購入していたが現在は、保存会を通じて県内の武具専門店で購入している。

【由緒・来歴】

太平洋戦争の戦時中は中断したが、終戦後落ち着いてきた1947（昭和22）年以降に再興されて現在に至る。棒術にまつわる由来として、東風平の棒術は約250年余の歴史があるといわれ、オーエーティー（喧嘩棒）

といわれ、迫力と力強さが持ち味である。フーチリは西と東の代表（マチ頭）が封を切るということで、1 番目に演武される型である。戦前から豊年祭の拝みを終えた後、年少から高年の男子により披露されてきた。

東風平の舞方棒は、琉球史劇「大新城忠勇伝」に登場する琉球王朝時代の王位継承の件で、大新城親方と津堅親方の対立に勝利した大新城親方の心情をイメージして創作されたと言われている。舞方の特徴は、前に進むときに足を揚げて進むところにある。これは大新城親方が津堅親方に対して怒りを爆発させその首根っこを踏みつけうつぶんをはらす意の動作であり、心晴れ晴れとした心境から豊年祭以外でも祝いの座などで演じられている。

【棒演武・組織の構成員】

棒術に関する組織として字東風平は 1969（昭和 44）年に「字東風平棒術保存会」を設立した。棒術保存会が結成される以前は、それぞれの地域（班）の経験豊富な中高年の男性が指導していた。フーチリ棒や三人棒などの役目棒については、さらに経験豊富な中高年男性が公民館に集まり演武指導を行っていた。現在は棒術保存会がその役割を担っている。

【練習状況】

稽古については、豊年祭が土日開催となった現在は本番の 2 週間前から実施している。旧暦 8 月 15 日に豊年祭を実施していた頃は、旧暦 8 月 1 日から稽古を行っていた。稽古場所は村屋（公民館）前広場と隣接する馬場で行われる。集落以外での演武について、保存会の活動を中心として出演（演武）することがある。これまで主に海洋博記念公園、首里城公園、やえせまつり、八重瀬民俗芸能公演（国立劇場）、棒術フェスティバル（町主催）、棒術シンポジウム（県文化協会主催）などに出演してきた。字東風平棒術保存会は、八重瀬町民俗芸能連絡協議会に所属しており、町や県などの出演依頼を受けることもある。集落外での出演に関しては、時間の関係上演武時間や演武数には制限があるためその都度人選する。

【引用文献】

- ・『シーサーケラズ東風平神獅子とジュニン頭』（企画／八重瀬町製作／海燕社）地域創造 2024（令和 6）年度映像記録保存事業）



写真3-3-16 フーチリ



写真3-3-17 西のウラワタジリ四方切り



写真3-3-18 テンペー



写真3-3-19 西の三人棒

著：神谷 武史

5 詳細調査報告⑤ 南風原町字津嘉山

【行事名・開催日・開催場所】

津嘉山棒術の調査を2024(令和六)年7月27日土曜日に開催された大綱曳きと9月28日の聞き取りで行った。津嘉山の綱曳きは、アミシの御願(旧暦6月26日)として毎年行われる御願綱と、10年に一度行われるウーンナ(大綱曳き)がある。今回は、コロナの影響などで開催が遅れ2003年以來の21年ぶりウーンナが開催された。大綱曳きの年は、旗頭やカナチ棒などあきでは東西から雄雌の対峙を象徴する3人の支度が特別な装いで登場する。その支度を竹を組み合わせて作られたチナブと呼ばれる台に乗せ綱寄せの際に東、西両端から中央のカナチグチへ寄せてくる。その際、チナブを、六尺棒を用いて数十名の人数で高く支え上げる。通常の綱曳きは旧暦日に当てて行うが、ウーンナの開催時期について旧暦6月26日直後の日曜日に設定している。

【関連祭祀儀礼】

ウーンナでは、琉球王府からの御拝領旗が東西1旗ずつ、二番旗、王府直伝の鉦鼓隊がスネーイ(行列)を先導し、東はノロ殿内、西は大屋から会場を目指して歩む。その際、女性陣は臼太鼓やティサージ(手巾)、男性陣は棒持人として六尺棒を持って参加する。旗頭の旗持ち人が入れ替わる際に、棒持人らが棒と棒をカチカチ接触させながら、旗の周囲をグーヤマチで渦巻き状に駆け回り氣勢をあげる。さらに会場内で旗頭が所定の場所につくと、全ての棒持人がカナチグチ周辺で渦巻き状に駆け巡り氣勢をあげる。綱曳き勝敗が決し落ち着いた頃、東西別々に綱曳き棒が演武される。津嘉山では、綱曳き以外の行事として旧暦8月15日の字行事がある。昭和から現在までに4回しか行っていない大遊びでは組踊や狂言、舞踊、棒術や舞方も含まれる。大規模なため実施回数が少ない。十五夜遊びや村遊びと称し、規模を縮小させた行事を毎年開催している。現在では、民俗芸能保存会が主体となり実施されており、旧暦行事から時期を外して10月以降に開催日を設け、地域住民の親睦を目的に実施している。その中で、棒術や舞方の演武が披露される。

【棒の材料と演武(舞)の種類】

棒は桤材で、六尺棒、三尺棒、四・五尺棒を使用しており、六尺棒について以前は公民館でまとめて購入し個人へ販売していたが、現在は各自で購入し保管している。三尺棒、四・五尺棒は公民館で所有している。大別して棒(ボウ)、遊び棒(アシビボウ)、綱曳き棒(チナヒチボウ)、舞方(メーカタ)がある。津嘉山には13種類の演目があり、組棒では演目によって棒の長さが異なる。演目の種類は以下のとおりである。①西の綱曳棒(六尺×六尺)②西の綱曳棒(六尺×三尺)③東の綱曳棒(六尺×六尺)④東の綱曳棒(六尺×三尺)⑤綱曳棒(三尺×六尺)⑥又吉小棒(六尺×六尺)⑦ヌバル棒(六尺×六尺)⑧三月三日(六尺×六尺)⑨ミーハナヌチ(目鼻抜ち)(六尺×六尺)⑩三人棒(六尺×四・五尺×四・五尺)⑪左舞方⑫中舞方(奥の手くずし)⑬右舞方である。棒術の際の演奏は、銅鑼鐘(1名)、指笛(1名)である。舞方の際は、三線(2～3名)、箏、胡弓、笛、太鼓が各1名ずつで行っている。舞方棒は、棒術を舞踊化したもので棒の威力によって災厄や悪霊を祓い舞台を清めるために演じる。津嘉山の舞方棒には様式があり、昭和3年の「大遊び」では、座開きに「左舞方」、中締め「奥の手くずし」、結びに「右舞方」を演じた。いずれも独特な技法をもっておりテンポを早めれば、実戦的な棒術ともなり昔は門外不出とされていた。奥の手くずしについては、実践棒の要素が多く、棒は逆手で棒を3等分した部分を持つ。四方へ進退して技を繰り出すが、特に後半では歌の切り返し以後に変化技をみせる。左右の手が打ち・受け・突き・払い等の技を持ち、右足を軸に受けの態勢で4分の3周、右へ転回して攻撃体勢を取るなど、股を大きく開いて腰を落としての左右への払い技、片足を前方へ伸ばして腰を深く落として受けの構えなどの特徴があつて目が放せない。奥の手くずしの由来は、その昔、筑登之ペーチンと呼ばれ首里城勤めをしていた津嘉山の先達が首里士族か

ら習い受けたもので、「大遊び」や「十五夜遊び」で継承されてきたものである。字津嘉山に伝わるヌバル棒、三月三日、ミーハナヌチ、又吉小棒、三人棒は「綱曳き棒」に対して「遊び棒」といわれ、旧暦の8月15日の「十五夜遊び」のときに巻棒のときに演じられた。津嘉山の棒の特徴は、手数は少ないがクファミ（力強さ）を感じさせる所にあるといわれている。また、遊び棒と綱曳き棒の違いは、棒をカチカチと合わすのが遊び棒に対し、合わさないのが綱曳き棒である。

舞方棒の歌詞（曲：かぎやで風節）

左舞方：根の張りや巖 身は龍のごとに ことぶきや千歳 子孫そろて

奥の手くずし（中舞方）：根の張りや巖 身は龍のごとに ことぶきや千歳 子孫そろて

右舞方：常盤なる松の 変わること無さめ いつも春くれば 色どまさる

衣裳は、上は白胴衣（特製）、下は空手着ズボン紫サージ、紫タスキ、紫帯、白黒脚絆（綱曳の際、東は白黒脚絆、西は赤白脚絆を着用）。舞方は、上は白胴衣（特製）、下は空手着ズボン黒タスキ、黒帯、白サージ（前結び）、白黒脚絆を着用する。

【由緒・来歴】

綱曳き・ウンナー（大綱曳き）、綱曳きの勝敗が決まると同時に綱を片付け旗頭を鼓舞し、その後に棒術が行われていた。また棒術の役割として各陣の氣勢付けに演武される。ウンナーの際は、支度を載せる台チナブを六尺棒で支えあげる。毎年行われる御願綱では、東西の綱を寄せる際に六尺棒で高く支えあげる。大遊び、十五夜、村あしびにおける開幕舞踊として舞方の演舞があり、舞台演目の中で組棒が披露される。

【棒演武・組織の構成員】

津嘉山民俗芸能保存会（9部会）その中に棒術部会がある。綱曳きなどの行事においては、その都度実行委員会を結成する。

【練習状況】

戦後直後は、字内の棒術指導者の自宅庭にて行っていた。現在は公民館にて、行事の1か月前から週2回ほど行っている。

【コロナ感染症等をはじめ行事継承の今日的課題】

子どもたちの後継者育成に注力したい。地域内にある学童とも連携し、棒術を学童の教材に取り入れる取り組みも行った。

【引用文献】

- ・『津嘉山大綱曳き』（津嘉山大綱曳き実行委員会）
- ・『津嘉山大綱曳き解散総会』資料（津嘉山大綱曳き実行委員会）
- ・『組踊復活大あしび』記録集（組踊復活「大あしび」実行委員会）



写真3-3-20 又吉小棒



写真3-3-21 ヌバル棒



写真3-3-22 左舞方



写真3-3-23 大綱曳き支度台のチナブを支える棒持人



写真3-3-24 西の綱曳棒

著：神谷 武史

6 詳細調査報告⑥ 豊見城市高安竈ゴウ祭

【行事名・開催日・開催場所】

今回の高安竈ゴウ祭は、令和6年9月11日（旧暦8月9日）午前9時から開催された。ちなみに高安自治会ではそれ以前から、竈・道具の総点検をおこなったり（5月27日）、棒術等の全体練習をスタートさせたり（7月15日）、予行演習やガンヤー・シーシ・公民館周辺清掃をおこなうなど（9月8日）、12年ぶりの竈ゴウ祭に向けて入念な準備をおこなっている〔平田編2024：2〕。竈ゴウ祭当日、午前8時の時点で、高安公民館前の広場では、広場を取り囲むようにテントが張られていた。竈を安置したり道ズネーの出発地点となったりするメイン会場はこの広場であるが、後述するように、竈ゴウ祭の間中に集落内の様々な場所でウガンや棒術やガーエーがおこなわれるため、実質的には集落全てが会場とも言える。

【関連祭祀儀礼】

竈ゴウ祭当日の午前9時頃、供物（膳）が公民館に届けられる。それを受け取ると自治会長と顧問、当役が自動車に乗り込む。字豊見城の上原家（屋号沢岬）を拝むためである。上原家では、一番座と二番座の神棚に供物を供えて拝むという〔豊見城村教委員会文化課編2001：16〕。区長たちが上原家に行っている間、字高安の門中の代表が公民館を訪れて供物を受け取る。そして各門中の代表はそれぞれの門中墓を拝んで、竈ゴウ祭をおこなう報告をおこなった。

10時頃になると、副会長と顧問、当役ならびに青年たち十数人で、竈が納められているガンヤー（竈屋）へ向かう。竈のウンチケー（お迎え）をするためである。ガンヤーは集落の南東側、歩いて5分ほどの場所に置かれている。現在のガンヤーは2001年に改築され、コンクリート製の壁と赤瓦の屋根、木製の扉で出来ている。ガンヤーの扉の前に供物の膳（豆腐、三枚肉、酒）と線香を供えて、一同で拝む。この時、もう1組の役員たちがシーシヌメー（獅子様）に行って拝む。シーシヌメーはガンヤー北側、高さ十数メートルほどの高台に置かれた陶製の獅子で、顔はガンヤーに向いているという。それからガンヤーの扉を開いて竈を取り出す。青年達が竈を担いで、公民館まで運んでいく。公民館に到着すると、竈をテントの下に運び入れ、マクと呼ばれる木の台座の上に下ろす。

運ばれてきた竈は、ガンヤーに納めるために、コンパクトな保管状態になっている。これからそれを正式な竈の形に組み替えるのである。竈の屋根を外して、中に納められていた戸板や屋根飾り、欄干などを取り出して、組み見上げていく。完成すると、左右の戸板に蓮の花、前後の戸板に僧侶が描かれ、金色と螺鈿の屋根飾りをもつ美しい姿となる。竈の組み立てと並行して、ティンゲー（天蓋）の組み立てもおこなわれる。ティンゲーは長い竹竿の先に龍頭がついた物で、さらにその名の通り天幕が吊り下げられている。道ズネー（後述）の際には、ティンゲーが行列の先頭を歩く。竈が完成すると、竈の前に供物が並べられる。供物は、の一饅頭、豚のチラガーと肝、米、赤飯、泡盛である。その他、茶碗、和紙、硯、筆も並べられる（写真3-3-25）。そして自治会長以下役員数人がその前に座り、竈に向かって手を合わせて拝む。

その後、昼休みを挟んで、14時に竈ゴウ祭が始まる。最初に、棒士（男性自治会員）が、公民の広場でヘーイ棒を披露する。竈ゴウ祭に参加する棒士たちは4つの班に分けられていて、それぞれの班ごとにヘーイ棒を披露する。ヘーイ棒が終わると、今度は個人棒が披露される（1回）。最後にはヤイ・ナギナタが披露される（1回）。

棒術の披露が終わると、公民館の広場に旗頭が立てられる。高安の旗頭は、竿頭にヤイ、ナギナタを飾った2本あり、双方とも龍の口からヤイやナギナタが空に向かって伸びた形をしている。ヤイの旗文字が「勸農」、ナギナタの旗文字が「深耕」で、どちらも農耕との関わりを表しているという〔豊見城村教委員会文化課編2001：19〕。普段は、ヤイの旗頭は宜保殿内に、ナギナタの旗頭は波平に保管されている。旗頭が広中央に立てられると、1班と3班の棒士たちはヤイの旗頭の周囲に、2班と4班の棒士たちはナギナタの旗頭の周囲

に集まる。そして全員で、持っている六尺棒で旗頭の竹竿を激しく打ち鳴らしながらガーエー（氣勢をあげること）をおこなう。

次に、両元のウガミに移る。参加者達は2組に分かれて宜保殿内と波平へ向かう。東組（宜保殿内に向かう組）は、自治会長、顧問、当役、奉納舞踊をする女性会のメンバー、棒士たちとその他の自治会員たちで構成されている。西組（波平に向かう組）は、自治会長、顧問、当役、奉納舞踊をする女性会のメンバー、棒士たちとその他の自治会員たちで構成されている。行列は旗頭を担いだ棒士たちが先導し（東組の行列の先頭はヤイの旗頭、西組の行列の先頭はナギナタの旗頭）、四つ辻などに差し掛かると旗頭を立ててガーエーをおこなう（写真3-3-26）。道中、数回ガーエーをおこないながら、目的地に向かう。

両元での動きは次の通りである（今回は宜保殿内での参与観察をもとに記述する）。14時50分頃、宜保殿内に到着した。旗頭は母屋の前庭に立てられる。そして宜保殿内の当主と自治会長、役員数人は、屋敷の東側にある神屋に入る。神屋の中には、ヒヌカン、香炉が5つ、今帰仁へのお通し香炉が安置されている〔豊見城村教委員会文化課編 2001：25〕。それらに線香をあげ供物を供えて拝む。神屋での拝を終えると、当主と自治会長、役員たちは母屋に移動する。母屋では、一番座の神棚と門中のクディの香炉、そして二番座の仏壇を拝む〔豊見城村教委員会文化課編 2001：26〕。これで拝みは終了となる。拝みが終わると、母屋の前庭に女性会のメンバー（4人）が進み出て、かぎやで風を演舞する。この時は地謡ではなく、CDの音楽に合わせて踊られた。かぎやで風の後には、ヘーイ棒（1人）が披露される。ヘーイ棒の次には、タンカー棒（1組）が披露される（写真3-3-27）。その次に、ヤイ・ナギナタ（1組）が披露された。また、今回は特別に、宜保殿内の当主による個人棒も披露された。最後に、前庭の中央に旗頭を移動して、棒士たちがその周囲に集まり、ガーエーをして宜保殿内での儀礼は終了した。

宜保殿内での儀礼を終えると、東組は公民館へ戻る。この時、元来た道に戻るのではなく、別の道を通って遠回りしながら集落中を練り歩かたちで戻る。その道中、四つ辻に差し掛かると旗頭を立ててガーエーがおこなわれる。15時半頃、公民館前の広場に到着すると、最後にもう一度ガーエーをしてから、旗頭を電柱に縛って固定した。

16時頃、道ズネーが始まる。道ズネー出発前に、1～4班の棒士たちがそれぞれヘーイ棒を披露する。その後、道ズネーの隊列が組まれる。隊列は、ティンゲーを最先頭に、字の高齢者の方々、役員、供物（龕のウンチケーの際に龕の前に供えられていた供物）、龕、棒士たちの順番となる。高齢者の方々を先頭にするのは、高安が龕の霊に負けないことを示すためという〔平田編 2024：7〕。16時15分頃、道ズネーの隊列が公民館を出発。その後ろには東西の旗頭を担いだ棒士たちが続く。さらにその後ろには多くの見物客が続いて、道路は人で溢れかえった状況になる（写真3-3-28）。隊列は龕のウンチケーの際に歩いてきた道に戻っていくかたちで進む。四つ辻に差し掛かると東西両方の旗頭を立ててガーエーがおこなわれる。16時30分頃、ガンヤーに到着。旗頭をガンヤー近くの電柱に縛って固定する。そして龕をガンヤー入り口のスペースに置いて、龕を再び保管状態に組み替える。ティンゲーもこの時点で分解される。保管状態になった龕はガンヤーの中に運び込まれ、埃除けのために上からビニールで覆われる。そしてガンヤーの入り口に供物を並べる。しかしこの後すぐに拝みはおこなわず、しばらく時を待つ。この時、もう1組の役員たちがシーシヌメーに行っていて、最後の拝みは、シーシヌメーと時を合わせておこなわれるのである。シーシヌメーに行った組が拝みの準備ができると、旗（供物を包んだ風呂敷を六尺棒に括り付けたもの）を振って合図を送る〔豊見城村教委員会文化課編 2001：30〕。合図を受けて、ガンヤーでの拝みがおこなわれる。役員の合図で全員が「金・銀の鍵を閉めますので、次の辰年まで静かに御鎮まり下さい」と礼拝する〔平田編 2024：2〕。そしてガンヤーの入り口が閉じられる。

ガンヤーの入り口が閉じられると、奉納舞踊と奉納棒術がおこなわれる。奉納芸能は、男女の琉球衣装を着た踊り手によるかぎやで風であった。奉納棒術は、個人棒（1人）、タンカー棒（1組）、ヤイ・ナギナタ（1組）、ヘーイ棒（4人）であった。奉納棒術が終わると、旗頭を先頭に公民館に戻っていく。この時、道ズネー

の際に通ってきた道とは異なる道（中道）を通して、公民館に戻る。

道ズネー参加者全員が公民館に戻ると、コーヌユーエーが開催される。コーヌユーエーは、龕ゴウ行事を滞りなく終えることができたことに感謝し、祭りに取り組んできた自治会員の努力をたたえ、共に歓びを分かち合うことを目的としている。また、高齢者の健康長寿を祝う敬老会も兼ねているという〔平田編 2024: 3〕。コーヌユーエーでは、様々な芸能や棒術・武術が披露される。内容を紹介しますと以下の通りである。

- ・琉球舞踊：「かぎやで風」「鳩間節」「貫花」「南嶽節」
- ・琉球民謡：「花と花」「かりゆし祝囃子」「繁盛節」「ちばり節」
- ・こどもエイサー：「ミルクムナリ他」
- ・棒術：「ヘーイ棒」「個人棒」「タンカー棒」「ヤイ・ナギナタ」
- ・空手演武
- ・オキナワンえりフラ：「ていんさぐぬ花」「パイナップルプリンセス」
- ・民謡ショー

〔平田編 2024: 3〕

以上をもって令和 6 年の高安龕ゴウ祭は無事に終了した。

【棒の材料と演舞の種類】

棒は六尺棒を基本とする。一方、未成年用の短い棒もある。棒の材料は桧であるという。六尺棒は継承保存用として、専門家に制作依頼し整備し、一般用の六尺棒は個人負担としてまとめて購入している〔平田編 2024: 4〕。高安ではヤイ（槍）・ナギナタ（長刀）を用いた演舞もあって、ヤイ・ナギナタは専門家に作成依頼している〔平田編 2024: 4〕。ただし聞き取りによると、ヤイ・ナギナタは桧材ではないのではないかという（激しく打ち合うとすぐ破損するため）。

棒術の演武の種類としては、個人棒、ヘーイ棒、タンカー棒、ヤイ・ナギナタがある。

個人棒は、1 人だけで演武する。高安には、突きの動作のない棒術があって、高安独特の棒術だという〔豊見城村教委員会文化課編 2001: 23〕。

ヘーイ棒は、棒士同士が打ち合うことをせず、銅鑼鐘の打鐘に合わせて技を繰り出していく演武である（写真3-3-29）。個人が単独で演武する場合と、集団で動作を合わせて演武する場合の両方がある。ヘーイ棒は六尺棒を打ち合うことがないため危険性が少なく、非熟練者でも比較的習得しやすいという。そのため、班ごとの集団演武などでよく演じられる。

タンカー棒は、棒士 2 人が向かい合って技を繰り出しながらそれを防ぐ、組手形式でおこなわれる。実際に激しく棒を打ち交わすため怪我をする可能性もあり、そのためある程度の棒術の熟練者でなければ演ずることができないという。実際、タンカー棒を演武できる人は、棒術の初心者や龕ゴウ祭で久しぶりに棒に触れる自治会員に対して棒術を指南する、指導員の役割を担うことが多い。後述するように、熟練者たちは、衣装の上でもそれと分かるように区別されている。

ヤイ・ナギナタは、その名の通り、槍と長刀を用いて打ち合う演武である（写真3-3-30）。ヤイ、ナギナタは、六尺棒よりも短く太い棒の先端に、長五角形の穂先と、半月状の刃がそれぞれ取り付けられている。棒の長さが短いのでより接近しての打ち合いになるだけでなく、穂先や刃が付いている分武器の扱いが難しいため、タンカー棒以上に緊張感があり、観客達も観戦に熱が入る。

【棒組の構成員】

棒術の参加対象者は年齢 18 歳以上で健康な者とされているが、18 歳以下でも本人が希望し、保護者の同意が得られれば参加が認められている [平田編 2024:4]。実際、小学校低学年くらいの男児の参加もあった。先述したように、棒士として龕ゴウ祭に参加する際に、自治会員たちは 4 つの班に分けられて実際の行事に臨むが、この班分けは現在では練習時の便宜的な班分けを踏襲したもので、集落内における現在の居住地域や実家の場所などを基準にしているわけではないという。そのため、集落の西側出身の男性が、班分けの結果として、両元のウガンの際に宜保殿内を拝みに行く東組に組み入れられるということもありうる。

【棒の衣装・演舞時の音楽】

男性の服装は、全員、白いワイシャツ又は襟付きの白いポロシャツ、白系の長ズボンに白色のスポーツシューズ（運動靴）。その上で

- ①ヘーイ棒は、紫タスキ・豆絞り手ぬぐい。
- ②タンカー棒、ヤイ、ナジナタ、鐘打ちは、打掛け・紫頭巾・ミンサー帯・脚絆。
- ③旗頭、龕担ぎは、打掛け・紫頭巾・ミンサー帯・脚絆。

以上は事務局で準備する [平田編 2024 : 5]。

高安の棒術の演舞時には、銅鑼鐘のみが用いられ、歌三線などの演奏はみられない。

【練習状況】

今回の龕ゴウ祭のための棒術の練習は、令和 6 年 7 月 15 日から始まった。7 月 15 日からは月・水・金の午後 7 時から練習をおこない、8 月 20 日以降は毎日練習をおこなった。また、それに先だって、指導者、役員は事前にビデオで過去の棒術について検証したという [平田編 2024:4]。一般参加者への棒術の指導は、指導員がおこなう。指導員は、タンカー棒を演舞できるような棒術に長けた人物が務めるという。聞き取りによると、指導員も練習期間中には過去に指導員を経験した諸先輩から様々な指導を受けるという。ある指導員は、「自分も数回、龕ゴウ祭の棒に関わっているが、自分よりさらに多く龕ゴウ祭の棒に参加されている先輩がいらっしやるので、全然敵わない。先輩方はやはりすごい」と話した。このことから、高安の棒術は、ある程度棒術に通じた人々の先輩・後輩の関係の中で技術の維持継承がなされ、それを核として一般の参加者への指導普及がなされていると言える。

【コロナ感染症等をはじめ行事継承の今日的課題】

高安の龕ゴウ祭は 12 年に一度の開催であるため、今回のコロナ感染症蔓延事態の影響は直接受けなかった。ただし、棒術は毎年の綱曳きや夏祭りでも披露されているため、綱曳きや夏祭りの開催が見送られた 2020 年度～ 2022 年度は棒術の披露も中断された。しかし毎年演武をおこなう場があることや、今回の龕ゴウ祭にも小学校低学年の児童を含む多くの自治会員が棒士として参加していることから、他の地域に比べると高安の棒術がおかれた状況は明るいと思われる。

【引用文献】

- ・ 豊見城村教育委員会文化課編 2001 『豊見城村史だより』 第 6 号 豊見城村教育委員会
- ・ 平田実編 2024 『豊見城市宇高安龕ゴウ祭』 豊見城市高安自治会長（宜保樹）



写真3-3-25 龍と供物



写真3-3-26 四つ辻でのガーエー



写真3-3-27 宜保殿内での奉納演武



写真3-3-28 道ズネーの行列



写真3-3-29 ヘーイ棒



写真3-3-30 ヤイ・ナギナタ

著：神谷 智昭

第4節 宮古地区

宮古諸島における棒術の事例として、宮古島市新里と宮古島市野原の事例をとり上げる。

1 宮古島市新里の豊年祭と棒術

宮古島市新里（旧宮古郡上野村新里）は、宮古島の南西部に位置する村落で、2023（令和5）年12月末日現在の世帯数は400世帯、人口は735人（男性373人・女性362人）である（宮古島市役所統計資料）。

新里では、毎年旧暦6月の豊年祭において棒術を行う。豊年祭の日程は村落の日取り役が撰んでいるが、近年は夏休みに入ってからの日曜日に合わせる事が多い。新里は農村であるため、豊年祭は豊作の感謝と祈願の行事として行われてきた。

（1）豊年祭の概要

ここでは、2024（令和6）年7月29日（旧暦6月）に行われた豊年祭について、その概要を記す。

当日の午前中、村落の祭祀を担当する女性神人らが、地区内のムトゥ（拝所）などを拝む。

午後4時頃から演者の住民が身支度をして公民館に集合し、準備をする。また観客の住民たちも集まり始める。

午後5時、豊年祭が始まる。最初に公民館前で開会式を行う。新里民俗芸能保存会会長および自治会長が挨拶する。続いて鳴り物（ホラ貝、笛、鉦、パーランクー）と唄に合わせて獅子舞をする。獅子は1人獅子で、2匹（雄雌）である。続いて全員で円陣をつくり踊る。終了後、ホラ貝を先頭に、住民たちが拝所に向けて出発する。

新里の拝所であるツカサヤムトゥ（司屋ムトゥ）に到着する。白衣を着けた神人の女性たちと地区の役員が拝所の建物に入り、祭壇に香を立て、酒を供えて拝む。終了後、拝所前に集まった住民に盃が廻される。続いて拝所前の庭で、鳴り物と唄・獅子舞・棒術の順で披露し、最後に全員で円陣をつくり踊る。終了後、一同は公民館に向けて戻る。その道中において、拝所入り口の道路・道中の辻・公民館前の辻の3か所で、鳴り物と唄にあわせて全員が円陣をつくり踊る。公民館に到着後、いったん休憩する。

夕方6時過ぎ、公民館前の公園広場の中央で、豊年祭の演目が始まる。最初の演目は獅子舞である。先ほどと同様に鳴り物と唄に合わせて獅子舞をする。2番目の演目は棒術である。棒術の青年10名と鉦1名が広場中央で棒術を披露する（演武の内容は後述）。3番目の演目は踊りである。先頭に男性20名ほどの集団、女性20名ほどの集団の順で隊列をなして入場して踊る。先頭の男性たちは柄に房をつけたものを右手に持っている。これをザヤといい、これを振りながら「ザヤ踊り」をする。このザヤは作物の実りを表わすという。4番目の演目は、女性集団による踊りである。女性たちには、クバ扇を持つ人と四つ竹を持つ人がいる。女性たちは円陣をつくり、「引き踊り」と「巻き踊り」を踊る。5番目は綱引きである。綱は事前に住民たちが作成して会場に置かれている。新里の綱は山野の蔓とマーニの葉・月桃などを編み込んで作る。これに市販の白ロープをつなげて長くしたものを使用する。住民が東と西に分かれ、雄綱と雌綱をカヌチ棒で繋げて綱を引く。綱引きは2回行う。この年は1回目に東が勝ち、2回目は西が勝った。最後に、全演者に観客も加わって大きな円陣をつくり、全員でクイチャーを踊ってすべての演目が終了となる。その後、住民たちは公民館での慰労会に移行する。

豊年祭の夕方の演目（獅子舞・棒術・踊り）は、以前は公民館前から出発してウプザー（大座の意味か）と呼ばれる場所までの道路上で行っていたが、近年は道路の使用許可の問題等により、会場を公民館前の公園広場に変えた。もう一つ変化した点は、豊年祭に綱引きが加わった点である。かつて綱引きは、豊年祭とは別日に、子供たちの行事として行われていた。その頃は、中学生がツナシードゥ（綱勢頭）として子供たちをまとめていたという。しかし、子供の数が減ったため綱引きを単独で行うことが難しくなり、豊年祭

の演目に組み入れて、大人と子供が一緒に綱を引く形に変えたという。

（２） 新里の棒術

新里の棒術については「新里民俗芸能保存会」会長の上里雅章氏（昭和 29 年生まれ）から伺った。

新里では棒術のことを「ボーフィ°」（°は中舌母音）という。棒術は旧暦 6 月の豊年祭にて披露する。豊年祭では上述のとおり、獅子舞に続いて行う形を取るが、獅子舞は「厄を祓って道を開く」意味があり、それに続く棒術も「棒を打って邪気を祓う」意味があるという。

【棒の組織と演武】（写真3-4-2）

棒術は新里青年会の青年が担当する。以前は高校を卒業する 18 歳から入会し、25 歳頃まで青年会として活動していた。現在は青年の数が減ったので 30 歳代の人も棒を担当することがある。棒術は、鉦役 1 名と棒 10 名で行う。以前はこれが 2 組あったが、現在は 1 組（11 名）で行っている。10 名のうち、ナカボー担当が 2 名いる。ナカボーは他の棒とは違う動きをするため、重要な役とされる。他に獅子舞の時の鳴り物（笛とパーランクー）も外側に並んで参加する。

演武は、鉦・太鼓・笛と唄にあわせて行う。最初に円陣になり、全員円の内側を向いて踊る。次に反時計回りの方向に進みながら踊る。次に円陣から縦の隊列に変形する。隊列の基本形は、先頭に鉦 1 名、左の列に棒 4 名、中の列にナカボー 2 名、右の列に棒 4 名で、並んでしゃがむ。立ち上がり、全員で同じ動きで踊る。次に 5 名（ナカボー 1 名）・5 名（ナカボー 1 名）に分かれてそれぞれ棒を打ち合う。次に 2 名・5 名（ナカボー 1 名）・3 名（ナカボー 1 名）に分かれて打ち合う。隊列での打ち合いを繰り返してから最初の円陣に戻り、同様の踊りを繰り返す。

【棒の種類と衣装】（写真3-4-3～4）

新里の棒は二尺程度の短い棒を使用する。使用した棒は径 3 cm・長さ 57 cm で、表面を黒く塗ったものである。またナカボーが持つ棒はさらに短く、径 3 cm・長さ 44 cm であった。ナカボーは顔の前で棒を回す所作があるので、怪我をしないように少し短くしてあるという。現在使用している棒は、宮古島市内の「宮古木工芸」という業者に作ってもらった。堅いクロキがよいと聞かすが、手に入らなかったのもでヤラブの木で作ってもらったという。

衣装は黒色の上着に白色のズボン（以前は白のステテコを着用）、帯・襷・鉢巻きは白色を使用する。衣装類は各自が持っている。

【棒術の保存と継承】

新里には「新里民俗芸能保存会」がある。結成の時期は不明であるが、豊年祭で上演する獅子舞・棒術・踊りなどの芸能の継承を目的とした団体である。会員は現在 30 名ほどで、豊年祭の芸能を経験してきた年長者が多い。年に 1 回総会があり、豊年祭前の練習にも参加して若い人たちを指導する。

近年は青年の数も減ってきたので、芸能の継承のために小中学生も練習に参加している。年々人が少なくなっているが、これまで豊年祭を継続してきた。例外的に、コロナウイルスが流行した 2020（令和 2）年から 2022（令和 4）年までの 3 年間は豊年祭の芸能を中断した。この時は、神人による拝みのみ行っていた。2023（令和 5）年から豊年祭の芸能を再開している。

また、これまでに新里の棒術を村外のイベント等で披露する機会もあった。「上野村まつり」や「クイチャーフェスティバル」に出演した。島外では、在沖縄郷友会や在関西の郷友会に招待されて棒術を披露したという。



写真3-4-1 豊年祭会場



写真3-4-2 演武で円陣を組む



写真3-4-3 棒術の棒(下はナカボー用)



写真3-4-4 棒術の衣装

2 宮古島市野原のマストウリヤーと棒術

宮古島市野原（旧宮古郡上野村野原、方言でヌバリという）は、宮古島の南西部に位置する村落で、2023（令和5）年12月末日現在の世帯数は985世帯、人口は1734人（男性1048人・女性686人）である（宮古島市役所統計資料）。現在の野原は、従来のシマ・村落に加え、地区内に自衛隊宮古島駐屯地を擁している。

野原では、毎年旧暦8月15日のマストウリヤーとよばれる行事において棒術を行う。マストウリヤーは、かつて王府時代に、村人が貢租の完納を祝ったことに由来する行事とされる。野原にはネ（子組）・トゥラ（寅組）・ウマ（午組）・サル（申組）という4組の近隣組があり、マストウリヤーの棒術は組ごとに組織される。

（1）マストウリヤーの概要

ここでは、2023（令和5）年9月28日（旧暦8月15日）に行われたマストウリヤーについて、その概要を記す。

【前日までの準備】（写真3-4-5）

数日前から男性の棒術と女性の踊りを練習する。練習は、仕事と夕食を終えた午後9時頃に行う。棒術は組別に練習し、女性の踊りは地区全体で公民館に集まり練習する。マストウリヤーの前日、旧暦8月14日の夜に行う最終の練習（リハーサル）をナイスクンという。午後8時頃から組ごとに集まり、棒術の練習をする。組の住民たちも路上に蓆を敷いて座り、歓談しながら練習を見守る。午後9時頃に公民館（正式名称は「農民研修所」であるが、以下では便宜上公民館と記す）に各組が集まり、野原地区全体でのリハーサルを行う。この日は男性・女性ともに普段の服装のまま参加する。

【当日午前の拝み】

マストウリヤー当日の行事は、午前中の神人による祈願、夕方から組ごとに行う祝宴と棒術、夜9時から公民館広場で行う棒術と踊りの上演、の3段階からなる。

野原には、ツカサ（司）をはじめとした女性神人3名と男性神人2名がいるが、マストウリヤー当日の拝みは、ツカサ1名とトウム（お供）役の女性1名が行った。午前10時30分頃に公民館の広場に集合し、公民館広場の隅にある拝所に供物（花米・塩・フキャギ餅1個）を供え、香2枚を立てて拝む。続いて自動車でウブダキ（大御嶽）に移動する。祭壇の5か所の香炉に上記と同様の供物を供えて拝む。当日の拝みはこれで終了となる。

【当日夕方、組の祝宴】

夕方から組ごとにマストウリヤーの祝宴を開く。各組の支部長宅の前の道路上に席を作り、住民が料理ともの飲み物を用意して歓談する。午後8時頃から棒術を担当する青年らが衣装に着替えて集まる。午後9時、区長がマストウリヤーを開催するため公民館に集まるよう放送する。出発時、青年たちは路上で棒術を披露し、隊列をなして公民館に移動する。住民も公民館広場に移動し、組ごとに集まって着座する。

【当日夜、公民館での上演】

公民館広場の入り口に、棒術の青年集団（組ごとに並ぶ）と女性集団（組別ではない）が整列して入場する。先に青年集団が、反時計回りの方向で円を描きながら進み、唄に合わせて棒術を披露する。次に女性集団が同じく反時計回りの方向で円を描きながら進み、唄に合わせて踊りを披露する。次に青年集団の列と女性集団の列がつながり、青年集団を先頭にして反時計回りの方向で一つの大きな円陣を形成し、唄に合わせて踊る。最後は円陣のまま一緒にクイチャーを踊る。これで1回目の踊りを終える。休憩後、同様の棒術と踊りを再度披露する。終了後は組ごとに集まって祝宴となる。

(2) 野原の棒術

野原では、棒術のことを「棒振り」という。野原公民館にあるマストウリヤーの説明板に「野原のマストウリヤーの特徴は、男の棒振りと女の抱き踊りとなぎ踊りで構成」されることが記されており、棒術は「棒振り」と呼ばれていることがわかる。

【棒の組織と演武】(写真3-4-6)

棒術は、地区内の組（子組・寅組・午組・申組）ごとに組織される。この4つの組は、かつて野原にあった4つのマスムトゥ（枡元）を中心に形成された近隣組織であり、現在も組ごとにマスムトゥの場所が傳承されている。王府時代には各マスムトゥに貢租を集めて納めていたとされ、マストウリヤーの行事は貢租を完納した祝いに由来するという。

棒術は組ごとに青年男性5名で組織され、他に鳴り物として鉦1名・笛1名が加わる。5名の内訳は、前2名・ナカボー（中棒）1名・後ろ2名である。棒術の練習はマストウリヤーの数日前から始める。夜9時頃に組のマスムトゥの脇の道路（辻）で練習する。マストウリヤーの当日は、組の支部長宅の前の道路に住民が集まって祝宴を開き、9時頃に棒術を披露してから公民館の会場に向かう。

公民館の広場には、子組・申組・午組・寅組の順で隊列をなして入場する。「寅組を先頭にするとトゥラヌファカジ（寅の方向からの大風、台風）が吹く」ので、寅組は必ず隊列の最後尾にするという。

棒術の隊列は、鉦と唄に合わせながら、反時計回りに円を描きながら進む。演武には、5名が同時に同じ所作（踊り）をする形、3名（前2名と中棒）と2名（後2名）に分かれて打ち合う形、2名（前2名）と3名（後2名・中棒）に分かれて打ち合う形、5名で打ち合う形（前と後ろが同時に中棒に打ち込む）などがある。特に中棒の役割が重要で、リーダー格の人が担当するという。

また野原の棒術は、女性集団の踊りとセットで行われる点も特徴的である。女性集団は組別ではなく、野原地区全体として集まる。このうち前列の年長女性はクバ扇を持ち、後列の女性は四つ竹を持つ。最初に青年集団が棒術を披露し、続いて女性集団が同じく反時計回りに列をなしてダキブドイ°（抱き踊り）とナギブドイ°（なぎ踊り）を踊る。次に棒術の男性集団と女性集団の順でつながって大きな円陣を形成して進む。最後は全員でクイチャーを踊る。

【棒の種類と衣装】(写真3-4-7)

野原では三尺程度の短い棒を使用する。この棒は業者から購入したもので、棒の先に5円玉が仕込まれている。棒の材質は不明である。

衣装は、紫色の頭巾と襷・白色の上衣・黒色のズボンに縞模様の脚絆をつける。4組とも同じ衣装である。棒と衣装は公民館で保管している。

【棒術の保存と継承】(写真3-4-8)

野原には「野原民俗芸能保存会」がある。結成の時期は不明であるが、マストウリヤーで上演する棒術と踊りの保存と継承を目的とした団体である。「野原のマストウリヤー」は、1980（昭和55）年に国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定された。保存会は、この無形民俗文化財の保持団体として位置づけられている。

棒術の継承については、担い手となる若者の減少が課題となっている。以前は早ければ高校生から棒をやっていたが、近年は若者の減少によって演者の年齢が高くなっている。女性の踊り手の人数も以前に比べて減少しているという。

また、これまでマストウリヤーの行事を継続してきたが、コロナウイルスが流行した2020（令和2）年から2022（令和4）年までの3年間は行事を中断した。2023（令和5）年から再開している。



写真3-4-5 マストリヤー前日の練習



写真3-4-6 マストリヤーの棒術



写真3-4-7 野原の棒

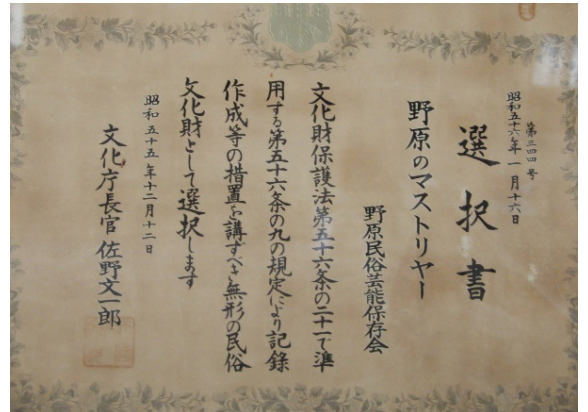


写真3-4-8 文化庁・無形民俗文化財の選択書

著：萩原 左人

第5節 八重山地区

八重山地区においては、代表的な事例を選定するにあたって、次のような考え方で6つの事例を選定し取り上げた。

八重山は単独の一島一市・町である石垣市と与那国町とは対照的に、竹富町のように一町でありながら多くの島々から成り立っているところもある。石垣市が所在する石垣島は広範囲の地域に村々が展開しており、与那国島は日本の最西端にあつて様々な文化の影響を受けた地域でもある。したがって、地域の選定にあたっては、各市町から必ず1事例は取り上げることとし、島嶼地域である八重山、とくに島々を多く抱える竹富町の島嶼部からは3例を取り上げることとした。

第2章第3節において、村落と行事の一覧で示しながらすでに指摘したように、八重山地区においては、豊年祭や結願祭、節祭において棒術等が多く披露されているが、その他に数は少ないものの、盆行事、盆行事にもかかわるイタシキバル、十五夜、旧正月の綱引きなどで披露されている。

そのようなことから、八重山地域では主要な祭祀として広く行われている豊年祭、結願祭、節祭は代表事例にあたると考えた。そこで、豊年祭は四箇村のプーリィ（豊年祭）を取り上げた。石垣市の市街地に所在する登野城、大川、石垣、新川は総称石垣四箇村と呼ばれ、元々は登野城村、大川村、石垣村、新川村だったところで、現在の字にあたる村落だった。結願祭は石垣市の川平、節祭は竹富町西表島祖納・干立を選定した。その他については、八重山では唯一の事例となる竹富島の種子取祭、また特異な事例として波照間島で盆行事の期間に行われるムシャーマ、を取り上げることとした。

なお、各村落の人口と世帯数については、沖縄県市町村課がホームページに掲載している「市町村の町字別住民基本台帳人口及び世帯数（令和5年1月1日現在）」を元としている。

1 石垣市四箇村のプーリィ（豊年祭）

登野城、大川、石垣、新川の四箇村のプーリィ（豊年祭）については、ここでは新川の事例を中心に取り上げながら、大川の採録データがないことから、必要に応じて登野城と石垣の例を紹介しておきたい。

【行事の概要】

豊年祭は旧暦6月のカンビューリィ（神日和）と呼ばれる癸や甲の日とその翌日の2日間にわたり行われる。その2日目の夕刻には新川にある真乙姥御嶽での儀式が終わった後、この御嶽から西へ移動した十字路を中心に重要な儀礼が行われる。それは豊年祭の重要な場面となるツナヌミンと呼ばれる儀礼では、台の上に一人は鎌、もう一人はナギナタを持ち、対峙して演武を繰り広げられる。今年の豊作への感謝と来年の豊作への祈願を目的として行われる豊年祭の終盤に行われる儀礼である。

新川南風ヌ島（ハイヌスマ）カンター棒は獅子に対峙しての武術がある、特に定められた期日はない。お祝い等で演じられる。令和5年は旧盆の送り日（オクリビー）に行われる獅子祭の前に演じられた。

〔登野城〕登野城では棒は豊年祭（オンプール）と結願祭の2回披露される。豊年祭は上記と同じ期日であるが、結願祭（旧暦8～9月）は12年に1回、寅年に開催される。前は去年の2022年に開催した。開催場所は豊年祭・結願祭とも天川御嶽（アーマーオン）である。天川御嶽への奉納として、境内において棒術演武を行う。



写真3-5-1 登野城字会の結願祭の棒〔石垣市登野城〕

棒術演武は、結願祭の演舞奉納として執り行われてきた経緯がある。結願祭は 1974 年以降では、十二支の寅年に開催されている。また、2009 年結願祭開催に向けた棒術演武の機運を高めるため、2005 年頃から豊年祭（オンプール）でも棒術奉納を行うようになり、それ以降は豊年祭でも棒術奉納を行って来ている。

〔石 垣〕行事は豊年祭（プール）や結願祭（キツガンサイ）、牛ヌ願（牛ヌ願い）で演じられる。開催時期は豊年祭のオンプールは 7 月後半から 8 月前半（旧暦 6 月）、結願祭は旧暦 9 月（6 年に 1 度だが前はコロナの影響で 1 年ずれる）牛ヌ願いは旧暦 2 月（2 年に 1 度）となっている。宮鳥御嶽への豊作の願い、牛馬の供養、一年の願いなどの目的がある。棒術・獅子舞は字石垣にある宮鳥御嶽前庭、ならびに同牛ヌ御嶽前で披露される。演武は奉納としての位置づけがある。

【由来・来歴】

本来は武術であったと考えられる棒術の新川南風ぬ島（ハインスマ）カンター棒が伝承されている。由来としては、昔、漂流民から唐眞家に棒踊りが伝わり、南風ぬ島カンター棒として唐眞家の家宝として伝承されていた。1757 年に新川村が創建されたのを機に、新川村の宝として後世に伝えていくこととなったとされる。

新川村の経験者により伝承されている。1945 年は太平洋戦争のため中断。

2 人の若武者は武士（役人）と平民（農民）、あるいは牛若丸と弁慶と表現される場合がある。近年では、天川御嶽（アーマーオン）への奉納演武が行われている。

2 日間にわたり豊年祭は行われるが、その 2 日目の夕刻に登場し演じられる。余興は 2 日目の祭祀行事の終了後、西へ移動して、日の入りで西の空が赤く染まった頃合いに松明を焚いた中で開始され、暗くなった頃に両者の勝敗はつかないまま終了となる。その後、綱引きが行われ勝敗は決まる。

【演武の種類と内容】

型の演武（舞）や対面での打ち合い等がある。演武には、東の大將と西の大將と呼ばれる 2 人の武者が登場する。東の大將はナギナタを持ち、ナギナタで振り払う、切り込む、振り下ろすなどの攻撃をする。一方、西の大將は鎌をもち、相手の攻撃を飛んでかわす、身を入れ替えてかわす、鎌で受け止めるなどをし、終盤に唯一、相手に鎌を足元めがけて足払いの攻撃を行う。また、それぞれの動作の合間には、お互いに見えを切り、威嚇して激しい攻防を繰り返す。最後にお互いに見えを切り、引き分けで、台が離れることにより演武は終了する。

〔登野城〕登野城独自の棒術演武として、六尺棒、カマ（ガギ）を使用する組手があると口伝により伝わっているが定かではない。また、ナギナタやカタナなどを使用する組手は、他村（字）の棒術演武を参考にその当時の師匠等が創作したと伝わっている。

六尺棒、三尺棒、ヤリ、ナギナタ、カタナ、カマ（ガギ）、サイ、トンファー、ヌンチャクを 2 名 1 対の組手で演武する。※ヌンチャク演武は 1985 年以降の記録がない。型の演武（舞）と対面での打ち合い等がある。

演武構成は、横笛による「ナナツングニ」で始まり、棒術師匠（1 名）及び副師匠（1 名）により境内を清め塩で清めた後に演武者が鳥居から境内に入場する。入場する際には「アシフン」と呼ばれる足さばきにより、境内を円形に囲むように進んで行く。全演武者が入場したところで、ボラと銅鑼が鳴り、2 人 1 対の演武者が境内を左周りに円を描くように軽快な小走りで 1 周し、鳥居と拝殿を結ぶ位置につくとボラがなり、演武が行われる。演武終了後は、両者拝殿を向き、左周りに円を描くように境内を半周して、前演武者（最初の演武者は最終演武者）の後ろに並ぶ。すべての演武を終えると、銅鑼の合図で掛け声『ヤー』で一斉に立ち上がり、鳥居と拝殿を結

ぶ線の両端から集まり、各々の武器を対面する演武者の武器に当て、銅鑼の合図で掛け声『ユイ』で、左右に分かれた列で境内を回る「スーマキ」を行い、入場時の位置まで着いたら、返し打ち（2回目）の演武を行う。

〔石 垣〕型の演武（舞）がある、対面での打ち合い等がある、獅子に対峙しての武術がある。演武構成は、三尺棒・六尺棒・間討ち棒・槍棒・ガギ棒・ティンバイ・三人棒（サイ・トンファー）（形棒）、獅子の前に形棒。農民と役人と伝承されている。

【演武の組織と稽古・継承方法】



写真3-5-2 南風又島カンター棒〔石垣市新川〕



写真3-5-3 南風又島カンター棒の演武〔石垣市新川〕

現在、新川村の誇る伝統民俗芸能として、保存会を組織し継承されている。平成元年に南風又島カンター棒保存会が発足し、その継承に努めている。新川字会、南風又島カンター棒保存会が中心的な組織である。棒の出演者は、新川村に在住する10代～50代の男性を中心としている。

鳴物（笛吹、太鼓打、銅鑼）と、棒舞組（10～15組）、獅子2頭で構成される。棒舞組

は、地謡の音に合わせて、2列に整列して入場し、ニナイディ（備えの構え）、廻り舞い、舞いティ（一番の舞）、ツキディー（二番の舞）、カミディー（三番の舞手）、ウツディー（4番の打ち手）、マキティー（巻き手）、カクティーを演舞する。演舞が終わると、雄雌の獅子が登場し、獅子パーシーの声かけの元、獅子舞が演じられ、獅子舞が終わると、全体で退場する。

武術の部分は専門の師匠がいる 戦前、戦後、復帰後しばらくは5町内（上の村）の方が中心に役割を担った。近年は5町内以外の方が参加する場合も見られる。新川字会の歴代経験者。戦前、戦後、復帰後において10代後半から30代後半の男性が役割を担った。戦前・戦後の状況は定かではないが、近年、希望者は祭祀担当者へ出演したいことを申し出て、豊年祭の1ヶ月前頃より稽古を開始する。稽古場所は決まっていない。公民館、公園ほか、人目に触れず稽古を行う。

棒の指導者は新川字会の歴代経験者が務めている。定期的な稽古は行われないが、祝事等で演じることが決まると、祝事の日より早くて約1ヶ月前から練習を開始する。稽古場所はとくに決まっていないが、公民館、公園、学校ほかで行われる。令和5年は石垣中学校を中心に練習が行われた。

これまでに、石垣小学校創立80周年記念式典、石垣港の開港式、沖縄海洋博覧会、名護市で開催された南ぬ島大会、与那国町での広域まつり、石垣島まつり、宮良長包生誕120年記念式典、石垣空港開港式、真乙姥御嶽拝殿落成式などで演じられた。

〔登野城〕棒術の演武は、近年は男性のみ出演している。年齢制限はない。進行伴奏（笛、ボラ、銅鑼）は年齢・性別の制限はない。演武を行う行事の約2～3週間前から練習が行われる。最近では現役世代が役職を担うようになってきたことから、副師匠を2～3名、会計も加えた組織に変化してきている。伝承を継承するために、登野城字会が主体となって保存会を設立し、地域内で継

承者の育成に努めている。

継承は基本的には歴代の棒術師匠から口伝による演武指導により伝承されてきた。武術の部分に特化した組織があり、武術の部分は専門の師匠がいる。青年会組織を中心とした若者が演武を担い、経験を積んだ青年会 OB 等が組織運営を行うための師匠（1 名）や副師匠（1 名）の役職を担う。

近年ではビデオカメラ等による動画撮影を行い記録映像として残し、演武の参考や振り返り等の棒術奉納を行って来ている。

稽古場所は、近年は師匠を担う責任者の屋敷形態や事情により練習場所の確保が行われる。庭やそれに面した路上、公園、公民館、天川御嶽などで行われている。

〔石 垣〕運営組織の主体は石垣字会である。武術の部分に特化した組織がある。「棒・獅子保存会」がある。中心となる指導者は仲新城家から出たともいわれる。稽古のスケジュールは豊年祭三週間前から宮島御嶽で行っている。

かつてそれぞれ中断した時期があり、棒術は昭和末期再興、獅子舞平成 5 年ごろ再興したことがある。とだえる前までは字石垣の農家の若者のみ、再興後は 10 代～ 20 代 字石垣の字民、現在は 10 代～ 30 代字石垣関係者となっている。

【演武の衣装と道具・楽曲】

棒舞及び鳴物の衣装・道具は、五・五尺程の棒、頭に草の繊維を赤く染めたカンター、上衣は白地の七分小袖、下衣は白地長パンツで、黒帯に赤襷、背中に緑色の葉っぱをつける。また、足は赤地に白線の脚絆と草鞋を履く。鳴物は竹製の横笛、太鼓及びバチ棒、銅鑼及びワラ棒を持つ。入嵩西家（字新川 151 番地）で大切に保管されている。南風ぬ島カンター棒保存会に小道具・装具の部があり、道具の修繕や製作を担っている。

新川字会の公民館にて保管されている。毎年、豊年祭のために準備委員が任命され、その方々により道具等の準備がなされている。なお、衣装や道具、楽曲などについてとくに変化はない。

〔登野城〕演武者：袴下と肌襦袢をベースに、たすき掛けと腰ひもに黒帯を使用する。足脛に脚絆を巻き、黒足袋（わらじ）を履く。頭部にはカニウツパイ（紅型風呂敷）で覆い、二又に分かれているツノマタと一緒に白帯で全体を固定する。師匠・副師匠：袴下に袴と肌襦袢をベースに、たすき掛けと腰ひもに黒帯を使用する。履物はわらじを利用し、頭部には幅広の白帯を巻く。

進行伴奏（笛、ボラ、銅鑼）：師匠・副師匠と同様の着付け（年度によってはポロシャツ着用の場合もあり）。近年：笛（ピー）2～3 名、銅鑼 2 名、ボラ 2 名。楽曲はナナツガンニである。

近年、すべての衣装・道具は師匠が保管している。現在使用している六尺棒、三尺棒、ヤリ、ナギナタ、カタナは昭和 48 年頃に地域の方が手作りで製作したと思われる。ガギ（カマ）、サイは手作りで見られるが、製作時期は不明。トンファーは市販品と思われる。2006 年頃に市販の六尺棒を数本購入。2022 年に文化庁補助事業により、ナギナタ、カタナ、ヤリを新調した（地域の方による手作り）。道具類の購入費は字会予算にて、字会長が発注している。

〔石 垣〕衣裳・棒、他の用具などは公民館で保管している。衣装は字会費、棒は棒うつで修繕を行っている。木製・ガギ・ティンバイは鉄 変化はない。楽曲については変化はない。

【行事継承の今日的課題】

字新川では、令和元年から 4 年にかけてはコロナ禍で行事が縮小されたため、4 年間は演じられなかった。近年は、子どもたちの参加もあり、時間帯を早くしてほしいとの声がある。道具の修繕、衣装の調達と演目の記録の実施が課題である。

字登野城では2020年～2022年の3年間は、豊年祭の開催規模を縮小したことで、奉納演武を行うことが出来なかった。課題としては、棒術では使用する道具が多く、高額な紅型風呂敷などもあることから、それらを保管する専用の場所が必要となっている。

字石垣の課題としては人材確保や道具等の資金である。コロナの影響により縮小があり、演武の数が少なくなっている。

2 石垣市川平の結願祭

【行事の概要】

棒術はムラの結願祭で奉納されている。結願祭は旧暦の8月頃に日を選んで行われる。正日の奉納・余興場所はンニブシオン（稲ほし御嶽）、別称のユブシオン（群星御嶽）である。結願祭はンニブシオン、ヤマオン（山川御嶽）、アーラオン（赤イロ目宮島御嶽）、キファオン（浜崎御嶽）の四つの御嶽で、播種、生育、収穫が雨に恵まれ、災害にも免れて無事にすべて済んだことに感謝と来期の豊作および住民の幸福を祈願する、一年間の儀礼のしめくりとなる。

なお、節祭でもかつて奉納余興が行われていたが、結願祭と二回の開催となると、ムラの人々の負担が大きいため、昭和34年以降は廃止された。〔川平公民館、1976、P103〕

【由来・来歴】

約500年前、川平村に仲間満慶山という人物が生まれた。彼は長じて武術の優れた青年となった。満慶山は毎日棒術、剣術、弓術を考案し、自己流で攻防戦の稽古に余念がなかった。ある日、その修練振りを村の若者達が、遠くから見て驚いた。まるで飛鳥のような身軽さ、早業である。そして自分達も満慶山の様にならうとの一念から、遠慮なく指導乞うたところ、満慶山も喜んで承諾し教えたのが棒術の始まりであると伝えられている。

【演武の種類と内容】

奉納余興には「庭の芸能」と「舞台の芸能」がある。「庭の芸能」では狂言、舞踊などを紹介するスーブドリ（総踊り）、祓いの意味で太鼓、棒、獅子舞の座見舞と本舞がある。座見舞では、御嶽の境内を笛、太鼓、棒術、獅子舞の順に入場し、境内を清める。雨天の場合は先頭棒等の一部棒術のみンニブシオンで奉納し、他はすべて川平小中学校の校庭および体育館で実施する。本舞でも太鼓、棒、獅子舞の順に披露される。棒の演武は2回行われ、演技中は銅鑼と太鼓が打ち続けられる。〔沖縄県教育委員会、1981、P11～17〕

川平の棒は「百姓棒」ともいわれ、対面での打ち合い等がある。本舞は刀棒から始まり約10組の棒術を奉納する。刀、ナギナタ、六尺棒、三人棒、エーク、ティンバイ、カニパー（クワ）、カマ（ガギ）の棒術を、三人棒以外は二名一組の組手で演武する。基本的には仲間満慶山から伝承された棒術を基本とし、役人と百姓の戦いや三人棒（大男と小人の戦い）等、迫力ある棒術が特徴である。

【演武の組織と稽古・継承方法】

12歳～50歳までの男性が中心となる。術の部分は専門の師匠がいる毎年、公民館から役割が言い渡され、棒・太鼓の責任者を中心に演者を決定する。本番約10日前後から練習を始める。

近年は保存会が中心になって組織、役割を決定している。高嶺・宮良・前浜・大浜・波照間・南風野・岸本など川平村に関係のあるすべての方が指導してきた。

演武の動画撮影や棒術の工工四を作成するなど、先代からの棒術演武を正確に継承できるようにしている。主に青年会や青年会OBなど等で構成される「川平棒・太鼓・獅子保存会」を結成して、保存継承に取り組

んでいる。

【演武の衣装と道具・楽曲】

座見舞と本舞では衣装が異なる。座見舞では上衣は紺地に赤襟り、下は白ズボン、たすき、黒帯、白黒縦縞の脚絆、頭には、カナヰフチブイ（麻糸で織った松竹梅の模様のある大風呂敷）をかぶる。カク（棒組の前に立つ人）の上衣は短めに、ナカンギリ（棒組の後ろに立つ人）の上衣は、やや長めである。扮装は赤襟の黒上衣に白襦袢、たすき、帯、棒縞の白黒脚絆。頭は唐草模様の頭巾を被り、兜を飾る。本舞では、太鼓の衣装は座見舞のときと異なり、頭巾を白鉢巻後結びにする。赤羽織はなし。

昔の衣装は芭蕉着物に帯を締め、草履を履いたという。時代が変わり、洋服に靴を履いた時代もあった。近年では着物、はかま、黒足袋に、下駄が定着していたが、最近では昔の服装に戻している。楽曲はすべて笛と銅鑼・太鼓で行う。

棒の材料はキャンギ（イヌマキ）・ガジュマル・クバ等の島材木を使用している。衣装、棒等の道具は全て公民館と保存会で管理している。主に公民館の予算で対応しているが、近年では公的補助金等も活用して、整備するようにしている。

【行事継承の今日的課題】

課題としては道具の修繕や衣装の費用不足などがあげられる。また、若者の島離れがあり、後継者不足が懸念されている。さらに、コロナ禍の影響で、3年間縮小して開催したため、後継者育成が出来なかったことがある。

3 竹富町竹富の種子取祭

竹富島の種子取祭は、1977（昭和 52）年に「竹富島の種子取」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。

【行事の概要】

種子取祭は「タナドゥイ」、十五夜祭は「ジングヤ」と呼ばれる。種子取祭は、10 日間に及ぶ島の最大行事で節祭（シチ願い）から 49 日にあたる戌子（つちのえね）の日を祭日として（旧暦 9 月～10 月）に行なう。甲申（きのえさる・トルツキ）の日に計画手配をして、奉納芸能の練習を始める戌子には「火の神」「農業の神」に種子取祭の祈願をし「飯初」（粟餅）を作る。7 日目 8 日目の両日に奉納芸能があり庭の芸能舞台の芸能の奉納の中で武術的所作の表現の形態がある。奉納芸能の中で庭の芸能として棒踊り（棒術）があり、対面での打ち合いが見られ、腕棒は素手で演じられ、女性が舞う。また、舞台芸能の中にもキョングンやブドゥイの中にも空手の型が見られる。

節祭（シチ願い）から 49 日目の前後 10 日間に行われる祭で島最大の祭の種子取祭と旧暦 8 月 15 日の十五夜祭（ジングヤ）でも棒術が演じられる。ジングヤは、ヤドウ（杖）と言われる工作物の上で演じられ大勢の担ぎ手がいる。

種子取祭は、世持御嶽（ユームチオン）で執り行われ、十五夜祭（ジングヤ）は、以前は各集落の指定場所で行われていたが、電線やその他の障害の為、旗頭の移動が困難なため、学校の校庭で行われた。コロナ禍で神事のみ行われ奉納芸能は中止となり、本年令和 4 年は神事と奉納芸能（重要な演目を数点）奉納することが出来た。

【由来・来歴】

種子取祭は 600 年の歴史をもつといわれるが、いつ頃始まったのかわからないとされる。沖縄本島で行わ

れていたタントウイ（種子取）が、八重山の島々にも伝わったと考えられ、琉球王府との往来が頻繁になったオヤケアカハチ騒乱以後、すなわち 1500 年以降のことと推察されている。〔狩俣恵一、2004 年 P13 ～ P14〕

【演武の種類と内容】

種子取祭は、シラ（稲積のこと）に保管してある粟の種子を選定し取り出しその種子の播種時期戊子（ツチノエネ）に播くことが重要であり、また播種後の種子が無事に発芽し、順調よく生育することを祈願し、その時期が来たら豊年万作でありまた来夏の世も豊作であるようにとの祈願と万作であったことへの感謝を奉納芸能として神に感謝する

種子取祭は、600 年とも 700 年とも言われており、中断等は厳密に言えない。ただ奉納芸能は最近では 2020 と 2021 年のコロナ禍により中止しており、以前にも戦時中とか台風襲来により中止したことはあるが、祈願は戦時中でもコロナ禍でも中止しないで、ずっと継続している。

種子取祭で奉納される「庭の芸能」で行列演目の最初が棒（ボー）で、棒は琉球古武術を現し、棒（六尺）、槍、刀、長刀、鎌等を持って演じる。楽器は銅羅鐘太鼓ホラ貝（ブラ）の音で演技を行うため、祓い清め意味があり対面での打ち合いが基本である。また、同じ行列で女性による腕棒（ウディボー）という行列があり、女性が素手で棒を演技するので大変人気がある。

行列の順序は①棒（ボー）、②太鼓、③マミドーマ、④ジツチュ、⑤真栄（マサカイ）、⑥祝種子取、⑦腕棒（ウディボー）、⑧馬乗り（ンマヌシヤ）である。「庭の芸能」の一部は翌日も同じよう奉納される。「庭の芸能」が終わると、「舞台の芸能」へと移る。

「庭の芸能」での棒（ぼうー）は対面での打ち合いである。「棒踊り」とも称される。1 番棒から 5 番まであり、二人一組で、1 番棒は（六尺棒）2 番棒は（刀と槍）3 番棒は（槍と刀）4 番棒は（長刀と鎌）5 番棒は（長刀と力）である。方は大刀でもある。

棒踊りは三部構成で、第一部は二列で、広場に入場し、はじめに奇数組の者が棒を打ち、次に偶数組の者が棒を打ち合い、それが終わると一列になって退場する。第二部は再び全員が一列となり入場し、互いに向き合って全員が棒を打ち合う。終わると退場する。第三部は各組ごとに入場して打ち合い、退場するという流れである。この打ち合いの組み合わせには、かつてテンベーと槍、槍と長刀の打ち合いもあった。〔沖縄県教育委員会、1981、P29 ～ 31〕

また、腕棒（ウディボウ）は武具は使用せず、素手での演武である。二人一組の 10 人が入場し、対面となり空手の型のような突きをしたり、掛け声いさましくお互い腕を組み合って引き合うなどの競い合いをおこなう。

【演武の組織と稽古・継承方法】

戦前、戦後、復帰後は多少の変化（時代に応じて）はあるとされるが、基本的には大きな変化はない。種子取祭やその他の祭に実行委員会なるものはないが昔から公民館長が祭主となりすべての祭を取り仕切るが古来より玻座間集落、仲筋集落に狂言部や舞踊部があり、更に玻座間狂言保存会、仲筋狂言保存会があり、演目は決まっている。

武術の部分は専門の師匠がいる。上記のように各集落の狂言部（キョングンドウン）舞踊部（ブドウイドウン）には歴代の師匠が居て指導におり各部は保存会的役目しており、師匠の後継者も保存会員の中で決め脈々と続いており、戦前戦後、復帰後も変化はない。



写真3-5-4 腕棒の演武〔竹富島〕

各集落には踊りや狂言の師匠がいる。また、島外では石垣竹富郷友会の会員を中心に玻座間狂言部があり、各部にも師匠がいる。また、島外では石垣竹富郷友会の会員を中心に玻座間狂言部があり、各部にも師匠がいる。

腕棒は、かつて玻座間村の男子が演じていたが、それほど人気がなく、いつしか演じられなくなった。そのようなとき、仲筋村の狂言部の師匠であった仲里長正さんがこの腕棒を女性に演じさせようと考えた。長正さんは奥さんの仲里ハルさんと友人の小底ハルさんを使い、やって、玻座間の師匠に頼んだところ、師匠は「ウリヤ、ウムッサンネンバ、ムチハリ（これは面白くないので、持っていけないさい）」と快く承諾してくれたという。それで腕棒は仲筋の女性が演じる人気演目になった。腕棒は、空手を取り入れた女性どうしの戦いの演技であるが、男性の演技としては単純な所作で物足りない。ところが、女性が演じると爆笑と喝采がわき起こる魅力ある演目とされている。〔狩俣：2004 年、p22〕

祭事への参加者は、島出身で島に存在し島の祭事行事に参加できる人、また島外出身であってもよく趣旨を理解、協力出来る人また伝統的に受け継がれている家柄等、例えば弥勒神の御面などを被る人等は世襲的でありまた小学校高学年から 60 才～ 70 才ぐらいで頑張れる人である。祭が近づけば各集落の会館やそれぞれの従来場所ではじまる。

稽古のスケジュールは、古来の習わしでは種子取祭では、トルツキ（キノエサル）の日から役割分担を決めて、練習に入るのが謂れであるが、現代では小学校高学年から参加する子もいるので夏休みに入ると練習に入る地域（集落）もある。

島では昔から男は狂言部（キョングドン）女は舞踊（ブドウドン）に入るのが習わしである。ブドウイキョングン遅くとも 1 か月前から始まる。各集落には集会所があるのでそこで練習（舞踊の場合）狂言は（玻座真はまちなみ館）中央公民館仲筋はこれまでは老人コミュニティセンターではあったが複合施設になった為、1 日保育所を利用している。

竹富島では種子取祭に関して「竹富島民俗芸能保存会」が設立されている。竹富島の字は大きくは玻座間ムラと仲筋ムラに分かれ、玻座間ムラはさらに東と西の集落に分かれている。そのため、奉納芸能の狂言部（男子）は玻座間と仲筋の二つの組織に分かれており、踊り部（女子）は玻座間東（玻座間村の東集落）・玻座間西（玻座間村の西集落）・仲筋の三つの組織である。狂言部（男子）の担当は「庭の芸能」で、その中に棒が含まれる。他には太鼓・馬乗者と「舞台の芸能」のホンジャー・ミルク（弥勒神）・狂言・組踊・芝居を受け持つが、玻座間と仲筋の担当する演目は決まっている。踊り部（女子）は玻座間東（玻座間村の東集落）・玻座間西（玻座間村の西集落）・仲筋支会に分かれており、それらの演目もほぼ固定している。なお、演目の一つである「腕棒（ウディボー）」は仲筋支会が担当している。

【演武の衣装と道具・楽曲】

衣装・道具については、槍とか長刀を扱う衣装で刀を扱う衣装はそれぞれ違い、また一番棒の衣装も違う。共通点は襦袢と緋・白のズボンに脚絆のいでたちで、ワラジに黒足袋をして、紫の襷をしめる。1 番棒は紫の入巻にレンコナー、槍と長刀の場合は紅型のフロシキを付ける。按司が着けたレンコナーとなる。

各衣装は各地域の保存会が保管しているが棒や刀類は練習中や本番中によく折れたり破損したりするので保存会が修理したり新調したりする。また演武した本人が修理したり新調したりする。女子の衣装も集落の保存会が集落ごとに保管している。

棒（ボウ）の材料は以前、デイゴ等を利用していたが脆いため、現在はほとんど杉材で、なかにはキャンギ（イヌマキ）で作られたものがある。棒の演技は銅羅鐘、太鼓、ホラ貝（ブラ）の音で行う。演奏者は保存会の先輩が行う。腕棒（ウディボー）についても銅羅鐘とホラ貝で行う。銅羅鐘と太鼓で入場しホラ貝の合図で打ち合いが始まり、ホラ貝の合図で終了し退場等の動作がある。腕棒もドラとブラで開始終了、退場がある。楽曲については、戦前戦後復帰後もとくに変化はみられないという。

【行事継承の今日的課題】

令和2年と3年については奉納芸能は中止した。公民館では、令和2年度の種子取祭ではコロナウイルス対策として感染対策を実施し、記録作成事業を実施した。奉納芸能は実施出来なかったものの、記録作成事業は県文化振興会の協力があり、島民の祭りに対する熱い思いから、記録作成が出来たことは今後の継承への道筋ができたといえる。

4 竹富町西表島祖納・干立の節祭

西表島の祖納と干立の節祭（シチサイ）は、1991（平成3）年に「西表島の節祭」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。両集落を網羅した形で「西表民俗芸能保存会」が組織化されている。

【行事の概要】

節祭は「シチサイ」と呼ばれる。10月の己亥（つちのとい）の日から3日間おこなわれる。行事の目的は豊作への感謝、五穀豊穡、健康と繁栄である。1日目は「シチ」で、翌日の「ユークイ」行事のための諸準備をおこない、身を清め、家を清め、ムラを清めて新しいユウを迎える日である。2日目は「ユークイ」と呼ばれ、奉納芸能が実施される。祖納における上演の場所は前泊の浜にあるクシムリウガンと前泊ウガン御願内にある「船元（フナムトゥ）の御座」である。以下、主に祖納の祭りの流れを中心に記述し、武芸に関する箇所については、干立の事例も参照するようにしたい。

【由来・来歴】

節祭の歌には日本の古い言葉でいう「御座る」とか「弓矢八幡」などが唄われるといい、興味深い民俗芸能でありながら、どのような経路で西表島まで伝来したのかはわからないという。〔沖縄県教育委員会、1981、P45〕

【演武の種類と内容】

「フナムトゥ（船元）の御座」の祭場では、クシムリウガンや前泊ウガンでの祈願祭祀のあとに櫓や棒による奉納演武が行われる。

演武の構成は一番旗が先頭となり、男子の芸人が公民館から「フナムトゥの御座」へ向けて出発する。船子は櫓を持ち二列縦隊で並び、その後方に太鼓打ち、船頭（歌い手）が続く。次に二番旗頭にはミリク行列、アンガマの女子芸人の行列の順である。

一番旗の船子たちは、太鼓打ちが三回打ち終わると、船頭が棒（六尺）を持って、ピョーシのかけ声に合わせて、演武する。舟おろしの「ヤフヌティ（櫓の手：「ピョーン）」ともいう）では、船子の櫓踊りが披露される。「ヤフ」とは櫓の意味で、「手（ティ）」と言っていることから、櫓を使った武芸としての要素を含んでいる。櫓を正眼に構える動作が攻撃であるが、一方膝を立て両手で櫓を頭上に上げるのは年貢を捧げる意味の動作ともいわれるが、別の解釈では攻撃に対する受けの構えとの見方もあるようである。「ヤフヌティ」の演技隊形は、二列に縦列で並び、船を象った形をしているのも特徴的である。歌と太鼓に合わせて、櫓を正眼に構えたり、膝を立て頭上に櫓を上げたりして、前進しながらゆっくりと力強く行われる。歌が終わると、太鼓の連打とともに船子は船頭をまわり元の位置に戻る。この隊形を三回繰り返す。

その後、ミリク行列、アンガマ行列のあとに、フナムトゥの祭場において、奉納舞踊やミリクの舞いが披露され、ユークイの舟漕ぎ競漕が行われる。これが終了すると「浜の芸能」として狂言が披露される。

次に棒術が行われる。棒術は「棒踊り」と「棒芸」と呼ばれる。棒術の演武は、鎌と棒（ガヒヤー）、二人棒、三人棒、五人棒がある。青年、小学生、中学生、郷友会も参加して勇壮に演じられる。銅鑼・太鼓・笛の伴奏に合わせて演武する。

右記のヤフヌティ（櫂の手）は干立においても行われる。その点は同様であるが、ここでは舟子（男子）の他に、アンガーとミルクヌファ（ともに婦人）がそれぞれ櫂を持ち二列の隊形でヤフヌティを演じるもので、女性が参加する点が異なっている。また、棒も披露されるが、シーシャン棒（獅子棒）や、一対二で打ち合う三人棒が行われる。この棒には小学生や中学生も多く参加するという。〔比嘉、1991、P64～78 及び P134～142〕



写真3-5-5 棒の演武〔西表島祖納〕

【演武の組織構成・稽古・継承方法】

節祭を構成する演者は以下のとおり。旗頭持ち二人（40歳前後の力の強い者）、舟頭二人（49歳を迎えた者）、舟子若干人（櫂踊り、爬龍船の船子その他）、太鼓打二人（櫂踊りの時の太鼓役）、ミリク（弥勒）役一人（49歳を迎えた繁盛家）、お供若干人（20歳以下の乙女）、フダミチ二人（50歳前後の婦人）、お供（50歳前後の婦人）、太鼓打二人（50歳前後の婦人）の以上である。〔沖縄県教育委員会、1981、P45〕

演武の構成は、前項で記したように、一番旗が先頭となり、男子の芸人が「フナムトウの御座」へ向けて出発する。舟子は櫂を持ち二列縦隊で並び、その後方に太鼓打ち、舟頭（歌い手）が続く。次に二番旗頭にはミリク行列、アンガマの女子芸人の行列の順である。その後、「浜の芸能」として狂言、棒術、アンガマの踊り、獅子舞という流れである。

節祭の主要な組織は公民館の青年部にて実施（70人～80人）される。性別の制限はないが、女性が実施しているところを見たり聞いたりしたことはない。男性であれば、大人子どもかわからず、できることをやる。元の人と移住者の割合は7：3程度。稽古は1週間前ころから公民館の青年部が中心となって実施され、稽古の場所はとくに決まっていない。

【演武の衣装と道具・楽曲】

旗頭持ちは頭に風呂敷を被り、純白の襦袢・コシタを着て、その上から藍型の麻タナチを着る。黒たすき、半帯しての姿である。棒踊りをする船子は風呂敷を被り、純白の襦袢・コシタを着て、黒のたすき・黒帯をしめて櫂を持つ。太鼓打は純白の襦袢・コシタを着て、その上から藍型の麻タナチを着て、片袖ぬぎ、太鼓を持つ。ミリク役はミリクの面をかぶり、黄色の着物に半帯をしめ、白足袋をはき、扇子を持つ。ミリクのお供は模様入りの浴衣に赤い襟をつけて、白カカンを着て、ミリクの両側から袖持ち、穀物の種子の奉納を持ち、その後から銭引きを持って行列をする。

フダミチは黒のスデナ、白のカカンを着て、頭に笠をかぶり、その上から黒い布を被衣し、扇子を持って先頭に立つ。お供は黒のスデナ、白のカカン、水色鉢巻をして、後に長くたらし、紅白のザイを持つ。太鼓打はカンプを結び、水色の鉢巻で顔だけを見せて頭に巻き、黒のスデナに白のカカンを着て、その上から藍型の麻タナチを片袖ぬぎにして太鼓を持って音頭をとる。〔沖縄県教育委員会、1981、P45〕

衣裳・棒、他の用具の管理はすべて個人管理で、衣裳・棒、他の用具の修繕については公民館で修繕ができる人を募って修繕。祭りの2～3日前から実施。棒の材質は木製。

楽器の内容と呼称、各楽器の演奏者数と時代の変化について（戦前、戦後、復帰後など）は、太鼓・笛・三線、演奏者の人数に決まりはない。

【行事継承の今日的課題】

口頭での伝承で公民館には映像が残っていない。個人で撮影している映像はあるが、あくまで個人で管理している。正式なものが残っていないので、型が崩れてきている。

コロナによる3年間は集落内で神事のみの実施してきた。今後は行事の正式な記録をとること（映像等）、指導者の育成が課題としてあげられる。

5 竹富町波照間のムシャーマ

波照間島の島最大の祭事であるムシャーマは、1993（平成5）年に国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている。このムシャーマの行事の中には棒術等が演じられる。

【行事の概要】

ムシャーマは、ソーリンと呼ばれる旧盆行事（旧暦7月13日～16日）のなかで、旧7月14日に行われる祖先供養と豊年祈願を結合した祭事である。

波照間島は行政区としては字波照間であるが、字は名石、富嘉、北、南、前の5つの集落（部落）からなり、各集落には集落の会場となる部落会館がある。また全体を総括する中央公民館にあたる公民館は名石に所在する。したがって、ムシャーマの行事では前組（前部落）、西組（名石部落・富嘉部落）、東組（北部落・南部落）という3つの組で組織化される。各部落会館にボーシンカ（棒衆）、テークウ（太鼓打ち）、ブドリクマリ（踊り係）、コンギンシカ（狂言衆）、行列各演目係が置かれるという組織である。棒は中学生から青年が主体となっている。

祭事の場所は「オーセー（オーシャー）」と呼ばれる公民館の前の広場「タカタミチ」である。公民館は昔の番所の跡地でもある。ムシャーマでは、当日の朝、各組ごとに所定の場所に集まり、仮装行列を組んで会場となる公民館へ進む。この行列を「ミチサネ」とか「ミチサネー」といい、様々な芸能や棒術などを披露しながら公民館へ向かう。公民館前の広場でも各組が奉納演舞を行なうという流れである。

【由来・来歴】

ムシャーマは約130年前から実施していると伝えられる。ムシャーマという語は、「ムッサーハー（おもしろいこと）」あるいは「ムシャー（武者あるいは猛者、亡者とも）」にちなむものともいい、明確ではない。

祭事の目的は、祖先供養、五穀豊穡、ミルク神への奉納（奉納芸能）などとされている。ムシャーマは、旧暦7月のソーリン（精霊祭・盆祭）の祖先祭祀行事においてみられるが、このムシャーマはその昔、豊年祈願をするプーリンのエンヌユーニゲー（来年の豊作祈願行事）の仮装行列としてあったものが、プーリンに行われていた綱引きにともなう双方の喧嘩沙汰にともない、綱引きは廃止され、プーリンは御嶽での豊作を祈願する神行事が中心となり、仮装行列はソーリンの行事の中に組み入れられ合併された経緯がある。したがって、ソーリン中のムシャーマは豊作祈願と祖先供養を総合した芸能の祭りとなったものといえる。〔波照間民俗芸能保存会：1982年、P14～18〕

【祭事の構成と種類】

三つの組とは、東組が北部落と南部落、前組が前部落、西組が名石部落と富嘉部落での組み合わせである。各組の列は、先頭と最後の部分の構成は共通で、先頭は大旗（ブーバタ）の旗持ち、次に五穀豊穡を意味する「ミルクヌナーリ（弥勒の実）」とよぶ竹に色紙などを飾るものを持つ者、「ミルク（弥勒）」、ミルクの椅子持ちと袖持ち役の二名の子ども、「五穀の籠」とよぶ竹かごを持つ少女二名、「ミルクンタマー（ミルクの子ども）」とよばれる10人ほどの子どもたち、さらに弥勒節（みるくぶしい）の歌い手と三線、笛がつく。次からは組ごとに、「豆どうま節」や「稲摺節」など、その年々に準備された10ほどの芸能が、それぞれ歌い踊られなが

ら続き、その間に魚釣りの様や、投網を打つ様を演じる者、南洋の土人踊りなども加わる。行列の最後の方は各組とも六尺棒、刀などを手に武術的な演技である棒（ボー）を行う若者たち、太鼓（テーク）の若者たち、一番最後が二頭の獅子（シーシイ）である。

以上の行列が公民館前の広場に到着すると、各組の太鼓、棒が披露され、続いて念仏踊（ニンブチャー）がある。対面での打ち合いなどであるが、本来は体に当てずに寸止めするのが正式とされる。午後から公民館の中庭に特設された舞台上、組ごとに舞踊や芝居の上演が続く。

西組は「一番コンギ」、「シーシン棒」、舞踊「かぎやで風」「世果報節」「祖平花節」、東組は「一番コンギ」、「コームッサー」、舞踊「五月雨節」「安里屋節」、前組は舞踊「崎山ゆんた・みなと一ま」「かしかき」であった。

最後は各組の獅子舞となり、終わると朝と同様に行列を組み、各組はそれぞれ演舞しながら、各会館もしくは所定の場所に戻るとそこで太鼓と棒が演舞されて、すべての祭事が終了となる。

棒の演武について 2024 年の事例で具体的に詳述する。基本的に演武内容は変わらず継承されている。

西組のボー（棒）は、一番「ジンバイ」の笠（カツツア）と長刀、二番「カタナボウ（刀棒）」の刀と長刀、三番「ガツキヤ棒」で鎌（ガツキヤ）と六尺棒、四番「六尺棒」で六尺棒と長刀、五番「マンチョー」で六尺棒と六尺棒である。東組のボー（棒）は、一番「パナ棒」で笠（カツツア）と長刀、二番「ガツキヤ棒」で鎌（ガツキヤ）と長刀、三番「ヤラ棒」で長刀と長刀、四番「ボンタマ」で五尺棒と長刀、五番「トゥム棒」で六尺棒と六尺棒である。前組のボー（棒）は、一番「ジンバイ」で長刀と長刀、二番「ガツキヤボー棒」で鎌（ガツキヤ）と長刀、三番「刀棒」で刀と長刀、四番「六尺棒」で六尺棒と長刀、五番「トゥムボー」で六尺棒と六尺棒である。銅鑼とブラの合図に合わせて行われ、いずれも二人一組による演武である。基本的に演武内容は

組ごとに棒の演武の名称や武具の組み合わせが少しずつ異なるものの、武具の種類は笠、鎌、刀、長刀、五尺棒、六尺棒の六種類である。各組の前者は農民で、後者は武士を表わし、最後の勝負は必ず前者の農民が勝つようになっているという。勇壮で威勢のある掛け声と武芸は、ムラから悪霊や疫病神を追い払う役割をもつとも言われる。〔波照間民俗芸能保存会：1982 年、P70〕



写真3-5-6 棒の演武〔波照間島・東組〕

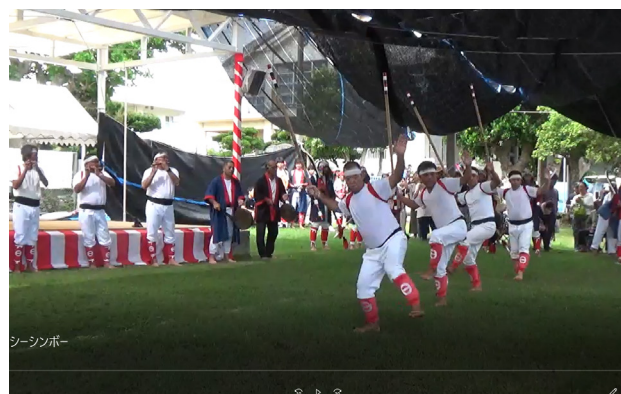


写真3-5-7 シーシン棒〔波照間島・西組〕

「シーシンボー（獅子の舞）」は西組により行われる演目である。これは五尺棒を持って、三組の獅子舞との演舞が行われる演目がある。この伝来の時期は不明であるが、伝承によると昔、南方諸島からの漂流民が波照間島と新川ムラに伝えたと言われ、波照間島では「シーシンボー（獅子の舞）」、新川ムラでは「ハイヌシマ（南風ぬ島）棒」と称されたという。

ハイヌシマ（南風ぬ島）棒は植物の繊維で作った赤毛のかつらを被り、五尺棒を持って奇異な掛け声を発しつつ、笛、太鼓、銅鑼の囃子で獅子舞の前に演じられる。

波照間島のシーシンボーは新川のそれと共通するところが多かったといわれるが、その演技が複雑で伝授に困難があったので、簡略化されて現在のように踊られているとされる。現在の服装は白ズボンに黒帯、赤たすきをかけ、白はちまきを締める。

演武は 4 名で行う。五尺棒を持って笛のメロディーで打つ銅鑼の拍子に合わせて、「棒とり」→「棒かさり」

→「棒しき」を一つのセットとして、次に「棒かみ」、再び「棒とり」→「棒かさり」→「棒しき」を2セット、次に「棒けり」、そして棒の下打ち、上打ち、回りなどをして、二人での棒の下打ちと上打ちを行い、「棒まわし」や「棒かさり」という型が演じられる。いずれも独特な棒の踊りで、例えば「棒とり」は右手で棒を持ち、右肩後ろに棒をあて、中腰で前かがみに足を後ろに跳ねるように足踏みして、待機する。笛が始まると4歩正面に跳び出し、左手の肘を曲げ、上にひらき右手は肘を曲げ、棒を上立て、頭上で右廻しに一回円を描き、顔は正面に向き、胴は右に向け、一歩正面に跳び腰を深く下すという具合である。また「棒かみ」は飛び跳ねながら棒を頭上で横に両手で持ち、腰を深く下ろし、跳び上がりながら左手の棒をはなし、右手の棒を上立てて両手を上げ、左回りに元に戻って待機するという動きである。〔波照間民俗芸能保存会：1982年、P128～P132〕

【演武の組織と稽古・継承方法】

ムシャーマは「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」、すなわち国選択無形民俗文化財で、すでに「波照間民俗芸能保存会」が組織化されている。

保存会は設立されてはいるものの、現在では人口の減少等にともない、人手不足の状態にあり、公民館の館長・役員にて保存・運営を実施しているのが実情である。

武術の部分は専門の師匠2～3名いる。棒・太鼓については以前、小学校高学年の生徒もやっていたが、中学生がメインで、青年たちも継承している。演武者について、性別の制限はないが、男性がほとんどである。行事自体は20代～30代がメインだが、60代も参加している。練習は2日前くらいから衣装や道具の準備・確認をおこない始めている。

【演武の衣装と道具・楽曲】

棒の衣装は三組ともほとんど共通している。素足のままで、白ズボンに脚絆、白シャツに黒帯を締め、その上から陣羽織に似たボアヌヌにたすきをかける。頭には唐草模様の風呂敷を被り、はちまきを締める。西組では額にカンピをさす。東組と前組はかつてカンピがあったかどうかは不明という。

すべて公民館で保管 公民館予算や寄附を募るなどして予算を捻出している。修繕については、基本的にすべて自分たちで実施している。太鼓・笛・三線の演奏者人数に決まりはない。舞踊で使用する楽曲と、番所あとで最初に演奏する「波照間島節」は決まっているが、演武者や演奏者などは公民館などに任せられている。

【行事継承の今日的課題】

コロナ禍による2年間は神事のみを行い、仮装行列の芸能は実施しなかった。島の人口減少による行事の維持と継承が大きな課題で、3～4年後には島の人口が300人を切るため、行事の維持を懸念している。

公民館長の話によると、とくに島の女性たちからは、ムシャーマは旧盆行事の中日に実施されるために、お盆行事の諸準備をしながら、仮装行列や芸能披露のために練習したり、それらの準備をすることはかなり厳しい状況にあるとの声が寄せられているため、今後3～4年かけてムシャーマ行事のあり方を検討していく予定であるという。

なお、今後に向けては国立劇場おきなわでのムシャーマ公演の依頼もあることから、そうした機会を活かしつつ、関係機関と連携をしながら継承していきたいとしている。

6 与那国町祖納・比川のウガンフトゥティ（豊年祭）

与那国島は南方や中国などの文化の影響を受けるとともに、琉球王国時代の文化を取り入れ、八重山諸島の中でも独特な文化を継承している地域でもある。

ここに対象とする与那国の祭事は、主要なものでもウガンフトゥティ（豊年祭）やスルブディ（お盆の踊り）、

シティブディ（シティ踊り）、シティガン（結願際）などがあり、全体としては「与那国の祭事と芸能」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。

芸能全体を支える組織は、あなか^{いむら}（東村）の東区、イリマイ（西村）の西区、ンマナガ（嶋仲）の島仲区、ンディムラ（比川村）の比川区に分かれる。また、本稿に關係する棒術については、東村には東棒座があり、東一組と東二組の二つで構成され、西村には西棒座があり、西一組、西二組、西三組の三つで構成され、嶋仲には嶋仲棒座（西五組）、さらには比川には比川棒座があり、全体では4つの棒座で構成されている。

【行事の概要】

棒術は豊年祭や結願際に披露される。また、棒座師匠とされる「チス」の世代交代の行事などでも披露される。この世代交代の行事は「チムバタイ」と呼ばれている。

本来、ウガンフトウティは、旧暦6月の庚または辛の日（その日と前日と後日の3日間に丑や酉の日が当たらないような日）に行われるが、近年、祖納のウガンフトウティは、祝賀会に多くの人に参加できるように、旧暦6月の日曜日（前日から後日までの3日間に、丑や酉の日が当たらない日）で計画されている。チムバタイは、2年に1度で、4月～6月頃に行われる。日程の詳細はそれぞれ、新しい棒座師匠（チス）が決める。

ウガンフトウティは奉納や披露の目的で、午前中の祈願や綱引き（隔年）が終わると、午後からトヤマウカ^ンの前で踊られる。チムバタイは、新しいチスの家の前で踊られる。

ウガンフトウティ、チムバタイ、どちらも、神様への奉納、披露、お祝いする目的で踊られる。

そのうち、ウガンフトウティ（豊年祭）のような他の公民館との芸能披露を伴う行事は、スブンクトウ（勝負事）とよばれ、互いにティ（技）の内容のすばらしさ、面白さを競いあう。往来は、各部落とも練習内容は互いに公開せず、手の内を秘伝した。時には、変装して他の村の練習場に忍び込みティを盗むこともあった。そのため、棒座では、シクミ棒とよばれる練習用のにせの棒とスニティ棒とよばれる本番用の棒踊を準備していた。現在は、本番用のみ練習している。

【由来・来歴】

与那国の棒術は、およそ320年以上の歴史を持っている。乾隆年間末期の西暦1700年頃、首里出身の棒術者、幸地氏が与那国島に漂着した。彼は与那国島に住みつくなり、島の娘と結婚し8名の子宝に恵まれた。そのうち7名の子息たちは怪童といわれ、あまりにも激しい気性と怪力の持ち主たちだったので、彼は棒術の伝授の後の危険性を恐れ、ひとり娘にひそかに棒術を伝授した。

娘が年頃になり、東迎家の先祖にあたる満名と結婚する際に、棒踊道具一式を持たせてやった。娘はその道具を用いて自分の息子4人に棒術を教えたのが始まりである。その棒踊道具は、東迎家で老朽するまで永らく伝えられていた。

また一説に、幸地氏が東迎家の孫に伝授したのが、始まりであるとも言う。

その頃、与那国島は役人が支配しており、その統制と抑圧はあまりにも厳しく、島民たちが棒術やその他の技を練ることを徹底的に取り締まったようである。そのような役人の抑制下にありながら、島の人たちは一層自分を守るにふさわし護身術として、いろいろ創意工夫して、六尺棒、三尺棒、薙刀、ティンバイ、イララ（鎌）棒、ダング（櫂）棒、マヌムヌ棒、ハサン棒など数多くの棒術をあみだした。

その背景には、並々ならぬ辛苦があったことが伺える。役人の目を誤魔化すために、棒術をフィ（笛）やンヌン（太鼓）、ドラガニン（どら鉦）の音に合わせて踊りとしておこなうようになり、島の諸行事の際には演技として役人たちを楽しませるようにしたのであろう。棒術本来の目的は、あくまでも身を守るためのものであったことは今更言うまでもないが、時に農具や漁具その他の器物を巧みに利用して棒術に取り入れ、練習を続けたのである。それ以来、与那国島全島（祖納東、祖納西、嶋仲、比川）へ棒踊が広く伝えられるようになった。

また、時代の進展とともに、他の島から取り入れたものやそれぞれの部落で創作されたものがある。明治末期以降創立された久部良集落では、棒踊りをはじめ与那国伝来の民俗芸能は数少ないが、戦前から戦後にかけての一時期、他の部落からの移住者によって、棒踊りが伝授され、行事で演じられたことがある。

【演武の種類と内容】

棒（ぼう）は、方言で「ブ」と言う。演武は型の演武や対面での打ち合い等がある。

西村の棒の演武の種類としては、①ミティアギ、②六尺一人棒、③六尺タイティ棒、④ンビムディ棒、⑤ダング棒、⑥六尺イララ棒、⑦イビ棒、⑧ウブ棒、⑨ハサン棒、⑩ティンバイ、⑪三尺三人棒、⑫マーヌムヌ棒、⑬六尺四人棒、⑭五人棒、⑮チチヌ棒、⑯ンビチ棒など 16 種類がある。

東村では①ミティアギ、②六尺一人棒、③イララ六尺棒、④ティンバイ、⑤三尺二人棒、⑥六尺二人棒、⑦ペラ棒、⑧イララ三尺棒、⑨サグ棒引きティニ人、⑩サグ棒イララ、⑪ンビフティ棒、⑫三尺三人棒、⑬ハディリ棒、⑭マラウティ棒、⑮六尺四人棒、⑯マーヌムヌ棒（マンナ棒）、⑰五人棒、⑱ブリ棒、⑲チチヌ棒、⑳ンビチ棒の 20 種類と多い。

嶋仲では①ミティアギ、②砂かけ棒、③六尺イララ棒、④ティンバイ、⑤三尺二人棒、⑥六尺二人棒、⑦六尺薙刀、⑧三尺イララ棒、⑨三尺三人棒、⑩マーヌムヌ棒、⑪六尺四人棒、⑫五人棒、⑬三尺五人棒、⑭チチヌ棒、⑮ンビチ棒の 15 種類である。

比川では、①ミティアギ、②六尺一人棒、③六尺イララ棒、④ティンバイ、⑤六尺二人棒、⑥三尺イララ棒、⑦サグ棒引きティニ人、⑧サグ棒イララ、⑨三尺三人棒、⑩マーヌムヌ棒、⑪六尺四人棒、⑫四人組、⑬五人棒、⑭五人棒、マティ棒、六尺イララ棒の連続した棒踊、⑮チチヌ棒、⑯ンビチ棒の 16 種類である。



写真3-5-8 棒の演武：イララ六尺（嶋仲棒座）〔与那国町教育委員会所蔵〕



写真3-5-9 棒の演舞：マンナ棒（東棒座）〔与那国町教育委員会所蔵〕

ウガンフトウティ、チムバタイ、どちらも、神様への奉納、披露、お祝いの意味があることから、ウガンフトウティでは、開演を告げる「座ならし」、六尺一人が登場する「ミティアギ」と他全出演者が揃う「スナイ」のあとに 3 演目ほど棒踊りを行う。なお、豊年に・豊穰に関係するイララ（鎌）を使った踊りは定番となっている。イクミでは、1 点踊っている。

鳴り物のンヌン（太鼓）は 5 名で、このうち真ん中に立つ人が音をとっている。カニン（ドラ）に 1 名、フィ（笛）に 1 名である。

多くの棒踊りには各部落共通する演目が多いが、棒のティ（うつ手）は多少異なる。それは当時の指導者がそのティをいろいろと加え、他と面白さを競ってきたためだと考えられる。

天地を轟かすようなフィヤンヌン、ドラガニンの音に合わせて、舞台狭しと演じる勇壮な棒踊りは、島人をして出演者、観客とも血湧き肉躍らせるものがある。今では与那国島の民俗芸能の大きな演目の一つである。

【演武の組織と稽古・継承方法】

各棒座が保有する棒踊りは、その棒座のみ特化している。東村には東棒座があり、東一組と東二組の二つで構成され、西村には西棒座があり、西一組、西二組、西三組の三つで構成され、さらに嶋仲には嶋仲棒座で、西五組となっている。比川は比川棒座である。

西棒座では男性のみで、年齢の制限は特にないが、「チス（師匠）」を経験すると「コモンウヤ（顧問）」の立場にあがる。祖納西地域（西一組、西二組、西三組）の出身であれば、他の地域に住んでいても西棒座に所属することができる。

東村では男性のみで、年齢の制限は特にないが、「チス（師匠）」を経験すると、「コモンウヤ（顧問）」の立場にあがる。東の地域の出身であれば、他の地域に引っ越しても東棒座に所属することが出来る。また、他の地域の出身であっても、東地域に住んでいる人は東棒座に所属することができる。

嶋仲では男性のみで、年齢の制限は特にない。また、嶋仲（西五組）の地域の出身であれば、他の地域に引っ越しても嶋仲棒座に所属することが出来る。また、他の地域の出身であっても、嶋仲地域（西五組）に住んでいる人は嶋仲棒座に所属することができる。

比川棒座に会計はなく、支出があれば公民館の会計から支払われる。棒座の1年の活動は、主に豊年祭（ウガンフトゥティ）の10日前から始まる練習である。棒座には、「チス」と呼ばれる座の師匠が置かれる。

〔西 村〕 武術の部分に関しては専門の師匠はいないが、その踊りについては経験者が教えている。かつては各家庭はいずれかの座に属していた（棒座の他に、踊座、組踊座、狂言座、旗座などがある）。そのため、ここでは棒座に携わっていた家庭を挙げると、東迎家、請花家、東浜家、外間家、小嶺家、新嵩家、杉本家、徳吉家、入慶田本家、東崎原家である。現在は、棒座への参加に家のルーツを問わない。

〔東 村〕 歴代棒座師匠として、外間守一郎、大川哲明、前黒島章、金城信利、前登野城充、嶋間信助、宮良正一、請舛正雄、久部良竹仁、祖納英文などの方（※順番は年代に関係しない。また、聞き取り調査によるものなので再確認必要）がいた。

〔嶋 仲〕 歴代棒座の師匠には、稲蔵国象、益良作、嶋間秀司、田島芳宏、田島政之、前外間均、田島永信、慶田嵩正弘、与那覇昇、前外間功、田島寛二、横田秀雄、上原光秀、上原信孝、大島馨、田島昇、与那覇徳三、与那覇義昭（※公民館に残された記録を参考にしたが、記録されていない人もいる可能性有）などの方がいた。与那国中学校で行われる郷土学習の「棒座コース」を、他の棒座（東棒座、嶋仲棒座）と持ち回りで教えている。以前は2年ずつ担当していたが、今は2年交替である。

各家庭はいずれかの座に属して代々受け継がれてきたため、棒踊を踊る家庭も決まっていたが、最近では生活様式の変容や特に後継者不足のため、これまでの強固な座の体制は弱まっている。現在、西棒座においては、「チス」という師匠を1名置き、その下に「ナガチス」を1名以上置いている。最近では会計係も置いている。以前は、座に所属する各家庭から集金して、年間の支出に充てていたが、現在は報酬のある草刈りの事業を受けて、収入を得ている。

〔西 村〕 稽古は、ウガンフトゥティの場合、まず棒座の会合を開き、今年は誰がどの演武をするかを決め、「コモンウヤ（顧問）」の了承を得る。練習は本番の二週間前から開始し、19時から21時ごろまで行う。チムバタイの棒踊は練習を行っていない。チスの家や公民館の庭など、屋外で練習している。

〔東 村〕 ウガンフトゥティでは、およそ2週間前から練習を始めている。18時半から1時間半程度練習している。練習の内容はチスが決める。本番の二日前に、踊り座（女性の舞踊の座）と合同でリハーサルを行っている。本番だと、身内に不幸があった人は、トヤマウカンに行けないため、その人達も棒や踊りを見られるように、また練習もかねて、合同でリハーサルを行う。練習場所は公民館の庭など屋外。

〔嶋 仲〕ウガンフトゥティの練習日程は、その年のチスが決めているため一概ではないが、当日のおよそ2週間前から始め、夜に2時間程度練習を行っている。練習の内容もチスが決めている。チムバタイで踊られる棒の練習についても、ウガンフトゥティと同様、チスが決めている。公民館の駐車場など、屋外で練習する。

〔比 川〕専門の師匠はおらず、その踊りの経験者が教えている。比川小学校の児童に、学芸会での発表を目的に教えている。小学校の児童には、男女関係なく教えており、人数が不足している場合は、比川小学校の先生に太鼓役をしてもらっている。入米蔵 茂夫さん 男性のみで、年齢の条件は特にない。他の地域出身であっても、比川地域在住であれば、参加することが出来る。ウガンフトゥティの10日前から、20時から21時を目処に練習を行っている。公民館の庭など、屋外で練習する。

なお、伝承によると、ウガンフトゥティ（豊年祭）のような他の公民館との芸能披露を伴う行事は、スブングトゥ（勝負事）とよばれ、互いにティ（技）の内容のすばらしさ、面白さを競いあう。往来は、各部落とも練習内容は互いに公開せず、手の内を秘伝した。時には、変装して他の村の練習場に忍び込みティを盗むこともあった。そのため、棒座では、シクミ棒とよばれる練習用のにせの棒とスニティ棒とよばれる本番用の棒踊を準備していた。現在は、本番用のみ練習しているという。

【演武の衣装と道具・楽曲】

〔西 村〕棒踊出演者の「衣装」を方言で、「ンナニ」という。踊りによっては一部特殊な衣装があるが、ほとんど同じ衣装を着用する。衣装は、それぞれ①サシマタ、②頭巾、③鉢巻、④たすき、⑤脚絆、⑥白の襦袢上下、⑦袴、⑧トサカなどである。

上は長袖の白いシャツ、下も城のズボンを着用し、ミンサー帯で絞め、たすきを掛ける。最近は白いシャツの代わりに、襦袢を着ている。頭は頭巾の上からサシマタとよぶ冠を掛け鉢巻を結ぶ。脚は黒の脚絆をつけ、履物は履かず素足で踊る。マーンムヌ棒の野武士は、頭をアグイ（クロツグの黒い繊維）で覆う。最近は、ティンバイ役が柄のあるズボンを着用していたり、薙刀役が袴を着用するようになっている。

鳴り物の出演者については、フィ、ンヌン、カニンの出演者は全員ドウタティ（与那国絃）をミンサー帯で絞め、数本の藁か花織シダディ（てぬぐい）を鉢巻にしていた。最近は、白いタオルを捻じり鉢巻に用いる場合が多い。

次に道具類について、棒踊の道具は、①三尺棒、②六尺棒、③イララ（鎌）、④ナギナタ（長刀）、⑤ティンバイの小刀、⑥笠、⑦ダング（櫓）、⑧ハサン（先が二股になったはさみ）などである。鳴り物の道具は、①ンヌン（太鼓）、②チムンク（太鼓のばち）、③カニン（ドラ鉦）、④フィ（笛）である。

衣装は個人で持っており、サシマタ、トサカと道具一式はチスの家で保管している。

衣装の変化としては、長袖の白いシャツと白い長ズボンが、襦袢の上下に変わっている。その他、ティンバイの薙刀が袴をきるようになった。衣装や道具は、古くなったり、傷んで修理が必要な場合は、個人のものは個人、棒座のものは棒座で修繕している。

棒は、昔はヒロウ（クバ）の幹の中心部分を使って作っていて、ハスノハギリ（トゥガヌタ、スガヌタ）やデイゴ（ディクイ）を使っている。現在は石垣島のスポーツ店から購入している薙刀（木と竹）を使用している。折れたり、替えがなくなるまで使っている。チムンク（太鼓のばち）はオオハマボウ（ドウニンパ、ドウヌンパ、ドウナンパ）を使う。

〔東 村〕棒踊出演者の「衣装」を方言で、「ンナニ」とうのは東村と同様である。踊りによっては一部特殊な衣装があるが、ほとんど同じ衣装を着用する。衣装は西村と同様である。上は長袖の白いシャ

ツ、下も城のズボンを着用し、ミンサー帯で絞め、たすきを掛ける。最近は白いシャツの代わりに、襦袢を着ている。頭は頭巾の上からサシマタとよぶ冠を掛け鉢巻を結ぶ。脚は黒の脚絆をつけ、履物は履かず素足で踊る。マヌムヌ棒の野武士は、頭をアグイ（クロツグの黒い繊維）で覆う。最近は、ティンバイ役が柄のあるズボンを着用したり、薙刀役が袴を着用するようになっている。棒踊りの道具は、①三尺棒、②六尺棒、③イララ（鎌）、④ナギナタ（長刀）、⑤ティンバイの小刀、⑥笠などである。鳴り物の道具は西村と同様。

衣装は個人で持っているが、棒座も何組かあるため、衣装を持っていない人は個人や棒座から借用する。衣装の中でも、サシマタ、トサカ、たすきは棒座が保管している。道具は、棒座が公民館で保管している。その他、衣装や道具は、個人のは個人、棒座のものは棒座で修繕しており、道具の材料や新規の購入などは西村と同じである。

〔嶋 仲〕 棒踊出演者の衣装の方言で「ンナニ」というのも同様で、踊りによっては一部特殊な衣装があるが、ほとんど同じ衣装を着用する。踊り衣装は道具、鳴り物の道具類も西村・東村と同じである。

なお、嶋仲では装の変化として、以前は長袖の白いシャツと白い長ズボンを着ていたが、今は襦袢の上下に変わっている。その他、ティンバイ役が柄のあるズボンを着用したり、薙刀役が袴を着用するように変化している。衣装の変化は見栄え良くするためである。

衣装は個人で持っているが、棒座にも何組かあるため、衣装を持っていない人は個人や棒座から借用する。衣装の中でも、サシマタやトサカなどは棒座が保管している。道具は棒座が公民館で保管している。衣装や道具は、個人のは個人、棒座のものは棒座で修繕している点などは他と同様である。棒は現在は、石垣島のスポーツ店から購入しているが、昔はビロウ（クバ）の幹の中心部分を使って作っていたということで他と同じである。

〔比 川〕 棒踊り衣装や道具、鳴り物の道具類は東村嶋や仲と同じである。衣装は個人で持っていて、衣装がない人には貸している。以前は、衣装に白いYシャツと白いズボンを着ていたが、今は肌襦袢変わった。道具は公民館に置いている。衣装が裂けた場合の裁縫や購入は個人で行い、道具の修繕は棒座で行う。道具の修繕には、薙刀に鶏の羽をつけたり、牛の皮に酒をよく塗して、ンヌン（太鼓）の張り替えなどを行う。棒は、なかなか折れることがないので、どのように購入しているかわからない。

西村と東村、それに比川では、それぞれ楽曲はとくに変化はないとされるが、嶋仲では音をあげる回数などが変わっているといわれる。比川ではンヌン（太鼓）の人数を、以前は4名だったが他の地域（祖納）に合わせて5名にした。カニン（ドラ）が1名。フィ（笛）が1名。以前は、フィ（笛）の人を他の地域（祖納）からよび、比川の楽曲で演奏してもらっていたが、今は比川に笛の演奏者がいる。ンヌン（太鼓）やカニン（ドラ）は以前から変化なし。

【行事継承の今日的課題】

全体としては、ウガンフトウティは、コロナの流行により祝賀会が行われず踊らなかった時はあったが、特に影響はなかったという。

東村の課題としては、要員不足のため、若い年齢の人たちが経験値があまりないままでチスになっていくのではないかと懸念している。また、鳴り物のンヌン（太鼓）はその張り替えで牛皮を買うが、一頭分（1枚）で10万円程度と値が高いということがある。一頭分（1枚）では六個の太鼓の両面を張り替えることが出来る分量であるが、経費がかかるという。嶋仲でも同様に、道具や衣装購入の費用などが課題とされている。

比川では要員不足であることが近年の課題となっているといい、若者が少なく、20代が0人、30代が1名、40代が2名という現状で、棒踊りの存続が厳しいとされている。

著：萩尾 俊章

第4章

委員座談会

第4章 委員座談会



【実施日】 令和6年12月7日（土） 【場 所】 八汐荘（小会議室）

【出席者】

学術研究連絡会委員 萩尾 俊章 沖縄民俗学会 会長
久万田 晋 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所 教授
神谷 武史 沖縄県立芸術大学音楽学部音楽文化専攻沖縄文化コース 講師
萩原 左人 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 教授
神谷 智昭 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 准教授

学術研究連絡会アドバイザー
久保田 裕道 東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長

今回の報告書作成にあたり協力頂いた委員に座談会として集まって頂き、以下の2つのテーマに沿って自由に意見を交わして頂いた。

【座談会テーマ】

- ① 調査を終えての感想や気づきについて
- ② ムラ行事を継承していく上での課題や対応策または希望について

神谷（武）【座長】

おはようございます。ざっくばらんに色々な意見をお聞かせいただければ、非常に有意義な座談会になると思います。よろしくお願いします。

初めに、今回の調査を振り返ってのご意見やご感想を伺いたいと思いますが、まずは委員長である萩尾先生からお願いします。

【座談会テーマ①】

調査を終えての感想や気づきについて

萩尾

今回の事業を振り返りますと、令和3年11月29日に第1回目の会議が開催され、事業がスタートしました。当初は年度末までの限られた期間での実施だったため、厳しいスケジュールでしたが、全県的にアンケート調査を実施し、武術的身体表現を把握できたことは大きな成果だったと思います。棒術や「舞方（メーカタ）」、獅子舞など地域の多様な事例を記録できた点は意義深いと感じます。

八重山地方では、竹富島の調査票に「空手の型が含まれる」と記載がありましたが、棒術

や腕棒などの表記はあるものの、その具体的な演目構成の詳細が記載されていないなど、深掘りが不十分でした。また、宮古島では新里、野原、川満など南西部地域に興味深い棒術事例が確認されましたが、以前の新聞資料をみたら「保良ヨンレー」では青年会の男性が5人で踊るようなものがあり、その中に空手の型が入っているようです。

八重瀬町の富盛の十五夜でやる唐人行列とか大和人行列、女行列（ヨンシー）などがありますが、唐人行列の中で空手が披露されています。アンケートにもこのように書かれていますが、実際にどのようなことをやるのか書かれておらず、富盛の字誌を見ても細かいところまでわかりませんでした。このように、空手が披露されていることはわかっている、細かい内容まで調べられていないものもありました。こうした取りこぼしを防ぐためにも、今後は継続的な調査や情報収集が必要だと感じています。

アンケート調査の中でどこから伝わったとか習ったかというところで、石垣島の川平の結願祭は川平の字誌で見ると、500 年前に仲間満慶山さんが独自に編み出したとなっています。与那国の方から伝えた棒もあつたりとか、本島から三人棒は伝えたとかいろいろあります。変遷自体はいろいろありますが、このような伝承のように与那国や沖縄本島から入り込んできている面もあります。宮良と白保は沖縄本島から来た空手家が棒を教えたとか、白保は勝連出身の人が「カッチン棒」を教えたとかの伝承があります。西表島の古見や小浜島は石垣島の川平から伝わったとアンケートで出ていて、与那国島では首里の空手家が 1705 年頃に伝えたとされています。大元でいうと沖縄本島、首里の王府の関係者かと思いますが、伝来的なものも調査できたかと思っています。

他にも、新川の南風ぬ島と波照間のムシャーマの中で、シーシンボウと呼ばれる棒と獅子舞と一緒にしているものですが、これは漂流民が伝えたと言われる棒術で、新川のものと波照間のものは元々は似ていました。



神谷 武史
沖縄県立芸術大学
音楽学部音楽文化専攻
沖縄文化コース 講師

神谷（武）【座長】

伝承者についても、「首里から来たタンメー（老人）」といった実名ではなく、呼称で伝えられているものが多く見られました。

萩原

私は宮古地域を担当しましたが、いくつか特徴が見えてきました。最も大きな特徴として、伝承地が非常に少ないことが挙げられます。他の地域では多くの事例が確認されている中、宮古諸島では棒術に関して 6 か所のみで、その分布も宮古島の南西部に 4 か所、多良間に 2 か所と、分布として2か所のみでした。

また、内容も対照的でした。宮古島南西部の地域では、非常に短い棒（3 尺またはそれ以下）を用い、集団で隊列を組んで演じる形態が一般的です。一方、多良間では 6 尺ほどの長い棒を使用し、2 人が対面して打ち合う形式が主流です。この違いは棒の長さや使用法の系統として興味深い特徴です。

さらに、他の芸能との関係にも違いが見られます。宮古南西部の 4 か所では、棒術と女性の集団舞踊、男女が一緒に円陣になるクイチャーなどが組み合わさる形態が特徴的です。一方、多良間では狂言や組踊といった舞台芸能の後に棒術が登場する演目構成になっています。

宮古諸島の棒術には 2 つのグループが存在しているように見えます。ただし、これらがどこから伝わったのかという伝承はほとんど確認できませんでした。棒の名称や形態を手がかりにすれば、伝来経路を推測することは可能かもしれないと感じています。

萩原

宮古地域は八重山とは異なり、伝承のルートがはっきりと分からない点が特徴的です。これは、今回の調査で浮き彫りになった課題の一つであり、次の調査や研究の問いとして発展させる余地があると思います。

神谷（智）

私は南部地域を担当しましたが、調査の中で感じたこととして、綱引きや豊年祭、また高安ではガンゴー祭など 12 年に一度行われる行事があり、それぞれの地域で特徴的な棒術が見られました。例えば、棒を打ち合う形態が見られない地域もあれば、実際に激しい打ち合いを伴う地域もあり、多様性があることが分かりました。

地域ごとに棒術自体やその技術を持つ人々への評価が異なることも興味深い点でした。「あの人が上手い」「あの技が一番だ」など、地域ごとに独自の評価基準や視点が存在し、それが世代間の関係性や地域の結束に寄与しているように感じました。この点は、棒術が単なる芸能や武術にとどまらず、ムラ社会における重要な役割を果たしていることを示しています。

久万田

中部には「舞方（メーカタ）」と呼ばれる即興的な空手の型を演じるものが存在します。これらは旧北谷村や旧与那城村（現在のうるま市）などに見られ、非常に興味深い伝承です。

綱引きの時に棒をやるところが多いのですが、棒そのものをやるのではなくて、年中行事のなかで綱引きの際に棒をやったり、中には読谷村のように、必ずしも綱引きではなくて、お盆のウークイや八月十五夜の観月会、青年合同祝いなど、さまざまな場面で棒を使った演目が行われています。棒そのものを書くのか、どのような年中行事との関わりがあるのかという視点も重要だと考えます。綱引きに関連して行うところが多いと思いますが、綱引き以外の年中行事にも注意を払

わないといけないと思います。

即興的な空手の型の披露については旧北谷村あたりの中部では「舞方（メーカタ）」と言いますが、南部では「舞方（メーカタ）」というのは、かぎやで風の上で棒の型を演ずるようなものになっていますので、同じ用語だけれども地域によって意味が違うこともあります。

技術的な身体動作に関する記述では、多くの報告書が「棒」に関する内容に重点を置いているように思います。私自身も最初は棒を中心にまとめようと考えていましたが、実際には棒以外の要素も多く見受けられました。例えば、三尺棒、六尺棒で対になってやるようなものもあるし、3～4 人で行うフォーメーション形式のものや、渦巻き状に多数の人が動く「棒巻き」と呼ばれる型など、棒の使い方にも多様性があると感じました。

神谷（武）【座長】

沖縄のムラ行事との比較において、日本各地の武術的身体表現を伴う民俗芸能はいかがでしょうか。

久保田 裕道
東京文化財研究所
無形文化遺産部
無形民俗文化財研究室長



久保田

日本全体の武術的身体表現を伴う芸能は非常に幅広いのですが、棒を扱う芸能だけ見てもたくさんあります。ジャンルで言えば獅子舞、それから中世芸能の「王の舞」、これは天狗のような鼻高面をつけて、基本的には鉾を持ちますが、それがだんだん変化して、鼻高面が棒を扱う芸能は、祭礼の先導役を含めれば、全国各地にあります。それから、棒を振る風流踊があり、さらに田楽系。これは仏教の正月行事である修正会とも結びついていて、祝い棒などと呼ばれ

る呪術的な棒を使いますので、そういったものからの変化かなと思います。また神楽でも、特に修験道系のものでは棒を使った演目がたくさん存在しています。

いずれの民俗芸能でも、その武器の持つ魔を払うといった呪術性、祭りが始まる前に場を清めるといった祓いの要素などが共通しています。

一方、沖縄に関しても、こうした呪術的要素と競技的要素の双方が影響していると考えられます。例えば競技的な要素を持った棒踊りが、特に四国の高知県あたりと南九州にたくさんあり、これは沖縄と共通するのではないかと思います。九州では近世になって示現流の影響を受けたり、薩摩が武術を奨励して武術として高められていく面もあるようですが、現在は棒踊りという形でやっています。

もともと呪術的だったものに、近世以降武術的な要素が加わっていった、どんな風になったのか、そのあたりも見えていくとよいのではないかと思います。

九州や四国では、三尺棒とか鎌とか、尺八なんてものも使っているようですが、こうした道具を使った武術が踊りと結びついて、風流化していく。これがすべて武術と結びついていたのかについては、検証しなければいけないのですが。

それから、中には武術を演劇の中で披露することでお芝居的な要素として発展したものもあります。そうした要素を見ることで、呪術的なものと武術的なものを比較することで、沖縄の特徴の分析が一層明確になるのではないかと考えています。

さらに地域に棒が入り込んでいった、その地域の中であの人がうまいとか。そういう意識が地域の中でなんとなく共有されているのが、沖縄の特徴なのかなと思います。それが、民俗の中にどういう風に溶け込んでいるのか、民俗的な文化を見るにあたっても、今回の調査はすごい資料になるのではないかと思います。



久万田 晋
沖縄県立芸術大学
芸術文化研究所 教授

久万田

沖縄の棒術には、綱引きの東西での競い合い、ガーエーの要素が強いという話になっていました。厄払いの要素が非常に強いと感じます。多くの行事では、何か行事を始める前に必ず悪霊を払うような儀式的要素が含まれており、こうした面にも注目する必要があると思ったのと、先ほどの「鎌踊り」みたいなものを考えてみると、沖縄本島にはあまりないんですけど、また、奄美大島の瀬戸内町の油井にある十五夜行事の「鎌を持って土俵で踊る」という例も思い出しました。これも土俵払い、つまり悪霊払いの一環として行われているように見えます。これを考えると、沖縄南部で行われるヘラで踊る「ウズンビーラ」や、農村部で金属製の農具を使って踊る行事にも、一種の悪霊払い的な意味合いが含まれているのではないかと感じました。

神谷（武）【座長】

「舞方（メーカタ）」など座清めと言ったりします。

幕開けとしての役割を担っていると思います。

沖縄の棒術や行事が持つ多様な側面や、他地域との関係性について新たな視点が得られたように感じました。

さて、今回座談会に参加できなかった委員から寄せられたコメントを紹介します。

園原（事務局代読）

コロナ禍の影響で4年に一度行われる行事が8年ぶりに開催され、集落における伝統的な行事の継承に困難があったと感じられます。しかし、自身で調査した内容については、体系的な理解ができ、有益だったと感じています。

本島北部や離島でのフィールドワークも実施したかったが、時間の制約により実現できませんでした。北部、中部、南部、宮古や八重山それぞれの地域の特徴を踏まえ、棒術の所作や演武形態などを比較検証する視点があれば、より詳細で有意義な調査が可能だったと思います。

仲村（事務局代読）

ムラ行事で行われている棒術について、市町村史レベルでの記述には、棒術があるとされているものの、その発祥や伝承経路に関する資料的な裏付けがほとんどありません。また、棒の操作法に関する大まかな説明は見られるものの、具体的な所作や一連の操作についての文脈的な言及、または研究は軽薄であると感じます。いわゆる古武術、武具操作術との関連性や違いについての指摘もほとんど見受けられません。

さらに棒を含む支度や道具類の調達、制作に関する情報が不足しており、今回の調査は、これらの分野に今後アプローチするための基礎的調査と位置づけられると思います。芸能系武術は沖縄空手の裾野の広がり、言い換えれば生活への密着度を顕すことのできる好材料であり、この方面の研究は引き続き継続すべきです。

県にあっては、ユネスコへの沖縄空手の登録を目指した調査事業にこだわるのではなく、沖縄空手の全体像を把握するためにも必要な課題として認識していただきたいと思います。



【座談会テーマ②】

ムラ行事を継承していく上での 課題や対応策 又は希望について

神谷（武）【座長】

さて、これからは「村行事を継承していく上での課題や対応策、希望について」というタイトルのもと、議論を進めたいと思いますが、まずは座談会に参加できなかった委員から寄せられたコメントを紹介します。

田邊（事務局代読）

個々に事情がある中で継承について考えているため、普遍的な対応策を考えることは難しいと思います。ただ、パフォーマンスとしての側面を持つ実践に関しては、余興などにおいて登場した際の場の盛り上がり方は目を見張るものがありました。少なくとも、内地において民俗芸能が登場して多少盛り上がることはあっても、熱狂するということは滅多にありません。武術については尚更です。そうした、観る側も含めた熱狂（＝「情動的な繋がり」、もしくは「場のエージェンシー」のようなもの）のできるような下地が沖縄におけるムラ行事の持つ特徴に思えるので、ただ継承していくだけではそうした“豊かさ”は、なかなか維持できないのではないかと思います。

仲村（事務局代読）

空手普及の歴史を紐解けば、学校教育への導入が普及への大きな影響があったことがわかっています。「普及」は同時に「継承」とも読み替えが可能です。学校と学区地域との連携を取りながら地域芸能に触れ、運動会や学習発表会等の学校行事で演目として固定化できれば良いと思います。現状は問題意識のある職員が学

校に配置されていなければ、地域芸能系の演目は行われていません。教育現場と地域の連携が学習指導要領で示されて久しいですが、この連携について教育現場は、地域が抱える課題（この場合はムラ行事の継承）を踏まえたものとして、ともにその課題を解決する主体であるとの認識を持って欲しいと思っています。

園原（事務局代読）

本部町指定無形民俗文化財「満名棒（三人棒）」の事例のように、地域で行事の社会的な評価として文化財指定を行うことで、辛うじて型や演武の技術継承がされている事例があります。

県指定無形民俗文化財は現在 6 件のみで、主に本島北部に 5 件、中部 1 件しかないので、民俗文化財の価値を見出す必要があります。

とりわけ北部地区における集落行事は、過疎化により集落の構成員では成り立たない行事があり、消滅の危機にある行事があります。そのため早急な対策が求められます。

今回の調査で、集落によっては専門業者に撮影させ、しっかりと記録保存されている名護市数久田の事例があり、演武内容の詳細な確認やスーマキの動きを記録する上で再現性を確保されていることは大変有益でした。現時点の民俗行事のデジタルアーカイブとしての記録保存の有用性を確認することができました。

槍とティンベの組型は、南部（八重瀬町東風平）や北部（本部町並里）と各地に点在して確認することができるので、古武術のひとつの型の伝播の状況を把握する上で興味深いと感じています。

久万田

継承の問題についてですが、単に文化財だから継承するというのではなく、「やる側の熱狂」が非常に重要だというご意見があります。すべての祭りに共通することですが、特に沖縄では戦後 80 年ほどの間で熱狂度が低下しているこ

とが明らかになっています。これは、若者を含む地域共同体への依存度が低下していることと関係があるのではないかと思います。

文化財として指定することで技術や行事の継承が保たれる場合もありますが、それは一部の意欲的な地域に限られるようです。

一方で、現在も行事が続いている地域は熱狂度が低下していても、地元の人々がその価値を認め、大切にしているからこそ存続しているのだと感じます。

神谷（武）【座長】

今の文化財指定が地域に良い影響を与えたという話を踏まえると、今回のユネスコ登録もその一環として重要な作業だと思います。最終的にユネスコに登録された場合、課題を抱える地域に対してどのような効果やメリットが期待できるでしょうか？

久万田

棒に関しては、八重山では非常に多様な型が存在していますよね。だからこそ、個別に文化財として指定する意義があると思います。例えば、六尺棒や槍、ティンベーなど、独自性のある型が文化財として評価されることで、その価値がさらに際立ち、文化財指定の効果があると思います。

文化財として指定されることで「なくなる」という安心感がありますが、課題はそこに「熱狂度」をどう取り戻すかだと思います。

神谷（武）【座長】

そうなんです。演じる側としては観客に目的や価値を感じてもらえることが一番の励みになります。それがあると、やっている子たちのモチベーションも持続します。

しかし、「継承しなければならない」と押し付けられる形で、「これを覚えろ」と強要されるの

は逆効果です。

久万田

私たちの友人と居酒屋で盛り上がるとホウキを持ってきて、棒の型を披露したりしていました。

盛り上がると自然にやりたくなる、そんな感覚があるんですね。



萩尾 俊章
沖縄民俗学会 会長

萩尾

文化財指定については地域ごとに大きな違いがあります。

竹富町では民謡を曲ごとに細かく指定しており、行事とか祭り全体ではなく、個別でやっていた数が多いです。西原の「翁長のヨンシー」という行事では、綱を引くのではなく、子供たちが担いで集落の主な拝所を回るという独特な形式を持っています。数年前に指定を進めていましたが、自治会の反対や子供たちの参加率低下が理由で、途中で取り下げることになりました。今年も公民館が放送で呼びかけたものの、子供が集まらず、大人たちが代わりに行う形になったそうです。

こうした状況を考えると、継承には子供や若い人たちの参加が不可欠です。ただ熱意だけではなく、参加しやすい環境を整えたり、地域全体で魅力を作り出す仕組みが必要だと思います。

宜野湾区のエイサーについても話を伺いましたが、以前はメンバーが 50 ～ 60 名いたのが現在では 20 名ほどに減少しているとのことでした。練習の時間が遅くなるため、高校生までしか参加できない中、他の区から興味を持って参加する子供もいるそうです。友達に誘われて来る子供もいるので、こうした関心を持つ子供たちが増えるような仕掛け作りが重要だと感じます。

都市部でさえ参加者の確保が難しい現状を考えると、離島や過疎地域ではさらに厳しい状況が予想されます。特に子供の数自体が少ない地域では、地域行事の継承に向けてより積極的な支援や取り組みが求められるのではないのでしょうか。

久万田

子供を巻き込むという観点から見ると、読谷では棒が非常に盛んで、子供から大人、壮年まで一貫して続けられています。子供たちは、自分のお父さんやお兄さんたちが激しい棒を披露する姿に憧れを抱き、徐々にその技術を身につけていきます。小学生の頃はゆるやかに始めますが、ペアを組むことで一生続ける関係が築かれていくそうです。

神谷（武）【座長】

仲村委員から出た「学校現場に地域の伝統を導入してはどうか」という意見がありました。

家庭の環境や事情で地域行事や子ども会に参加できない子どもたちでも、一緒に地域の芸能や行事に触れる機会を学校現場で導入することについて、皆さんはどうお考えでしょうか？

久万田

学校で地域文化を取り入れるには、学校の先生が地域の文化に理解を持っていることが重要です。そうすれば、学校での実施が可能になります。教育委員会や市町村の学校教育課が主導となって、小学校全体で一体となって取り組むことが重要だと思います。

久保田

学校の先生たちもそのことについてはあまり知らないですね、地域の伝統や芸能について。まず、先生方に知っていただくことが重要ですね。

神谷（武）

園原委員からもお話がありましたが、地域ごとに映像や記録を持っているところと持っていないところがあり、記録事業の実施状況は様々です。ですが、今後、元気なうちに長老たちの知識を記録として残していくことの重要性を感じています。

萩原 左人氏
琉球大学 国際地域創造学部
地域文化科学プログラム
教授



萩原

宮古では学校ではなく、保存会が組織されており、その中で小学生を取り込みながら活動が行われています。具体的には、成人のメンバーが中心となり、練習に参加させるなどの取り組みがなされています。しかし、残念ながら人数は減少している状況です。こうした活動を映像や他の方法で記録しておけば、有効に活用できるのではないかと思います。

久万田

趣味で撮影されたものと、専門の業者が補助金を使って撮影したものの差があります。業者が撮ったものでは、顔がアップになりすぎて、全体像が映っていないことが多いです。例えば、地元の人に見せるために顔をズームしてしまい、踊りや棒術などの全体像が映されていません。後で伝承のためにその映像を使おうとしても、全体像が映っていなければ使いにくいですね。

久保田

毎年何本ずつか、記録作成を行っているところもあります。例えば静岡県とか千葉県とか、いろいろな県でそうした取り組みが行われてきましたが、結局、お金はかかるため、継続的に続けることは難しい現状があります。佐賀県のように

にテレビやインターネットで発信している例も、参考になるのではないかと思います。

しかし、予算と時間をかけて映像制作すれば質の高いものが作れる一方で、作ることでできる数は限られるので、1本撮影している間に、他の多くのものが失われていくことも事実です。

ただ、今の時代誰でもスマホなどで簡単に映像が撮れるようになりました。ですので、そのような映像記録を集めてアーカイブするためのネットワークを作ることも重要ではないか、ということを感じています。

神谷（智）

取りまとめのセンターのようなものがあつた方が良いという点には賛成です。

久万田

デジタルアーカイブを構築することは、武術的身体的な動作に関する記録だけでなく、今回のような取り組みにおいても非常に重要だと思います。

神谷（武）

座談会もそろそろ終了の時間となりました。

やはり生活との密接な関わりがあることが非常に大切だと感じました。お疲れ様でした。



第5章

調査回答結果

第5章 調査回答結果

第1節 市町村の各行政区（ムラ）所在の「武術的身体表現」を有する調査 調査地区一覧表

各市町村へ基本調査を行い、対象行事がない市町村もある。悉皆調査において調査票の提出があった字の一覧である。

区分	No.	市町村	対象 村数	豊年祭や綱引き、集落の祭祀、行事の中で、「空手の所作」、「村棒」、「棒踊」等がある村名
北部	1	国頭村	1	奥
北部	2	大宜味村	1	饒波、大兼久、謝名城
北部	3	東村	0	－
北部	4	今帰仁村	3	今泊、仲宗根、湧川
北部	5	本部町	8	瀬底、伊野波・並里、浜元
北部	6	名護市	11	数久田、真喜屋・稲嶺、仲尾次、田井等・親川、振慶名、古我知、我部祖河、呉我、屋我、久志、辺野古
北部	7	恩納村	4	
北部	8	宜野座村	3	宜野座
北部	9	金武町	3	金武、並里、伊芸
北部	10	伊江村	2	西江上区、西崎区
北部	35	伊平屋村	5	我喜屋
北部	36	伊是名村	4	仲田、伊是名、勢理客、諸見
小 計			45	

区分	No.	市町村	対象 村数	豊年祭や綱引き、集落の祭祀、行事の中で、「空手の所作」、「村棒」、「棒踊」等がある村名
中部	11	うるま市	13	田場集落、宮城島（宮城集落、上原集落、池味集落）
中部	12	沖縄市	7	
中部	13	読谷村	4	座喜味、宇座、波平、長浜
中部	14	嘉手納町	1	野里
中部	15	北谷町	2	字北谷、字下勢頭
中部	16	北中城村	5	喜舎場、熱田、島袋、荻道、大城
中部	17	中城村	0	－
中部	18	西原町	1	小波津、小波津
中部	19	宜野湾市	4	字宜野湾、大謝名、野嵩、新城
中部	20	浦添市	1	前田
小 計			37	

区分	No.	市町村	対象 村数	豊年祭や綱引き、集落の祭祀、行事の中で、「空手の所作」、「村棒」、「棒踊」等がある村名
南部	21	那覇市	1	字安里
南部	22	豊見城市	2	字嘉数、字保栄茂、高安、根差部、饒波、翁長
南部	23	糸満市	3	字真栄里、字真栄平、字新垣
南部	24	八重瀬町	11	東風平、富盛、世名城、当銘、志多伯、小城、友寄、宜次、安里、破名城、具志頭
南部	25	南城市	9	津波古区、奥武区
南部	26	与那原町	0	－
南部	27	南風原町	6	照屋、兼城、神里
南部	28	久米島町	1	字具志川
南部	29	渡嘉敷村	0	－
南部	30	座間味村	0	－
南部	31	粟国村	3	前原、草戸原
南部	32	渡名喜村	0	－
南部	33	南大東村	0	－
南部	34	北大東村	0	－
小 計			74	

区分	No.	市町村	対象 村数	豊年祭や綱引き、集落の祭祀、行事の中で、「空手の所作」、「村棒」、「棒踊」等がある村名
宮古	37	宮古島市	4	下地字川満、下地字来間、上野新里、上野字野原
宮古	38	多良間村	2	仲筋字、塩川字
小 計			6	

区分	No.	市町村	対象 村数	豊年祭や綱引き、集落の祭祀、行事の中で、「空手の所作」、「村棒」、「棒踊」等がある村名
八重山	39	石垣市	10	登野城、大川、石垣、平得、真栄里、大浜、宮良、白保、新川、川平
八重山	40	竹富町	9	竹富島、小浜島、黒島、西表古見、西表祖納、西表干立、波照間、鳩間島、船浮
八重山	41	与那国町	4	西、東、嶋仲、比川
小 計			23	

※調査にご協力頂きました各市町村の皆さまに感謝申し上げます。

第2節 調査地区分布地図



第3節 調査回答結果表

各市町村より回答頂いた結果を抜粋し、一覧にしたものであり、各個票については更新されている場合がある為、最新調査結果については、HP（<https://okinawakarate-unesco.jp/reports/>）にて公開する。



ホームページ

【北部地区】

市町村名	行政区	No	方言名称	武術的身体表現の形態
			1 年中行事名	4 武術的身体操作・表現の分類
1.国頭村	奥	1	■シヌグ (フーヨーサレー行事とピーンクイクイ行事)。	■型の演武がある
2.大宜味村	饒波	2	■シヌグ・ウンジャミ	■型の演武(舞)がある
	字大兼久	3	ゾーガリー	■型の演武がある
	謝名城	4	■豊年祭(謝名城の豊年祭)	■型の演武がある
4.今帰仁村	今泊	5	■その他(村芝居)	■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある
	仲宗根	6	■その他(村踊り)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある、
	湧川区	7	■その他(村踊り)	■型の演武(舞)がある、 ■対面での打ち合い等がある
5.本部町	瀬底	8	■豊年祭(村踊り)	—
	伊野波・並里	9	■豊年祭(村踊り)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある ■芝居の中で武術的所作が演じられる
	浜元	10	■シヌグ・ウンジャミ	—
6.名護市	数久田	11	■その他 (南島(フェーヌシマ)※北中城村指定無形民俗文化財)	■型の演武がある
		12	■豊年祭	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある ■その他 (ボーグミ(棒組)全員によるスーマキ(総巻き)がある。)
	真喜屋・稲嶺	13	■豊年祭 (綱引きで東側が刀と西側がナタをもった按司が合せる)道ジュネでは「棒」もある)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある
	仲尾次	14	■豊年祭	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある ■その他
	田井等・親川	15	■豊年祭	■型の演武がある ■その他 (獅子舞の踊る手は、空手のクーサンクー(公相君)を活用したという伝承がある。)
	振慶名	16	■豊年祭	—
	古我知	17	■豊年祭	—

時期・場所	組織・指導者・伝承方法
5 行事が行われる期日(旧暦)	11 組織
旧盆後の最初の干支(亥の日)を「アラウイミ」と呼び、シヌグ行事(3日間)とウンジャミ行事(2日間)を隔年で行う。 「ピーンクイクイ」はシヌグの際に3日目に行う	フーヨーサレー行事は朝、ヌンドウンチでウグワン(祈願)を行い、「ヤマジー」組(奥川を挟んで西側)と「シバシジ」組(シバギーがある奥川を挟んで東側)の2組に分かれて数名(奇数か5人、7人)で、山に上り、「シドゥー」(責任者)は丑の人か未の干支の人が担う。シバヒ(神木)の取り扱い方がある。山から下るときは、かけ声を掛けない。山の神々にウフガンを行う。「シバヒ」(和名:イヌガシ)の木は、悪霊払いをする神木と考えられており、小ぶりなものを選び、7回でゆすって折り倒す。ノコは使用禁止だという。出発前には、ヌンドウンチでのウグワン(お祈り)を行う。現在はノロなどの神人が不在のため、区長や書記が代理で行うという。
旧盆明け亥の日(ウングミの日)	ウングミの実行委員会(区長が会長、各団体(婦人会・青年会)の代表などが代議委員)
旧盆の次の日	大兼久区公民館(区長及び役員)
旧暦の8月8日から11日まで ※隔年開催。 ※現在は十五夜の頃を中心に新暦の9月または10月に開催。	豊年踊り実行委員会
五年マール(満4年毎)	今泊棒術保存会(会長、青年会、消防団、豊年祭の時には小・中・高校生)
8月13日(スクミ)、15日(ソーニチ)、17日(終い)の3日間 ※豊年祭は5年マール(満4年) ※旧暦7月踊りから旧暦の8月踊りに変更	消防団、青年会、小学生、中学生
旧暦8月14日の豊年祭	棒シンカは、消防団、高校生、中学生で約20名くらい
8月11日、8月13日、8月15日	豊年祭実行委員 棒部(部長、副部長)
旧暦8月11日 ※5年に1回	並里区村踊り保存会
旧暦7月17日(トウンダチ) 旧暦7月21日(シニグ)	—
豊年祭の3日間	棒頭(経験を積んだ人で、プログラム全体に詳しい人があたる)
旧暦8月9日、11日、12日の3日間	「ボーグミ(棒組)」の「ボーガシラ(棒頭)」 踊り部の会長、棒組の会長
旧暦8月8日	芸能愛好会(真・稲神祠会会員)
旧暦9月7日～10日 旧暦9月7日(メージュクミ) 旧暦9月8日(スクミ) 旧暦9月9日(ソーニチ) 旧暦9月10日(ワカリ) ※2023(令和5)年は、土日にあたる10月28日(土)・29日(日)に変更。	「座員」(座長、副座長を筆頭に、踊方、棒方、楽屋方、裏方、御願(道ジュネー)、受付、接待) 「豊年踊担当者会議組織表」(総責任者、座長・副座長・踊方主任(=文化部長)・棒方主任など)
旧暦8月8日(親川公民館) 旧暦8月9日(田井等公民館)	青年会、両区の向上会。向上会は、29歳～55歳で構成。
旧暦8月8日 ※平成14年度(2002)から休日を正日にあてる。ボーは正日に実施。	座長(選任)、踊方、棒方。(豊年祭の一部)
旧暦8月7日(前仕込み) 旧暦8月8日(正日) ※週末や祝日、休日に変更あり。 ※3年マールで開催	区長のもとに4人の責任者あり(地謡責任者、座長責任者、棒方責任者、会計責任者) 従来、村踊りの出演者は総て、男性だけであったが、1941年羽地村内で古我知は初めて4名の女子青年が村踊りに出演して、その後から女子青年の出演者が毎年増えた。棒は男子のみか。

【北部地区】

市町村名	行政区	No	方言名称	武術的身体表現の形態
			1 年中行事名	4 武術的身体操作・表現の分類
6.名護市	我部祖河	18	■豊年祭(踊の開演前と終了後)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある
		19	■豊年祭	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある ■その他
	呉我	20	■豊年祭	■型の演武がある
	屋我	21	■豊年祭(ムラウドゥイ)	■型の演武がある
	久志	22	■盆行事(ムラ踊り)	■型の演武がある ■その他 (ムラ踊りの演目に「メーカタ」(伊良波尹吉の指導)のものがある。)
	辺野古	23	■豊年祭(ムラウドゥイ)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある ■その他 (ムラウドゥイの演目にメーカタ、古くはコーサンクーと称す。別称ザーギリウドゥイ(舞台を決める舞、古武道的な形の力強い舞)『辺野古誌』p.655
8.宜野座村	宜野座区	24	■その他(宜野座の八月あしび)	■型の演武(舞)がある ■芝居の中で武術的所作が演じられる ■獅子に対峙しての武術がある
9.金武町	金武区	25	■その他(観月祭)	—
		26	■その他(旧暦八月十五日)	—
	並里区	27	■その他(十五夜村あすび)	■型の演武(舞)がある
	字伊芸	28	■その他(旧8月15日の観月祭)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
10.伊江村	西江上区	29	■その他 (西江上区民俗芸能発表会・伊江村民俗芸能発表会 他)	■対面での打ち合い等がある ■芝居の中で武術的所作が演じられる、
	西崎区	30	■その他 (西崎区民俗芸能発表会・伊江村民俗芸能発表会 他)	■対面での打ち合い等がある
35.伊平屋村	我喜屋	31	■その他(綱引き)	—
36.伊是名村	仲田・伊是名・勢理客・諸見	32	■シヌグ・ウンジャミ	■型の演武がある、 ■対面での打ち合い等がある

時期・場所	組織・指導者・伝承方法
5 行事が行われる期日(旧暦)	11 組織
旧暦8月8日	特別な組織はないが、青年会、向上会を中心に最近は高校生や中学生も本人の希望により参加する。
旧暦8月6日(メースクミ) 旧暦8月7日(スクミ) 旧暦8月8日(ソーニチ) 旧暦8月9日(ワカリ) ※村踊りは3年に1度の開催	組織としては「演芸部」があり、これは1978(昭和53)年からであり、それ以前は「豊昌会」と呼ばれていた。2003(平成15)年は、演芸部長を中心に3組の組長、地謡、舞踊、棒方等の責任者を選出して村踊りの取り組みについて話し合われた。メンバーは区長、評議員、老人会、婦人会、青年会、向上会の代表、踊り手の指導者数人、棒方の代表、書記である。村踊りの組織・取り組みについては、戦前から戦後初期は踊り方と棒方はそれぞれ独立した組織で、練習期間中の会計も別であった。〔『名護市史 芸能編』〕
豊年祭の正日(8月15日に近い土曜日(正日)、前仕込(前日))	向上会
9月9日	「棒組」がある(踊り組に対して、そのように呼ばれた) ・「平成13年豊年祭プログラム」(10月25日)の棒術には、7名の名前が記される。
7月16日	ボウシンカ 以前は、夜警、見物席の世話等いろいろな雑役を負った。
ムラウドウイ 7月11日(モーズクミ) 棒演舞 7月14日(スクミ) 16日(正日)、 17日(別に遊び) ※3年マール(3年に一度)	辺野古芸能保存会の棒術部
旧暦8月15日頃	宜野座区の15～49歳の青年会・成人会の男性で組織される「ニオ団」が中心となり、地域の老若男女が協力・参加して宜野座の八月あしびは催される。
旧暦8月15日	伝統芸能保存会
旧暦8月15日	男子青年団全員(金武区誌・戦前編・上)P309
旧暦8月15日	伝統芸能保存会の保存演目として位置づけられている(並里区事務所)
旧暦(8月15日)の観月祭で演舞。	伊芸南又島保存会(平成元年結成)
新暦10月下旬(西江上区民俗芸能発表会) 新暦11月第2週(伊江村民俗芸能発表会) ※8年に1回。直近は平成27年。	西江上区民俗芸能保存会、伊江村民俗芸能保存会(昭和48年伊江村民俗芸能保存会が発足し、『伊江島の村踊』の継承を行っている)。
新暦10月下旬(西江上区民俗芸能発表会) 新暦11月第2週(伊江村民俗芸能発表会) ※8年に1回。直近は平成31年。	西崎区民俗芸能保存会、伊江村民俗芸能保存会(昭和48年伊江村民俗芸能保存会が発足し、『伊江島の村踊』の継承を行っている)。
旧暦6月25日	
旧暦7月18日	・区長を中心として、子ども会会長や参加する男子の父親などがサポートする。 ・棒術の型については、青年会等で伝承されているため、指導できる方が子ども達の稽古を付ける。

【中部地区】

市町村名	行政区	No	方言名称	武術的身体表現の形態
			1 年中行事名	4 武術的身体操作・表現の分類
11.うるま市	具志川 田場	33	■豊年祭(十五夜)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
		34	■盆行事(旧盆)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
		35	■その他(新年会、夏祭り)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	与那城 宮城	36	■その他(15歳祝い)	■型の演武(舞)がある
13.読谷村	座喜味	37	■その他(敬老会(9月))	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある、 ■その他 (棒術を演武する前に演武者全員で「スーマチ(総巻)」を行う。)
		38	■その他(総合共進会(12月))	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある、 ■その他 (棒術を演武する前に演武者全員で「スーマチ(総巻)」を行う。)
	宇座	39	■盆行事	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
		40	■その他 (シチグアチエイサー・ジュグヤー「旧歴八月十五日 観月会」)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	波平	41	■盆行事	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
		42	■その他(観月会)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	長浜	43	■その他 (役員歓送迎会、敬老会、生年合同祝)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
14.嘉手納町	野里	44	■その他 (5月小 グングワチャグワー 旧暦の5月5日)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
15.北谷町	下勢頭	45	■その他(祝賀行列や出演依頼の際に行う。)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■その他 (型の演武(舞)は、子どもが参加できるように工夫し演武(舞)の1つに取り入れた。)
	北谷	46	■豊年祭	■対面での打ち合い等がある、 ■その他(演武(舞)の中で武術的所作がある。)
		47	■その他 (12年毎(寅年)の「北谷大綱引き」、戦前は、毎年9月に行われる「北谷長老祭」や「ムラアシビ」でも演じられた。)	■対面での打ち合い等がある、 ■その他(演武(舞)の中で武術的所作がある。)
16.北中城村	喜舎場	48	■その他 (獅子舞 ※北中城村指定無形文化財)	
	熱田	49	■その他 (南島(フェーヌシマ)※北中城村指定無形民俗文化財)	
	島袋	50	■その他(島袋まつり)	■対面での打ち合い等がある
		51	■その他 (赤木名節 ※北中城指定無形民俗文化財)	

時期・場所	組織・指導者・伝承方法
5 行事が行われる期日(旧暦)	11 組織
旧暦8月15日	田場区伝統芸能ティンペー・獅子舞保存会
旧暦8月15日	田場区伝統芸能ティンペー・獅子舞保存会
旧暦8月15日	田場区伝統芸能ティンペー・獅子舞保存会
旧暦1月2日	宮城自治会、現在は各家庭単位。
戦前は、農閑期を利用して旧暦の7月16日、8月15日、9月9日に「アシビ」と言われる催しが開かれた。 現在は、字行事の敬老会(9月)、総合共進会(12月)で演武披露される。	座喜味棒保存会は、1975年(昭和50年)4月10日に結成。構成員は字出身の青年が中心である。 現在の保存会構成員は、小学生の頃から棒術を演じている。
戦前は、農閑期を利用して旧暦の7月16日、8月15日、9月9日に「アシビ」と言われる催しが開かれた。 現在は、字行事の敬老会(9月)、総合共進会(12月)で演武披露される。	座喜味棒保存会は、1975年(昭和50年)4月10日に結成。構成員は字出身の青年が中心である。 現在の保存会構成員は、小学生の頃から棒術を演じている。
旧暦7月16日「ウークイ」	宇座区伝統芸能保存会及び青年会が運営。
旧暦8月15日「ハチグアチジュグヤー」	宇座区伝統芸能保存会及び青年会が運営。
*波平盆行事 ～ 旧暦7月16日	伝統芸能保存会の組織により、ハンジャ棒は継承・継続されている。子ども棒術クラブもあり、保存会の青年達が指導にあたっている。
*波平観月会 ～ 旧暦8月15日	伝統芸能保存会の組織により、ハンジャ棒は継承・継続されている。子ども棒術クラブもあり、保存会の青年達が指導にあたっている。
自治会の行事(生年合同祝・役員歓送迎会・敬老会)のある毎に演じられていたが、最近では平成31年(2019)1月の亥年生年合同祝、9月の敬老会にて演武を披露。同年、地域伝統芸能保存事業として映像記録(DVD)を作成。 40年前程前より不定期に読谷まつりや読谷村民族芸能祭にて演武を披露。	・長浜伝統芸能保存会、自治会長が保存会長となり、棒術部長が演者をまとめる。(各演目・伝統芸能毎に部会がある) ・長浜自治会員すべてが会員となり、指導は部長を中心に数名の青年が行っている。
もともとは旧暦の八月に行われていた村芝居で演じられていた芸能である。 現在は、団体が主催している行事のほか、町主催の野國總管まつりや県内外で行われる芸能祭などで披露している。	一般財団法人嘉手納町野里共進会は、理事長、副理事長、事務局長、理事評議員、監事、婦人部、青年部、古典音楽同好会、顧問で構成される。
・生年祝いの「カジマヤー」に行われる。(一般的には旧暦9月7日) ・下勢頭郷友会の行事等で行われ、出演依頼を受けたイベントで行われる。	・下勢頭郷友会:戦後は、当初「字下勢頭会」、1955年(昭和30)年から「下勢頭部落会」の名称を使用、「下勢頭郷友会」と名称の変遷がある。 ・下勢頭芸能保存会:1976年(昭和51)年の結成。
	・旧字北谷郷友会 ・1987年(昭和62)に「フェースマ保存会」が組織され、会長1名、副会長2名、理事9名、監事3名、会員9名 計24名で組織されている。会員は、字北谷郷友会会員で構成されている。
・神行事として12年に1回(寅年)、旧暦6月15日に行われる「北谷大綱引き」のミチ(道)ジュネー、スネーの演目として演じられる。 ・現在は、字北谷郷友会のニグワチャー(旧暦2月2日)や、学事奨励会で演武(舞)される。	・旧字北谷郷友会 ・1987年(昭和62)に「フェースマ保存会」が組織され、会長1名、副会長2名、理事9名、監事3名、会員9名 計24名で組織されている。会員は、字北谷郷友会会員で構成されている。
●旧盆後の十七日の午後四時頃から。	
●踊られる時期は一定していないが、昔は旧盆の七月遊びと称した盆の前日の十四日と翌日の十六日であった。現在では八十八歳の長寿を祝う合同祝いのときや、字外から文化財として招待される公演のときなどである。	
・特に決まっていない。 ●村遊びの中で行うので毎年行うことはなく、何か大きな祝事の時にやる。	島袋民俗芸能保存会を中心に青年会、壮年会が協力、指導は保存会会員が行う。自治会の広報、公民館だよりを通して参加希望者を募集する。参加人数は約50人前後。
・1月の新年会、9月の敬老会、10月の島袋まつりと北中城まつり。 ●戦前から村芝居で演じられ、戦後も字の行事などで演じられている。	字島袋民俗芸能保存会(会員15人)

【中部地区】

市町村名	行政区	No	方言名称	武術的身体表現の形態
			1 年中行事名	4 武術的身体操作・表現の分類
16.北中城村	島袋	52	■その他(敬老会「赤木名節」)	■その他(空手風の舞踊)
	荻堂	53	■その他(旗すがいい・夏まつり)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	大城	54	■その他(旗スガシー)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
18.西原町	小波津	55	■その他(旧暦6月の綱引き)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■その他 (獅子舞の演目に棒手(ボーディー)があり、前踊りとしてウフクン(一人棒)の演舞を行う。)
		56	■盆行事	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■その他 (獅子舞の演目に棒手(ボーディー)があり、前踊りとしてウフクン(一人棒)の演舞を行う。)
		57	■獅子ヌ御願と七年まーる村遊び	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある、 ■その他 (獅子舞の演目に棒手(ボーディー)があり、前踊りとしてウフクン(一人棒)の演舞を行う。)
		58	■その他(七年まーる村遊び)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある ■その他 (獅子舞の演舞は、前踊りとして小波津の棒の「ウフクン(一人棒)」を使う棒手(ボーディー)、ムンダニ(紅白の布で編んだ紐に鞆と鈴を付けた道具)を使った鞆手(マードイー)やムンダニを肩に掛けて空手の型を取り入れた小波津手(クファチディー)がある。)
19.宜野湾市	前田原	59	■その他(舞方(メーカタ))	■その他(舞踊)
	大謝名	60	■豊年祭 (大謝名の獅子舞。獅子舞の前に棒術と舞方を行う)	■型の演武がある
	野嵩	61	■豊年祭(野嵩マールアシビ)	■芝居の中で武術的所作が演じられる、
	新城	62	■その他(ムラアシビ)	■芝居の中で武術的所作が演じられる
20.浦添市	前田	63	■豊年祭 (綱引きと村芝居(近年村芝居なし)綱引きの後で「棒使い」とよばれる棒術を行う)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある

時期・場所	組織・指導者・伝承方法
5 行事が行われる期日(旧暦)	11 組織
○開催期日:敬老会(9月17日) *演目の一つとして披露 *令和5年度はコロナ禍のあとで、4年ぶりの披露。コロナ以前は島袋の新年会や敬老会、北中城村まつりなどの行事で披露していた。 ○島袋の村遊びは、定期的に行うマール遊びではなく、何か大きな記念行事の時にやる方法であった。例えば、昭和4年の昭和天皇即位記念、昭和15年の紀元二千六百年祭、終戦後昭和24・25年頃の龕の仕立て祝いという場合である。期日は旧暦八月か九月頃に二日間行ったという。	島袋民俗芸能保存会を中心に青年会、壮年会が協力、指導は保存会会員が行う。自治会の広報、公民館だよりを通して参加希望者を募集する。参加人数は約50人前後。 字島袋民俗芸能保存会(会員15人)
旧暦7月17日	荻道青年会・壮年会
・8月14日(旧暦7月17日)年1回 ・令和4年度は、旗スガシーは中止となった。三役で拝所にウガンを実施。	なし
旧暦6月25日(ウファチ)の後の日曜日の綱引き。	・現在の会長は、平成14年の結成から現保存会会長が担う。 ・会員は、小波津に在住するもの及び小波津出身者で本会の趣旨に賛同するものとする。
旧暦7月15日(ウークイ)の後の日曜日の盆踊り。	・現在の会長は、平成14年の結成から現保存会会長が担う。 ・会員は、小波津に在住するもの及び小波津出身者で本会の趣旨に賛同するものとする。
旧暦8月15日(十五夜)の「獅子ヌ御願」と、卯年・酉年に行う「七年まーる村遊び」。	・現在の会長は、平成14年の結成から現保存会会長が担う。 ・会員は、小波津に在住するもの及び小波津出身者で本会の趣旨に賛同するものとする。
本来は旧暦8月15日の十五夜に行われるものであるが、区民や出演者の仕事などの都合を考慮し、その前後の日曜日をあてて開催されている。今回は日曜日開催で、旧暦では8月17日にあたる。	保存会の会長名がないが、会長は糸数氏が現在も務めている。
じのーん大綱引き(旧暦6月15日あるいは25日)、祝儀(敬老会、生年祝い等)等の座敷、観月会等	じのーん舞方保存会(平成17年発足)
旧暦8月15日	大謝名獅子舞保存会(昭和51(1976)年より)
昔:子・午の旧暦8月15日を中日として3日間 昭和59年～:子・午の旧暦8月15日近くの日曜日	戦前は組(=門中)を中心に行われた。
寅・申年の旧暦9月のタントウイ(種子取)後。旧暦9月15日頃	
・旧暦6月の豊年祭の一環で行われる。 ・令和4年は、コロナ禍で綱引きは3年連続で中止になったが、7月23日(旧暦6月25日)に「綱引きウガン」を集落内16カ所を自治会三役等数名で回って、部落民の健康祈願を行った。	・現在の会長は、令和3年度から保存会長(自治会役員)を担う。小学校低学年頃からの経験を積んできた。 ・コロナ禍前までは通年で毎週水曜日午後8時～9時まで自治会(公民館)前で棒の練習を行っていたが、現在はコロナ禍の影響でできない。 ・コロナ禍前まで浦添前田出身の小学生～中学生を中心に約20人(男女)で練習を行っている。 ・保存会の会員は15人程度で、指導は会長や数名の青年が行っている。 ・構成員は、基本的には、前田集落の住んでいる人、嫁いだ人も入れていたが、最近はなくなくなった。

【南部地区】

市町村名	行政区	No	方言名称	武術的身体表現の形態
			1 年中行事名	4 武術的身体操作・表現の分類
21.那覇市	安里	64	■その他 (安里八幡宮例祭・安里金満宮例祭(フェーヌシマ))	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■その他(サールー・ゲイ(トンボ返り)がある)
22.豊見城市	字嘉数	65	■その他(嘉数の棒)	■対面での打ち合い等がある
	字保栄茂	66	■豊年祭	■対面での打ち合い等がある ■その他 (一定の年齢層の男性たちが集団演技する「巻ち棒」がある)
	高安	67	■その他(チナヒチ)	■その他(詳細は不明)
		68	■その他(ガンゴー)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある
	根差部	69	■その他 (チジグンヌウガミ。綱引きの前のガーエーで、棒や空手が行われた。)	■その他(詳細は不明)
	饒波	70	■その他 (コーヌ祝い。祈願の後に、棒術や空手などを披露する)	■その他(詳細は不明)
	翁長	71	■豊年祭	■その他 (一定の年齢層の男性たちが集団演技する「巻ち棒」があった。1981年に49年ぶりの再演が行われたが、以来今日に至るまで行われていない)
23.糸満市	新垣	72	■豊年祭 (棒術の集団演武や個人演武を行う)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	真栄平	73	■豊年祭(ジュグヤー)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■その他(フェーヌシマ、ガーエー・マキ棒)
	真栄里	74	■その他(チナヒチ)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
		75	■その他(十五夜綱引き)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■その他(フェーヌシマ、ガーエー・マキ棒)
24.八重瀬町	世名城	76	■豊年祭	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	東風平	77	ヌホーン、 あるいはナコーシ	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	富盛	78	■豊年祭 ■その他(十五夜行事という)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある
	当銘	79	■その他(龍甲祭)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある

時期・場所	組織・指導者・伝承方法
5 行事が行われる期日(旧暦)	11 組織
旧4月15日(金満宮例祭)※アブシバレーの日 旧9月9日(八幡宮例祭) ※現在は旧暦の祭日の次の日曜日に開催。	安里南之島保存会の会員によって伝承されている。復活した平成4年から平成8年までは玉井氏(空手の師匠)、平成8年以降はほぼ玉城氏が会長をつとめている。催事ごとに出演できるメンバーを募り、その日程に都合のつく際はオファーを引き受けている。
なし	・知念三良に師事したのが、比嘉成一郎(1890～1991)、比嘉来助(1904～89)、赤嶺要平(1906～87)、比嘉仁三郎(1900～81)で、それぞれ佐久川の棍、周氏の棍、米川の棍、白樽の棍として今に伝わる。 ・指導を受けた4氏は、嘉数の若者たちに指導を行った。あまりにも激しい稽古の様子から、近隣の集落の人々からいつしか「嘉数棒」と恐れられた。 ・現在は、字根差部の信武館道場で、指導が行われている。
旧暦8月15日。 前回の2017年(酉年)の場合は、職業や学業の多様化から参加者が集まりやすい旧8月15日直近にあたる10月8日(旧暦8月19日)の日曜日(10月5日(旧暦8月15日)の水曜日には、自治会長らが拝みをたてた)	現在は、十五夜に合わせて実行委員会を結成し開催する。委員会の名称は「十五夜実行委員会」「大豊年祭実行委員会」「豊年祭実行委員会」など、開催年によって変わる。
旧暦6月25日	綱引き行事に関わる諸準備は字の当役が行い、また当役は余興として棒術を披露する
旧暦8月9日 12年に1度の辰年に龕の補修を行い、行列や余興などもある盛大なガンゴーが行われるが、それ以外の年は無病息災を祈る御願のみが行われる。	・高安龕ゴウ祭実行委員会を中心として、青年会、婦人会、寿友の会が参加して行われる。委員長は自治会長が務める。 ・次回(2024年)の龕ゴウ祭の開催に向けて、伝統的棒術や奉納舞踊の継承と伝統文化の調査研究などを行うために、高安伝統文化保存会(仮称)設立の検討が行われている(2012年時点)
6月ウマチー(旧暦6月15日)と6月カンチー(旧暦6月25日)の間の吉日に行われた。	不明
・旧暦8月9日 ・特に卯年のコーヌ祝いは十三年マ－イといって盛大に行われる。	不明
旧暦8月15日	不明。
旧暦8月15日の十五夜行事だが、2013(平成25)年より運営上の理由により旧暦8月15日に近い日曜日に開催。ただし、ボーマキの成功と演者の安全を祈願するボーマキウグワン(棒巻き御願)は、変わらず旧暦の8月15日。	・運営は区長や評議員などの役員と、ジュニンガシラ(十人頭)が中心になって行う。 ・「新垣棒巻き保存会」の役員が練習開始の御願、練習、本番などの場面に立ち会う。
旧暦8月16日の昼に綱引き、17日の夕方にアトウアシビを行う。 明治の頃までは15日の夜に綱引きを行っていた。	ムラ全体が東西のマールーと呼ばれる組に分かれて行事を行う。綱引きでは、ウチワキニン(相談役、東西3人ずつ)、ニンセーガシラ(青年頭、東西2人ずつ)、イーゴーガシラ(連絡係、東2人、西3人)、ジンガミ(会計係、東西2人ずつ)を選出して、綱引きに関する祭祀や行事を運営する。棒術などの稽古も東西のマールーに分かれて行う。棒術はボーガミー(棒頭)や長老が指導する。
本来は旧暦8月15日の夜に行われていたが、明治の時期にけが人が出たり、喧嘩が絶えなかったため、その後は戦後にかけて旧暦8月16日の昼間に長く行われてきた。しかし、2019年からは参加者などの都合も考慮して、旧暦8月15日を過ぎた最初の日曜日に開催されるように変更	真栄里のムラを東マールーと西マールーの二つの組分けて、それぞれの区域において綱引きにともなう準備や役割分担が行われる。東マールーはアガリカーンマー、西マールーはイリカーンマーの各広場で行うジューヌークンタティ(芸能の組み立て)の会議を行う。この会議には各マールーの人たちが参加し、綱引き行事での各役割について話し合いをする。役割が決まると、ウドウイガミ(舞踊係)によるアシビ(遊び)の打ち合わせがある。アシビは大綱引きの時に、東西それぞれが10演目を披露する演舞のことで、それぞれが重複しないように調整する。
旧暦8月16日の昼に綱引き、17日の夕方にアトウアシビを行う。明治の頃までは15日の夜に綱引きを行っていた。	ムラ全体が東西のマールーと呼ばれる組に分かれて行事を行う。綱引きでは、ウチワキニン(相談役、東西3人ずつ)、ニンセーガシラ(青年頭、東西2人ずつ)、イーゴーガシラ(連絡係、東2人、西3人)、ジンガミ(会計係、東西2人ずつ)を選出して、綱引きに関する祭祀や行事を運営する。棒術などの稽古も東西のマールーに分かれて行う。棒術はボーガミー(棒頭)や長老が指導する。
本来は旧暦8月15日の夜に行われていたが、明治の時期にけが人が出たり、喧嘩が絶えなかったため、その後は戦後にかけて旧暦8月16日の昼間に長く行われてきた。しかし、2019年からは参加者などの都合も考慮して、旧暦8月15日を過ぎた最初の日曜日に開催されるように変更となっている。	真栄里のムラを東マールーと西マールーの二つの組分けて、それぞれの区域において綱引きにともなう準備や役割分担が行われる。東マールーはアガリカーンマー、西マールーはイリカーンマーの各広場で行うジューヌークンタティ(芸能の組み立て)の会議を行う。この会議には各マールーの人たちが参加し、綱引き行事での各役割について話し合いをする。役割が決まると、ウドウイガミ(舞踊係)によるアシビ(遊び)の打ち合わせがある。アシビは大綱引きの時に、東西それぞれが10演目を披露する演舞のことで、それぞれが重複しないように調整する。
旧暦8月15日以降の土日(拝みは当日行う)	以前は字の役員である十人頭が指導者であった 現在は保存会
旧暦8月15日の次の日曜日。十数年前までは旧暦に合わせて行っていたが現在は日曜日に実施。	戦後、生活様式が多様化し、集落の伝承行事や生活習慣が次第に姿を消した。このままでは消滅してしまうのではないかと危機感が芽生え、一九八九年に富盛伝統芸能保存会、棒術保存会を結成、月二回の稽古日を設けて伝承保存に取り組んだ。
法要年忌(1、3、7、13、25、33年翌年から1年忌と繰り返す)の年にあたる旧暦8月10日	当銘棒術保存会

【南部地区】

市町村名	行政区	No	方言名称	武術的身体表現の形態
			1 年中行事名	4 武術的身体操作・表現の分類
24.八重瀬町	志多伯	80	■豊年祭	■型の演武がある、■対面での打ち合い等がある ■その他 (獅子舞の前に座清めとして「舞方」がかぎやで風の曲で演舞される)
		81	■その他 (旧6月ウマチー綱引き、七月綱、敬老会)	■型の演武がある、■対面での打ち合い等がある ■その他 (獅子舞の前に座清めとして「舞方」がかぎやで風の曲で演舞される)
	小城	82	■その他(龕甲祭)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	友寄	83	■豊年祭	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	宜次	84	■その他(綱引き)	■型の演武(舞)がある
	安里	85	■豊年祭	■型の演武がある
	坡名城	86	■豊年祭 ■その他(旧暦7月16日:シーサーウークイ)	■型の演武がある ■獅子に対峙しての武術がある
	具志頭	87	■その他 (旧暦8月15日綱曳きの後に行う「村あしび」 または「十五夜あしび」において実施)	■型の演武がある
25.南城市	佐敷津波古	88	■盆行事 (旧暦7月16日 盆の翌日に行われるヌーパ レー行事)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある
	奥武区	89	■その他(観音堂祭で棒術を披露する)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある
27.南風原町	照屋	90	■豊年祭(十五夜)	■型の演武がある
	兼城	91	■その他(舞方棒 メーカタボー)	■型の演武(舞)がある
	神里	92	■その他(舞方棒 メーカタボー)	■型の演武(舞)がある
28.久米島町	具志川	93	■その他(字移転記念日)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある
31.粟国村	字西(前パル原)	94	■その他	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある
	字西(草戸原)	95	■豊年祭	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある

時期・場所	組織・指導者・伝承方法
5 行事が行われる期日(旧暦)	11 組織
法要年忌(1、3、7、13、25、33年翌年から1年忌と繰り返す)の年にあたる旧暦8月15日、16日に実施。 1946年(1年忌豊年祭)戦後初の豊年祭。 2024年(戦後3巡目の13年忌豊年祭)、2036年(25年忌豊年祭)、2044年(33年忌豊年祭)	2巡目の13年忌豊年祭(1996年)の翌年に「志多伯獅子舞愛好会」その2年後、1999年に「現 志多伯獅子舞棒術保存会」が結成された。伝統の獅子舞の継承と若い世代の活動拠点となるために獅子舞棒術保存会を結成した。コロナ禍になり活動が低迷したことで、志多伯道場(古武道)として開設したところ女性や子どもの参加が急増した。保存会と道場の活動が融合し、活性化に繋がっている。
綱引きは、旧6月15日(ウマチー綱引き)、旧7月15日(七月綱)の年に2回行われ、そのなかで棒術が豊年祭がない年の9月には敬老会が開催され、その中でも複製獅子による獅子舞演奏や棒術が披露される。後継者育成や獅子文化啓発も兼ねている。	
年忌(1,3、7,13,25,33)の旧暦8月10日	邪気除け、座清め
旧暦八月十五夜の豊年祭で行われるが、約25年前から平日では字民の都合がつきににくいという事で、旧暦八月十五日後の日曜日に行われる。	舞台演奏の最初は舞方という棒術で始まる。昭和初期の映像を見ると、棒巻も友寄の名物であったが現在は多人数での棒術は難しい。現在若いメンバーが増えてきているので彼らが意識を持ち続けると復活も可能かと期待する。
3年毎に開催される綱引きの前座、道ジュネー、敬老会、夏祭り等の字行事で披露される	昭和62年 大城氏が字民に対し指導を始める(「シナカチ」「ユニガー」のみ) 平成7年 愛好会結成 平成26年 保存会結成
旧暦8月15日	安里棒術保存会
旧暦の7月16日のシーサーウークイ、旧暦の8月15日の十五夜の日	毎年の字破名城の恒例行事として実施され、伝統芸能の保存継承を目的に保存会が結成された
3年毎の旧暦8月15日に行われる。	根川氏の三男、根川氏(昭和9年生)が伝授。 昭和51年に瀧野氏、徳浜氏、崎江氏らにより東り組(アガリンダカリ)青少年棒術保存会が結成され、根川氏が当時の東り組の小学生4年生～6年生までを対象に伝授する。 令和元年に根川氏、徳浜氏、徳浜氏、徳浜氏、崎江氏(元東り組青少年棒術保存会)らが「具志頭棒術保存会」を結成。
旧暦7月16日 ヌーバレー ※戦前は旧暦7月、8月の年中行事で行われていた。「村遊び」では「棒マチ」が行われた。	
観音堂380年祭までは、旧暦9月18日に行ってきたが、385年祭からは9月28日以降の日曜日に開催。参加者の仕事の都合等による。	・保存会が結成され、定期的に練習している。子どもたちにも伝承し後継者育成も行っている。地域の諸行事には子どもたちが行方が、伝承者は観音堂祭でしか演武しない。 ・公民館に棒術の型の写真を展示し、区民に広く伝わるようにしている。
旧8月15日(R5年は翌日の9月30日)	照屋民俗芸能保全会、青年会
敬老会、新年会	兼城区(字の芸能保存会はない)、青年会
十五夜遊び(敬老会)9月頃	神里伝統芸能保存会が舞方棒を継承
字具志川移転記念日(明治28年字仲村渠古島から現在の字具志川松の口に移転した日)旧暦の8月19日を基本として、実行委員会・部落で日程調整し、10年に1度棒術を行っている。平成5年10月9日には、「字具志川移転100周年記念」として三味線、舞踊、民謡ショー、棒術を披露し、盛大に式典が行われた。その後110周年も同様の式典を行った。	以前は実行委員会の組織を形成し、実行委員長を中心に「祝宴部」「式典部」「事業部」を設置し、運営を行っていたが、今年は区長を中心に行事を行う。詳細は今から決定する。
旧暦1月3日、7日、16日	前バル原という地域があるが、現在は棒踊りは行われていない。
旧暦12月31日、元旦、3日	草戸原

【宮古地区】

市町村名	行政区	No	方言名称	武術的身体表現の形態
			1 年中行事名	4 武術的身体操作・表現の分類
37.宮古島市	来間区	96	■その他(ヤーマスイ ^① 御願)	■対面での打ち合い等がある
	新里区	97	■豊年祭 (旧暦6月・日は選定する。開催日は毎年5～6月頃に決まり、保存会にも連絡がくる。)	■対面での打ち合い等がある
	上野野原区	98	■豊年祭(旧8月15夜 マストウリヤー)	■対面での打ち合い等がある
38.多良間村	仲筋字	99	■豊年祭(多良間の豊年祭 八月おどり)	■型の演武(舞)がある、 ■対面での打ち合い等がある
	塩川字	100	■豊年祭(多良間の豊年祭 八月おどり)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある

時期・場所	組織・指導者・伝承方法
5 行事が行われる期日(旧暦)	11 組織
旧暦9月(もしくは8月)の甲午(きのえうま)・乙未(きのとひつじ)の2日間、その最終日の午後に棒術が行われる。 村落の神女による祈願はその前の辰の日から最終日まで の四日間	ブナカは、長男スミリヤブナカ、次男ウブヤーブナカ、三男ヤーマスブナカの3つであり、村落の構成員はいずれかのブナカに所属している。棒術の集団は、3つのブナカごとに作られる。それぞれ棒振り役15名(3人棒×5列)、鉦打ち役1名からなる。またブナカごとにヤライ・シュー2名がいて、最終日の棒術などの演舞の時間調整・連絡などを担当する。
旧暦6月 ※日取りを選ぶ。	①青年会。青年会が棒術を担当していた。棒術は10名1組。以前は2組あったが、若者が減って1組になった。いつ頃から変わったのかは不明。棒の編成は5名(前棒2名・中棒1名・後棒2名)×2。他にナリモノ(横笛1名・鉦1名・太鼓2名・ホラ貝4名)の役がある。棒術は高校卒業後に加入し、25歳頃まで活動していたが、近年は人が少ないため30歳代もやっている。長男次男の関係はなく、地元に残る青年は皆棒術やシン舞いを担当した。 ②保存会。現在もシン舞いと棒術は青年たちが担当するが、特に保存会と協力しながら実施している。「新里民俗芸能保存会」は、豊年祭で行う芸能全般を保存継承する目的で作られた。結成時期は不明。現在会員は30名余りで、年配の経験者が多い。年間の活動としては、5月頃に総会があり、他に毎月のモアイをしている。豊年祭の芸能は保存会が中心になって指導する。
旧暦8月15日夜	村落内の4組がそれぞれに伝承の組織になっている。組の住民のうち青年の男性が中心となり、5名1組で棒術を担当する。同時に行われる女性の踊りは組別ではなく、野原区全体で組織されている。
旧暦 8月8日・9日・10日	多良間村民俗芸能保存会 仲筋字会 中に10座ありその中の1つの座、「獅子座」(スース座) 成年団員が獅子舞とボーアース(棒合わせ)を演じ15人程度で構成される。 演武は、獅子舞・獅子2人・舞手1人。 棒踊り ニーニン棒 2人、トウ棒 2人。 民俗踊り:キネツキ踊り・臼引き踊り(復帰後だんだんに成人女性が踊るようになった。)
旧暦 8月8日・9日・10日	多良間村民俗芸能保存会 仲筋字会 中に9座ありその中の1つの座、「獅子座」(スース座) 成年団員が獅子舞とボーアース(棒合わせ)を演じ15人程度で構成される。 演武は、獅子舞・獅子2人・舞手1人。 棒踊り ニーニン棒 2人、トウ棒 2人。 民俗踊り:ユリ・ツキ踊り・女ヨンシー(復帰後成人女性が踊るようになった。) ヨーンシー(成年男子が踊り塩川字のみが演じる。)

【八重山地区】

市町村名	行政区	No	方言名称	武術的身体表現の形態
			1 年中行事名	4 武術的身体操作・表現の分類
39.石垣市	登野城	101	■豊年祭(オンブール)	■型の演武(舞)がある、 ■対面での打ち合い等がある
		102	■その他(結願祭)	■型の演武(舞)がある、 ■対面での打ち合い等がある
	石垣	103	■豊年祭	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある
		104	■その他(結願祭)	
		105	■その他(牛ヌ願)	
	平得	106	■その他(結願祭)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	真栄里	107	■盆行事 ■その他(郷土芸能発表会S40～S47 2月)	■獅子に対峙しての武術がある
	大浜	108	■豊年祭(ツナヌミン)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある
		109	■その他(イタシキバル)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある
		110	■その他(共進会)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	宮良	111	■その他 (結願祭(きつがんさい)、その他、イベント等でも演舞。)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある、
	白保	112	■その他(十五夜 旧暦:8月15日)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	新川	113	■豊年祭(ツナヌミン)	■対面での打ち合い等がある
		114	■その他(南島(フェーヌシマ))	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある、
	川平	115	■その他(結願祭・節祭)	■対面での打ち合い等がある
40.竹富町	竹富	116	■その他(種子取祭)	■対面での打ち合い等がある ■芝居の中で武術的所作が演じられる ■その他 (奉納芸能の中で棒踊り棒術が見られ、腕棒は素手で演じられ、女性が舞う。)
		117	■その他(十五夜祭)	
	小浜	118	■その他(結願祭)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■芝居の中で武術的所作が演じられる
	黒島	119	■豊年祭 ■その他(旧正月、結願祭)	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある ■芝居の中で武術的所作が演じられる
	古見	120	■その他(結願祭)	■型の演武(舞)がある
	祖納	121	■その他(節祭)	■対面での打ち合い等がある
	千立	122	■その他(節祭)	■対面での打ち合い等がある

時期・場所	組織・指導者・伝承方法
5 行事が行われる期日(旧暦)	11 組織
豊年祭(オンブール、旧暦6月)	青年会組織を中心とした若者が演武を担い、経験を積んだ青年会OB等が組織運営を行うための師匠(1名)や副師匠(1名)の役職を担う。 また、近年では現役世代が役職を担うようになってきたことから、副師匠を2～3名、会計も加えた組織に変化してきている。
結願祭(旧暦8～9月):12年に1回、寅年に開催される。	青年会組織を中心とした若者が演武を担い、経験を積んだ青年会OB等が組織運営を行うための師匠(1名)や副師匠(1名)の役職を担う。 また、近年では現役世代が役職を担うようになってきたことから、副師匠を2～3名、会計も加えた組織に変化してきている。
豊年祭 オンブール 7月後半から8月前半(旧暦6月)	石垣字会
結願祭旧暦9月(6年に1度だが前回はコロナの影響で2年ずれる)	石垣字会
牛又願い旧暦2月(2年に1度)	石垣字会
12年毎に御嶽及び公民館の決定により行う。	平得獅子舞棒術旗頭同好会
2月に芸能発表会	
豊年祭の二日目の村プールにて行われる。太陽が沈み、旗頭に明かりが灯される頃に機敷に乗って演じられる。	大浜獅子棒保存会
旧盆の送り日の翌日に獅子舞と一緒に演じられる。	大浜獅子棒保存会
特に定められた期日はない。優良農家を表彰する式典のアトラクションとして演じられる。	大浜獅子棒保存会
神年とされる子年、寅年、午年、酉年の旧暦10月頃。	明治から大正、昭和初期までは、個人道場が技術をもって村行事に協力する関係性であった。昭和20年代に、保存会が結成され、公民館の傘下団体となり現在に至っている。
毎年十五夜(旧暦:8月15日)の夜に行われる。	「白保棒術保存会」として独立した組織がある。会長以下役員及び会員により組織される。また、歴代の打ち手である師匠(1名)により棒術の指導がなされる。
旧暦6月のカンピューリイ(神日和)と呼ばれる癸や甲の日とその翌日の2日間にわたり豊年祭は行われる。その2日目の夕刻に行われる。	2日間にわたり豊年祭は行われるが、その2日目の夕刻に登場し演じられる。余興は2日目の祭祀行事の終了後、西へ移動して、日の入りで西の空が赤く染まった頃合いに松明を焚いた中で開始され、暗くなった頃に両者の勝敗はつかないまま終了となる。その後、綱引きが行われ勝敗は決まる。近年は、子どもたちの参加もあり、時間帯を早くしてほしいとの声がある。
特に定められた期日はない。お祝い等で演じられる。令和5年は旧盆の送り日(オクリビー)に行われる獅子祭の前に演じられた。	新川字会、南風ぬ島カンター棒保存会
結願祭:旧暦の8月頃	主に青年会や青年会OB等で結成される「川平棒・太鼓・獅子保存会」取り組んでいる。
節祭(シチ願い)から49日目の前後10日間に行われる	公民館長が祭主となりすべての祭りを取り仕切る。玻座間集落、仲筋集落に狂言部や舞踊部があり、玻座間狂言保存会、仲筋狂言保存会があり、演目は決まっている。
旧暦8月15日	
結願祭	石垣島の川平地区からの伝承だとされる
豊年祭⇒旧暦の6月 結願祭⇒7月(旧盆の時期を外して) 旧正月⇒旧正月	東筋(あがりすじ)、仲本、宮里、保里(ほり)、伊古(いこ)の5部落があり、それぞれで行事を担っている。
旧暦八月の結願祭で奉納する。令和になってコロナ等で今日まで祭りは行われていません。	村の祭に戦前、戦後、復帰後の変化はない。先人から受け継いだ伝統文化変わることなく継承している
10月の己亥(つちのとい)の日から3日間 2日目は「ユークイ」と呼ばれ、奉納芸能を実施	公民館の青年部にて実施(70人～80人)
10月の己亥(つちのとい)の日から3日間 2日目は「ユークイ」と呼ばれ、奉納芸能を実施	公民館の青年部にて実施

【八重山地区】

市町村名	行政区	No	方言名称	武術的身体表現の形態
			1 年中行事名	4 武術的身体操作・表現の分類
40.竹富町	船浮	123	■その他(節祭)	■対面での打ち合い等がある
	鳩間	124	■豊年祭 ■その他	■型の演武がある ■対面での打ち合い等がある
	波照間	125	■豊年祭(ムシャーマ)	■対面での打ち合い等がある ■その他 (対面での打ち合いだが、本来は体に当てずに寸止めするのが正式)
41.与那国町	西村	126	■豊年祭	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
		127	■その他 (棒座師匠(チス)の世代交代の行事)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	東村	128	■豊年祭	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある(武術はないが、紐付きの玉を持って踊る)
		129	■その他 (チムパタイという棒座師匠(チス)の世代交代の行事の世代交代の行事)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある(武術はないが、紐付きの玉を持って踊る)
	嶋仲	130	■豊年祭	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
		131	■その他 (チムパタイ ※公民館長及び棒座チスの世代交代の行事。嶋仲の場合は、棒座と館長のチムパタイは一緒に行う。)	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある
	比川村	132	■豊年祭	■型の演武(舞)がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある→武術かどうかはわからない

時期・場所	組織・指導者・伝承方法
5行事が行われる期日(旧暦)	11 組織
10月の己亥(つちのとい)の日から3日間 2日目は「ユークイ」と呼ばれ、奉納芸能を実施	公民館
豊年祭のナカピ⇒旧暦の6月(新暦7月後半)	西(イリ)、東(アガリ)各公民館
旧暦7月14日(旧盆)	前、西、東の各公民館
本来、ウガンフトウティは、旧暦6月の庚または辛の日(その日と前日と後日の3日間に丑や酉の日が当たらないような日)に行われるが、近年、祖納のウガンフトウティは、祝賀会に多くの人が参加できるように、旧暦6月の日曜日(前日から後日までの3日間に、丑や酉の日が当たらない日)で計画されている。	かつては、各家庭はいずれかの座に属して代々受け継がれてきたため、棒踊を踊る家庭も決まっていたが、最近は生活様式の変容や特に後継者不足のため、これまでの強固な座の体制は弱まっている。現在、西棒座においては、「チス」という師匠を1名置き、その下に「ナガチス」を1名以上置いている。最近では会計係も置いている。以前は、座に所属する各家庭から集金して、年間の支出に充てていたが、現在は報酬のある草刈りの事業を受けて、収入を得ている。
チムバタイは、2年に1度で、4月～6月頃に行われる。日程の詳細はそれぞれ、新しい棒座師匠(チス)が決める。	かつては、各家庭はいずれかの座に属して代々受け継がれてきたため、棒踊を踊る家庭も決まっていたが、最近は生活様式の変容や特に後継者不足のため、これまでの強固な座の体制は弱まっている。現在、西棒座においては、「チス」という師匠を1名置き、その下に「ナガチス」を1名以上置いている。最近では会計係も置いている。以前は、座に所属する各家庭から集金して、年間の支出に充てていたが、現在は報酬のある草刈りの事業を受けて、収入を得ている。
本来、ウガンフトウティは、旧暦6月の庚または辛の日(且つ、その日と前日と後日の3日間に丑や酉の日が当たらない日)に行われるが、近年、祖納のウガンフトウティは、祝賀会に多くの人が参加できるように、旧暦6月の日曜日(前日から後日までの3日間に、丑や酉の日が当たらない日)で計画されている。	東棒座には、「チス」という師匠が1名いて、その下に「ナガチス」1名、「ナガキリ」1名置いている。チスは、チムバタイでの祝儀を管理し、年間にかかる出費に充て、不足分は自弁している。
チムバタイは2年に1度で、大体4月～6月頃に行われる。日程の詳細はそれぞれ、新しい棒座師匠(チス)が決める。	東棒座には、「チス」という師匠が1名いて、その下に「ナガチス」1名、「ナガキリ」1名置いている。チスは、チムバタイでの祝儀を管理し、年間にかかる出費に充て、不足分は自弁している。
本来、ウガンフトウティは、旧暦6月の庚または辛の日(且つ、その日と前日と後日の3日間に丑や酉の日が当たらない日)に行われるが、近年、祖納のウガンフトウティは、祝賀会に多くの人が参加できるように、旧暦6月の日曜日(前日から後日までの3日間に、丑や酉の日が当たらない日)で計画されている。	かつては、各家庭はいずれかの座に属して代々受け継がれてきたため、棒踊りを踊る家庭も決まっていたが、最近は生活様式の変容や特に後継者不足のため、これまでの強固な座の体制は弱まっている。現在、嶋仲棒座においては、「チス」という師匠がいて、その下に「ナガチス」と会計係をおいている。会計係は、嶋仲公民館から支給される活動費やその他の収入(祭事の祝儀など)を管理し、年間にかかる支出に充てている。
チムバタイは、2年に1度で、大体4月～6月頃に行われる。前年度の総会以降の日で、日程の詳細は、新しい公民館長が決める。	かつては、各家庭はいずれかの座に属して代々受け継がれてきたため、棒踊りを踊る家庭も決まっていたが、最近は生活様式の変容や特に後継者不足のため、これまでの強固な座の体制は弱まっている。現在、嶋仲棒座においては、「チス」という師匠がいて、その下に「ナガチス」と会計係をおいている。会計係は、嶋仲公民館から支給される活動費やその他の収入(祭事の祝儀など)を管理し、年間にかかる支出に充てている。
ウガンフトウティは、旧暦6月の庚または辛の日(且つ、その日と前日と後日の3日間に丑や酉の日が当たらない日)に行われる。	棒座に会計はなく、支出があれば公民館の会計から支払われる。棒座の1年の活動は、主に豊年祭(ウガンフトウティ)の10日前から始まる練習である。棒座には、「チス」と呼ばれる座の師匠が置かれる。

<別表>

地区	市町村名	行政区	No	方言名称 1 年中行事名	3. 武術的身体表現・表現の形態 3. 武術的身体表現・表現の形態
北 部	1. 国頭村	奥	1	■シヌグ (フーヨーサレー行事と ピーンクワイ行事)。	ピーンクワイの長壽祈願の行事で一行の先頭に、空手を演じる方2人、棒術を演じる方2人がある。「アイー」と「ボー」(歩きながら、道ジューネーの先頭を務める) ※集落で一番長老(男性のみ、桶長老/戦前は慶応2年生まれの屋号「徳門仲」の金城定敬を担いだことの証言まで遺れる。チョウロー(長老)昭和12年生が対象。昭和17年)奥での最老年齢者の男性を飾り付けた桶「ウヒ」に乗せ、若衆(「カタミヤー」と呼んでいる。戦後間もない頃は青年だけでできた)担ぎ、反時計回りに円を描きながら練り歩く。その際に、「ピーンクワイ、ユイヤーサー…」のかけ声で担ぎあげた桶を天に突き上げながら練り歩く。男性のみで担ぐ。女性はウステークで迎える。
	2. 大宜味村	饒波	2	■シヌグ・ウングヤミ	棒術
		字大兼久	3	■ゾーガリー	クーサンクーと呼ばれる型の演舞がある。大まかな型の所作は決まっているが明確な型の決まりはなく、アジビの中で先輩から後輩へ見よう見まねで受け継がれている。
		謝名城	4	■豊年祭 (謝名城の豊年祭)	長者の大王の中で、空手の型を奉納する
		今泊	5	■豊年祭 ■その他(村芝居)	古武術としての棒術というより、庶民的ハナ棒(棒踊りの一種)である。(「今泊誌」)
	4. 今帰仁村	仲宗根	6	■その他(村踊り)	銅鑼の調子に合わせて演ずる棒術で、チュイボー(一人棒)、タイボー(二人棒)、などの組棒があった。また専門家が一人で演ずる棒や、大勢でにぎやかな演技もあった。(「仲宗根誌」)
		湧川区	7	■その他(村踊り)	ガク、ドラ、太鼓の音に合わせた掛け声と共に演舞する(「湧川誌」)
	5. 本部町	瀬底	8	■豊年祭(村踊り)	棒衆(ボウシンカ)と呼ばれ、ウチマン毛で潮巻き(スーマキ)を終えてから舞台上道ジューネーの踊りの次に棒の演舞が行われる。
		伊野波・並里	9	■豊年祭(村踊り)	寸留めで棒同士をぶつけないことにごろがけている。
		浜元	10	■シヌグ・ウングヤミ	
			11	■その他 (南島(フェヌシマ)※北中城村指定無形民俗文化財)	
		数久田	12	■豊年祭	数久田では「ボー(棒)」と呼ばれる棒術が披露される。数久田の棒は他の区からオーイボー(けんか棒)といわれ、組棒では真剣に棒を打ち合う激しさで有名である。『名護市史 芸能編』
		真喜屋・稲嶺	13	■豊年祭 編引きで東側が刀と西側がナタをもった抜司が合せる)道ジューネでは「棒」もある	真喜屋(南側)と稲嶺(北側)で神アシャギと舞台の間での綱引きが終わった後で、棒がある。「棒法」人数22名。全員による棒「スーマキ」。その後二人一組による棒「組棒」(15種)がある。
		仲尾次	14	■豊年祭	仲尾次では「ボ-ボ- (棒方)」と呼ばれ、棒の演武が行われる
	6. 名護市	田井等・親川	15	■豊年祭	棒の出演者は、棒方(ボウカタ)と呼ぶ。「田井等・親川の獅子舞の由来」の書き物の中に、「・・・踊る時間は二十分。踊る手は唐手の九三九と称し、今より七十年前親川孝一氏の振付けで技もものなり・・・」『名護市史研究資料第91集 芸能調査資料5 羽地地区の芸能・』 359-360p.p.
		振慶名	16	■豊年祭	
		古我知	17	■豊年祭	
			18	■豊年祭 (謡の開演前と終了後)	
		我部祖河	19	■豊年祭	我部祖河では「ボ- (棒)」と呼ばれる棒術が披露される。棒は二人が対面で行う組棒とボウホウ(棒方)全員で行うスーマキ棒(総巻棒)がある。
		呉我	20	■豊年祭	
		屋我	21	■豊年祭(ムラウドウイ)	空手の演目は、屋我地地区の児童・生徒が松田氏の空手指導を受けているが、屋我地他地区で豊年祭で演武するのを参考にした(2005年現在)
		久志	22	■笠行事(ムラ踊り)	ムラ踊りの演目の中には、「メーカタ」とよばれる空手を舞踊化したものがある。
		辺野古	23	■豊年祭(ムラウドウイ)	ムラウドウイの演目にメーカタ、古くはコーサンクーと称す。別称ザーギリウドウイ(舞台を決める舞、古武道的な形の力強い舞)『辺野古誌』p.655
8. 宜野座村	宜野座区		24	■その他 (宜野座の八月あしび)	宜野座の八月あしびに伴う武術的操作・表現としては、宜野座スンドゥルチ(ノロ殿内)・大川按司の屋敷跡・根屋の拝所で奉納される舞踊の中に「棒(6尺2人棒)」がある。その後、道ジューネを経て舞台芸能の会場である「平松毛」にて、再び「棒」が演じられる。八月あしびの舞台芸能の演目としては、「獅子舞」で舞方が「クーサンクー」の音曲で登場して舞台の座を清める。また、舞踊では空手の技法を取り入れた「前之浜」、組踊「伏山敵討」は武術的身体操作・表現がある。
		金武区	25	■その他(親月祭)	金武区のなぎなたはメリハリがあって、ピシッピシッと胴着の音がある特徴的で、演舞のキレなどを大事にしている。
			26	■その他 (旧暦八月十五日)	スネイ棒(マチ棒ともいう)のあと、一斉棒演技(二人組棒・三人組棒の棒術(金武区誌・戦前編)上)P309
9. 金武町	並里区		27	■その他 (十五夜村あすび)	(1)スネイボー(チクラボー) ドラや太鼓、フラ(ホラ貝)、ドラのリズムにのせて体形の変化を工夫して行進する ・チクラ巻 ・マチボー(蝶線状) (2)一斉棒(基本動作) (3)組み棒 ・タイボー(二人組) ・ミツチャイボー(三人組)「並里区誌・戦前編」P298 ①「サウーサー、サウーサー」と声を掛け合い、6尺棒(スネイ棒)で土気を高め合いスーマキ棒、マチ棒を行う。スーマキ棒は潮の干満をヒントに連帯を表現したもので、マチ棒とはチクラマチともいい、チクラという魚の群れに、ナタを投げ入れ、逃げ惑う魚と水の波紋をヒントに考えられたものである。 ②型の演技「基本棒」全員、2人で行う「甲乙」、3人で行う「三人棒(みつちやい棒)」、5人の「五人棒(ごにんぼう)」でドラ・太鼓・ボラに合わせて演じられる。(並里伝統芸能保存会)
		字伊芸	28	■その他 (旧8月15日の親月祭)	棒(六尺・三尺)、ジューネー、サールゲー
10. 伊江村	西江上区		29	■その他 (西上区民俗芸能発表会・伊江村民俗芸能発表会 他)	・3つある場面の内一つに、六人の鬼が二人一組で相対し、棒を打ち合い、踊る場面(第一場面)がある。
	西崎区		30	■その他 (西崎区民俗芸能発表会・伊江村民俗芸能発表会 他)	銅鑼やホラガイが鳴らされ、二人一組で棒などを打ち合う演舞を行う。
35. 伊平屋村	我喜屋		31	■その他(綱引き)	綱引きの前に東である内村と西である兼久双方が体をぶつけ揉みあい、力比べのような「ガエー」と呼ばれるものが女性から始まり、次に男性のぶつかり合いと、2度行われる。そこに、内村からは阿麻利和、兼久からは護佐丸に扮した2人の若者がハンルーと呼ばれる木の上の板に担がれ登場し、一騎打ちとなる。
36. 伊是名村	仲田・伊是名・勢理努・諸見		32	■シヌグ・ウングヤミ	クーサン(棒)を杖状に構え、地面や家屋内(拝所含む)を練り歩きながら、床面をドンドンと打ち鳴らしながら、「ウンナジューレー・ボイ・ボイ」や「ウナザリ・ボホヒ・スーマキ」などと呼ぶ、度のある拝所や住宅では、2人1組や3人1組で棒術の型を披露する。
			33	■豊年祭(十五夜)	型の演武(ティンペーの手、ナギナタの手、エークの手)
			34	■笠行事(旧盆)	型の演武(ティンペーの手、ナギナタの手、エークの手)
			35	■その他(新年会、夏祭り)	型の演武(ティンペーの手、ナギナタの手、エークの手)
			36	■その他(15歳祝い)	空手の型をまねた各自創作型を演武。

地区	市町村名	行政区	No	方言名称 1 年中行事名	3. 武術的身体表現・表現の形態 3. 武術的身体表現・表現の形態
中 部	座喜味	宇座	37	■その他(敬老会(9月))	演武者は「棒チカヤー」と呼ばれ、棒術を演武する前に全員でスーマキ(総巻)を行う
			38	■その他 (総合共進会(12月))	他字の棒術と比べ、何よりも「実践型」で常に相手の急所を狙って攻める戦いが特徴である。
			39	■笠行事	棒術「ボーチカイ」 ・エイサー(旧暦7月16日「ウークイ」には、エイサー演舞のつなぎに演舞。 ・ジューグヤー(旧暦8月15日 親月会)には、組踊り・舞踊と組み合わせて演舞する。
			40	■その他 (シチファチエイサー・ジューグヤー(旧暦八月十五日 親月会))	
	13. 読谷村	読平	41	■笠行事	読平笠行事読平親月会に、14種の組棒(組手)が継承継続し、ハンジヤ棒・エイサーと組み合わせで演武します。
			42	■その他(親月会)	読平笠行事読平親月会に、14種の組棒(組手)が継承継続し、ハンジヤ棒・エイサーと組み合わせで演武します。
			43	■その他 (役員数送 迎会、敬老会、生年合同祝)	①足切り右手斜め上に振り上げ、左から相手の足を払う。 ②大割・上段高(振り上げ、相手の頭上肩間に打込む。 ③ふす技相手のへそを突く技。 ④ウービ切り相手の腰がマクを切る。 ⑤カチ切り相手の肩を打ち落とす技。 ⑥突手:左手先に相手の股間を突く。 ⑦うら切り:上段で棒を一回振り回して、相手のウラから打込む。
			44	■その他 (5月小 グングッチャークワ 旧暦の8月5日)	野里の棒術は、一命「道棒」とも称され、武術として普及したといわれている。
	14. 嘉手納町	下勢頭	45	■その他 (祝賀行列や出演依頼の際に行う。)	組み手の演武(舞)は、2人1組の組み手(組棒)を複数組が順番に行う。二人で構え、打ち合いを行う。棒をよけるために飛びよがるなどの動作もある。
			46	■豊年祭	フェーヌシマは、棒を振り回したり、打ち合う「棒巻」。空手の型の「手」と「ダツチムンチー」がある。 「ダツチムンチー」は、二人組み合わせて相手の股の間に頭を入れて腰を抱えて抱き合うようにして後方に回転する。
			47	■その他 (12年毎(寅年)の「北谷大綱引き」、戦前は、毎年9月に行われる「北谷長老祭」や「ムラアンビ」でも演じられた。)	
			48	■その他 (獅子舞 ※北中城村指定無形文化財)	獅子舞は、はじめに一人の男(ワクヤー)がまりを両端に結びつけたひもを首にかけてまりを振りながら獅子を誘い出して始まる。獅子の胴体には二人の男がはいり、三線、太鼓、ドラに合わせて獅子舞を演じる。(『北中城村の文化財』北中城村教育委員会)
	15. 北谷町	北谷	49	■その他 (南島(フェーヌシマ)※北中城村指定無形民俗文化財)	先に金環をつけた棒を打ち合ったり、振り回して威嚇したり、「ハウー」と奇声を発したり、また大きく割って飛び跳ねて野性味を出しておどる。(『北中城村の文化財』北中城村教育委員会) 前半:南島歌 幕内で三線が南島の曲を弾き始めると、舞台下手から踊り手八人が、ハウー、ハウーと奇声を発しながら出てゴーマチ(輪)を作る。歌が始まると、歌に合わせてゆくりした振りで踊り始める。両方の手を拳状に曲げて、両手で打ちあひ仕舞をし、両手を交互にくぐる回しをする。 後半:エ三工節 エ三工節に変わると、一の棒、二の棒、三の棒、四の棒の順に連続して棒の打ち合い、跳躍と激しい演技がある。特に三の棒のミエズジ(目貫き)、カマチワイ(頭割り)、四の棒のチンシワイ(膝割り)などは、緊張を要する危険な組み手である。これらの演技を済ませると、再びボウ、ボウと奇声を上げながら上手に進場する。(『北中城村史 第二巻 民俗編』)
			50	■その他(鳥袋まつり)	奇数組、偶数組が一列縦隊になり会場内を両サイドに分かれて周回する。総巻きとハジリ棒と呼ばれる組み手で構成される。中央付近で交差する時、右側側にかまえての棒下方をお互い相手側に少し出しすれちがう時にお互い棒を交えてカチカチ音を出して進むという。青年たちが各自六尺棒を持ち、うす巻き状に巻きしめ、また解いていくという見事な集団演技と、ドラとボウ貝のリズムに合わせた武術的な激しい棒の打ち合わせ、掛声が迫力をもって観る人を圧倒する。(『北中城村史 第二巻 民俗編』)
			51	■その他 (赤木名節 ※北中城指定無形民俗文化財)	赤木名節は、琉球王明時代から伝わる二オ(ニーセー)踊りで、1番から4番までの振りは空手の異なる受けの型を取り入れている勇士で活発な踊り。 「踊りは二歳踊りで、特徴は空手風の勇士、活発な振付にある。(『北中城村史 第二巻 民俗編』)
			52	■その他 (敬老会「赤木名節」)	赤木名節は男性によるニーセー(二オ)踊りで、空手風の踊り。赤木名節は近隣の村にはない演目や独特なものである。
	16. 北中城村	島袋	53	■その他 (旗すくい・夏まつり)	大城地区と読道地区の兄弟棒(各地区代表)
			54	■その他(旗スガシー)	読道自治会と大城自治会代表による約束組棒(兄弟棒・スガシー)
			55	■その他 (旧暦6月の綱引き)	「以前は、綱引き行事で炬火をたき、けんか棒を競い、弱い方は危険であった。」と記されている。『大城の今昔』仲村栄孝
			56	■笠行事	盆踊りや八月十五夜(獅子又御願と七年まーる村遊び)には、一人棒や組棒の演舞を行う。
18. 西原町	小波津		57	■獅子又御願と七年まーる村遊び	「棒チカヤー」と呼ばれる。
			58	■その他 (七年まーる村遊び)	棒術と獅子舞には棒や空手の型を取り入れた演舞がある。
			59	■その他 (舞方(メーカタ))	「かぎやで風」の早寝きにに合わせて、空手の型を緩急をつけたがら舞踊風に踊る。 別添参照:演舞
			60	■豊年祭 (大謝名の獅子舞、獅子舞の前に棒術と舞方を行う)	獅子舞の前に棒術と舞方を行う (別添参照:棒術①棒術②、舞方)
	野嵩		61	■豊年祭 (野嵩マールアジビ)	組踊(昔は「宜野湾敵討」「八重瀬」「忠臣護佐丸」、現在は「忠臣護佐丸」のみ)の中に棒術や殺陣を取り入れている。 (別添参照:演舞①②) ボウマ(棒巻)
			62	■その他(ムラアジビ)	戦前組踊「本都大部」「国吉の比屋」「伏山敵討」「手水の縁」「森川の子」(忠孝人)で棒術や殺陣が取り入れられている。 棒術:ボウマ(棒巻)三尺又は六尺の棒を持ち、最初は法螺貝の音に和して一列に進み螺旋を巻きを解いた。それから二人ずつ打ち合いの型をやり、又渦巻をやって退場した。之を芝居の前後に2回行つた。現在は組踊で使うのは短刀のみで空手の要素はない
	新城		63	■豊年祭 (綱引きと村芝居(近年村芝居のみ)綱引きの後で「棒使い」とよばれる棒術を行う)	「棒つかい」と呼ばれる。 ・綱を引き終えたら、その後1時間ばかりの間に、ガーエ、旗頭持ち、棒、空手を順序にしたがって演武した。
			64	■豊年祭 (綱引きと村芝居(近年村芝居のみ)綱引きの後で「棒使い」とよばれる棒術を行う)	
20. 浦添市	前田		65	■豊年祭 (綱引きと村芝居(近年村芝居のみ)綱引きの後で「棒使い」とよばれる棒術を行う)	
			66	■豊年祭 (綱引きと村芝居(近年村芝居のみ)綱引きの後で「棒使い」とよばれる棒術を行う)	

地区	市町村名	行政区	No	方言名称 1年中行事名	武術的身体表現の形態 3. 武術的身体操作・表現の形態
南部	21. 那覇市	安里	64	■その他 (安里八幡宮例祭・安里金満宮例祭(フェースマ))	フェースマ芸術 祈願のあとに演じられる。棒術、ヒュータン踊り、サークル・ゲーの三つが揃っている。
			65	■その他(嘉数の棒)	「嘉数棒」や「嘉数の棒」と呼ばれる。
			66	■豊年祭	奉納舞踊としての棒術、サイ術 棒の集団演技「巻ち棒」、「巻」棒の中に構成される組棒「ヒチザンシー」と総称される。
		高安	67	■その他(チナヒチ)	・余興として棒術を披露する
			68	■その他(ガングー)	・棒術の奉納と空手の演舞 ・棒術は行事全体を通して奉納・披露され、空手は祭事の終了を祝して行われる「コスモユーエー」で披露される。
	22. 豊見城市	根差部	69	■その他 (チジグアンヌウガミ、綱引きの前のガーエーで、棒や空手が行われた。)	・綱引きの前に、棒や空手、歌舞などによるガーエーが行われた。
			70	■その他 (コスモ祝。祈願の後に、棒術や空手などを披露する)	・祈願の後に、棒術や空手、舞踊などを披露した。
		翁長	71	■豊年祭	集団演技としての「巻ち棒」は、1981年(酉年)の再演以来、演じられていない。 翁長の巻ち棒の型は「グヤー棒」、「グヤースマチ」と称されていたという。 現在では余興などの一演目として棒術や空手が披露されている模様。
			72	■豊年祭 (棒術の集団演技や個人演技を行う)	十五夜に行われる宇新垣の伝統行事で、公民館前の広場で集団演技と個人演技あわせて約1時間かけて披露される。四方巻きとも呼ばれる集団演技のマクン(巻の意)は新垣のボーマキの大きな見せ場のひとつ。個人演技では、1対1の対戦形式で行われるタンカーボー(一対一棒)、2人並んで同じ型を見せるダンスボー(二人棒)、2対1のサンニボー(三人棒)などがある。そのうち、タンカーボーはアフリシタカ、イリシタカからそれぞれ1人ずつ出て、悪(かし)などの堅い木で作った六尺棒で対戦するもので、激しく打ち合うためオーエーボー(喧嘩棒)とも呼ばれる。ダンスボーは通常2人で行うものだが、新垣では1人で行うことが多い。
			73	■豊年祭(ジューグヤー)	大きく分けてタンカーボー(タンカーは一対一の喧嘩の意)、ダンナボー(二人棒)、サンニボー(三人棒)、トゥンボー(殿棒)の4種類があった。 タンカーボーは東西からそれぞれ1人ずつが出て1組になり、1対1の対戦形式で行う組棒である。タンカーボーの相手は13歳のミーボーグラー(新棒グラー)の時に決まり、その組み合わせは生涯を通じて変わらなかったため、特に親しい者同士が組むことが普通であった。組んでいる相手が不在の場合は、演技の後半で相手のいない者同士がその場で組んで演じ、これをヒリーボーといったが、ヒリーの意味は不明である。 ダンナボーも2人で演技するが、タンカーボーのように戦うのではなく、並んで同じ型を見せる棒であった。これは相手を2、3人ごとに交替して若者たちが型を引き継いだ。サンニボーは名称のとおり1対2の3人1組で演ずる組棒で、1人は六尺棒、2人は三尺の短棒を持って戦った。いずれのボーより激しく戦うのが特徴で、時に怪我する恐れもあった。トゥンボーは基本的に2対2の4人組棒で、ウフトゥン(大殿)の拝所で行うことからこの名称が付いたといわれている。これらはタンナボーと同じく、3人ごとに組み合わせを交替して行うが、必ず東西が戦う形式とした。また、ボーマキ(棒巻)といって参加者を組に分け、それぞれ隊列が数分間1つずつ円陣をとりたけ回し、それぞれ隊形を変えていく集団演技がある。各組の先頭がそれぞれ槍と長刀を持って先導役を務め、ほかの参加者がそれに続いて棒の下端を胸の高さで握み、ヤグワイとって威勢のいい掛け声を発しながら棒の上に突き挙げて演技する。これはスーマキ(総巻)とも呼ばれているが、左右から進んできた2つの隊列が、ぐるぐると回りながら1つになっていく様子が、まるで渦潮のように見えることからスーマキ(潮巻)の意味であるともいわれる。
23. 糸満市	真栄平	真栄平	74	■その他(チナヒチ)	綱引き当日、東はカッチンヤマで女性達が踊ったり、若者が棒術を披露する。西はイリーカーンマーの広場で同様に踊りや棒術を披露する。また、綱を引く前と引いた後に槍に三角旗をつけた棒術や棒術の演技が行なわれる。翌17日にもアウアンと(後述)として簡略化した行列を行なった後、東西それぞれの広場で棒術や踊りをして楽しんだ。
			75	■その他 (十五夜綱引き)	真栄里の綱引きはアガリ(東)・マールーとイリー(西)・マールーの組に分かれて行われる。綱引き前のガーエー(示威的行為)の一環として棒術などが行われる。公民館前のメーミチの広場で演技の場所になる。ガーエーは一般には綱引きの前に男たちが激しく揉み合う様子を指すことが多いが、真栄里では「棒ガーエー」「ツツン(鼓)ガーエー」「チナ(綱)ガーエー」などという言い方がある。このうちとくに武術的な身体操作に関係するものが「棒ガーエー」である。 双方の綱が広場に到着すると、綱はいったん脇に寄せられ、最初はアガリとイリーの棒旗が二人一組ずつで互いににらみ合い、三角旗の旗を付けた棒をふたつたり、突いたして中央まで進み演技が行われる。棒旗によるガーエーである。この「棒ガーエー」には基本的には4種があるという。ヘーヒカグサン(一人で行う演技)、タンカーボー(2人が向き合って打ち合う棒)、三人棒(2対2の構成で打ち合う棒)、トゥンボー(4人で行う棒)である。
			76	■豊年祭	棒巻、一人棒、組棒、舞方棒
			77	■スポン、あるいはナコシ	一人棒、組棒(二人棒、三人棒、ティンペー)、舞方棒
			78	■豊年祭 ■その他 (十五夜行事という)	・棒を演技する人を「棒人衆」と呼ぶ。 ・2023年は奉納演技はなし。棒巻を南(フェー)から入場し、北(ニシ)の棒巻(グヤーエー巻)の形態で行った。
	24. 八重瀬町	志多伯	80	■豊年祭	六尺棒、棒、ティンペー、サイト、トゥンファー、エーク、スンティエーなど古武道具を使用した、個人または団体による「型」、2人または3人による組棒の演技 豊年祭の中で棒術を演技する人を「棒衆」(ボウシカ)と呼ぶ。 豊年祭の道ズネーや馬場にて行われる舞台の前座で巻棒が行われ、夕方からの舞台では獅子舞の球に舞方(かぎやで風)にのせた棒の舞)、武の舞(組棒を琉球音楽と融合した演技)が演技される
			81	■その他 (旧6月ウチー綱引き、七月綱、敬老会)	綱引きでは、主に子どもたちと保存会会員による棒術演技が行われる
			82	■その他(龍甲祭)	棒巻、一人棒(各家に伝わる型)、組棒、舞方棒
			83	■豊年祭	「棒使やー(ボウチカヤー)と一般に言われているが、明治、大正の先輩方はヤマンニのタンメーのことを「棒者(ボウシャ)」と呼んで崇めていた。戦前は、十五夜の舞台の前に宇の若者が棒巻(ボウマチ)を行い、馬場を中心に道ズネーがあって大宴盛り上がりだったと聞いている。現在は獅子屋より公民館まで300m道ズネーをしている。昔の映像などを見て復元が望まれる。
			84	■その他(綱引き)	
			85	■豊年祭	
		坂名城	86	■豊年祭 ■その他 (旧暦7月16日:シーサーウーイ)	六尺棒を持ち、獅子を誘い出す シーサーウーイや豊年祭の道ズネー出発の際に六尺棒を使用し、獅子と対峙してウクヤー棒の演技がある。 「坂名城のお宮」で棒と子どもたちによる踊りが奉納される。

地区	市町村名	行政区	No	方言名称 1年中行事名	武術的身体表現の形態 3. 武術的身体操作・表現の形態
南部	24. 八重瀬町	具志頭	87	■その他 (旧暦8月15日綱曳きの後に「行方」村あしび、または「十五夜あしび」において実施)	津堅舞方棒(現在も行っている) ※過去においては「津堅手」(チキンディー)・「津堅の訓」(チキンヌン)と呼んでいた。 「訓練」の意から「訓」を用いている
			88	■笠行事 (旧暦7月16日 盆の翌日に行われるスーパレー行事)	棒の演技があり、大きくはメーカタボウ(舞方棒)、組棒、棒マチの三種がある。津波古の棒マチは「セーマチ」と呼ばれる(18 演武(舞)構成(芝居)参照)。
	25. 南城市	奥武区	89	■その他 (観音堂祭で棒術を披露する)	9つの型があり、特に棒術の原型とされている津堅暗闘(チキンランシムボウ)は技が非常に難しく、長いために上級者しかできない型である。一般的な棒術は六尺棒で演武し、四方に向きを変えるが、津堅棒は八方に向きを変える。幕開けで行う舞方(メーカタ)はその場の邪気を祓い清める意味がある。
			90	■豊年祭(十五夜)	棒術
	27. 南風原町	神里	91	■その他 (舞方棒 メーカタボー)	棒術
			92	■その他 (舞方棒 メーカタボー)	神里の舞方棒の起源は海の男が陸に上がって戦うことがあると言われる。打ち手や突き手の多彩な技に特徴があります。
	28. 久米島町	具志川	93	■その他 (宇移転記念日)	①入場「たかまち・グヤー巻き」※現在はマチ棒 全員参加 ②対戦「タンカー棒」 基本全員 ③基本型「ダンス棒」 8名
			94	■その他(マースヤ行事)	棒踊り(棒術)
	31. 栗国村	宇西(前ハル原)	95	■その他(マースヤ行事)	棒術
			96	■その他 (バーマズイ「御願」)	ボーフィ(棒振り)という。
	37. 宮古島市	新里区	97	■豊年祭 (旧暦8月、日は選定する。開催日は毎年5〜6月頃に決まり、保存会にも連絡がある。)	ボーフィ(棒振り)という。
			98	■豊年祭 (旧暦15夜 マストリジャー)	棒振りという。
	38. 多良間村	仲筋字 塩川字	99	■豊年祭 (多良間の豊年祭 八月おどり)	
			100	■豊年祭 (多良間の豊年祭 八月おどり)	
	39. 石垣市	登野城	101	■豊年祭(オンプール)	六尺棒、三尺棒、ヤリ、ナギナタ、カタナ、カマ(ガキ)、サイ、トンファー、スンチャクを2名1対の組手で演武する。 ※スンチャク演技は1985年以降の記録がない。
			102	■その他(結願祭)	
			103	■豊年祭	棒術・獅子舞
		石垣	104	■その他(結願祭)	
			105	■その他(牛又蘭)	
			106	■その他(結願祭)	山頭を先頭に御旗の敷地内に入り、獅子舞及び全十二組(24人)の組手、演舞を行う。
		真栄里	107	■笠行事 ■その他 (郷土芸能発表会S40〜S47 2月)	山頭を先頭に御旗の敷地内に入り、獅子舞及び全十二組(24人)の組手、演舞を行う。
			108	■豊年祭(ツナズミン)	本来は武術であったと考えられる棒術
			109	■その他(イタシキバル)	本来は武術であったと考えられる棒術
			110	■その他(共進会)	本来は武術であったと考えられる棒術
	40. 竹富町	宮良	111	■その他 (結願まつりがんさい、その他、イベント等でも演舞。)	基本的に、空手の延長である「棒術」の要素で構成されている。また奉納棒とも位置づけられていることから、棒術とは離れた所作も含んでいる。
			112	■その他 (十五夜 旧暦8月15日)	六尺棒、三尺棒、ヤリ、カマ(ガック)、サイ、ナギナタを2名1対の組手で十組により演武する。
			113	■豊年祭(ツナズミン)	棒術演技の最後には、ティー棒と呼ばれる型の演技が2名により行われる。
		新川	114	■その他 (南島(フェーヌシマ))	台の上に一人は鐘、もう一人はナギナタを持ち、対峙して演武を繰り広げる。
			115	■その他(結願祭・節祭)	本来は武術であったと考えられる棒術
	41. 与那国町	川平	116	■その他(種子取祭)	刀、ナギナタ、六尺棒、三尺棒、エーク、ティンバイ、カニバー(クワ)、カマ(ガキ)、の棒術を2名1組の組手で演武する。基本的には仲間満座山から伝承された棒術を基本とし、役人と百姓の戦いや三人棒(大男と小人の戦い)等、迫力ある棒術が特徴である。
			117	■その他(十五夜祭)	種子取祭は、10日間に及ぶ島の最大行事で節祭(シチ順い)から49日にあたる成子(つちのえね)の日を祭日として(旧暦9月〜10月)に行なう。甲申(きのえさる)トルツキの日(計画手配をし奉納芸能の練習を始める成子)には「火の神」豊衆の神に種子取祭の祈願をし「熊初」(熊始)を作る。7日目の8日の両日に奉納芸能があり庭の芸能舞台の芸能の奉納の中、表現の形態がある。また舞台芸能の中にもキョウギンやブドウイの中にも空手の型が見られる。
			118	■その他(結願祭)	空手を基にした演技、農具等を使用(カマ、クワ、ナタ)
		黒島	119	■豊年祭 ■その他 (旧正月、結願祭)	■型の演技がある ■対面での打ち合い等がある ■獅子に対峙しての武術がある ■芝居の中で武術的所作が演じられる ■その他(獅子に関する表現では、獅子の棒(東筋部)がある。その時は仲本地区がオスの獅子、宮里地区がメスの獅子を演じ、周りで保里地区が太鼓をたたくこと。)
			120	■その他(結願祭)	棒打と言ひ、一番棒〜五番棒まで有ります。
			121	■その他(節祭)	棒による演技(2人棒、3人棒)
	42. 波照間町	千立	122	■その他(節祭)	棒による演技(2人棒、3人棒)
			123	■その他(節祭)	棒による演技(2人棒、3人棒)
			124	■豊年祭 ■その他	豊年祭→棒術(2人棒)、ナギナタ、太鼓、剣(2人)つり棒、かき棒、六尺棒、尺棒
		波照間	125	■豊年祭(ムシヤマ)	前集落2人棒(10組) 西集落、東集落、後集落、刀棒、ナギナタ(西集落:しんぼう、東集落:こもつクラー)
			126	■豊年祭	棒(ぼう)は、方言で「フ」と言う。 奉納や披露の目的で、ウガシフトウティではトヤマウガンで祈願の後、午後からの祝賀会で踊られる。チムパタイは新しいチスの家の前で踊る。
	43. 東村	西村	127	■その他 (神座師匠(チス)の世代交代の行事)	棒(ぼう)は、方言で「フ」と言う。 奉納や披露の目的で、ウガシフトウティではトヤマウガンで祈願の後、午後からの祝賀会で踊られる。チムパタイは新しいチスの家の前や公民館で踊られる。
			128	■豊年祭	棒(ぼう)は、方言で「フ」と言う。 奉納や披露の目的で、ウガシフトウティではトヤマウガンで祈願の後、午後からの祝賀会で踊られる。チムパタイは新しいチスの家の前や公民館で踊られる。
			129	■その他 (チムパタイという棒座師(チス)の世代交代の行事)	棒(ぼう)は、方言で「フ」と言う。 奉納や披露の目的で、ウガシフトウティではトヤマウガンで祈願の後、午後からの祝賀会で踊られる。チムパタイは新しいチスの家の前や公民館で踊られる。
		嶋仲	130	■豊年祭	棒(ぼう)は、方言で「フ」と言う。 奉納や披露の目的で、ウガシフトウティではトヤマウガンで祈願の後、午後からの祝賀会で踊られる。チムパタイは新しいチスの家の前や公民館で踊られる。
			131	■その他 (チムパタイ ※公民館長及び棒座チスの世代交代の行事、嶋仲の場合は、棒座と館長のチムパタイは一緒に演じる。)	
	44. 比川村	比川村	132	■豊年祭	棒(ぼう)は、方言で「フ」と言う。 ウガシフトウティの祈願が終わると、祝賀会で踊られる。

關係資料

1 参考資料

No.01



金武町教育委員会『伊芸区・南又島(フェーヌシマ)』
(金武町伝統芸能記録映像事業)

No.02



金武町教育委員会『並里区・棒かじゃで風』
(金武町伝統芸能記録映像事業)

No.03



金武町教育委員会『並里区・棒スケー』
(金武町伝統芸能記録映像事業)

No.04



大謝名 空手型

No.05



大謝名3-1棒術①19.9.13

No.06



大謝名3-2棒術②23.9.23

No.07



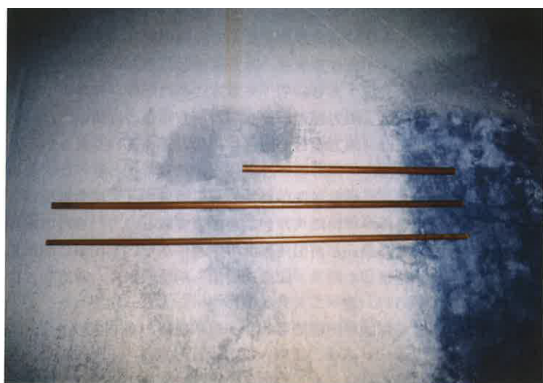
大謝名3-3舞方23.9.23

No.08



別紙3

糸満市-新垣(集合写真)



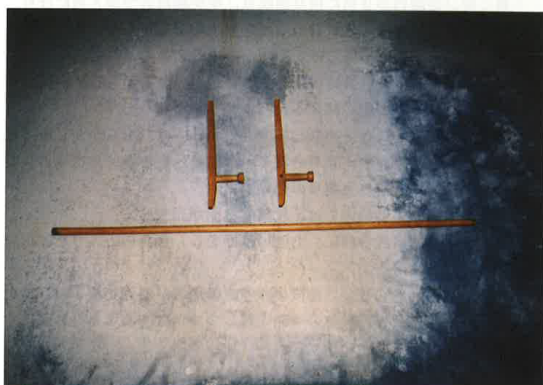
棒術用具

上はサクグラー 中はタンカーボー専用の6尺棒
下はダンヌボー等に使用する6尺棒



棒術用具

ティンバー（笠）と短刀及びエイ（槍）



棒術用具 トウンファーと6尺棒

- 30 -



エインティール用具

上から王冠・長刀・槍

- 31 -

No.10



野原区1・棒の出発

No.11



野原区2・男性の棒術

No.12



野原区3・全員の踊り

2 引用文献・参考文献

※配列は基本的に著者・編集者等の五十音順とした。

■ 第1章（第1節）

引用文献

- 下野敏見 2009『南日本の民俗文化誌2 鹿児島県の棒踊り』南方新社
中村茂子 1997「棒を用いる民俗行事と民俗芸能―突き技と組打ち技を中心に―」『芸能の科学』25 ほか

■ 第1章（第2節）

引用文献

- 榎本鐘司 1994「北信濃における無雙直傳流の伝承について：江戸時代村落の武術と『境界性』」『スポーツ史研究』7, pp.21-36
藤木久志 2005『刀狩り：武器を封印した民衆』岩波書店
森山軍治郎 1981『民衆蜂起と祭り秩父事件と伝統文化』筑摩書房
中嶋哲也 2017『近代日本の武道論：〈武道のスポーツ化〉問題の誕生』国書刊行会
西久保弘道 1915「武道講話」警察協会編『警察協会雑誌』警察協会
西山松之助 1982『家元の研究』吉川弘文館
小倉學 2005『加賀・能登の民俗小倉學著作集第2巻民俗芸能』
尾張旭市誌編さん委員会 1980『尾張旭市誌文化財編』尾張旭市
下野敏見 2009『南日本の民俗文化誌2鹿児島県の棒踊り』南方新社
田邊元 2013「「芸能武術」論序説：長谷川流棒術と田山花踊りの「棒振り」を事例として」『スポーツ人類学研究』15：45-66
田邊元 2017「村落における武術伝承組織の検討：神道香取流を事例として」『体育学研究』62（2）：631-646
田邊元 2019「つながりの中で生まれる技：神道香取流にみる技の復元」『現代民俗学研究』11：37-50
魚住孝至 2021『日本の伝統文化6武道』山川出版社

■ 第2章（第2節）

参考文献

- 石垣市史編集委員会編 2007『石垣市史各論編民俗 下』石垣市
大城学 1992『フェーヌシマ系の芸能』『沖縄文化』第76号沖縄文化協会
沖縄県教育委員会 2018『沖縄県史研究叢書18 沖縄の民俗資料（上）』沖縄県教育委員会
沖縄市総務部市史編集 2015『沖縄市史第三巻資料編2 民俗編一冊子編一』沖縄市役所
北中城村教育委員会編 2021『北中城村歴史風致資産調査報告書』北中城教育委員会
宜野湾市教育委員会 2001『市内民俗芸能調査報告書 村芝居－ぎのわんのムラアシビ』
崎原恒新 1999『ハンドブック 沖縄の年中行事』沖縄出版
佐敷町史編集委員会編 1984『佐敷町史2 民俗』佐敷町役場
島袋全発 1978「同治二年癸亥西東綱挽之時日記」『那覇変遷記』沖縄タイムス社
竹富町史編集委員会編 2011『竹富町史 第二巻 竹富島』竹富町役場
名護市史編さん委員会編 2012『名護市史本編・8 芸能』名護市役所
那覇市教育委員編 1981『那覇市文化財調査報告第1集 那覇安里のフェーヌシマ』那覇市教育委員会
読谷村教育委員会編 1989『読谷の文化 第4集 ムラアシビ』

※ 文献名を記していない事例については、「令和3～4年度沖縄空手ユネスコ登録推進事業学術研究連絡会」による調査資料に基づいている。

■ 第2章（第3節）

参考文献

- 栗国村村史編纂委員編 1984『栗国村誌』 栗国村
- 字具志川移転百周年記念誌編集委員会編 1995『字具志川移転百周年記念誌』 沖縄県島尻郡具志川村
字具志川移転百周年記念事業実行委員会
- 糸満市史編集委員会編 1991『糸満市史 資料編 12 民俗資料』 糸満市役所
- 「アラカキ棒巻きの歴史」編集委員会 2008『アラカキ棒巻きの歴史』 沖縄県糸満市字新垣棒巻き保存会・
沖縄県糸満市字新垣
- 沖縄県教育庁文化課編 1994『沖縄県文化財調査報告書第 112 号 沖縄県の民俗芸能—沖縄県民俗芸
能調査報告書—』 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課編 2006『沖縄県文化財調査報告書第 143 集 沖縄の綱引き調査報告書』 沖縄県
教育委員会
- 勝連盛豊 2019『検証 沖縄の棒踊り』 有限会社沖縄文化社
- 北大東村誌編集委員会編 1986『北大東村誌』 北大東村役場
- 金城繁正編 1977『玉城村誌』 玉城村役場
- 具志頭村史編集委員会編 1990『具志頭村史 I「復刻版」』 具志頭村役場
- 具志頭村史編集委員会編 1993『具志頭村史 第三巻（伝説・古謡・歌謡編・技能編・方言編）』 具志頭村
- 具志頭村史編集委員会編 2005『具志頭村史第五巻（村落編二）』 具志頭村
- 佐敷町史編集委員会編 1984『佐敷町史 2 民俗』 佐敷町役場
- 座間味村史編集委員会編 1989『座間味村史 上巻』 座間味村役場
- 座間味村史編集委員会編 1989『座間味村史 中巻』 座間味村役場
- 座間味村史編集委員会編 1989『座間味村史 下巻』 座間味村役場
- 知念善栄編 1976『東風平村誌』 東風平村役場
- 渡嘉敷村史編集委員会編 1987『渡嘉敷村史 資料編』 渡嘉敷村役場
- 渡嘉敷村史編集委員会編 1990『渡嘉敷村史 通史編』 渡嘉敷村役場
- 渡名喜村編 1983『渡名喜村史 上巻』 渡名喜村
- 渡名喜村編 1983『渡名喜村史 下巻』 渡名喜村
- 豊見城市市史編纂委員会民俗編専門部会編 2008『豊見城市史第二巻 民俗編』 豊見城市役所
- 那覇市企画部市史編纂室編 1979『那覇市史 資料編第2巻中の7 那覇の民俗』 那覇市企画部市史編
纂室
- 南風原町史編集委員会編 2003『南風原町史第六巻民俗資料編 南風原 シマの民俗』 沖縄県南風原
町役場
- 南大東村誌編集委員会編 1990『南大東村誌 改訂』 南大東村
- 宮古島市教育委員会編 2007『宮古島市の文化財 平成 18 年度宮古島市文化財要覧』
- 与那原町史編集委員会編 1988『与那原町史 序説・むかし与那原』 与那原町役場

■ 第2章（第4節）

引用文献

- エミール・デュルケーム 2014『宗教生活の基本形態下オーストラリアにおけるトーテム体系』 筑摩書房
- 山本素世 2023「伝統祭祀行事の継承と地域社会——八重瀬町志多伯を事例として——」 平井順編『沖
縄的共同性の構築と継承：シリーズ沖縄の地域自治組織2〈南部離島編〉』 ナカニシヤ出版

■ 第3章（第2節）

参考文献

- 沖縄県教育委員会編 2004『沖縄県文化財調査報告書 143 集 沖縄の綱引き習俗調査報告書』沖縄県教育委員会
- 北谷町教育委員会編 2000『北谷町文化財調査報告書第 19 集 北谷町の綱引きー北谷三ヶ村大綱引き（ウーンナ）を中心にー』北谷町教育委員会

■ 第3章（第3節）

引用文献・参考文献

- 玉城村字仲村渠祭祀委員会編 1990『ミントン』仲村渠祭祀資料No. 1 玉城村字仲村渠
- 豊見城村教育委員会文化課編 2001『豊見城村史だより』第 6 号 豊見城村教育委員会
- 富盛伝統芸能保存会編 2008『甦る伝統芸能 20 周年記念誌』富盛伝統芸能保存会 8p.13p.26p.
- 平田実編 2024『豊見城市字高安竈ゴウ祭』豊見城市高安自治会長（宜保樹）
- 湧上元雄 1977「「藪薩の浦原」考」『琉球大学法文学部紀要』第 21 号 琉球大学法文学部

記録集・映像記録等

- 組踊復活「大あしび」実行委員会『組踊復活大あしび』記録集
- 志多伯伝統文化保存会 2010（平成 22）年ふるさと文化再興事業『志多伯の獅子加那志豊年祭一年忌行事の八月十五夜豊年祭一』（上）
- 志多伯伝統文化保存会 2011（平成 23）年ふるさと文化再興事業『志多伯の獅子加那志豊年祭一年忌行事の八月十五夜豊年祭一』（下）
- 津嘉山大綱曳き実行委員会『津嘉山大綱曳き』
- 津嘉山大綱曳き実行委員会『津嘉山大綱曳き解散総会』資料
- 南城市ホームページ（<https://www.city.nanjo.okinawa.jp/shisei/jichikai/tamagusuku/nakandakari/>）
- 八重瀬町企画／地域創造 2008（平成 20）年度映像記録保存事業『甦る十五夜綱』（製作／海燕社）
- 八重瀬町企画／地域創造 2011（平成 23）年度映像記録保存事業『獅子加那志が鎮まる村』（製作／海燕社）
- 八重瀬町企画／地域創造 2024（令和 6）年度映像記録保存事業『シーサーケーラス東風平神獅子とジュウニン頭』（製作／海燕社）

■ 第3章（第5節）

参考文献

- 沖縄県教育委員会編 1981『八重山の民俗芸能（3）』沖縄県教育委員会
- 勝連盛豊 2019『検証 沖縄の棒踊り』沖縄文化社
- 狩俣恵一 2004『竹富島文庫 I 種子取祭』遺産管理型 NPO 法人たきどうん
- 川平村の歴史編纂委員会 1976『川平村の歴史』川平公民館
- 波照間民俗芸能保存会編 1982『波照間島のムシャーマ』波照間民俗芸能保存会
- 比嘉康雄 1991『神々の古層 世を漕ぎ寄せる〔シチ・西表島〕』ニライ社
- 宮良賢貞 1973『八重山の社会と文化』木耳社
- 牧野清 1975『登野城村の歴史と民俗』（発行 牧野清）
- 与那国町教育委員会編 1988『与那国島の祭事の芸能』与那国町教育委員会

3 写真及び図版提供

【写真及び図版提供機関・団体・個人】

写真・図版の掲載にあたっては、下記の機関・団体・個人の皆さまにご協力いただきました。
ここに記して感謝申し上げます。

写真・図版番号		提 供
写真	2-1-1	国立公文書館
写真	2-2-4	当山昌直
写真	2-3-1	飯田泰彦
写真	2-3-2	大濱憲二
写真	2-3-4	与那国町教育委員会
写真	2-3-5	与那国町教育委員会
写真	2-4-1	沖縄空手道小林流小林館協会八重瀬道場
写真	2-4-2	沖縄小林流空手道協会宮城空手道場
写真	3-1-1	名護市数久田区長
写真	3-1-2	名護市数久田区長
写真	3-1-3	名護市数久田区長
写真	3-1-4	名護市数久田区長
写真	3-1-5	名護市数久田区長
写真	3-1-6	名護市数久田区長
写真	3-1-7	名護市数久田区長
写真	3-1-8	名護市数久田区長
写真	3-1-9	名護市数久田区長
写真	3-1-10	名護市数久田区長
図	3-1-2	宜野座村宜野座区長
写真	3-1-12	宜野座村宜野座区長
写真	3-1-13	宜野座村宜野座区長
写真	3-1-14	宜野座村宜野座区長
写真	3-1-15	宜野座村宜野座区長
写真	3-1-16	宜野座村宜野座区長
写真	3-1-17	宜野座村宜野座区長
写真	3-1-18	宜野座村宜野座区長
写真	3-1-19	宜野座村宜野座区長
図	3-1-3	宜野座村宜野座区長
写真	3-1-30	本部町並里区長
写真	3-3-12	志多伯区長
写真	3-3-13	志多伯区長
写真	3-3-14	志多伯区長
写真	3-3-15	志多伯区長
写真	3-3-20	津嘉山民俗芸能保存会長
写真	3-3-21	津嘉山民俗芸能保存会長
写真	3-3-22	津嘉山民俗芸能保存会長
写真	3-3-24	津嘉山民俗芸能保存会長
写真	3-5-1	大濱憲二
写真	3-5-2	宮良長章
写真	3-5-3	宮良長章
写真	3-5-4	飯田泰彦
写真	3-5-5	飯田泰彦
写真	3-5-8	与那国町教育委員会
写真	3-5-9	与那国町教育委員会

以上、掲載以外の写真・図版については事務局及び執筆者による撮影もしくは作成・提供によるものです。

令和6年度 生活文化に息づく「沖縄空手」調査報告書

～沖縄の風俗慣習・民俗芸能にみる武術的身体表現～

【編集】 沖縄空手ユネスコ登録推進協議会 学術研究連絡会

【発行】 沖縄県文化観光スポーツ部 空手振興課
〒900-8570 沖縄県那覇市泉崎 1-2-2 行政棟 12 階（南側）
電話：098-866-2232 FAX：098-866-2208

【発行年】 2025 年（令和 7 年）3 月発行

【印刷】 光文堂コミュニケーションズ株式会社

【受託事業者】 沖縄空手ユネスコ登録推進事業共同企業体
（沖縄 JTB 株式会社 内）
